

千葉市平和公園遺跡群 I

多 部 田 貝 塚
貝 殻 塚 遺 跡
ム グ リ 遺 跡

2 0 0 3

千 葉 市 教 育 委 員 会
財 団 法 人 千 葉 市 教 育 振 興 財 団

例 言

1. 本書は千葉市若葉区多部田町地内に所在する、多部田貝塚・貝殻塚遺跡・ムグリ遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は平和公園整備事業に伴うもので、平成13年度までは（財）千葉市文化財調査協会が実施し、平成14年度以降は（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが継続して行っている。事業地内に所在する遺跡全体を、平和公園遺跡群と総称している。平和公園遺跡群という名称は、平成5年度より千葉市文化財調査協会の年報において使用されており、それ以前については多部田町遺跡群という名称を用いていた。今後は混乱を避ける為にも「平和公園遺跡群」を正式な名称として使用する。

2. 発掘調査の期間・面積・担当者は次の通りである。

多部田遺跡（多部田貝塚と貝殻塚遺跡を併せた当時の呼称）

平成元年10月23日～平成2年2月27日 確認調査 対象4,245/63,600m² 村田六郎太

多部田貝塚

平成4年3月2日～平成4年3月31日 本調査 対象1,000m² 飛田正美

平成4年4月1日～平成5年3月31日 本調査 対象4,900m² 白根義久

平成5年4月1日～平成6年3月31日 本調査 対象22,300m² 白根義久・鶴岡英一

平成6年4月1日～平成7年3月31日 本調査 対象4,700m² 山下亮介

貝殻塚遺跡

平成4年4月1日～平成5年3月31日 本調査 対象10,000m² 白根義久

平成6年4月1日～平成7年3月31日 本調査 対象11,000m² 山下亮介

ムグリ遺跡

平成6年4月1日～平成7年3月31日 確認調査 対象470/3,200m² 山下亮介

平成7年4月1日～平成8年3月29日 本調査 対象1,460m² 山下亮介

3. 整理作業及び本書の作成は、平成14年4月1日～平成15年3月31日に行い、田中英世・中山貴正が担当した。

4. 本書の図版作成・編集作業及び執筆は、田中と中山とが共同で行った。

5. 航空写真撮影は沢本吉則写真事務所に委託した。遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。航空写真及び遺構写真はフィルムスキャナ（Nikon SUPER COOLSCAN 4000ED）で取り込んだデータを使用した。

6. 遺物の写真は整理担当者がデジタルカメラ（Nikon D100）で撮影した。

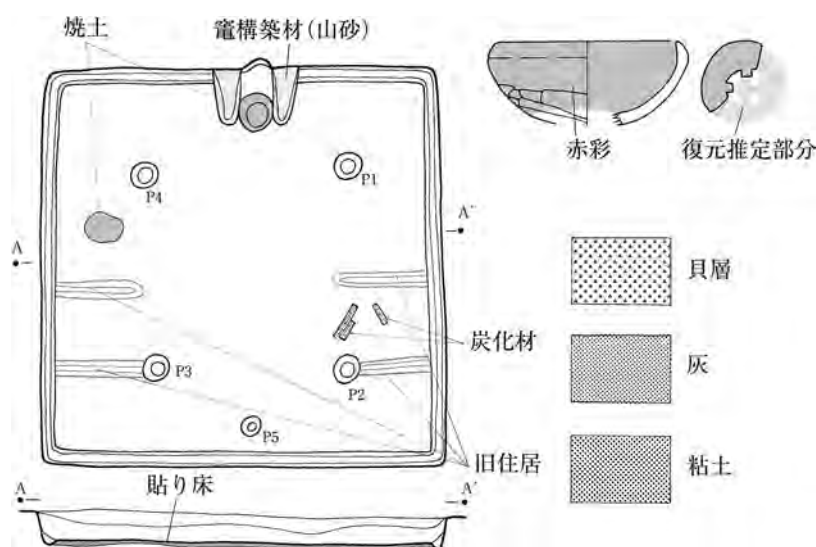
7. 出土遺物及び調査記録は、すべて埋蔵文化財調査センターに収蔵保管している。

8. ムグリ遺跡出土の製鉄関連遺物の分析は、川鉄テクノロジー株式会社へ委託した。

発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏のご協力を賜った。ここに記して謝意を表したい。千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会文化課、千葉市加曽利貝塚博物館

凡 例

1. 本書で掲載した遺構図等の方位は、座標北である。第2図の公共座標の基準は、日本測地系に基づいている。
2. 本書での遺構表示は、竪穴住居跡「A」、土壇「C」、溝跡「D」を基本とし、それ以外の遺構については遺構名をそのまま表記した。遺構番号については、基本的に発掘調査時に使用した番号を踏襲しており、その帰属時代等は各遺跡の第1節に一覧として示している。
3. 各遺構の調査区内における位置は、小グリッドを基本として示している。複数グリッドにかかる場合は、面積を最も多く占めているグリッドで表している。
4. 掲載した各遺構図の縮尺率は各図にスケールで示したが、原則として竪穴住居跡・土壇1/60、竈・炉跡1/40としている。またそれ以外の遺構については、規模の大小に応じて縮尺率を変えており、各図に表示したスケールを参照されたい。なお遺物実測図中のスクリーントーンは右図を基本とし、それ以外については各図中に表記している。
5. 古代住居跡の遺構図・遺物実測図の表現については、右図の通りである。
6. 縄文時代の住居跡の規模については、楕円形の長軸と短軸との長さを表記している。主軸方向については、長軸の振れの角度を表している。
7. 各遺構の土層説明は記号化しており、「R」はローム粒、「RB」はロームブロック、「T」は炭化物、「S」は焼土、「N」は粘土、「Y」は山砂をそれぞれ表し、含有量は「◎」多く含む、「○」普通に含む、「△」少し含む、空欄は含まないことを意味する。なおその他の含有物や、各層の特性（例えば炉・焼土や竈構築材など）は備考に示している。
8. 掲載した各遺物実測図の縮尺率は図中にスケールで示しており、原則として1/4とした。縄文土器の拓影図は1/3とし、それ以外の石製品・土製品等は形状等に応じて縮尺率を変えており、各図に表示したスケールを参照されたい。
9. 遺物観察表の中の数値で（ ）は復元推定値を、数字の後に続く+は残存する長さをそれぞれ表している。
10. 遺物実測図中の口縁部をつなぐ線が一部空白になっているものは、復元実測を行っているもので、それは遺物観察表の法量の口径が（ ）復元推定値になっているものと一致する。
13. 縄文時代の石器・土製品は、残存度1/2以上の個体について実測・計測を行ったが、紙面の関係上すべては掲載していない。第13表・第21表で「図版・遺物番号」の空欄のものは、計測値のみ掲載してある個体である。
14. 第4章第4節は、川鉄テクノロジーサーチ株式会社による原稿で、各種の「表・写真・図」が用いられているが、それはその節内においてのみ対応する。



目 次

第1章 平和公園遺跡群の概要	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡群の位置と歴史的・地理的環境.....	4
第3節 調査の方法.....	4
第2章 多部田貝塚	5
第1節 調査の概要.....	5
第2節 縄文時代住居跡.....	9
第3節 古代住居跡.....	21
第4節 土壌・竪穴状遺構・溝跡.....	35
第5節 調査区出土遺物.....	49
第3章 貝殻塚遺跡	54
第1節 調査の概要.....	54
第2節 縄文時代住居跡.....	56
第3節 古代住居跡.....	58
第4節 土壌.....	71
第5節 調査区出土遺物.....	75
第4章 ムグリ遺跡	77
第1節 調査の概要.....	77
第2節 A地区 検出遺構・遺物.....	77
第3節 B地区 検出遺構・遺物.....	79
第4節 千葉市ムグリ遺跡出土製鉄遺物の分析・調査.....	91
第5章 まとめ	102
第1節 調査区出土縄文時代遺物の時期別分布状況.....	102
第2節 古墳時代後期における住居跡出土遺物の統計的分析.....	107

写真図版

抄録

挿図目次

第1章 平和公園遺跡群の概要

- 第1図 周辺の遺跡
- 第2図 調査区と周辺地形図
- 第2章 多部田貝塚**
- 第3図 遺構配置図①
- 第4図 遺構配置図②
- 第5図 遺構配置図③
- 第6図 A-001
- 第7図 A-003・004
- 第8図 A-007・008・009
- 第9図 A-010・013
- 第10図 A-012・014
- 第11図 A-015・021
- 第12図 A-001・003 出土遺物
- 第13図 A-004・007・008・010① 出土遺物
- 第14図 A-010②・012・013・014 出土遺物
- 第15図 A-015・021 出土遺物
- 第16図 A-002
- 第17図 A-005
- 第18図 A-006
- 第19図 A-016
- 第20図 A-017
- 第21図 A-018①
- 第22図 A-018②
- 第23図 A-020
- 第24図 A-002・005① 出土遺物
- 第25図 A-005②・006・016・017 出土遺物
- 第26図 A-018① 出土遺物
- 第27図 A-018②・020 出土遺物
- 第28図 C-001～009
- 第29図 C-010～014
- 第30図 C-015～024
- 第31図 C-025～033
- 第32図 C-034～037・039・040・042～050
- 第33図 C-051・052・054・057～070
- 第34図 C-072～079
- 第35図 C-080～088
- 第36図 C-089～097
- 第37図 C-098～101
- 第38図 土壙 出土遺物①
- 第39図 土壙 出土遺物②
- 第40図 竪穴状遺構
- 第41図 調査区 出土遺物①
- 第42図 調査区 出土遺物②
- 第43図 調査区 出土遺物③

- 第44図 調査区 出土遺物④
- 第3章 貝殻塚遺跡**
- 第45図 遺構配置図
- 第46図 A-002
- 第47図 A-008
- 第48図 A-002・008 出土遺物
- 第49図 A-001
- 第50図 A-003
- 第51図 A-004
- 第52図 A-005
- 第53図 A-006①
- 第54図 A-006②・007
- 第55図 A-009①
- 第56図 A-009②・010
- 第57図 A-001・003① 出土遺物
- 第58図 A-003②・004・005① 出土遺物
- 第59図 A-005②・006・007・009① 出土遺物
- 第60図 A-009②・010 出土遺物
- 第61図 C-002～015
- 第62図 C-016～027
- 第63図 C-028～035
- 第64図 C-024・028・031 出土遺物
- 第65図 調査区 出土遺物
- 第4章 ムグリ遺跡**
- 第66図 遺構配置図及び周辺地形図
- 第67図 A地区 遺構配置図
- 第68図 A-001・002
- 第69図 C-002・003・005・006、粘土採掘坑
- 第70図 C-001～003、D-001・002、1号～3号窯跡
- 第71図 1号窯跡
- 第72図 2号・3号窯跡
- 第73図 B地区 遺構配置図
- 第74図 C-001～003、ピット群
- 第75図 A-001・002、1号窯跡灰原・2号窯跡 出土遺物
- 第76図 3号窯跡、C-002、D-001、調査区 出土遺物
- 第5章 まとめ**
- 第77図 時期別総量比率
- 第78図 調査区出土遺物重量別分布図①
- 第79図 調査区出土遺物重量別分布図②
- 第80図 調査区出土遺物重量別分布図③
- 第81図 製品別出土量
- 第82図 土師器器種別比率
- 第83図 土師器坏赤彩比率
- 第84図 土師器赤彩比率

表目次

第1章 平和公園遺跡群の概要

- 第1表 平和公園遺跡群関係文献一覧表
- 第2章 多部田貝塚**
- 第2表 遺構一覧表
- 第3表 縄文住居跡計測表
- 第4表 出土遺物計量表
- 第5表 石器計測表
- 第6表 古代住居跡計測表
- 第7表 古代住居跡出土遺物計量表
- 第8表 古代住居跡出土遺物観察表
- 第9表 土壙一覧表①
- 第10表 土壙一覧表②
- 第11表 土壙出土遺物観察表・計測表
- 第12表 竪穴状遺構一覧表
- 第13表 調査区出土土製品・石器計測表
- 第3章 貝殻塚遺跡**

- 第14表 遺構一覧表
- 第15表 縄文住居跡計測表
- 第16表 古代住居跡計測表
- 第17表 古代住居跡出土遺物計量表
- 第18表 古代住居跡出土遺物観察表
- 第19表 土壙一覧表
- 第20表 土壙出土遺物観察表
- 第21表 調査区出土土製品・石器計測表
- 第4章 ムグリ遺跡**
- 第22表 遺構一覧表
- 第23表 古代住居跡計測表
- 第24表 出土遺物観察表
- 第5章 まとめ**
- 第25表 貝殻塚遺跡 調査区出土遺物計量表
- 第26表 多部田貝塚 調査区出土遺物計量表
- 第27表 多部田貝塚・貝殻塚遺跡調査区出土遺物の総計

第1章 平和公園遺跡群の概要

第1節 調査に至る経緯

千葉市平和公園は若葉区多部田町に所在する。昭和43年に建設が始まり、現在も拡張計画が進行している。当初の建設予定地周辺には多くの遺跡の存在が古くより知られており、昭和28年に刊行された『千葉市誌』においても、多部田貝塚及び周辺の高墳群が地名表に記載され、昭和34年に刊行された『千葉県石器時代遺跡地名表』でも、多部田貝塚及びうならず遺跡が登録されている。昭和47年の造成工事の際に、円墳1基が削平を受け、加曽利貝塚博物館がその調査（昭和47年2月）と隣接地の調査（昭和47年1月）を実施した。これ以降、公園の拡充計画に先行して埋蔵文化財の確認調査及び本調査を千葉市教育委員会が実施し、昭和60年以降は（財）千葉市文化財調査協会が継続して行ってきた。西側拡張部分にあたる多部田貝塚については平成元年に確認調査を行い、貝殻塚遺跡と併せて平成4年から平成6年にかけて本調査を実施した。ムグリ遺跡については平成元年に新たに発見されたもので、平成6年に確認調査を実施し平成7年に工事部分の本調査を実施した。うならず遺跡は平成元年に確認調査を行い、平成2年から平成7年にかけて本調査を実施した。東側拡張部分には昭和47年・48年の千葉市内全域に亘る分布調査により、木戸作遺跡・内野北遺跡・内野遺跡・上の台古墳群が確認されていたが、全体を木戸作遺跡とし平成7年・8年に確認調査を、平成14年から本調査を実施している^(注)。公園内の古墳については保存が計られ昭和50年に測量調査を実施、多部田貝塚の貝層部分についても昭和60年に貝層範囲確認の試掘調査を行い、平成11年・12年には重要遺跡として一部本調査を行い、保存の計画が進められている。

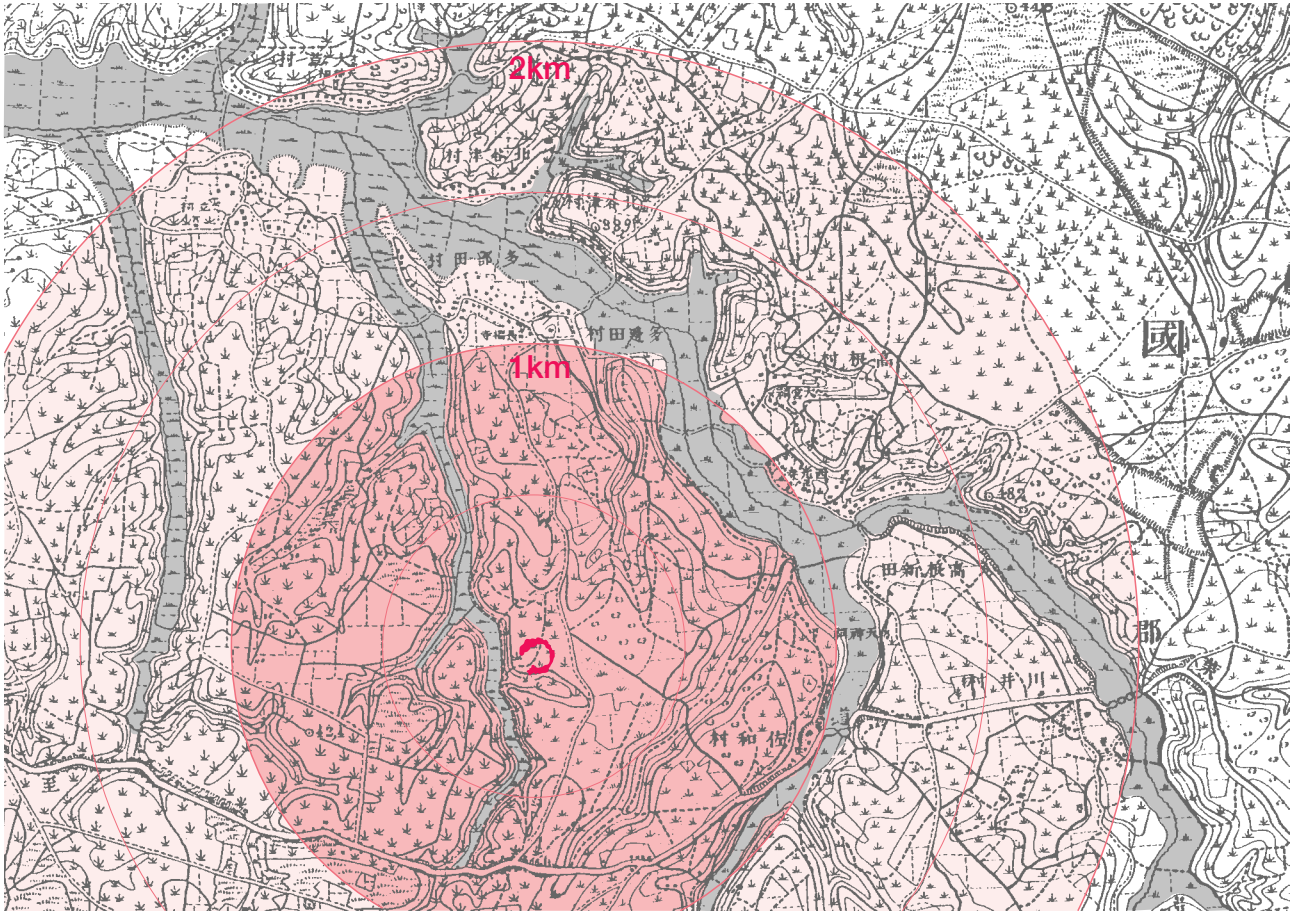
第1表 平和公園遺跡群関係文献一覧表

遺跡名	著書名	調査年度	報告年度	著者名
多部田貝塚	『大塚考古』第5集 千葉県多部田貝塚出土遺物遺体	昭和29年度	昭和39年度	前田 潮
多部田貝塚	『千葉県石器時代遺跡地名表』 千葉県の石器時代文化		昭和34年度	伊藤和夫
内野古墳群	千葉市史 史料編1 原始中世古代	昭和46年度	昭和50年度	
平和公園内C地点 平和公園内D地点 内野古墳群	『千葉市文化財調査報告』第1集 千葉市多部田町 千葉市平和公園内遺 構確認予備調査報告	昭和47・48・50年度	昭和49年度	薬師寺崇 寺沢 薫
木戸作遺跡	千葉市文化財調査協会年報9・10	平成7・8年度	平成8・9年度	山下亮介
多部田貝塚	千葉市多部田貝塚	平成10・11年度	平成12年度	佐藤順一
うならず遺跡	千葉市うならず遺跡—平成12年度調査—	平成12年度	平成12年度	長原 亘

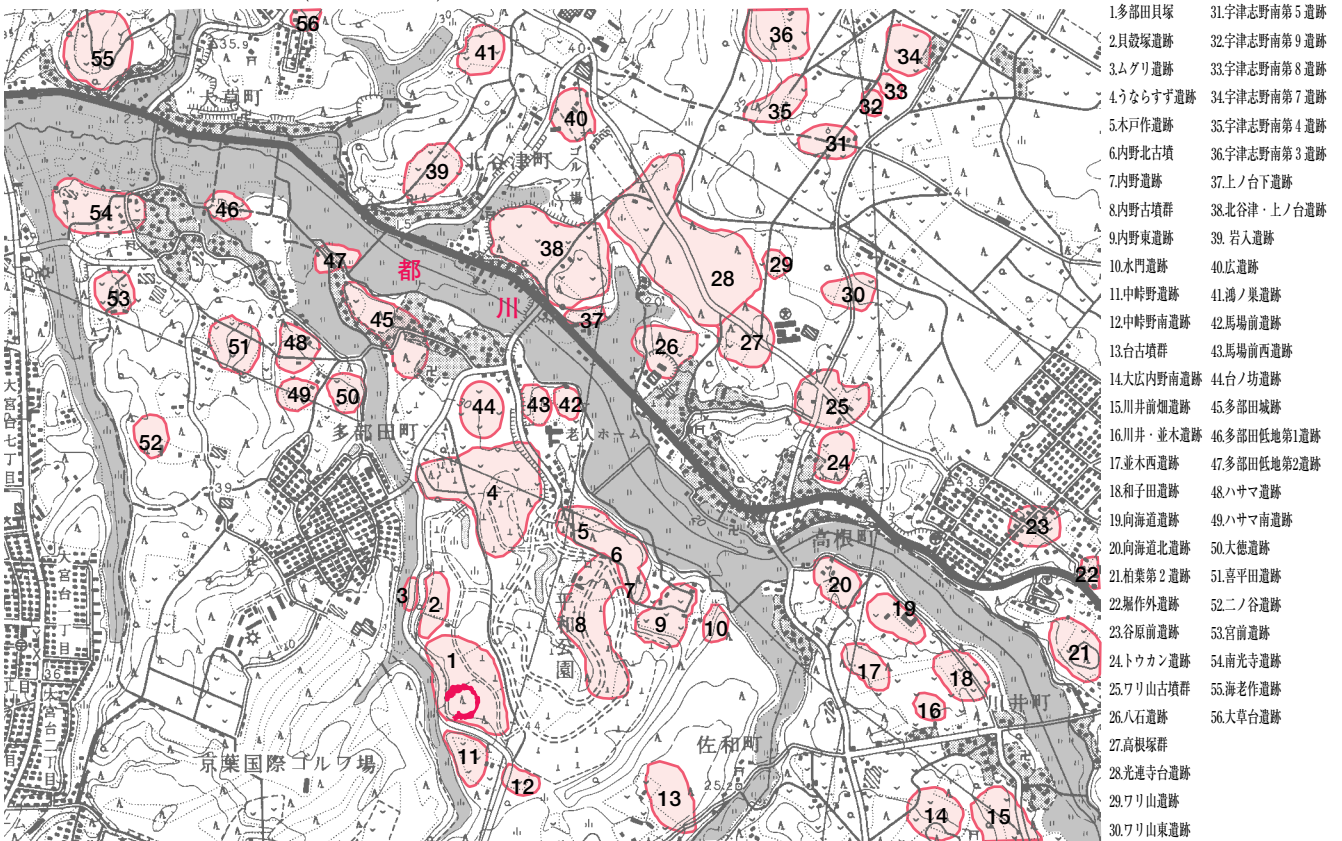
未報告分の調査の概要

昭和46年度の加曽利貝塚博物館による緊急調査では、1基の古墳の組合式箱形石棺から複数の人骨と直刀・刀子・鉄鏃を検出している。千葉市教育委員会の平和公園に対する予備調査は、第1表の『千葉市文化財調査報告』第1集で報告されているC・D地点の他にも、昭和46年度にA・B地点、昭和50年度にはE・F地点について実施されている。また昭和57年～59年度の3年度に亘り平和公園内を調査し、その際には「内野遺跡」という呼称を用いており、千葉県教育委員会文化課発行の『文化財抄報』（昭和57～59年度）に記載されている。なお「平和公園遺跡群Ⅱ」で報告するうならず遺跡の調査分と、今報告分については省略してあるので、各報告書の「例言」を参照されたい。

(注) 2,870m²を対象とした本調査が実施されており、詳細については「埋蔵文化財調査センター年報16」及び「千葉市平和公園遺跡群Ⅱ」に報告予定である。

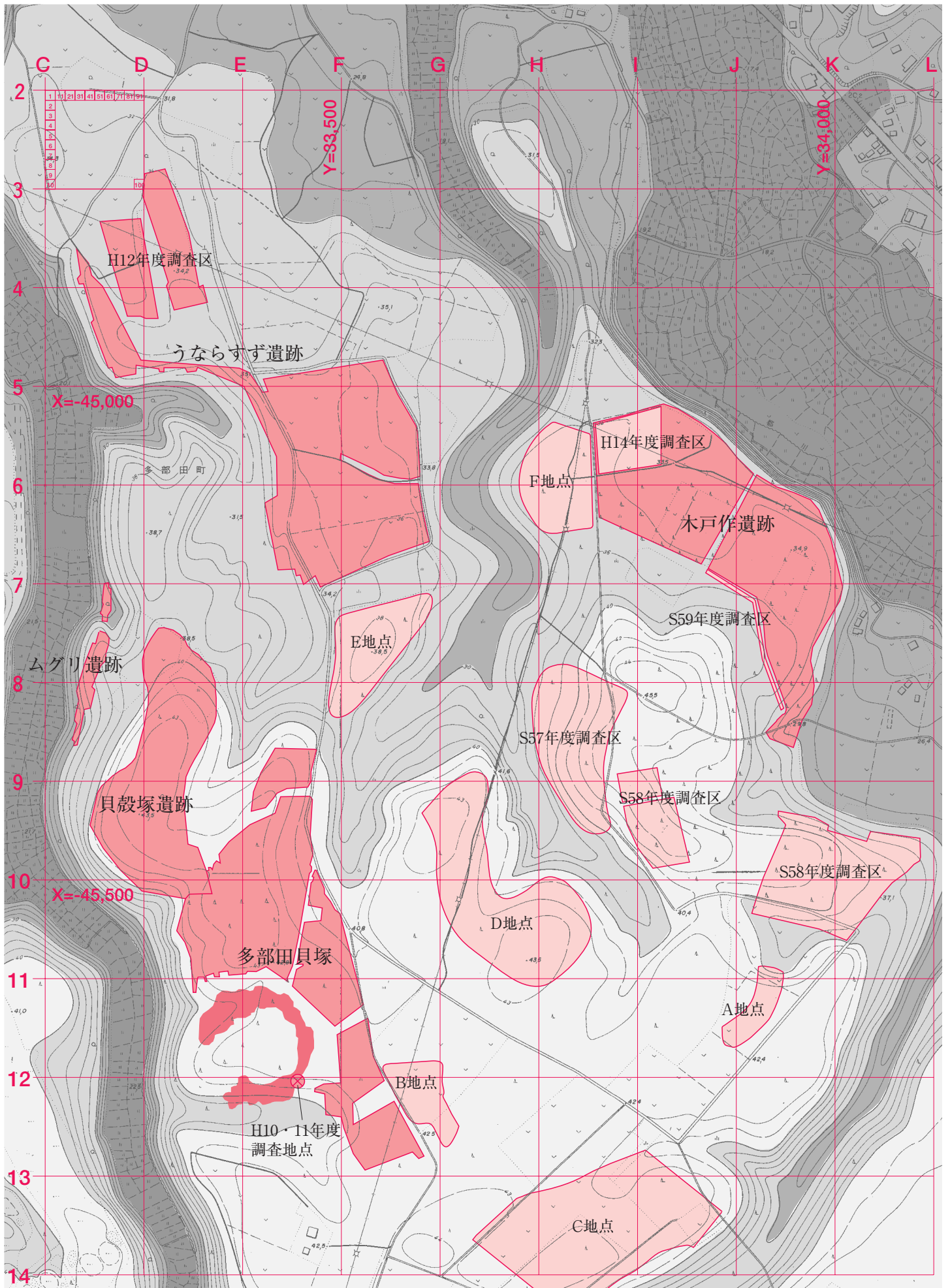


参謀本部陸軍部測量局 迅速図(明治15年発行)



国土地理院 地形図「千葉東部」(平成10年発行)

第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)



第2図 調査区と周辺地形図 (S=1/5,000)

千葉市都市計画図昭和46年測図

第2節 遺跡群の位置と歴史的・地理的環境

平和公園遺跡群は、千葉市のほぼ中央部に位置し、市内を東西に流れる都川の中流域に所在している。都川の南岸、多部田支谷に西側を画された舌状の台地上に立地する。現在では平和公園として開発整備され、旧来の地形は失われているが、開発以前の昭和46年度の都市計画図（第2図）を見ると、現在の平和公園内には北の都川からのびる小支谷によって中央部を分断されている状況が理解できる。地形的には北から南へ行くに従って緩やかに標高が高くなり、最も高いところでは標高約43mを測る。都川流域の水田及び多部田支谷の水田は標高20m前後であり、台地状との比高差は15～20m程度である。多部田支谷に面する斜面は急傾斜で、北東側の都川に面する傾斜は幾分緩やかとなる。以下、平和公園内とそれに隣接して所在するうならず遺跡・貝殻塚遺跡・多部田貝塚・ムグリ遺跡・木戸作遺跡・内野古墳群をまとめた平和公園遺跡群の概要について記す。

旧石器時代 現在のところ旧石器時代の遺物を出土した遺跡としては、うならず遺跡がある。石器ブロックを2地点確認している。ブロックはいずれも標高34m前後の緩やかな傾斜をもつ平坦面に位置する。

縄文時代 大局的にみると、多部田貝塚は中期（加曽利E式）の遺構・遺物が認められるものの後期後半（加曽利B式・安行式）の遺物が主体となり、貝塚から北側の貝殻塚遺跡へ行くに従って中期の遺構・遺物が多くなるという傾向が認められる。貝殻塚遺跡では住居跡は中期が2軒と少なく、遺構外の遺物としては中期の阿玉台式と加曽利E式が大半を占めている。またそこから北側にやや標高の下がったうならず遺跡では中期（加曽利E式）を主体とした住居跡が多く認められる。さらに北に位置する平成12年度調査区の方へ行くにしたがい、後期（堀之内式）を主体とする遺構群が多くなる。木戸作遺跡では土壙120基・住居跡1軒が確認されている。このように平和公園遺跡群内においては縄文中期から後期にかけての集落は地点を変えつつ、存続していた状況が看取出来る。

弥生時代 木戸作遺跡については弥生時代後期の住居跡が8軒確認されており、集落の存在が予測される。

古代（古墳～平安時代） 古墳時代の住居跡は、うならず遺跡において前期より出現しており、後期に至って、多部田貝塚・貝殻塚遺跡を中心とした平和公園西側の地域に集落が形成される。また同時期の古墳が現在のところ11基知られている。うち1基は前方後円墳であり、消滅したものを含めると公園内には、多くの古墳が造成されていたと思われる。奈良・平安時代の集落は、多部田貝塚・貝殻塚遺跡の北方へと移行し、うならず遺跡の地域に集中してゆく傾向がある。ただ、うならず遺跡においても、木戸作遺跡においても古墳時代から奈良・平安時代にかけては大きな断絶はなく、継続的に住居は構築されていたようである。またムグリ遺跡では古代の製鉄関連の遺構・遺物が認められ、集落との関係或いは、周辺地域との関連性が注目される。

中世 遺跡群の同一台地上の都川寄りの先端部には戦国期の城郭とされる多部田城跡があり、公園内にもかつて多部田塚群と認知された一群が存在する。うならず遺跡の平成12年度調査区では塚・土壙墓・火葬墓が検出されており、その範囲については不明な点も多いが、今後さらなる展開が十分に予測され得る。

第3節 調査の方法

調査区は公共座標をもとに100m単位の方眼を設定し、大グリッドとした。東西方向をアルファベットの大字で、南北方向は算用数字で表記している（第2図）。大グリッドはさらに10m単位の方眼に分割し、1～100の小グリッドとした。小グリッドはその中を5m四方に分割し、a～dの記号を付け、北西部の杭を基準とした。各遺構の位置についてはこの小グリッド内のa～dの単位を基本として表記し、遺構外の遺物についてもこの単位に取り上げを行った。本報告では遺構外に遺物については小グリッド単位の集計を行い、「第5章 第1節」に掲載している。

第2章 多部田貝塚

第1節 調査の概要

立地

遺跡は平和公園内の南西部に位置する。貝塚は西側を都川から南方に伸びた多部田支谷に面し、標高は40～42m程度の緩斜面に立地し、低地との比高差は約20mを測る。貝層は、現在でもやや高まりを持ち環状に盛り上がった景観を見せており、直径約120mの規模をもつ。貝塚の南は、西側の谷から更に細く南東方向へと伸びる谷によって画されている。今回報告するのは、貝層を取り巻く周辺にあたり、多部田支谷の東側に位置する標高41m前後の台地上の調査区となる。多部田貝塚の北側に位置する貝殻塚遺跡とは西側に谷を持つ点で共通し、2遺跡を画する地形的な変化は殆どなく、本来的には同一の遺跡と見なしても差し支えはない。検出されている遺構・遺物からも共通性が指摘できる。一応東西で貝殻塚遺跡と多部田貝塚とを地形的に画し、南へと伸びる傾斜の緩やかな谷があり、谷の東側の台地先端をもって、多部田貝塚の北限とする。南限は貝塚南側の谷の先端付近で、多部田貝塚の東側については平和公園の緩やかなカーブを描き南北に走る道路までとする。本報告で扱う調査区はいずれも殆ど比高差のない平坦な地形である。

調査履歴

多部田貝塚の発掘調査については、多年度に亘って実施されている。本報告で扱うのは、平成3年度から平成6年度に行われた調査についてであるが、それ以前・以後にも発掘調査は実施されており、詳細は「第1章第1節 調査に至る経緯」にまとめてあるので参照されたい。掲載している遺構についても中には複数年度にまたがっているものあり、下の一覧表に調査年度を明記した。

検出遺構・遺物の概要

平成3年度から平成6年度にかけての発掘調査では合計32,900m²を対象とし、縄文時代中・後期の住居跡12軒、土壇60基、古墳時代の住居跡7軒、土壇1基、時期不明の土壇34基、竪穴状遺構8基、溝跡12条を検出した。縄文時代の住居跡は貝塚付近に高い密度で位置している。また調査区全域で見ると、中世陶器としては11F-27aグリッド内のD-008覆土中から検出された常滑甕片、近世陶器としては10E-38aグリッド出土の志野焼碗の破片があるに過ぎない。中・近世と特定出来る遺構の検出もなく、全体として不明な点が多い。

標準土層は1層暗褐色土（表土）・2層暗褐色土・3層褐色土（ソフトローム）である。

第2表 遺構一覧表

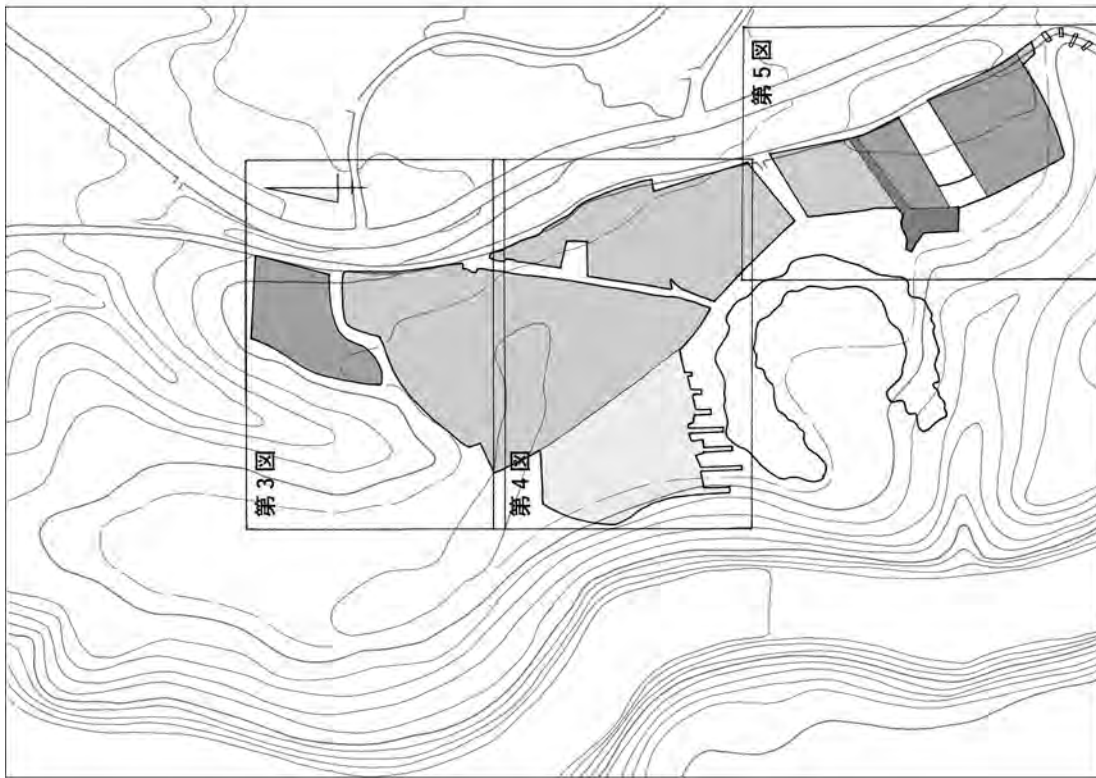
住居跡

遺構名	時期	調査年度	遺構図版	遺物図版
A-001	縄文	平成3年度	6	12
A-002	古代	平成5年度	16	24
A-003	縄文	平成5年度	7	12
A-004	縄文	平成5年度	7	13
A-005	古代	平成5年度	17	24
A-006	古代	平成5年度	18	25
A-007	縄文	平成5年度	8	13
A-008	縄文	平成5年度	8	13
A-009	縄文	平成5年度	8	
A-010	縄文	平成5年度	9	13・14
A-012	縄文	平成5年度	10	14
A-013	縄文	平成5年度	9	14
A-014	縄文	平成5年度	10	14
A-015	縄文	平成5年度	11	15
A-016	古代	平成6年度	19	25
A-017	古代	平成6年度	20	25
A-018	古代	平成6年度	21・22	26・27
A-020	古代	平成6年度	23	27
A-021	縄文	平成6年度	11	15

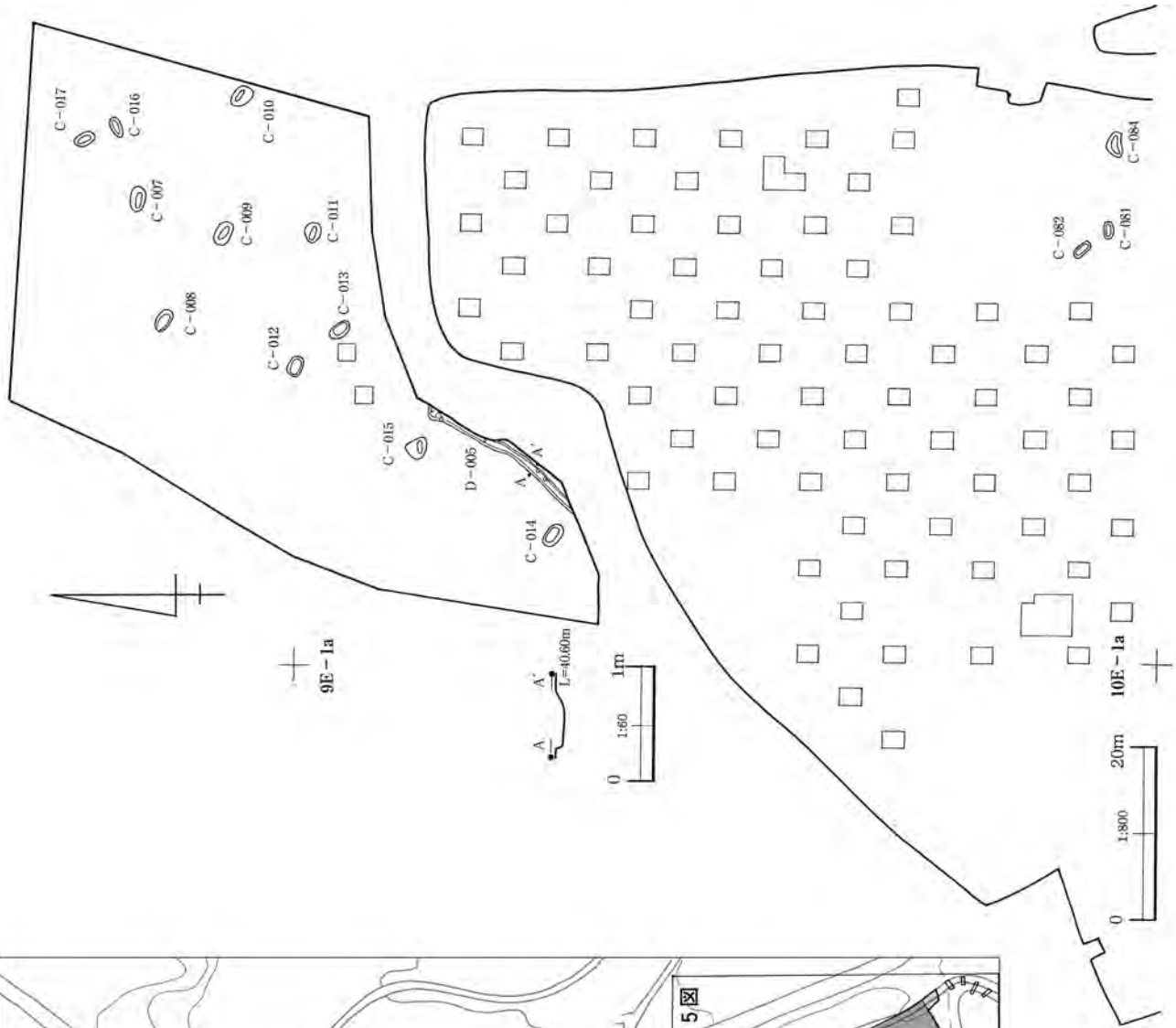
A-011・019は欠番

土壇

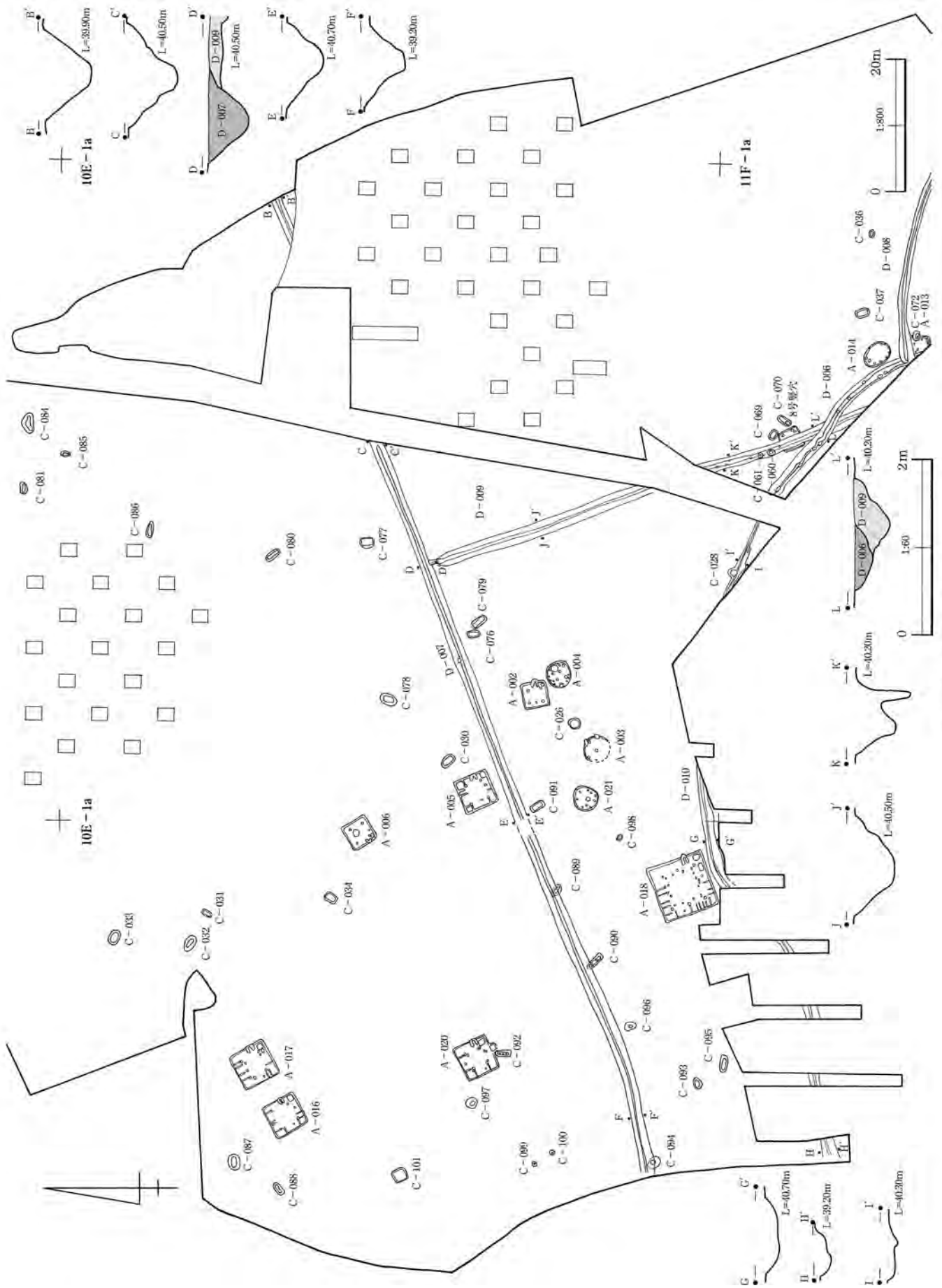
遺構名	調査年度	遺構図版
C-001～006	平成3年度	28
C-007～025	平成4年度	28～31
C-026～086	平成5年度	31～35
C-087～101	平成6年度	35～37
備考		
C-038・041・053・055・056・071は欠番		
竪穴状遺構		
遺構名	調査年度	遺構図版
1号～8号	平成5年度	40
備考		
住居跡・土壇から変更しているものもある		
溝跡		
遺構名	調査年度	遺構図版
D-001～004	平成3年度	5
D-005	平成4年度	3
D-006～009・011・012	平成5年度	4・5
D-007・010	平成6年度	4
備考		
D-011・012は調査時には命名されていないもの		



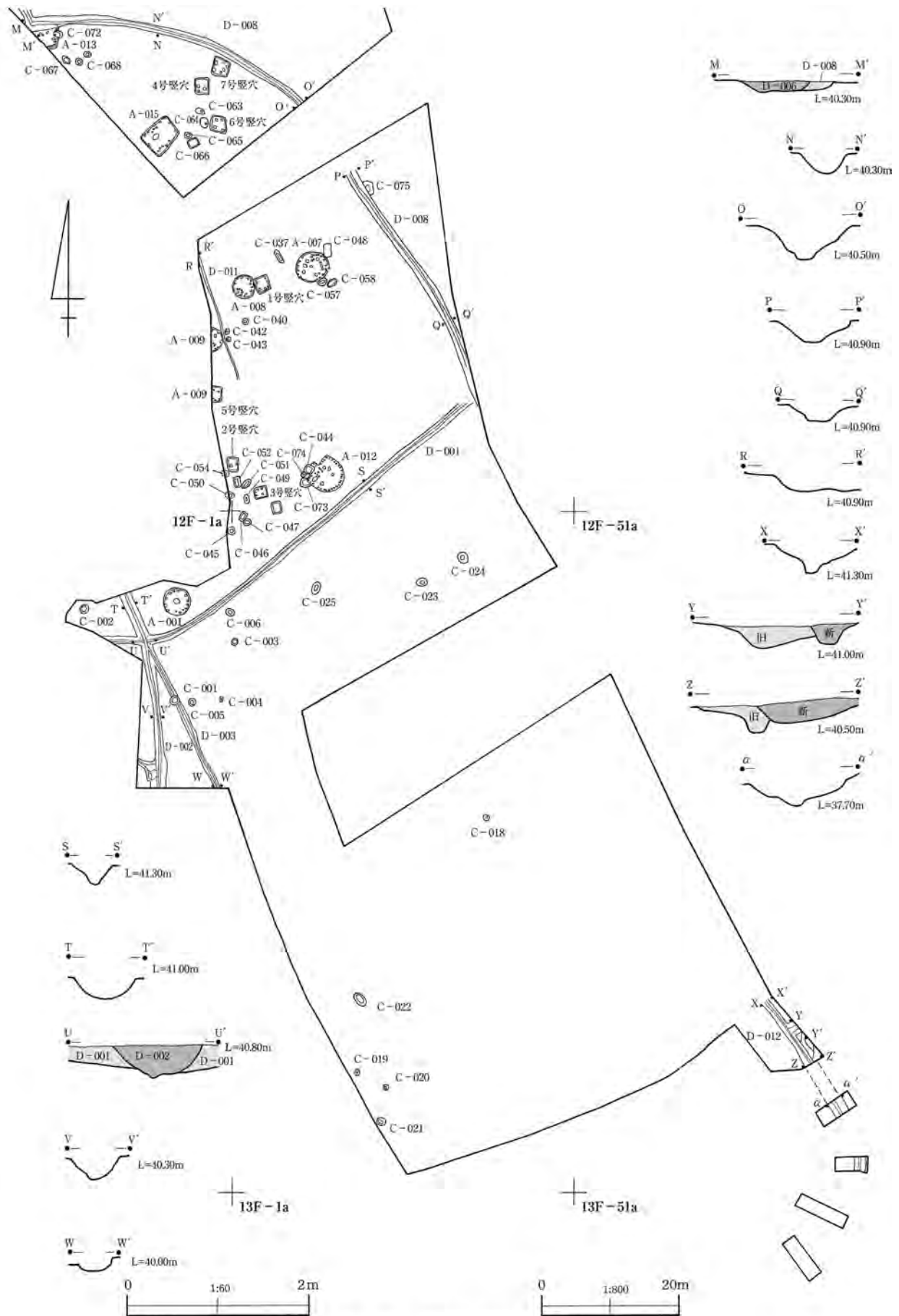
- (S=1/4,000)
- 平成3年度調査区
 - 平成4年度調査区
 - 平成5年度調査区
 - 平成6年度調査区



第3図 遺構配置図①



第4図 遺構配置図②



第5図 遺構配置図③

第2節 縄文時代住居跡

多部田貝塚から検出された縄文時代の住居跡は12軒である。中期末の加曾利EⅢ式・Ⅳ式期4軒、後期初頭の称名寺式期1軒、後期前半の堀之内1式期1軒、後期中葉から晩期初頭1軒で、残り5軒については出土遺物が少なく炉が検出されていない点などから、住居跡とするには不確定な点も多い。

今回検出された住居跡は貝層部周辺に限定されている。平成10・11年度の貝層部の調査により、貝層下に加曾利EⅢ式・Ⅳ式期の住居跡が検出されているが、これにつながるものと考えられる。貝層形成の中心となる後期中葉の住居跡と思われるものは第12号住居跡のみで、これも明確な時期決定はできない。貝層部南側に谷が入り込む地形的な制約を考慮すると、縄文時代の住居跡は貝層部分及び斜面地に限定される可能性があり、住居跡が貝層の外側に広く分布する園生貝塚や加曾利貝塚とは異なった集落構成を示す。

A-001は直径約4mの円形を呈し、中央に炉を有する。石棒3点(5～7)、石皿1点(8)、磨石1点(11)、敲石1点(12)、磨製石斧1点(10)、軽石製品2点(9・13)が出土している。5の石棒はピット1に頭部を突き刺した状態で出土し、基部は住居跡南側から出土している。土器は全面緻密な縄文を施したもの(1・2)と、微隆起線文を施した加曾利EⅣ式土器(4)及び磨消縄文を施した称名寺1式土器(3)が床面から若干浮いた状態で出土した。1の土器は器形から称名寺式土器と思われ、住居跡の時期もほぼ同じ時期と思われる。5の有頭石棒の出土状態は極めて珍しい例である。樹立した出土例としては東京都船田遺跡C-35号住居例や成田市長田雉子ヶ原遺跡245号住居例等があるが、ピット内に頭部を入れた倒立状態での出土例は少ない。このピットが石棒を樹立させるためのものか、柱穴として使用したものに廃棄の段階で石棒を入れたものかは今後の検討を有するが、いずれも祭祀的色彩が強いものである。なお、千葉市内野第1遺跡では後期の加曾利B式期のものと思われる石棒が屋外で頭部を地中に突き刺した状態で出土しているが、掘り込み等は検出されなかった。

A-003は直径約4.5mの円形を呈し、中央にはほぼ完形の加曾利EⅢ式土器(1)を埋め込んで炉としている。2の連弧文土器の表面には一部赤彩痕が認められ、炉内から破片の一部が出土している。住居跡の時期は加曾利EⅢ式期と思われる。

A-004は直径約3.5mの円形を呈し、中央に炉を有する。石鏃1点(7)、打製石斧1点(8)が出土している他、加曾利EⅢ式期～EⅣ式期の土器が出土しており、住居跡の時期もほぼ同じ時期と思われる。

A-007は直径約4.5mの円形を呈するが、炉は検出されていない。遺物の出土も少なく、加曾利B式土器が若干出土しているのみである。東側の張り出し部は別遺構と思われる。

A-008は直径約3.5mの円形を呈するが、炉は検出されていない。遺物の出土も少なく、加曾利EⅣ式土器(1)と加曾利B式土器(2・3)が出土している。

A-009は直径約3.7mの円形の東半分が検出されているが、遺物の出土は認められない。

A-010は直径約4mの円形を呈し、中央に炉を有する。土器は微隆起線文を施したもの(1～9)と条線によるもの(10)が出土しており、いずれも加曾利EⅣ式土器である。12・13は注口土器の同一個体で、15の蓋形土器とセットになる可能性がある。14は両耳壺の把手であり、11は覆土上面から出土した加曾利B式土器で底部のみを欠く。住居跡の時期は加曾利EⅣ式期と思われる。

A-012はD字形を呈し、西側に張り出し部を有するが、一部第44号土壇により切られている。南西隅に1.2m×0.68mの大型の炉が検出されている。遺物は曾谷式(1・2)、安行2式(3～5)、安行3a式(7)が出土している。9は安行1式に伴う異形台付土器で貝の花貝塚出土例に類似する。遺構確認時に覆土上面から焼土が確認されており、1・7・9の破片の一部が出土している。6の安行3b式土器はC-044から出土している。住居跡の時期は曾谷式期～安行3a式期の幅で捉えられる。

A-013は一部が検出されているのみで、規模・形状は不明である。遺物は曾谷式期から安行1式期の土器の小片

が出土しているのみである。

A-014は約4.5m×3.5mの楕円形を呈するが、炉は検出されていない。遺物は曾谷式期から安行1式期の土器の小片が出土しているのみである。

A-015は約4.9m×4mの方形を呈し、中央に炉を有する。覆土中にハマグリを主体とし、アサリ・シオフキ・キサゴを含む貝ブロックが検出されている。遺物は加曾利EⅢ式土器(1)と堀之内1式(2~7)が出土しているが、床面から出土しているのは2と7の沈線と条線を主体とする土器で、住居跡の時期は堀之内1式期と思われる。

A-021は直径約4mの円形を呈し、中央に炉を有する。出土遺物は微隆起線文を施したもの(1~6)と条線によるもの(7)と沈線を主体としたもの(11・14)が出土しており、いずれも加曾利EⅣ式土器である。14が床面から出土しており、住居跡の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

第3表 縄文住居跡計測表

住居番号	位置	時期	主軸方位	平面形態	規模(m)		壁高(cm) 最大~最小	炉	柱穴
					長軸×短軸				
A-001	12E-92a	称名寺	N- 25° -E	円形	4.10 × 4.08		14~9	有	13
A-003	10E-19a	加曾利EⅢ	N- 37° -E	円形	(4.85) × 4.40		14~8	有	11
A-004	10E-28c	加曾利EⅢ~Ⅳ	N- 11° -E	円形	3.86 × 3.55		21~10	有	19
A-007	11F-17a	(加曾利B)	N- 7° -W	円形	4.84 × 4.54		6~5	無	34
A-008	11F-7c	(加曾利B)	N- 22° -W	円形	3.60 × 3.40		26~14	無	18
A-009	11E-98b	不明	N- 3° -W		3.72 × (1.55)		14~6	無	10
A-010	12F-3d	加曾利EⅣ	N- 3° -W	楕円形	4.04 × 3.74		42~12	有	5
A-012	11F-20d	(曾谷~安行3a)	N-130° -E	D字形	4.30 × 5.06		25~6	有	45
A-013	11E-74a	(曾谷~安行1)			(4.95) × (4.74)		16~12	無	18
A-014	11E-73a	(曾谷~安行1)	N- 35° -W	楕円形	4.50 × 3.46		25~10	無	9
A-015	11E-95a	堀之内1	N- 43° -E	方形	4.90 × 4.00		14~12	有	18
A-021	10E-9a	加曾利EⅣ	N- 37° -E	円形	4.06 × 3.80		8~4	有	9

第4表 出土遺物計量表

単位(g)

単位(点)

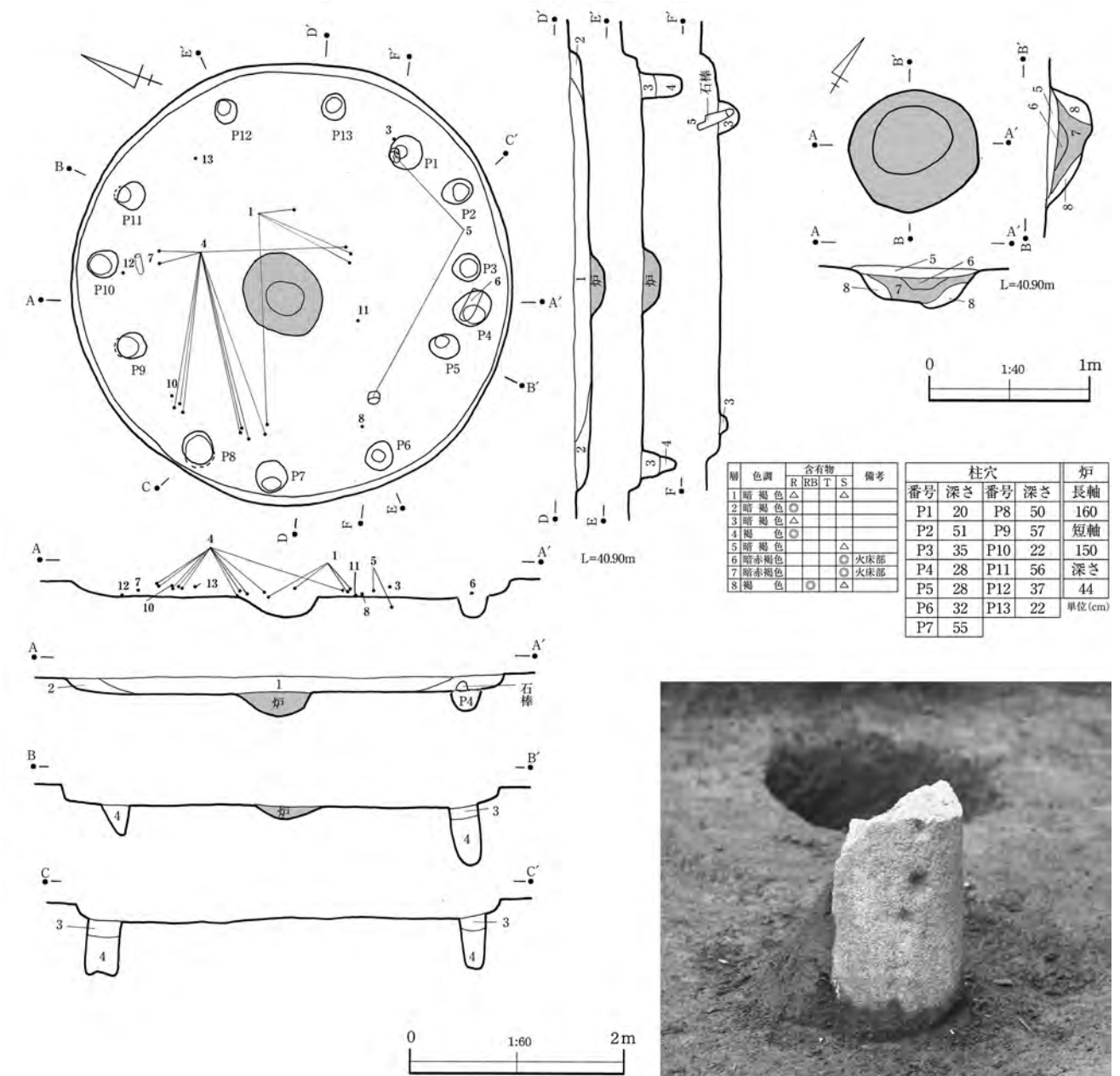
住居番号	土器	石製品	総計	剥片	石鏃	打斧	磨斧	敲石	軽石	石皿	磨石	石棒	不明	計
A-001	6793	18770.3	25563.3				1	1	2	2	1	3	1	11
A-003	1553		1553											
A-004	5393	146.5	5539.5	4	1	1				1				7
A-007	418		418											
A-008	682		682											
A-009														
A-010	6720	1038	7758							2	2			4
A-012	3341	10	3351	3										3
A-013	125		125											
A-014	28		28											
A-015	2720	118	2838										2	2
A-021	7518	677	8195							1				1

第5表 石器計測表

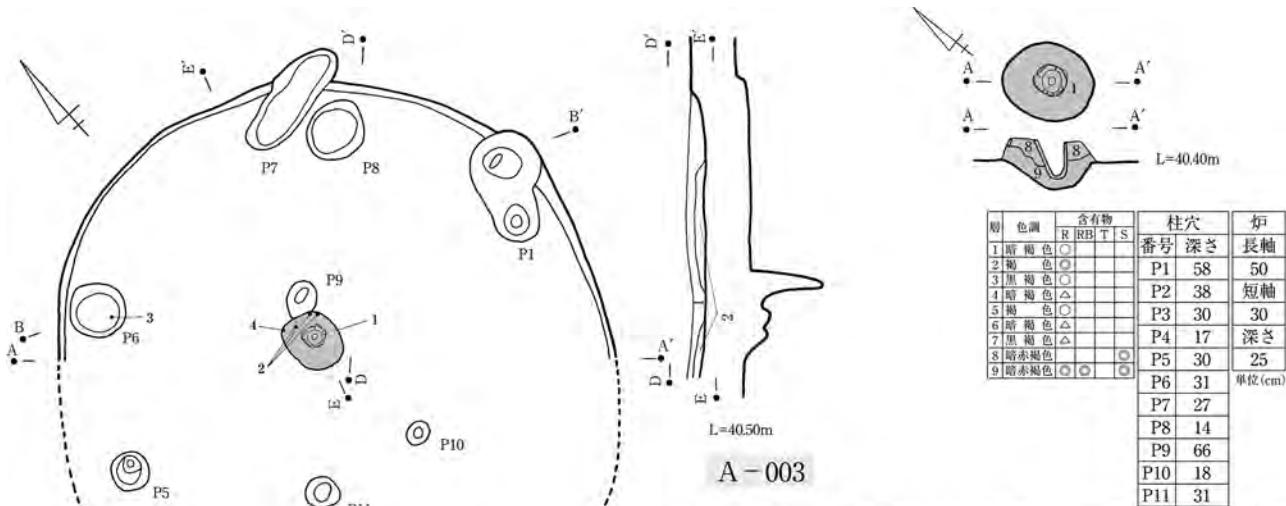
単位(g)

単位(cm)

遺構名	No	種別	石材	重量	長	幅	厚	遺構名	No	種別	石材	重量	長	幅	厚
A-001	5	石棒	緑泥片岩	8600	26.5+	11.6	11.6	A-001	12	敲石	砂岩	810	8.7+	9.0+	7.7
A-001	6	石棒	緑泥片岩	4300	29.0+	9.5	9.2	A-001	13	軽石製品	軽石	605	13.8+	7.0+	6.0+
A-001	7	石棒	緑泥片岩	550	15.4+	6.0+	3.2+	A-004	7	石鏃	黒曜石	2	1.7+	2.3	0.5
A-001	8	石皿	安山岩	1180	14.8+	11.0+	4.0	A-004	8	打製石斧	安山岩	42	5.3+	5.0	1.4
A-001	9	軽石製品	軽石	45	7.5	4.5	3.5	A-010	16	磨石	花崗岩	861	11.2	9.2	5.2
A-001	10	磨製石斧	蛇紋岩	45	6.1	2.9	1.4	A-021	16	磨石	花崗岩	676	11.2	9.2	4.5
A-001	11	磨石	砂岩	810	8.7	9.0	7.7								



第6図 A-001

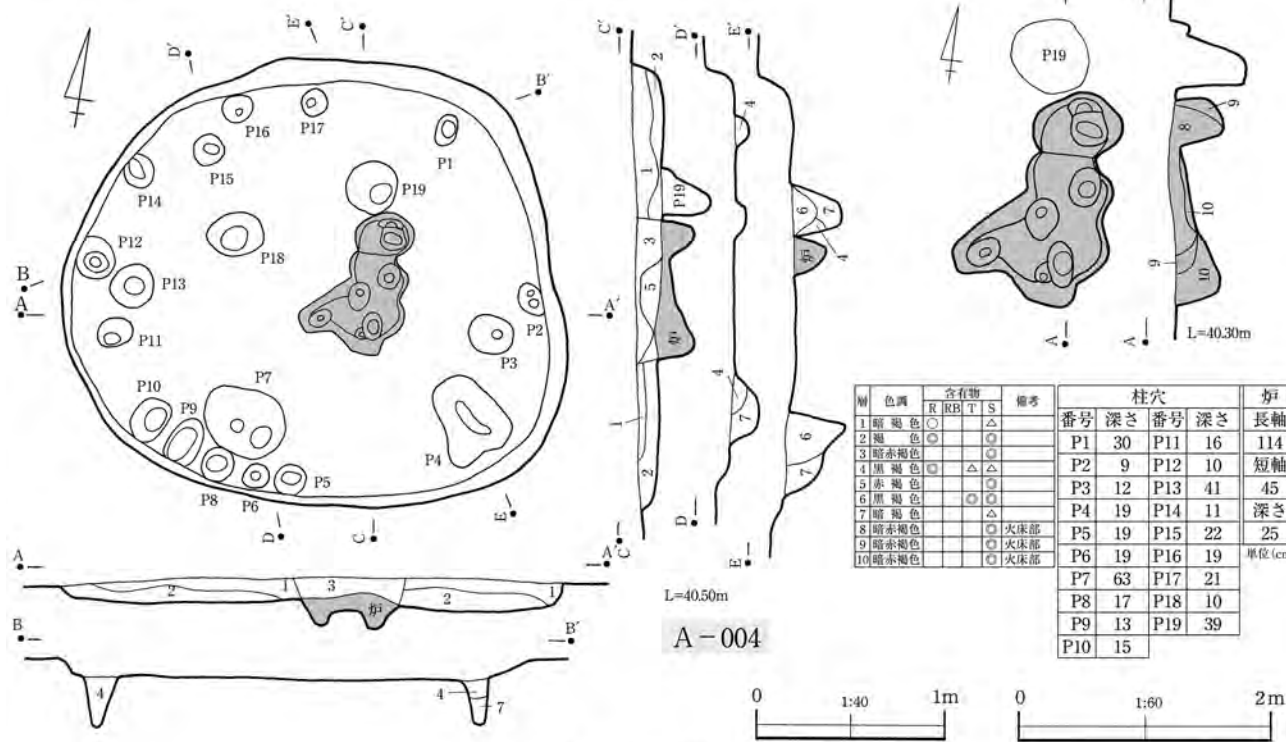
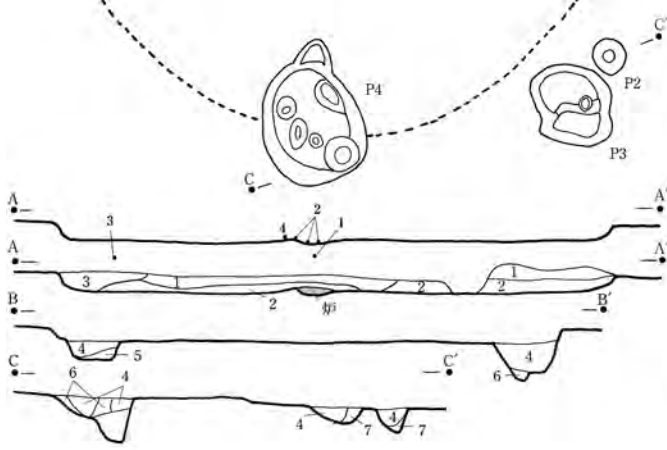


層	色調	含有物				柱穴		炉	
		R	RB	T	S	番号	深さ	番号	深さ
1	暗褐色	○				P1	58		50
2	褐色	○				P2	38		短軸
3	黒褐色	○				P3	30		30
4	暗褐色	△				P4	17		深さ
5	褐色	○				P5	30		25
6	暗褐色	△				P6	31		
7	黒褐色	△				P7	27		
8	暗赤褐色				○	P8	14		
9	暗赤褐色	○			○	P9	66		
						P10	18		
						P11	31		

単位(cm)



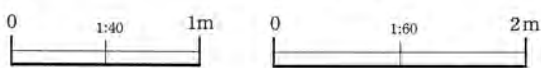
A-003 全景



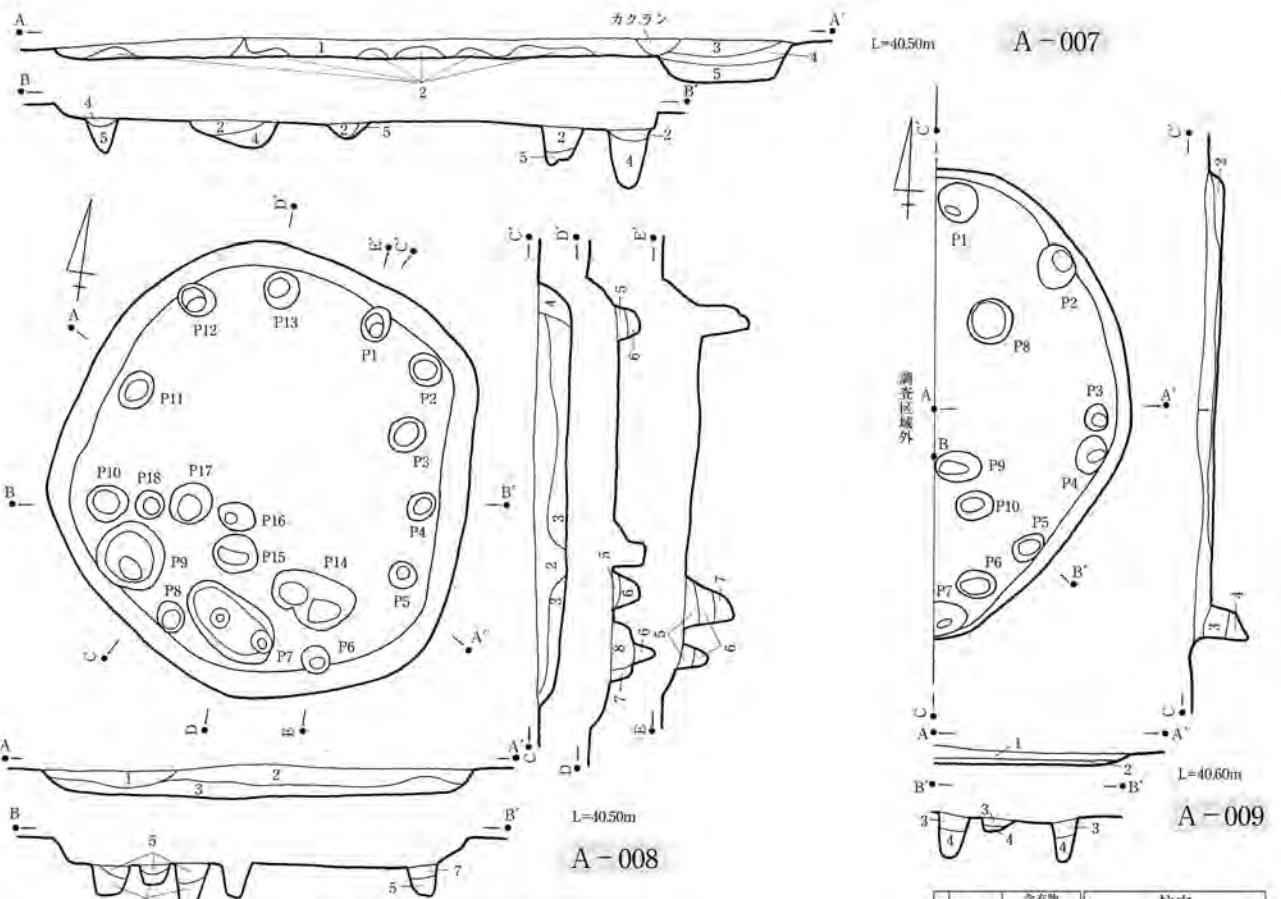
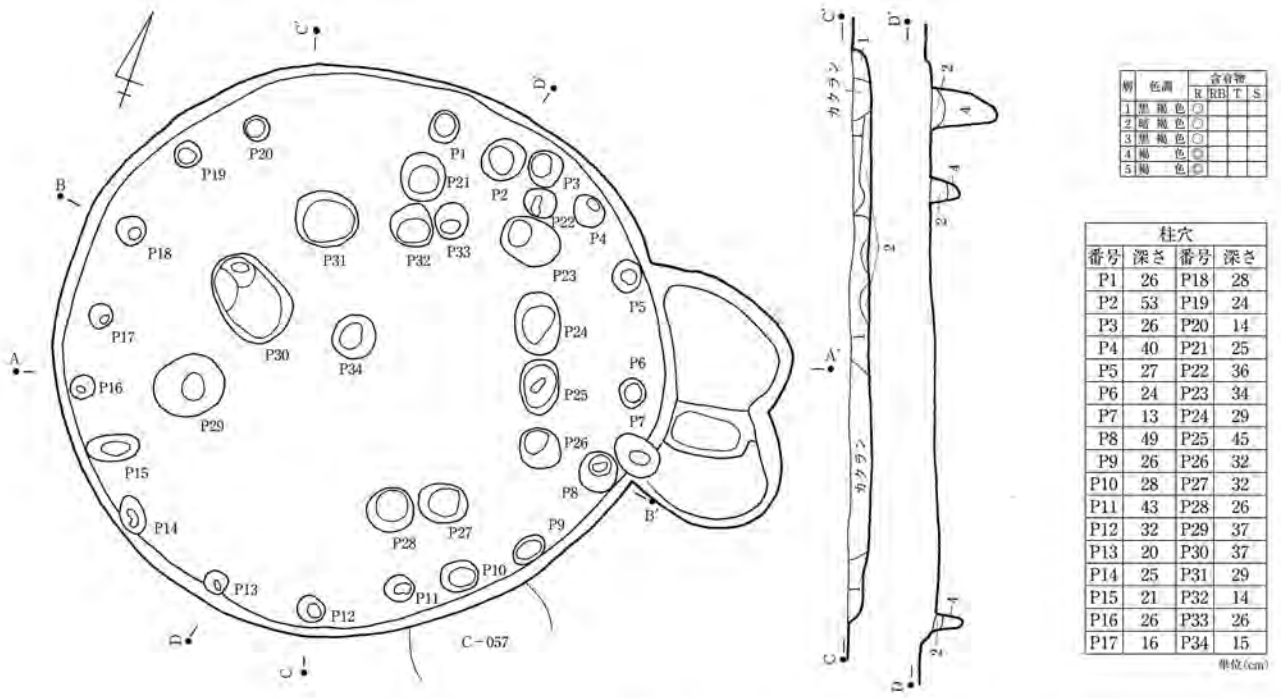
層	色調	含有物				備考	柱穴		炉	
		R	RB	T	S		番号	深さ	番号	深さ
1	暗褐色	○			△					
2	褐色	○			△					
3	暗赤褐色	○			△					
4	黒褐色	○			△					
5	赤褐色	○			△					
6	黒褐色	○			△					
7	暗褐色	○			△					
8	暗赤褐色				○	火床部				
9	暗赤褐色				○	火床部				
10	暗赤褐色				○	火床部				

番号	深さ	番号	深さ	長軸
P1	30	P11	16	114
P2	9	P12	10	短軸
P3	12	P13	41	45
P4	19	P14	11	深さ
P5	19	P15	22	25
P6	19	P16	19	
P7	63	P17	21	
P8	17	P18	10	
P9	13	P19	39	
P10	15			

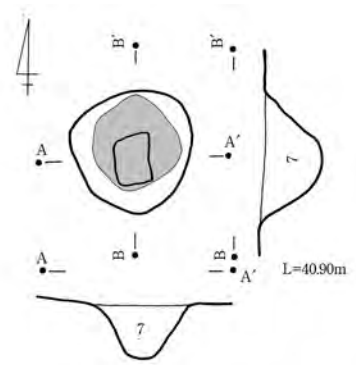
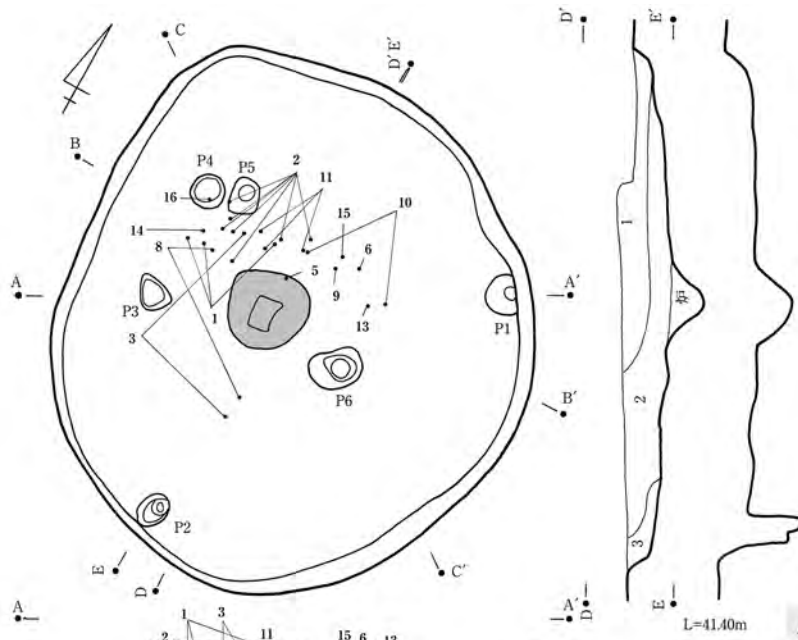
単位(cm)



第7図 A-003・004

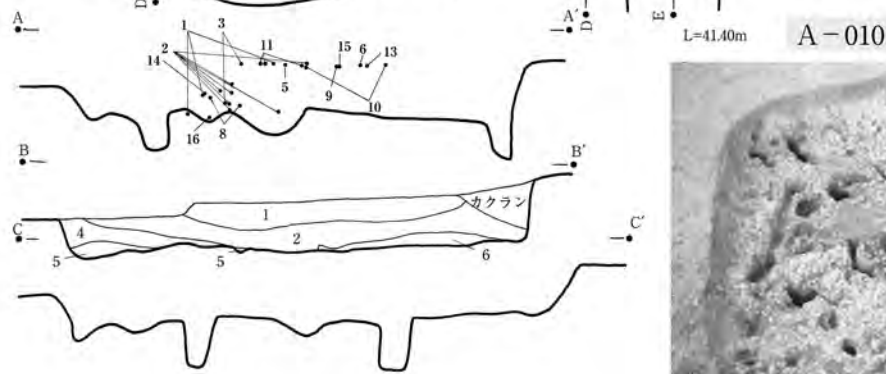


第8図 A-007・008・009

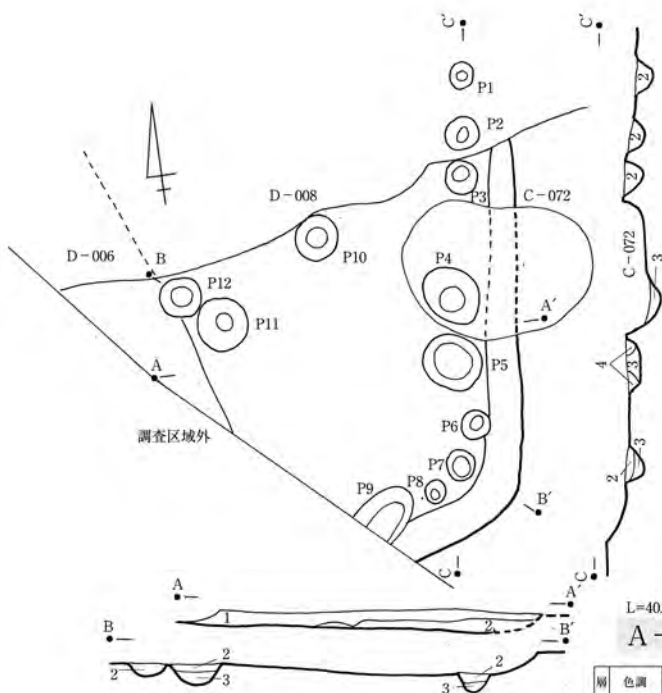


層	色調	含有物				柱穴		炉
		R	RB	T	S	番号	深さ	
1	暗褐色	○				P1	37	66
2	暗褐色	○				P2	43	短軸
3	褐色	○				P3	33	65
4	褐色	○				P4	20	深さ
5	褐色	○				P5	40	28
6	褐色	○				P6	43	
7	暗赤褐色				□			

単位(cm)



A-010 全景

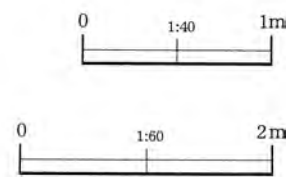


A-013 全景

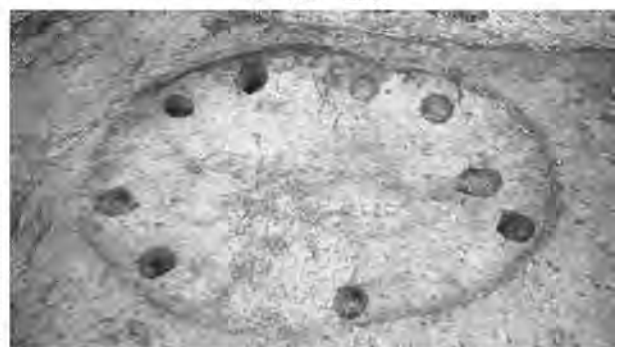
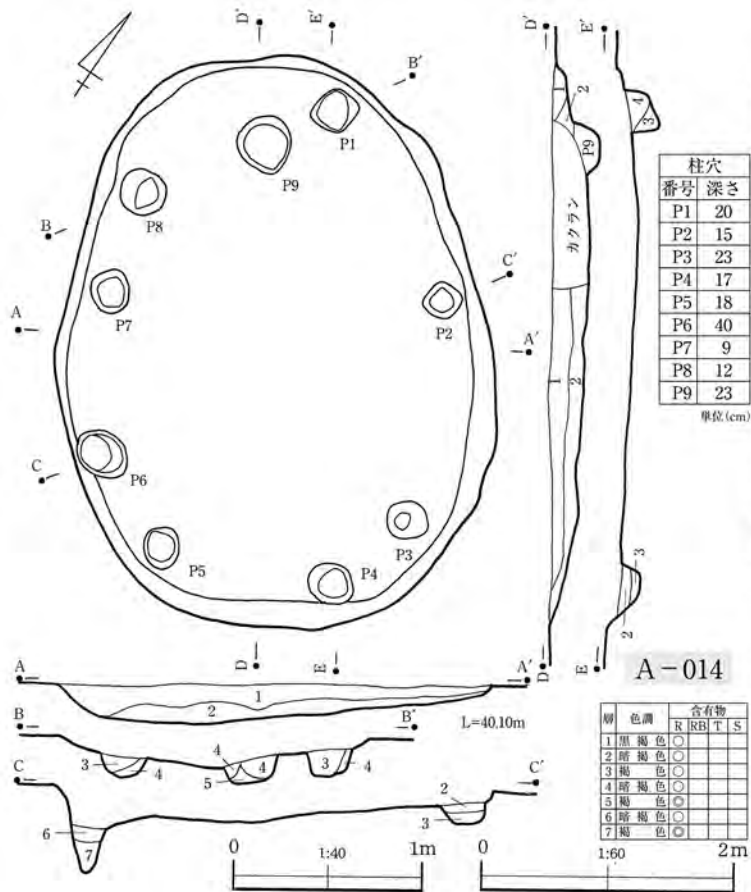
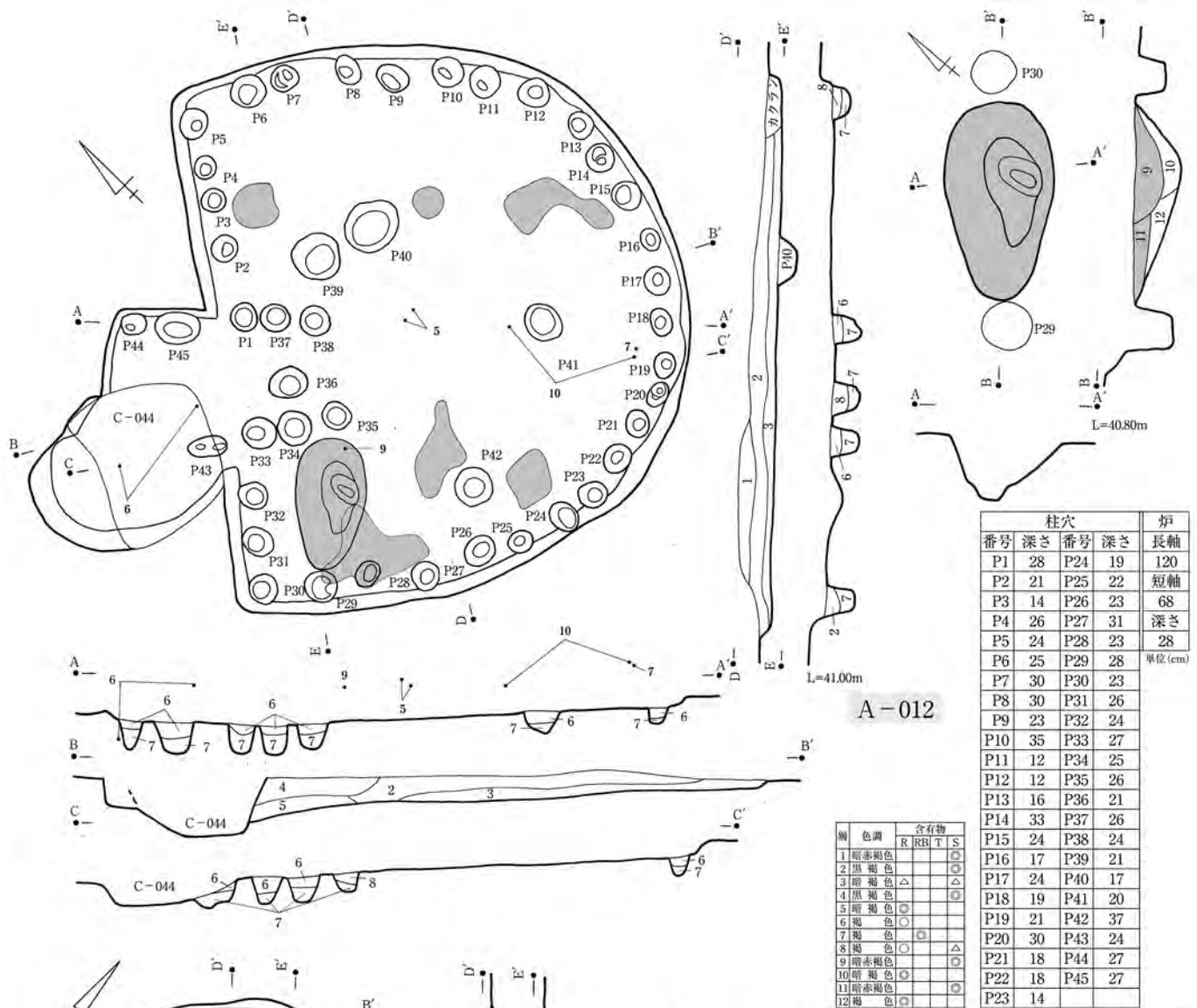
層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	黒褐色	○			
2	褐色	○			
3	褐色	○			
4	暗褐色				△

柱穴			
番号	深さ	番号	深さ
P1	9	P7	15
P2	17	P8	11
P3	18	P9	18
P4	31	P10	8
P5	10	P11	18
P6	14	P12	12

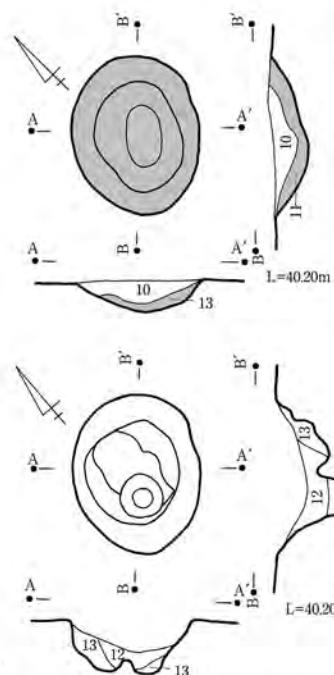
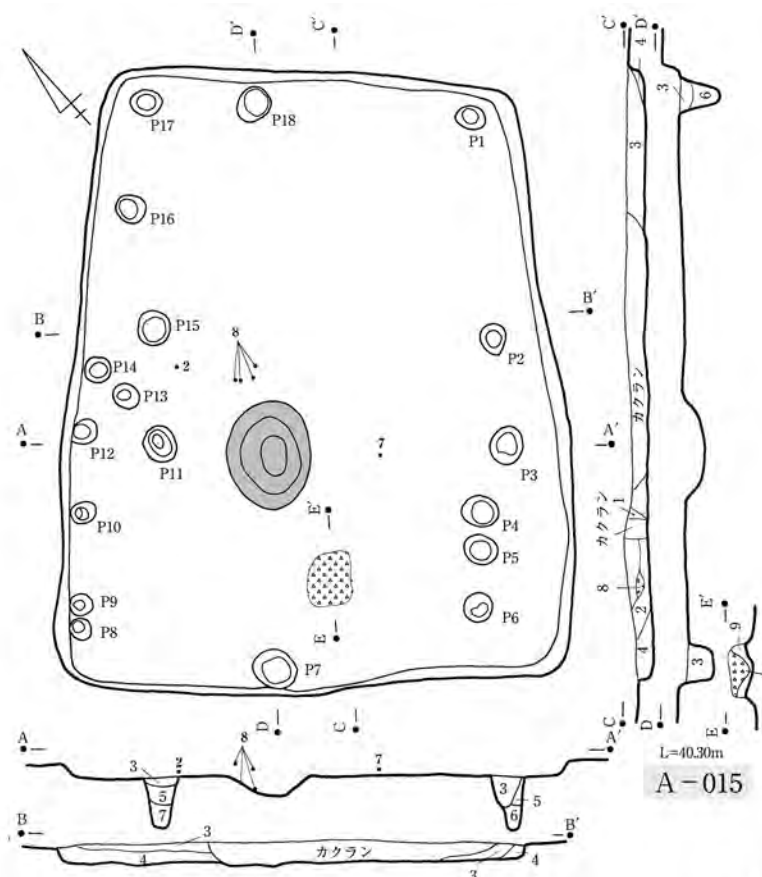
単位(cm)



第9図 A-010・013

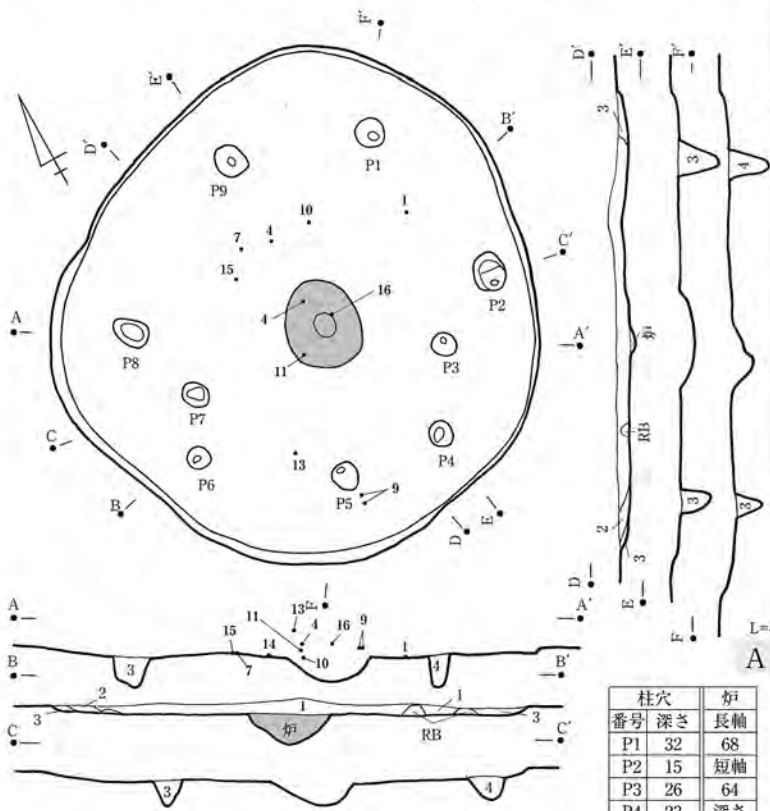


第10図 A-012・014

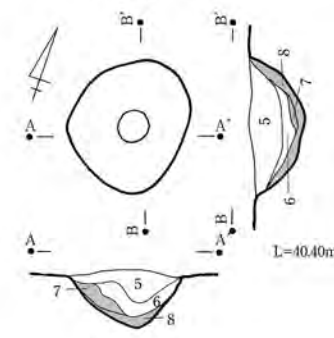


柱穴		炬
番号	深さ	長軸
P1	13	84
P2	15	短軸
P3	43	68
P4	17	深さ
P5	12	18
P6	37	単位(cm)
P7	21	
P8	18	
P9	17	
P10	13	
P11	41	
P12	10	
P13	14	
P14	13	
P15	18	
P16	15	
P17	12	
P18	35	

層	色調	含有物					備考	層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S					R	RB	T	S		
1	黒褐色△					貝を含む	8	黒褐色△						混土貝類	
2	褐褐色○						9	暗褐色△							
3	暗褐色○						10	暗褐色△						△	
4	暗褐色○						11	暗赤褐色○						◎ 灰床部	
5	褐色○						12	暗赤褐色○						◎	
6	褐色○						13	褐色○							
7	暗褐色△						14	黒褐色△						△	

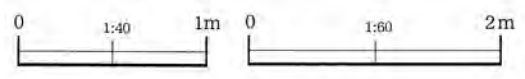


A-021 全景

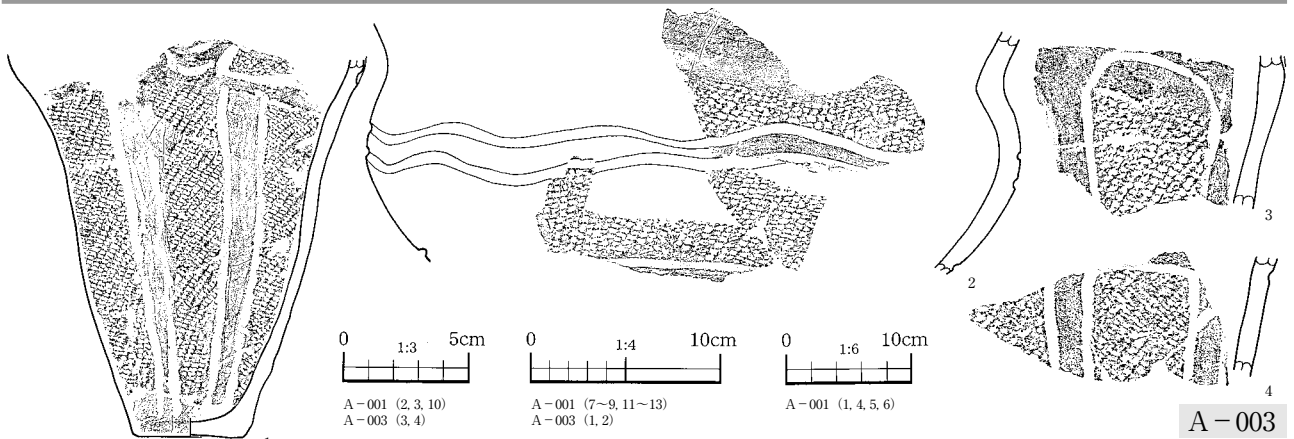
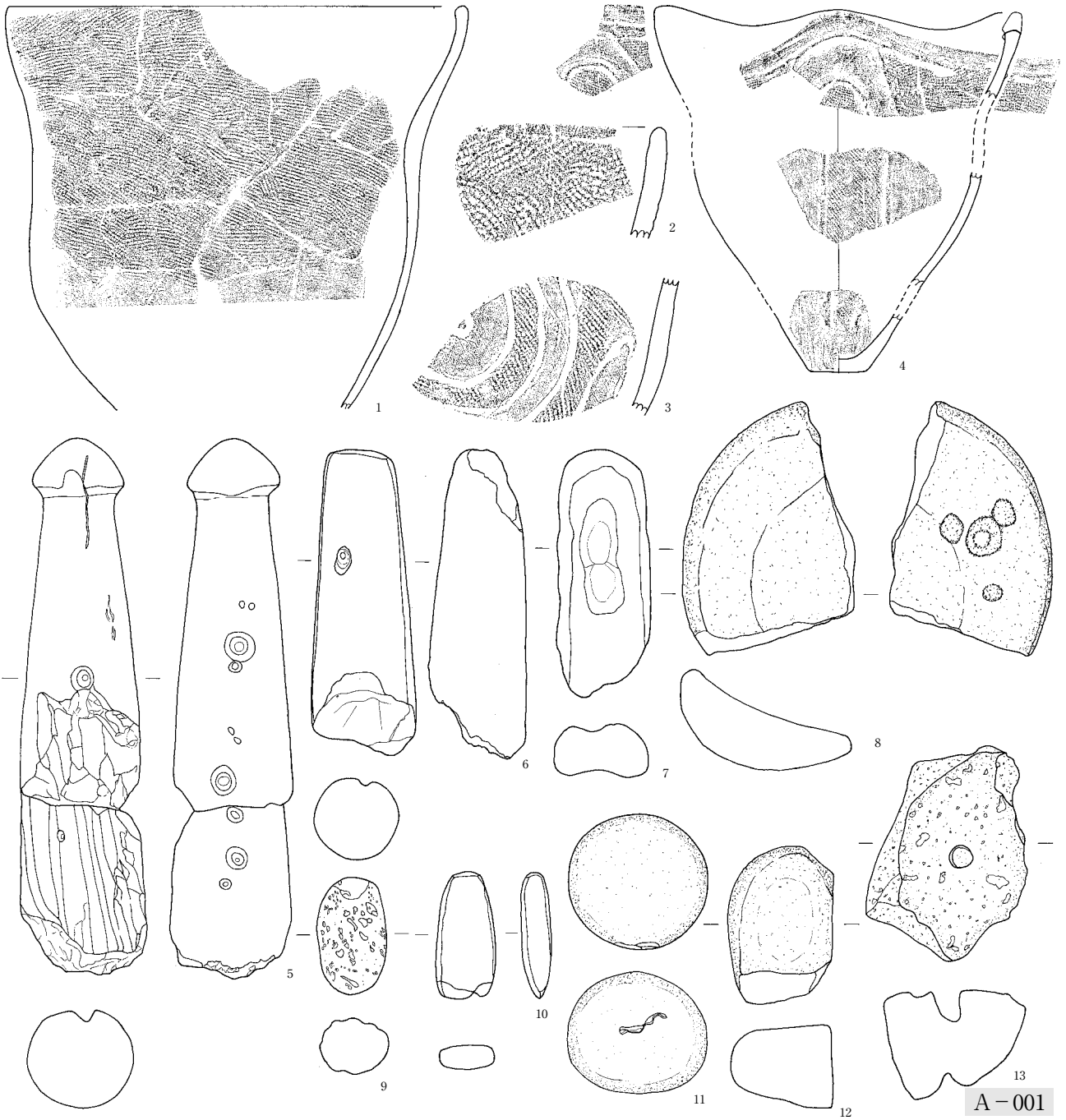


柱穴		炬
番号	深さ	長軸
P1	32	68
P2	15	短軸
P3	26	64
P4	23	深さ
P5	21	30
P6	23	単位(cm)
P7	19	
P8	16	
P9	36	

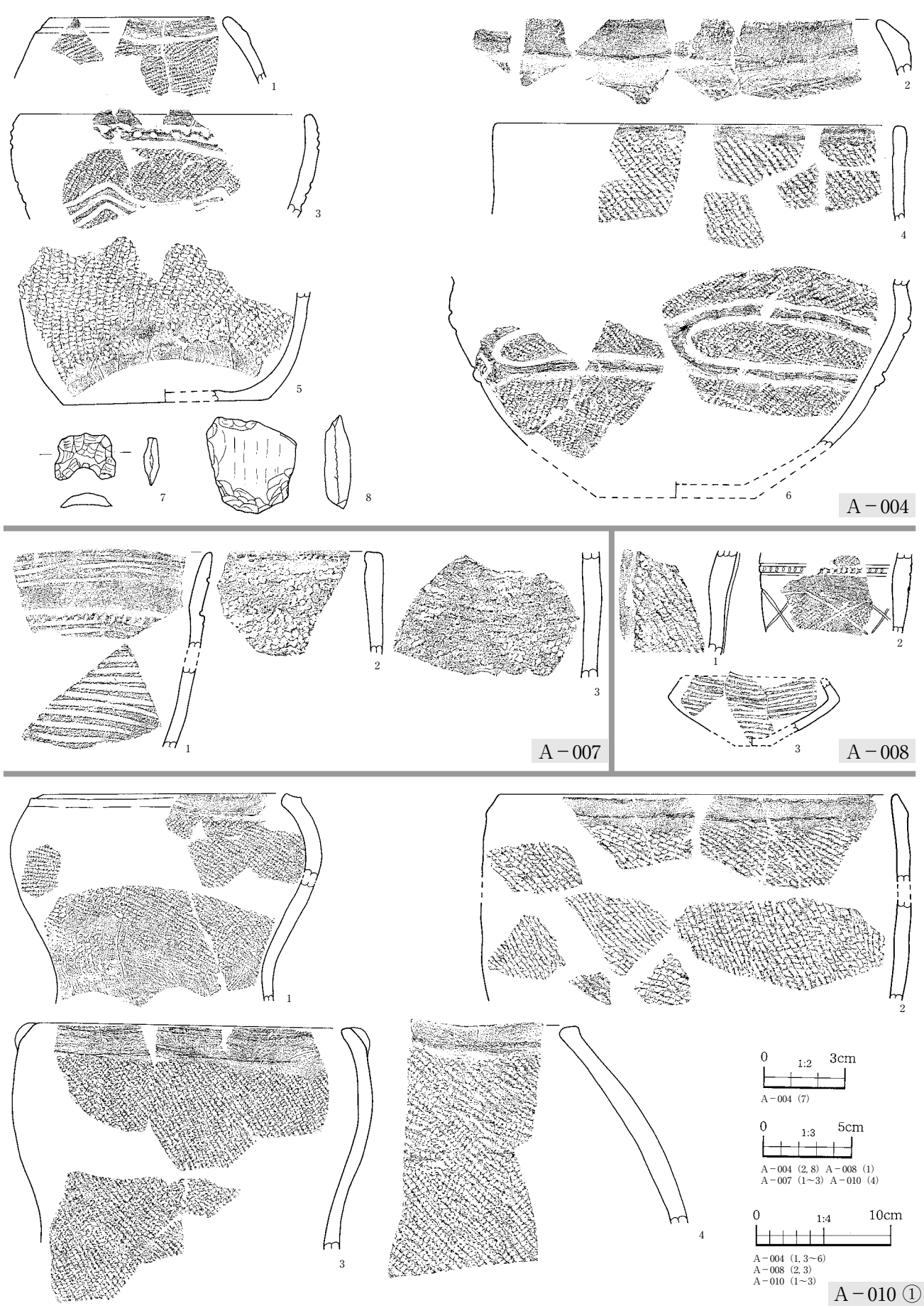
層	色調	含有物					備考	層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S					R	RB	T	S		
1	暗褐色○						5	暗褐色△							
2	暗褐色○						6	暗褐色△						△	
3	褐色○						7	暗赤褐色○						◎ 灰床部	
4	暗褐色△						8	比高い暗褐色						◎ 灰床部(灰)	



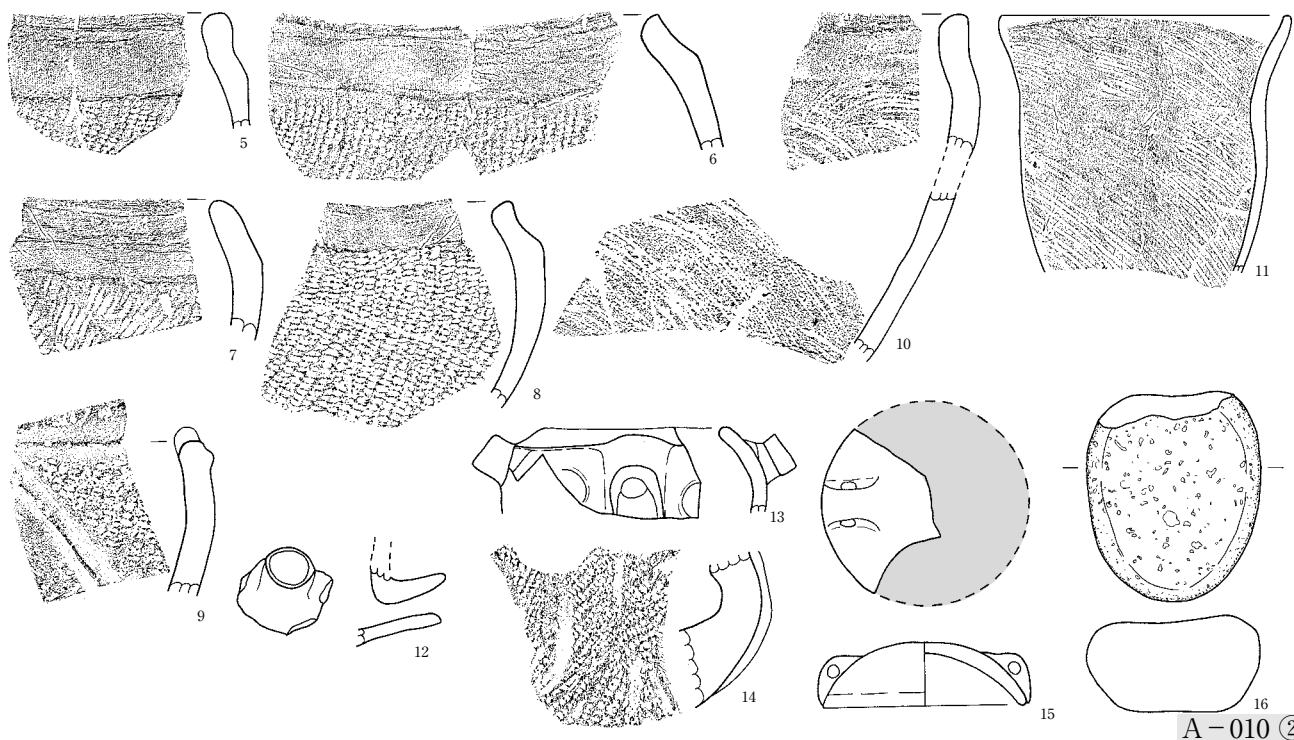
第11図 A-015・021



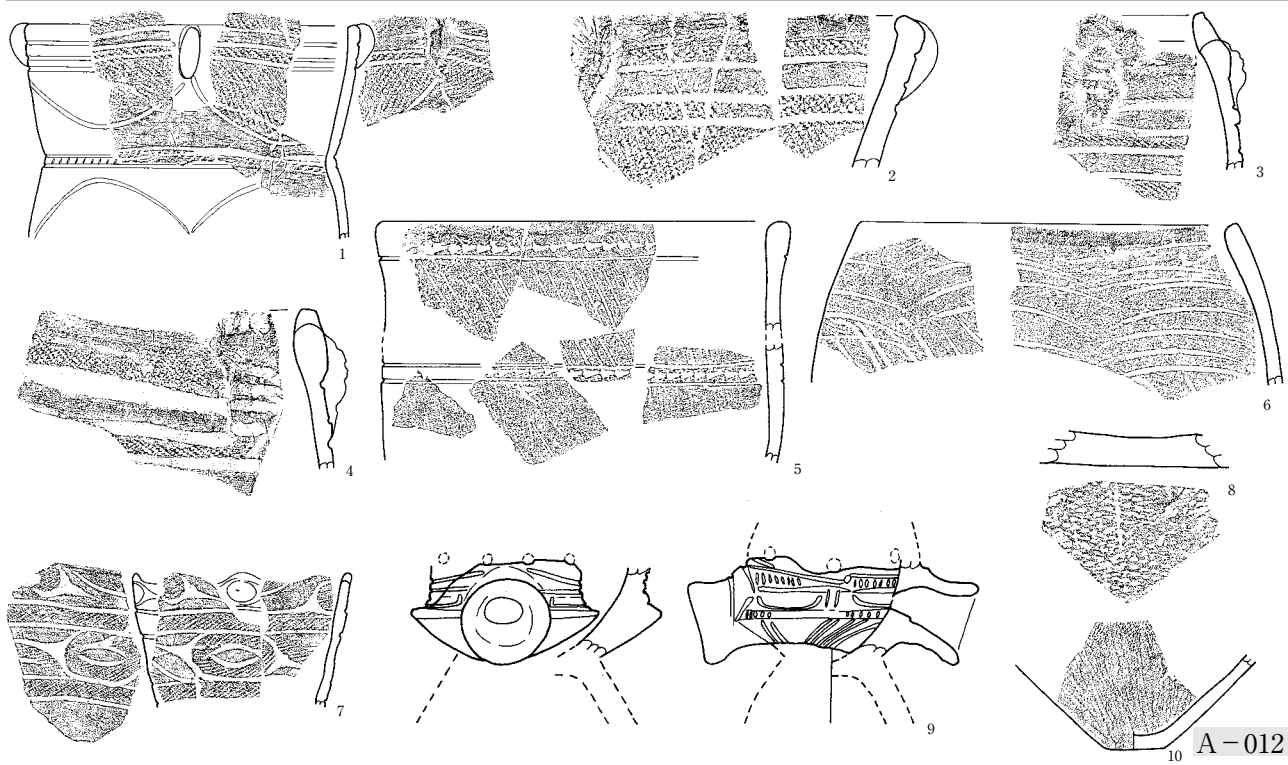
第12図 A-001・003 出土遺物



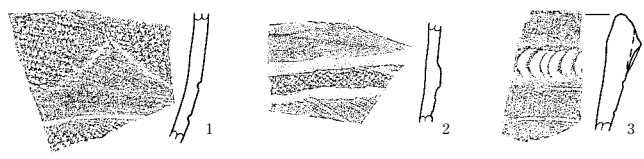
第13图 A-004·007·008·010 ① 出土遺物



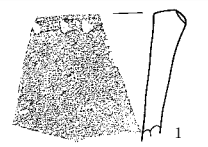
A-010 ②



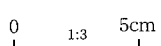
A-012



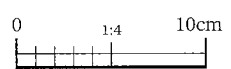
A-013



A-014

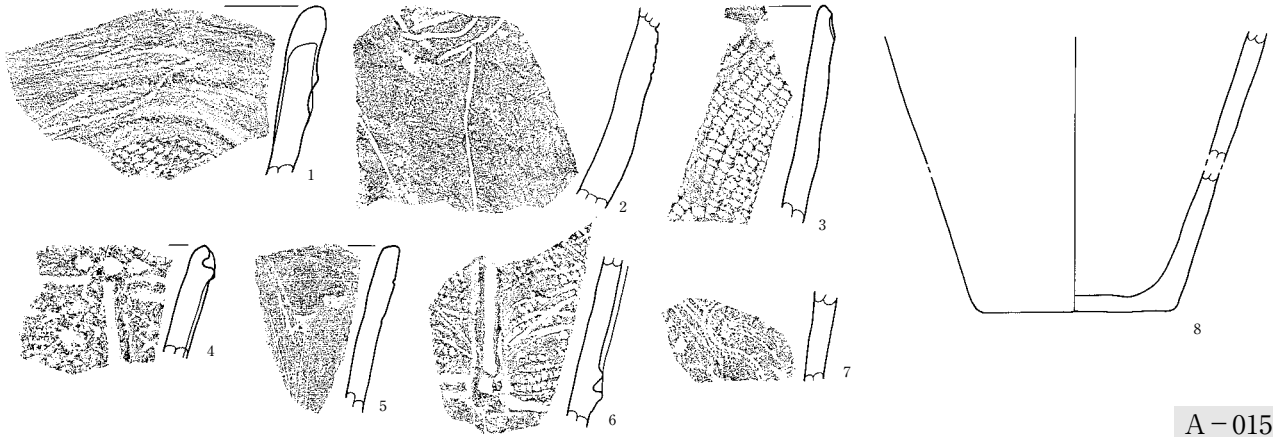


A-010 (5-10, 12-14)
 A-012 (2-4, 8, 9)
 A-013 (1-3)
 A-014 (1, 2)

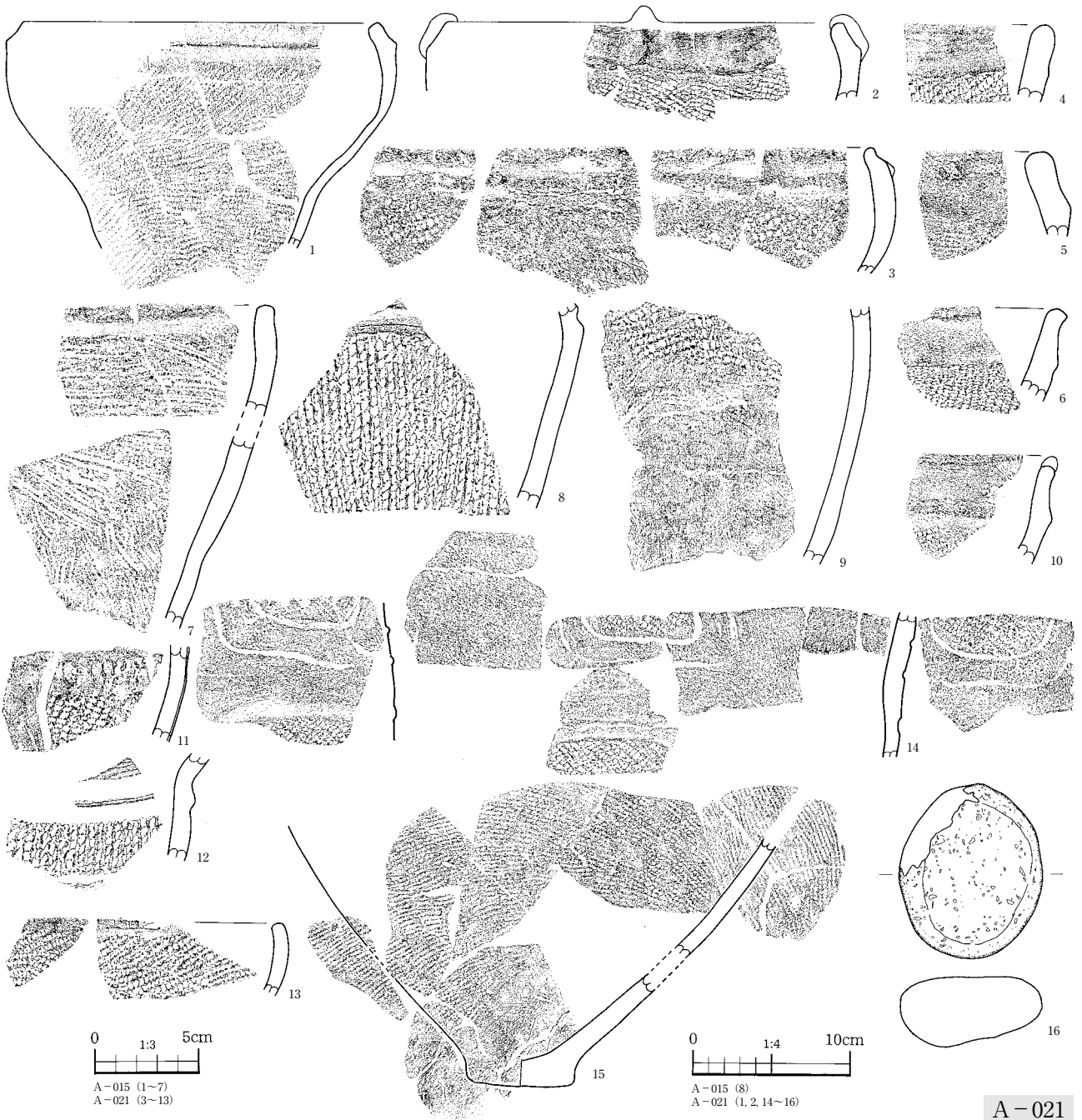


A-010 (11, 15, 16)
 A-012 (1, 5-7, 10)

第14图 A-010 ② · 012 · 013 · 014 出土遺物



A-015



A-021

第15図 A-015・021 出土遺物

第3節 古代住居跡

多部田貝塚から検出された古代の住居跡は7軒で、古墳時代後期に属する。いずれの住居跡も貝層北側の谷寄りに位置し、主軸を北東方向に揃えている。これは北西に位置する貝殻塚遺跡の古墳時代の住居跡も同様で、遺構・遺物の点からほぼ同時期の一集落を構成していたと考えられる。

7軒中5軒の住居跡から炭化材・焼土を多量に検出しており、火災住居であると考えられる。また建替も4軒に認められ、床面下に旧住居の痕跡と思われる周溝・間仕切り溝・竈跡を確認している。いずれの住居跡も貯蔵穴を装備し、壁際に竈が構築されている。竈はA-006が北東に主軸を持ちながらも、南西壁に構築されている他はすべて北東壁に構築されている。なおA-002・006では竈とともに、住居中央部付近に炉跡が検出されており、併用されていたものと考えられる。A-020では貯蔵穴が2基検出されており、うち東南壁に位置するものは張り出しタイプで、これは旧住居時に構築された可能性が高い。

出土遺物も比較的多く、特に火災住居からの出土量が多いが、A-016に関しては火災住居でありながら、出土量は7軒中で最も少ない。出土土器は須恵器を除き在地産と考えられ、色調は赤褐色・褐色と共通している。ただし坏の中でも無彩のタイプや、出土量の最も多いA-018から出土している乳白色の色調を示す胎土をもち、底部に木葉痕のある甕(15・16)は在地産の土器の色調に反しており、非在地産の可能性が高い。乳白色の甕については、その土器片が各住居跡の出土遺物中に微量ながら含まれており、在地ではみられないハケ調整の技法や底部に木葉痕を残すといった特徴から出自や分布が追求可能な貴重な資料となろう。支脚はA-018を除く6軒の住居から検出されている。なおA-002・005・020の個体については崩壊が著しく掲載はしていない。鉄製品は鎌と思われる小破片1点をA-017から検出したのみである。石製品はA-006の砥石、A-017の磨石兼敲石の小破片2点の他は、すべて図化して示している。

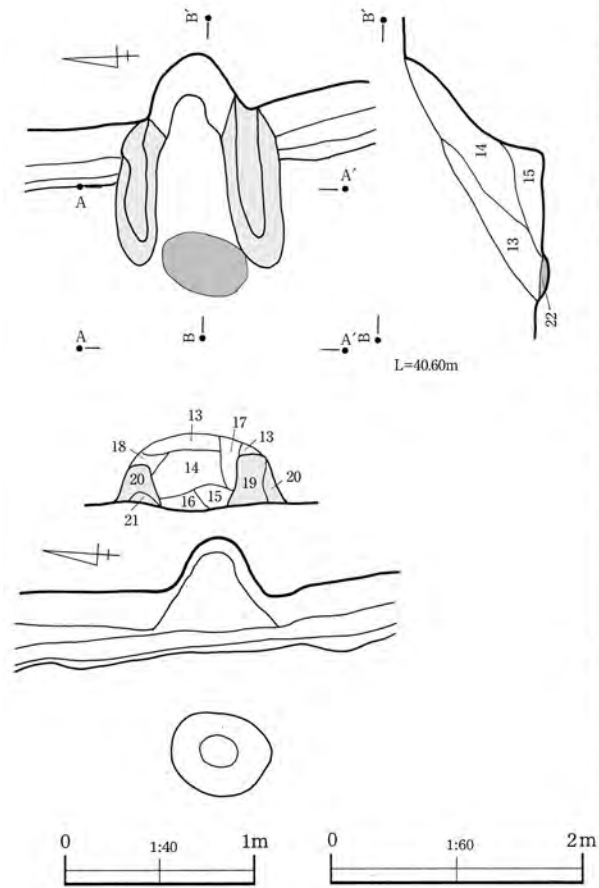
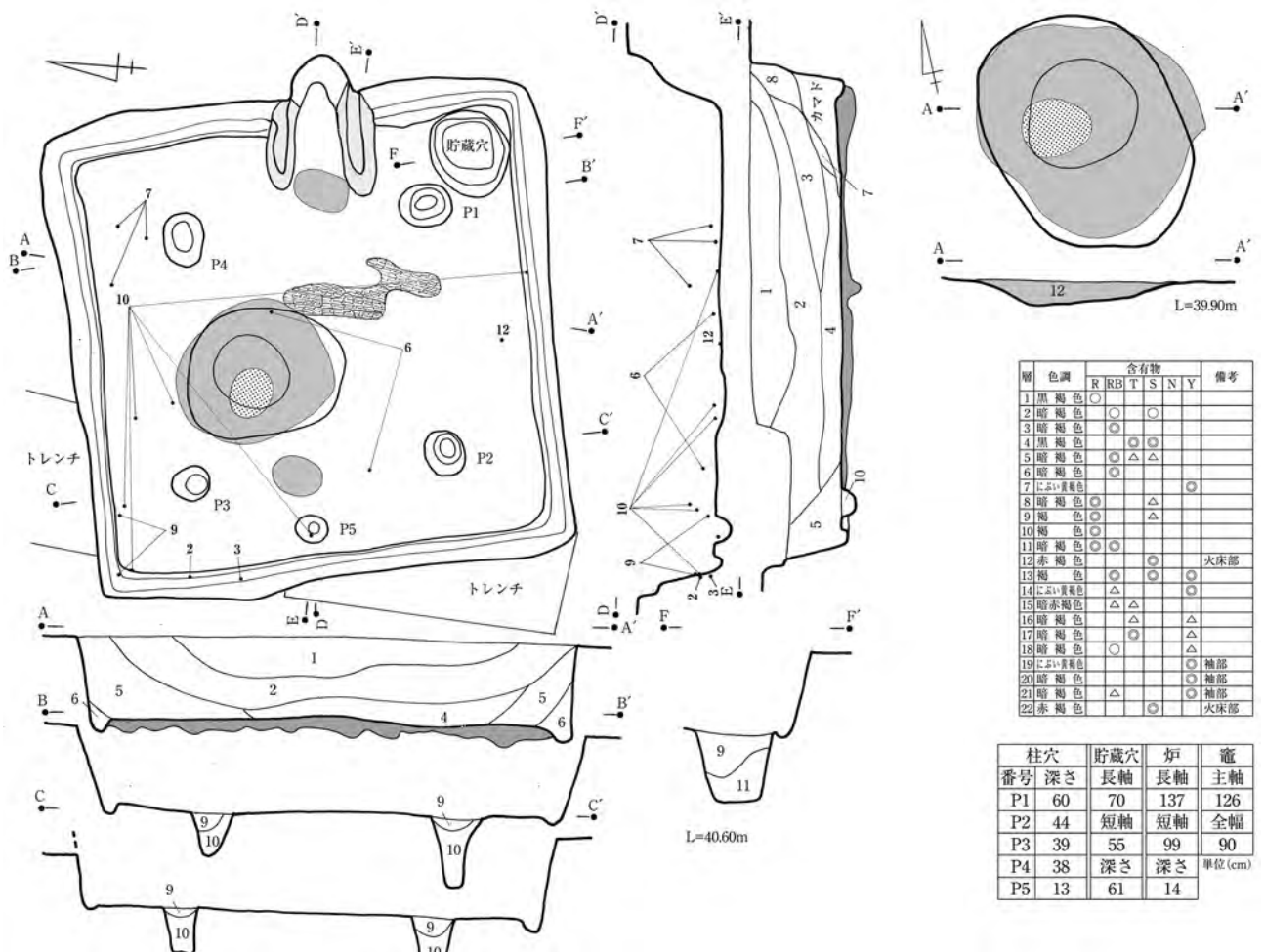
第6表 古代住居跡計測表

住居番号	位置	主軸方位	規模(m)		貯蔵穴	旧貯蔵穴	柱穴	旧柱穴	出入口	旧出入口	間仕切溝	旧間仕切溝	周溝	火災	建替	備考
			主軸長×横軸長	最大~最小												
A-002	10E-18b	N- 82° -E	4.22×3.92	68~42	有	無	4	無	有	無	無	無	全周	無	無	炉あり
A-005	10E-7a	N- 70° -E	5.25×5.28	53~43	有	無	5	無	有	無	7	無	全周	有	無	
A-006	10D-95d	N-120° -W	4.12×4.10	50~32	有	無	4	無	有	無	無	無	全周	無	無	炉あり
A-016	10D-54d	N- 62° -E	5.22×5.28	62~48	有	無	4	1	有	有	6	2	全周	有	有	
A-017	10E-64a	N- 63° -E	5.73×5.76	68~58	有	有	4	5	有	無	5	4	全周	有	有	旧竈あり
A-018	10D-100a	N- 70° -E	8.70×8.72	68~60	有	有	7	16	有	無	10	12	全周	有	有	
A-020	10D-67a	N- 64° -E	5.40×5.22	66~48	有	無?	4	6	有	無	7	2	全周	有	有	旧竈あり

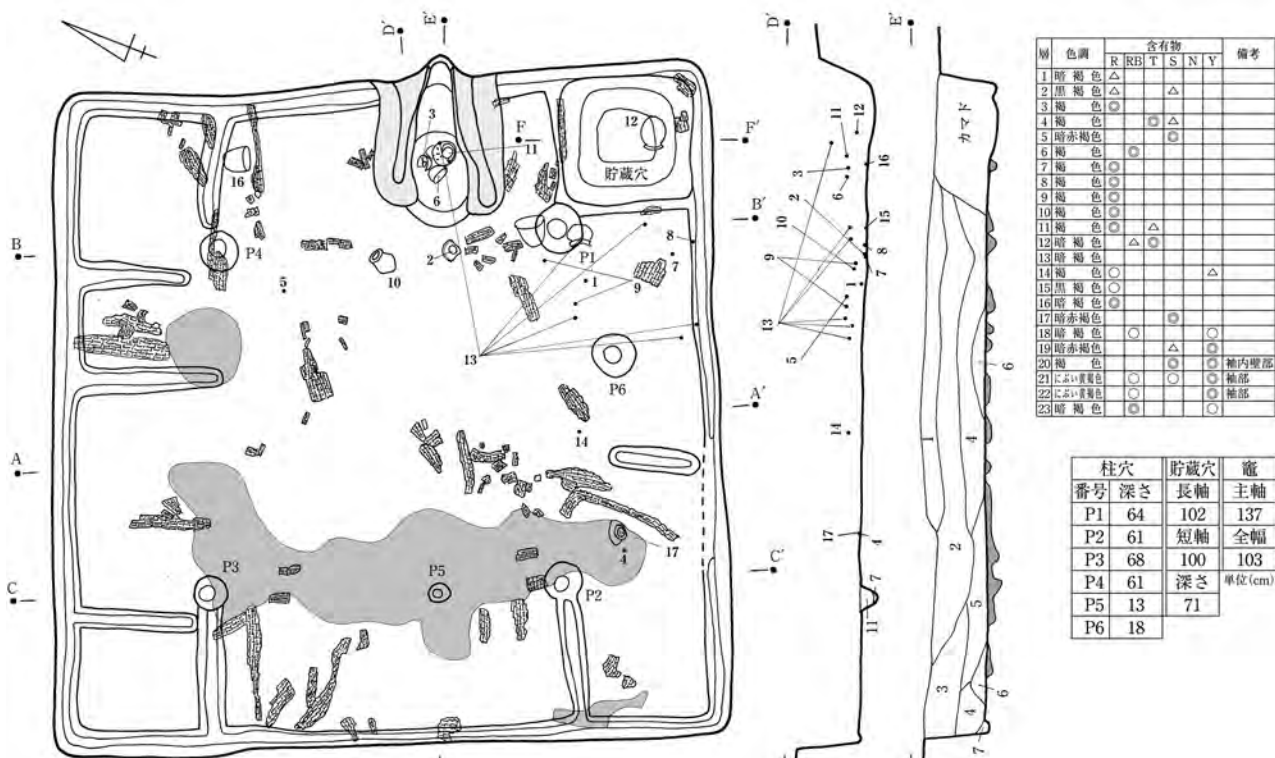
第7表 古代住居跡出土遺物計量表

単位(g)

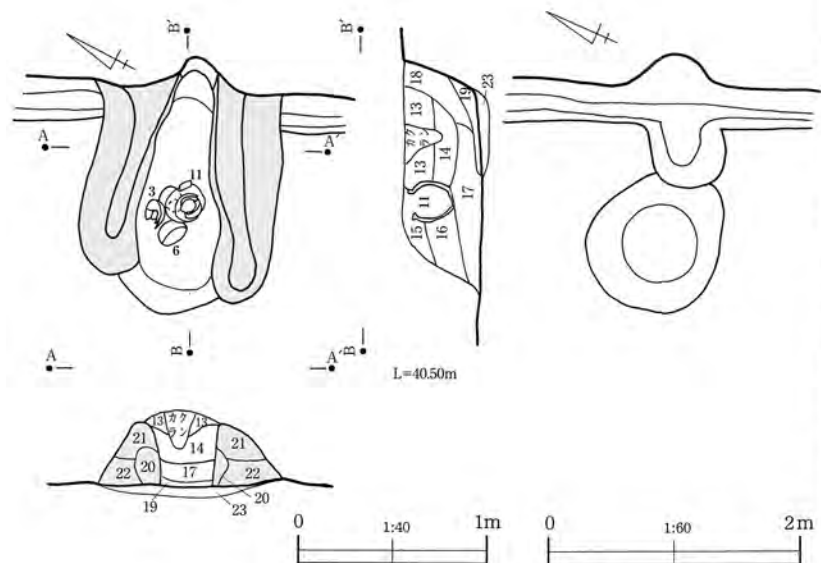
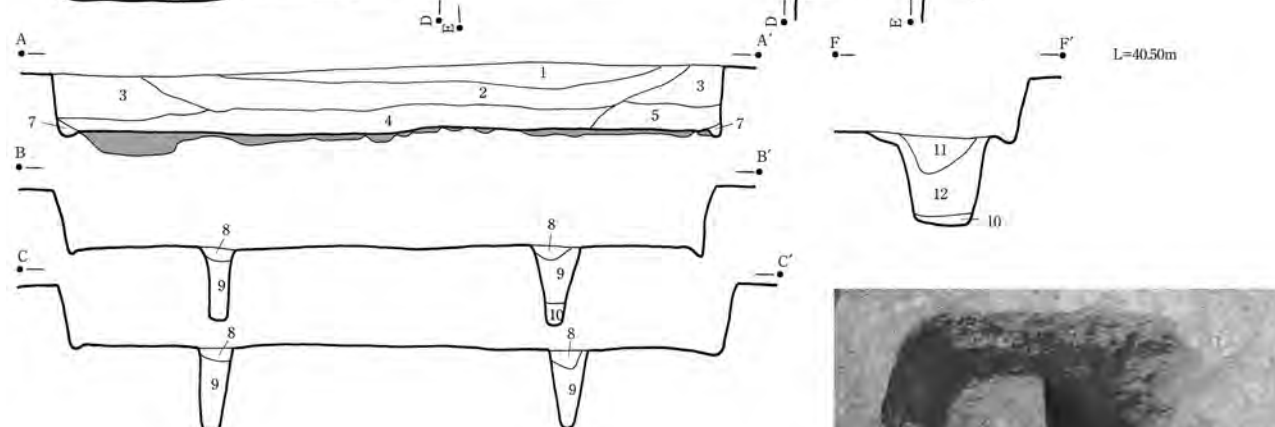
住居番号	製品別比率						土師器器種別比率							
	土器	土製品	石製品	鉄製品	その他	総計	坏	高坏	壺	甕	甑	鉢	鉢	総計
A-002	8655	388.5	606.2		45	9694.7	998	168		7483				8649
	89.3%	4.0%	6.3%		0.5%	100%	11.5%	1.9%		86.5%				100%
A-005	18258	1018	176.9		64	19516.9	1437	191	506	12689		3305		18128
	93.5%	5.2%	0.9%		0.3%	100%	7.9%	1.1%	2.8%	70.0%		18.2%		100%
A-006	3495	1473	38			5006	1162		532	1291				3495
	69.8%	29.4%	0.8%			100%	33.2%		15.2%	36.9%				100%
A-016	1697	2215	28			3940	653			1044				1697
	43.1%	56.2%	0.7%			100%	38.5%			61.5%				100%
A-017	6299	1280	93.3	7	4	7683.3	1208	96	85	4910				6299
	82.0%	16.7%	1.2%	0.1%	0.1%	100%	19.2%	1.5%	1.3%	77.9%				100%
A-018	24553	16	259.7		60	24888.7	2719	10	989	18302		1593	773	24386
	98.7%	0.1%	1.0%		0.2%	100%	11.1%	0.0%	4.1%	75.1%		6.5%	3.2%	100%
A-020	7722	1649.2	143.5		45	9559.7	1213	10	82	6416				7721
	80.8%	17.3%	1.5%		0.5%	100%	15.7%	0.1%	1.1%	83.1%				100%



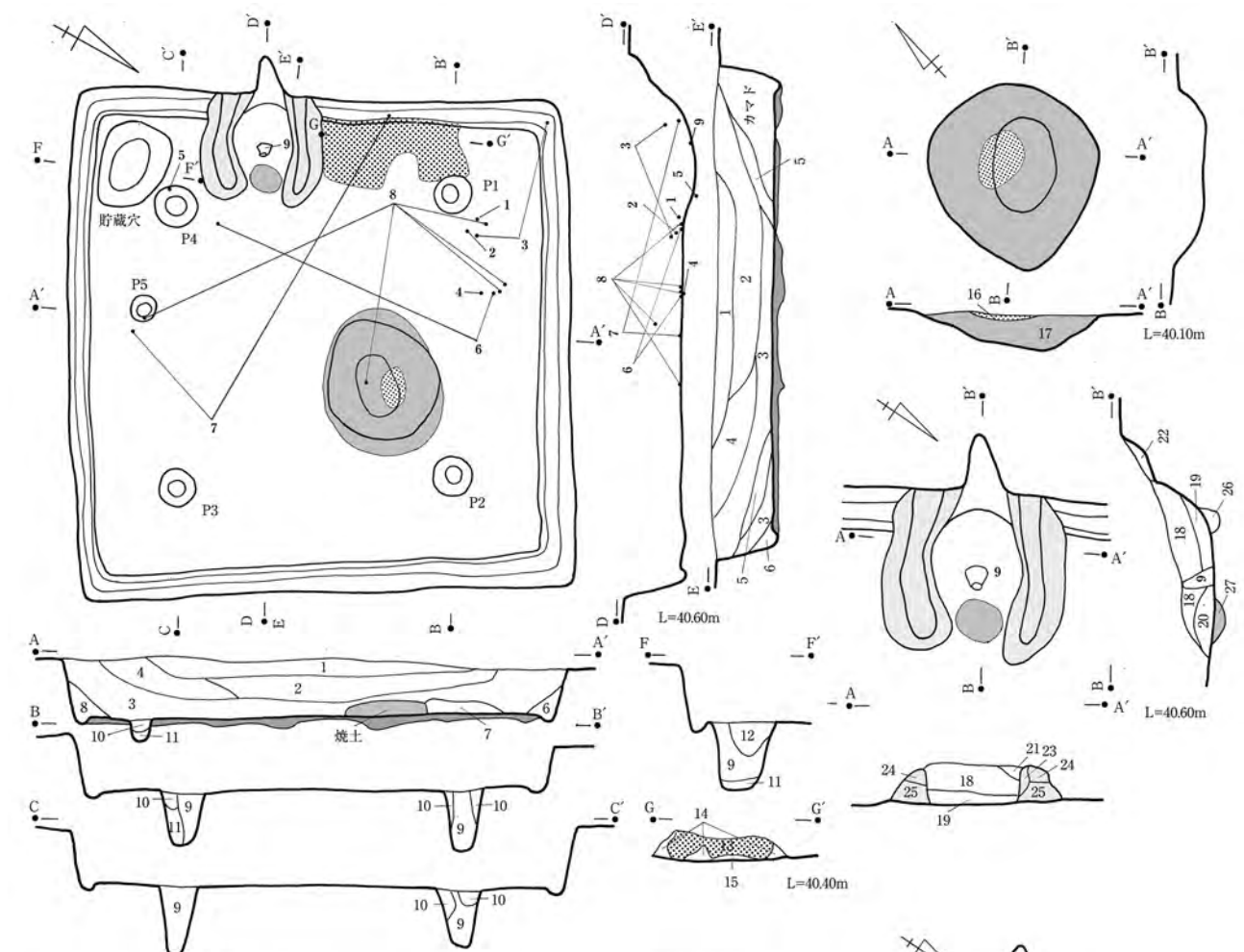
第16図 A-002



柱穴	貯蔵穴	竈	
番号	長さ	長軸	主軸
P1	64	102	137
P2	61	短軸	全幅
P3	68	100	103
P4	61	長さ	単位(cm)
P5	13	71	
P6	18		



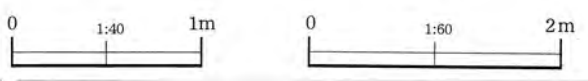
第17図 A-005



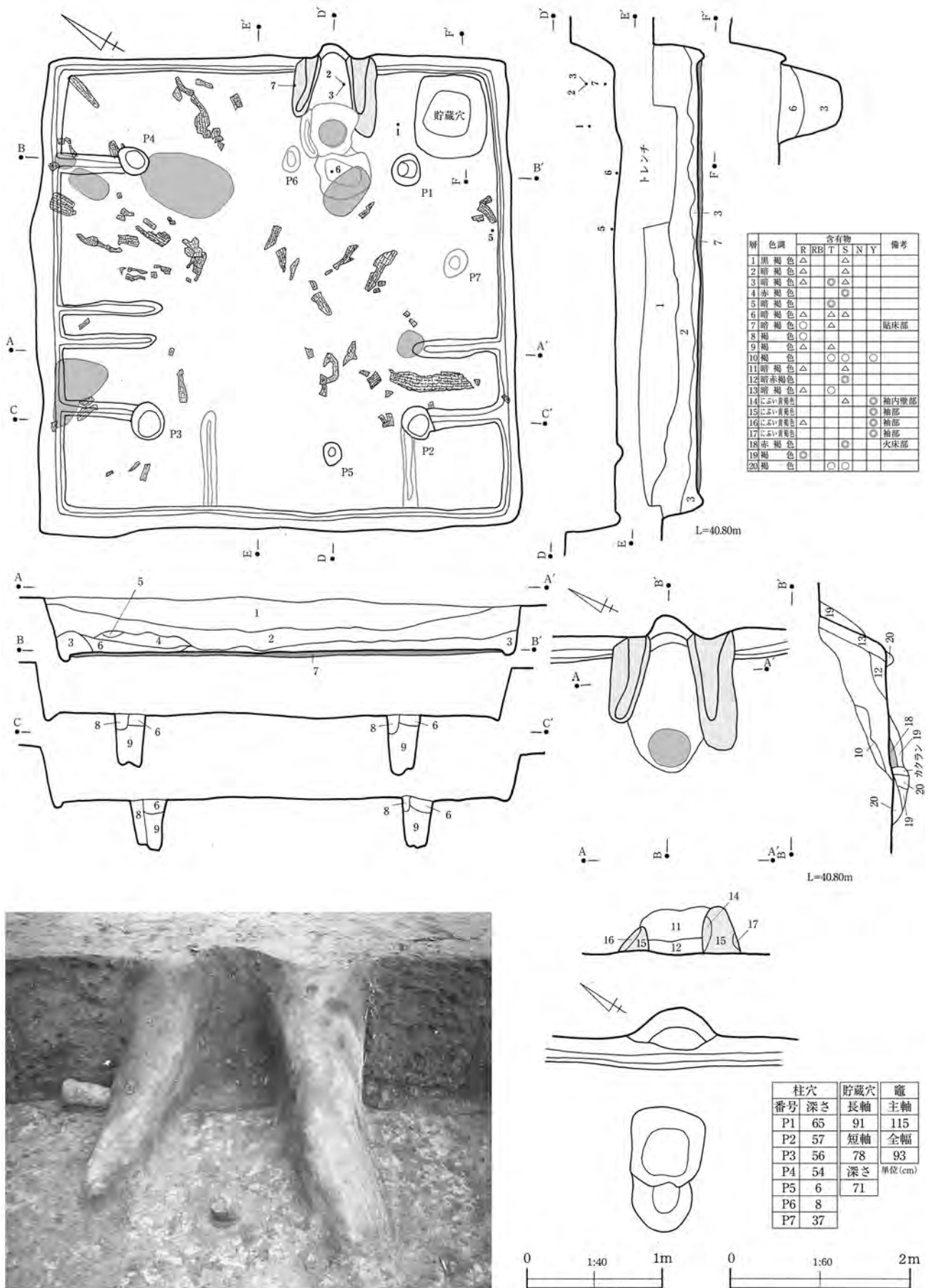
層	色調	含有物					備考	層	色調	含有物					備考	
		R	RB	T	S	N				Y	R	RB	T	S		N
1	黒褐色	○						15	褐色	○						
2	黒褐色	○						16	灰白色						灰層	
3	暗褐色	○			△			17	赤褐色						火床部	
4	黒褐色	○						18	暗褐色		○		○			
5	暗褐色	○			○			19	褐色		○		○			
6	暗褐色	○						20	暗赤褐色		○		○			
7	黒褐色	○						21	にぶい赤褐色		○		○			
8	褐色	○						22	暗褐色		○		○			
9	暗褐色	○						23	にぶい赤褐色		○		○	袖内壁部		
10	褐色	○						24	褐色		○		○	袖部		
11	褐色	○						25	褐色		○		○	袖部		
12	暗褐色							26	褐色		○					
13	灰白色				○			27	にぶい赤褐色		○			火床部		
14	暗褐色				△	△										

番号	深さ	貯藏穴		竈		炉	
		長軸	短軸	主軸	長軸	短軸	深さ
P1	53	72		128	100		
P2	43	短軸		全幅	短軸		
P3	59	52			93		
P4	50	深さ			深さ		
P5	14	61			19		

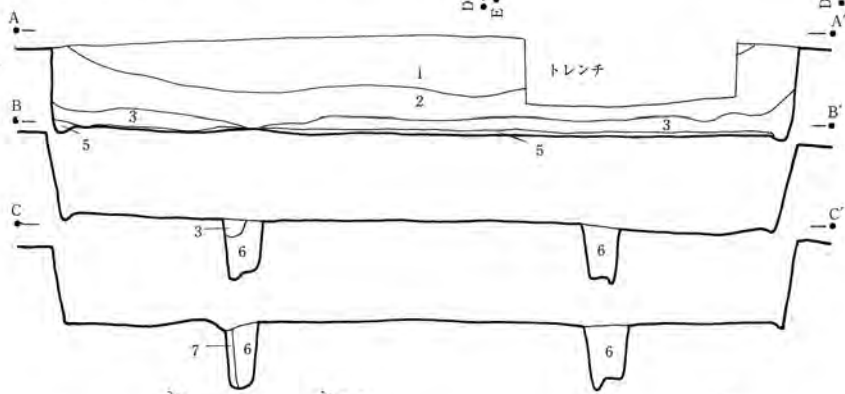
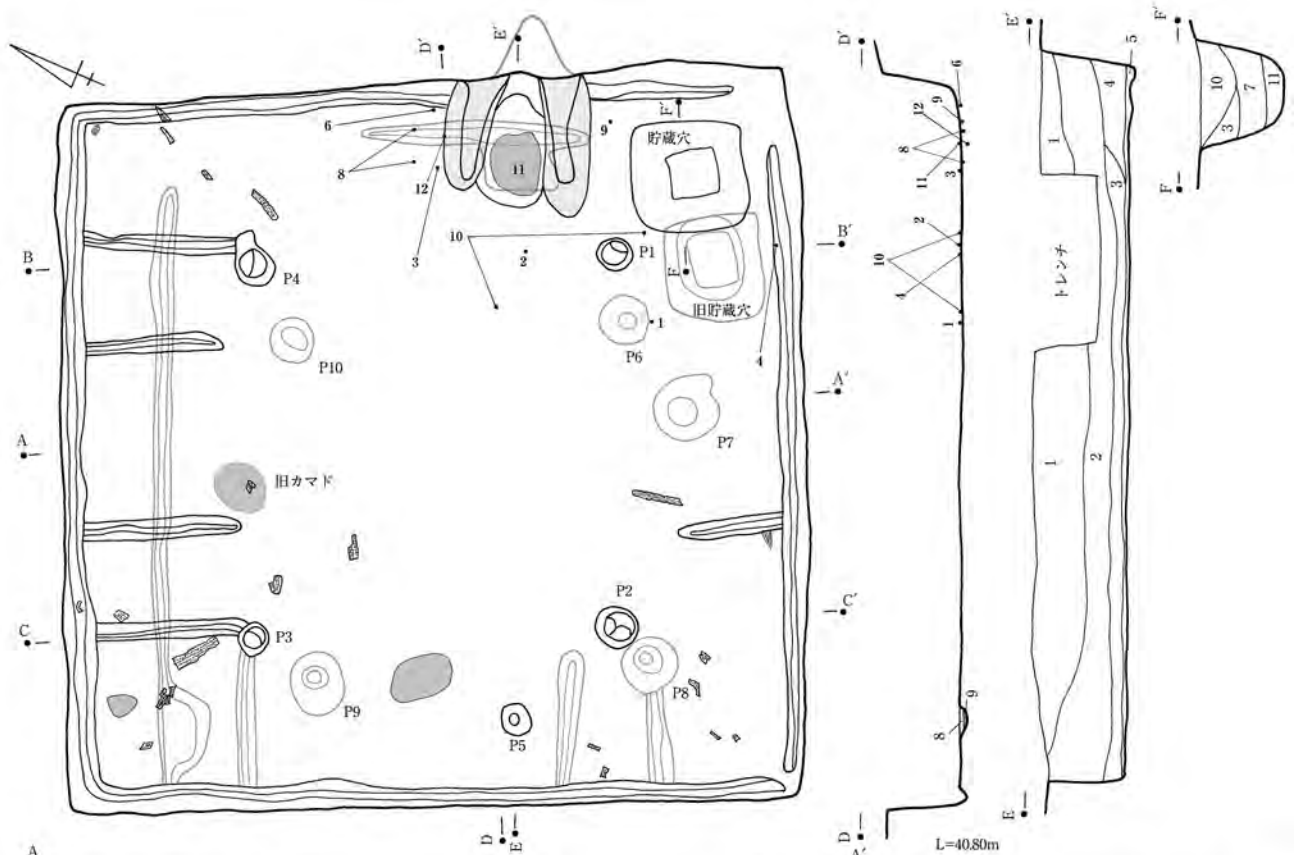
単位 (cm)



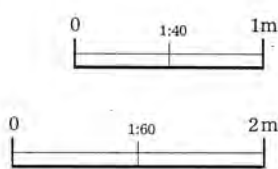
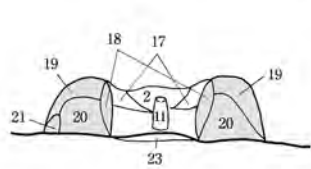
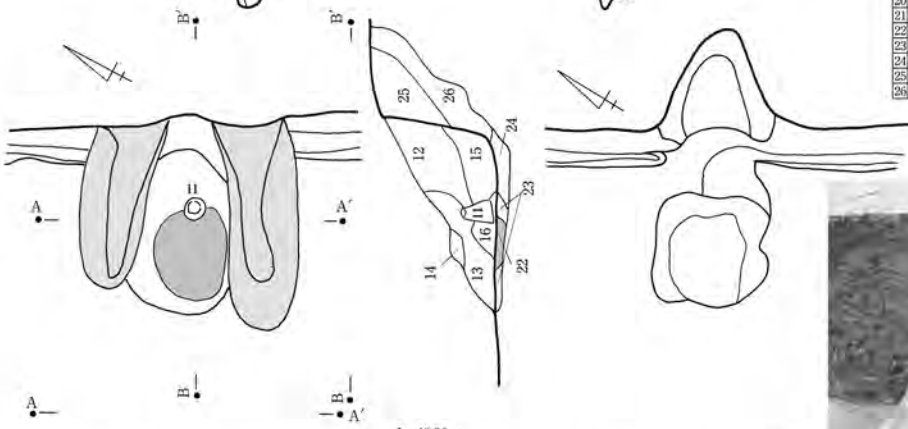
第18図 A-006



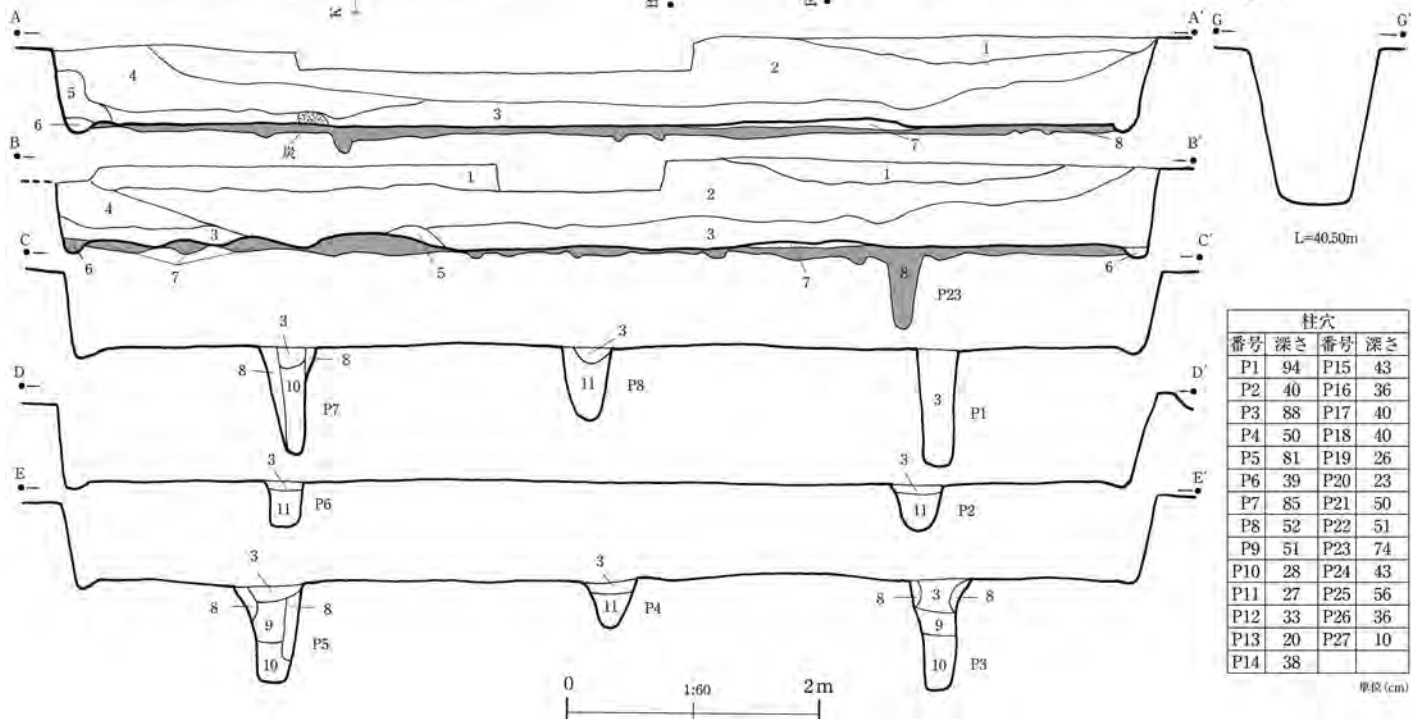
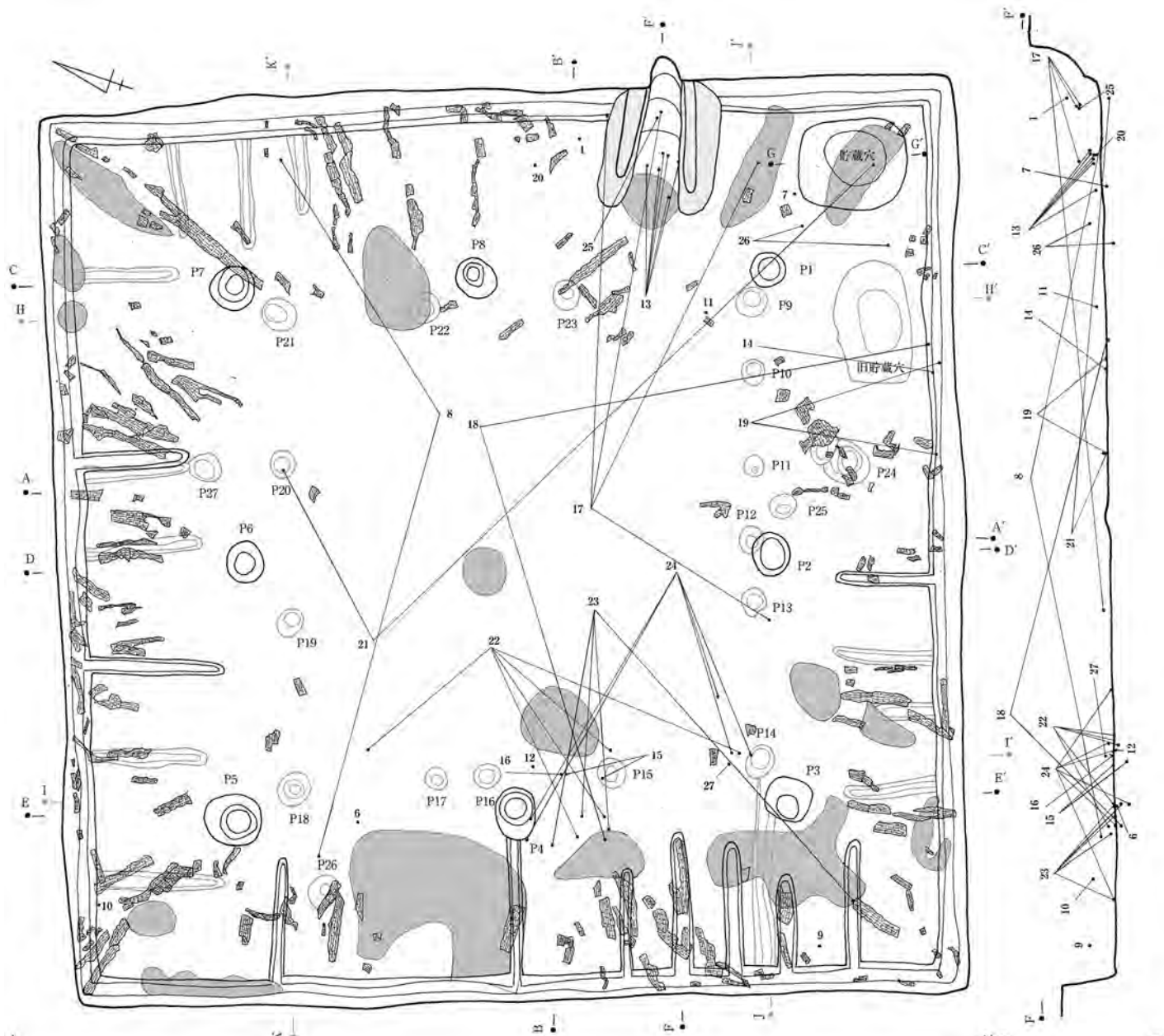
第19図 A-016



層	色調	含有物					備考	柱穴	貯蔵穴
		R	RB	T	S	N			
1	黒褐色							番号	長さ
2	暗褐色	○					P1	42	90
3	暗褐色		△	△			P2	51	短軸
4	暗褐色					△	P3	53	88
5	暗褐色	△					P4	47	深さ
6	暗褐色	○	○				P5	4	79
7	暗褐色	○	○				P6	44	竈
8	暗褐色	△	△				P7	31	主軸
9	褐色	○					P8	66	106
10	暗褐色	△	△	△			P9	66	全幅
11	褐色	○					P10	70	117
12	にぶい黄褐色					○			
13	暗赤褐色			○					
14	暗赤褐色			○					
15	にぶい黄褐色			△		○			
16	暗赤褐色								
17	褐色								
18	にぶい黄褐色								
19	にぶい黄褐色			○			袖内壁部	旧貯蔵穴	
20	にぶい黄褐色			○			袖部	長軸	
21	灰黄褐色			○			袖部	80	
22	赤褐色			○			大床部	短軸	
23	赤褐色			○				78	
24	にぶい黄褐色			△				深さ	
25	にぶい黄褐色			△				65	
26	にぶい黄褐色			○					



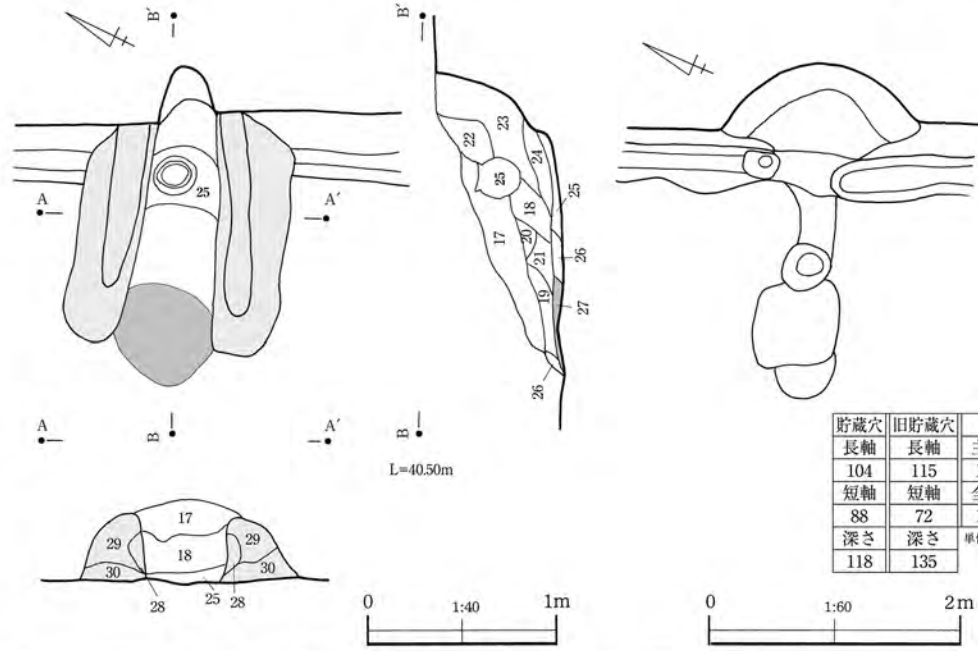
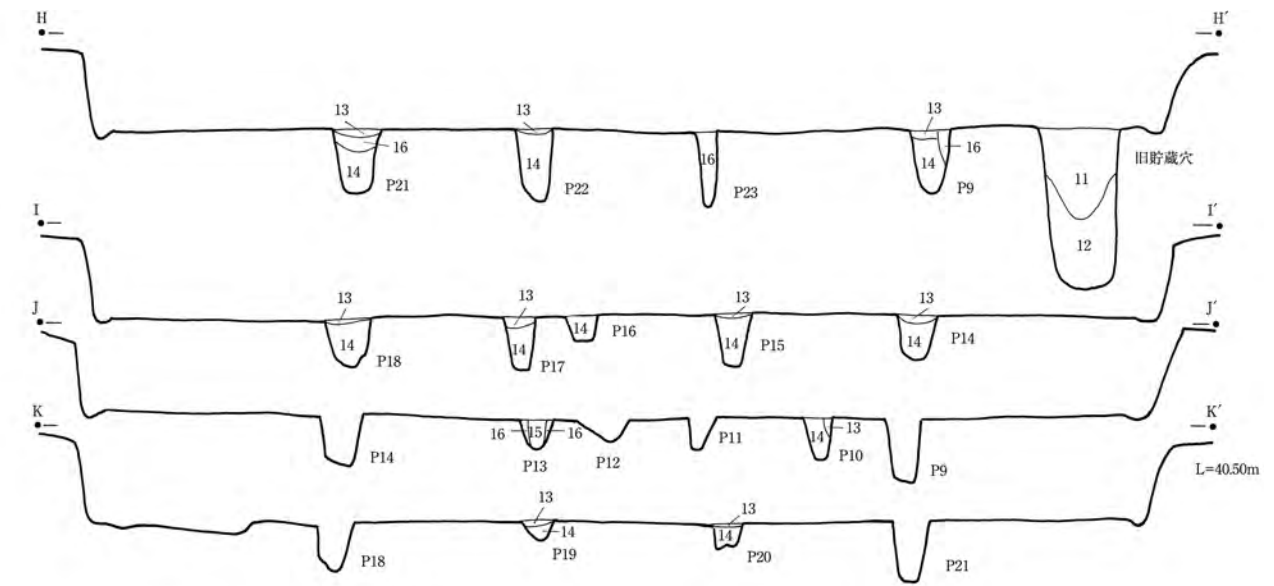
第20図 A-017



柱穴			
番号	深さ	番号	深さ
P1	94	P15	43
P2	40	P16	36
P3	88	P17	40
P4	50	P18	40
P5	81	P19	26
P6	39	P20	23
P7	85	P21	50
P8	52	P22	51
P9	51	P23	74
P10	28	P24	43
P11	27	P25	56
P12	33	P26	36
P13	20	P27	10
P14	38		

単位 (cm)

第21図 A-018 ①

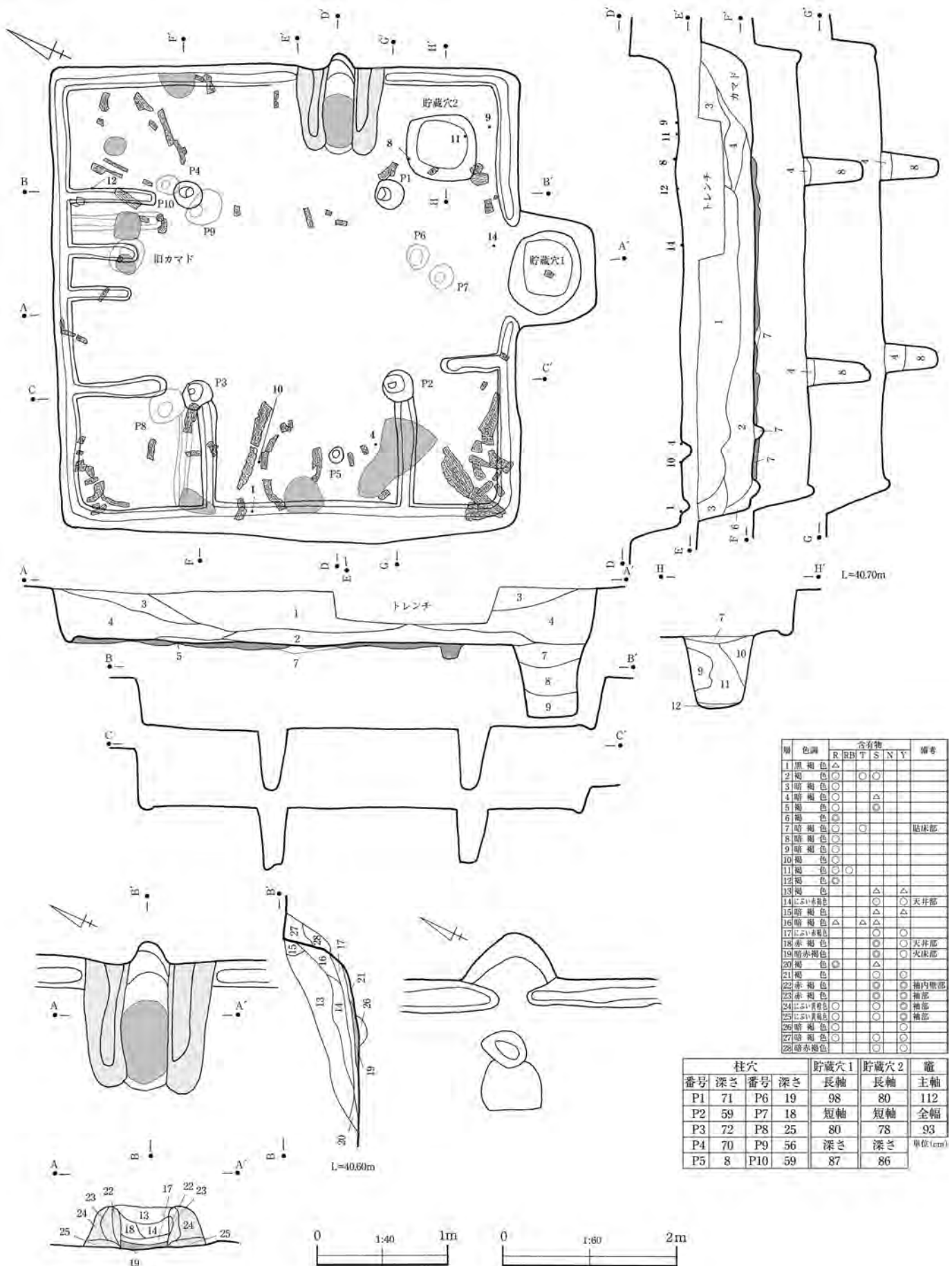


順	色調	含有物					備考	
		R	RB	T	S	N		Y
1	黒褐色	△						
2	黒色	△						
3	暗褐色	○		○				
4	褐色	△	△					
5	暗赤褐色	△		○				
6	褐色	△						
7	褐色	○		○				貼床部
8	褐色	○						貼床部
9	暗褐色	○						
10	暗褐色	○						
11	暗褐色	△	△					
12	黒褐色	△	△					
13	褐色	△	△					
14	褐色	○						
15	褐色	○						
16	褐色	○						
17	暗褐色	○		○				
18	暗褐色	○						
19	暗赤褐色	△		△				
20	暗褐色		△					
21	暗赤褐色			○				
22	にじみ黄褐色							○
23	にじみ黄褐色							○
24	暗赤褐色			○				灰を含む
25	にじみ黄褐色			○				灰を含む
26	暗赤褐色			○				灰を含む
27	赤褐色							灰床部
28	赤褐色			○				袖内壁部
29	にじみ黄褐色							○
30	にじみ黄褐色	○						○

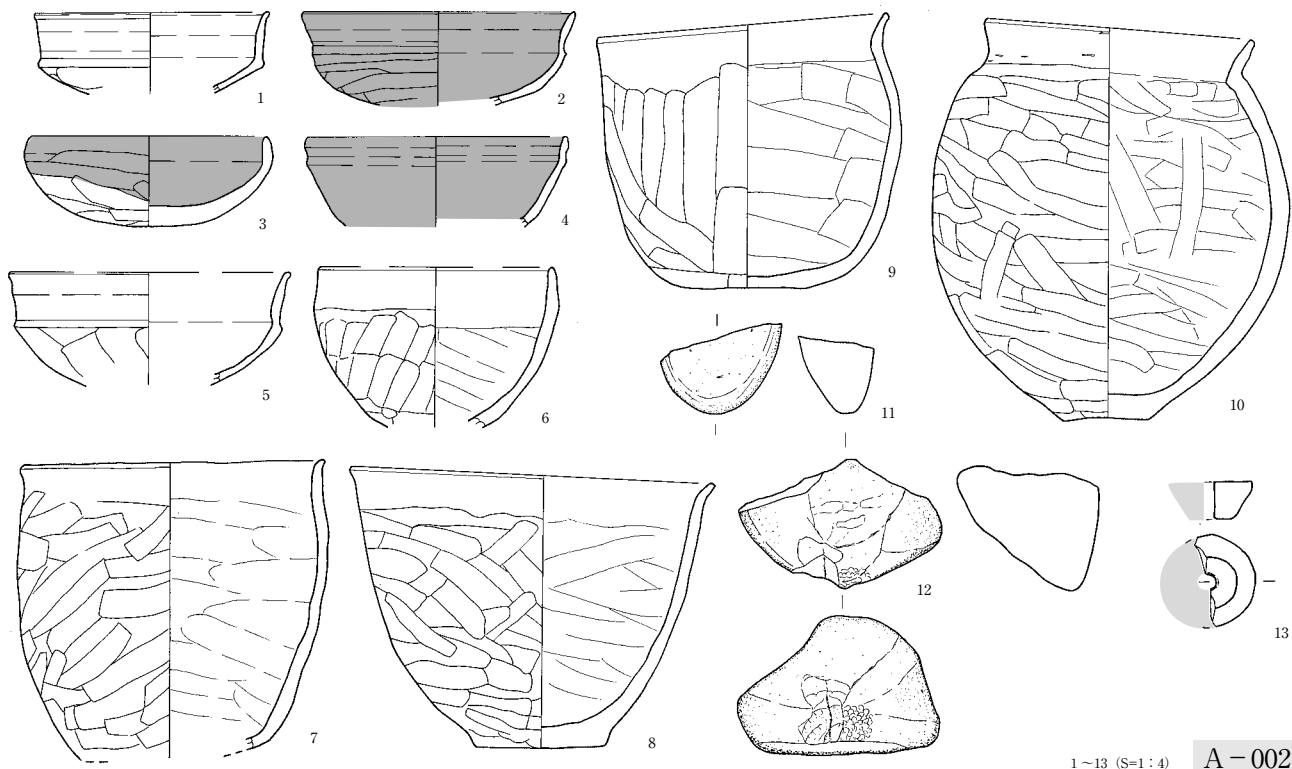
貯蔵穴	旧貯蔵穴	竈
長軸	長軸	主軸
104	115	168
短軸	短軸	全幅
88	72	110
深さ	深さ	単位(cm)
118	135	



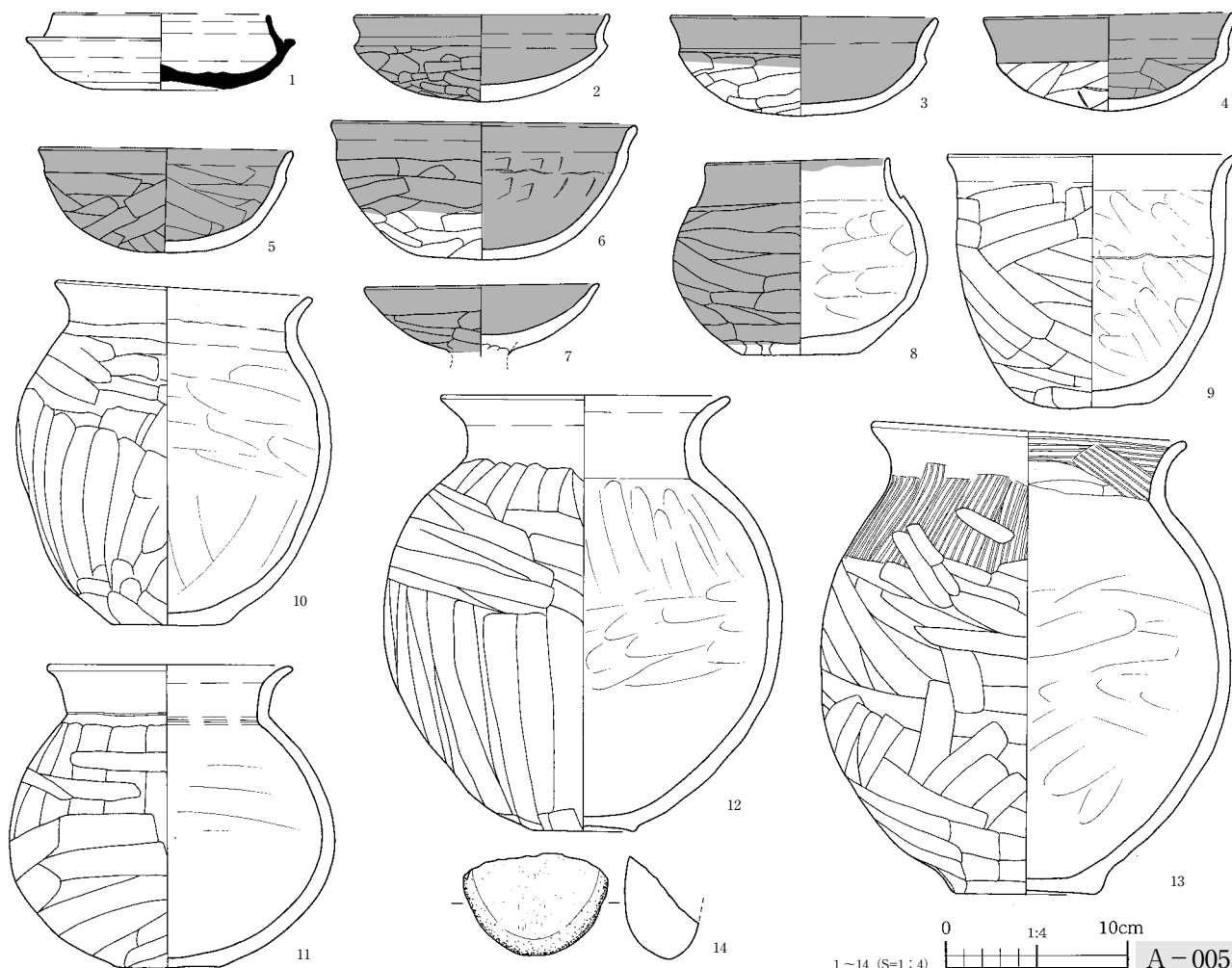
第22図 A-018 ②



第23図 A-020

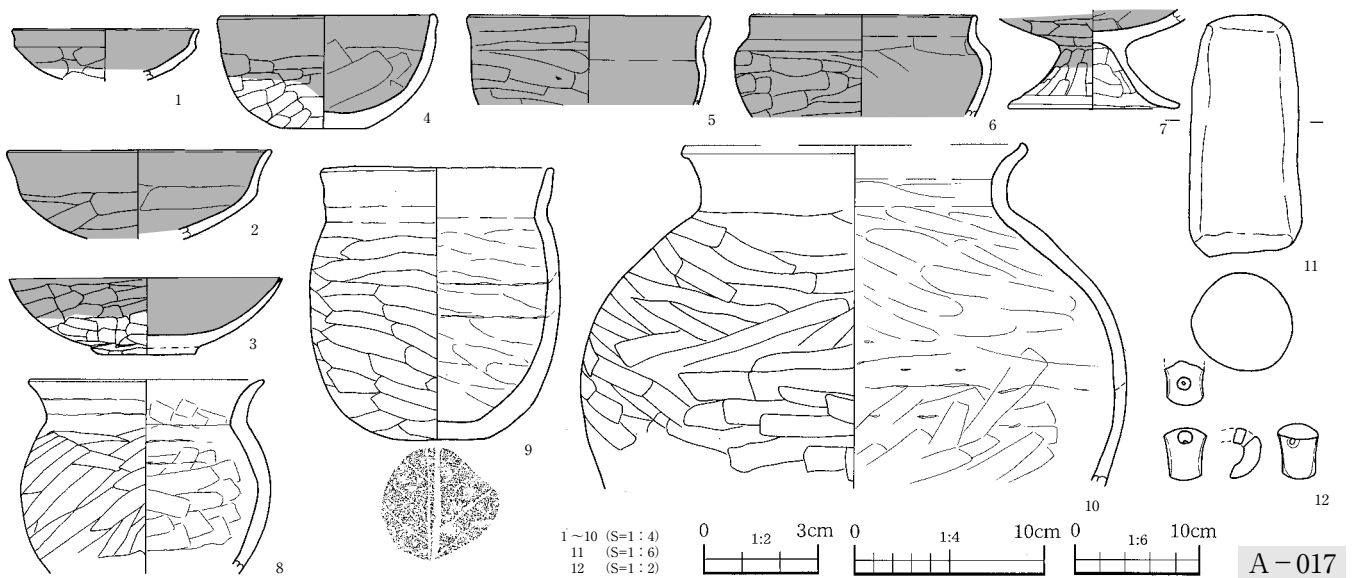
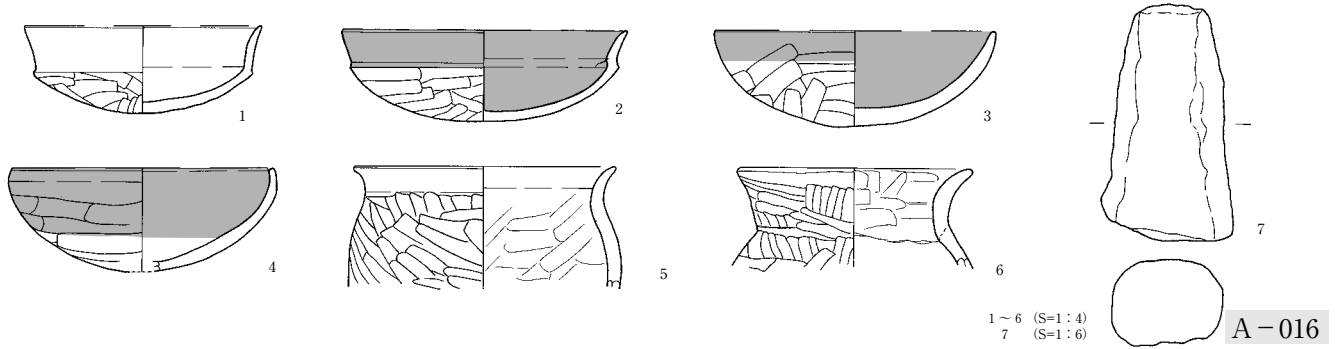
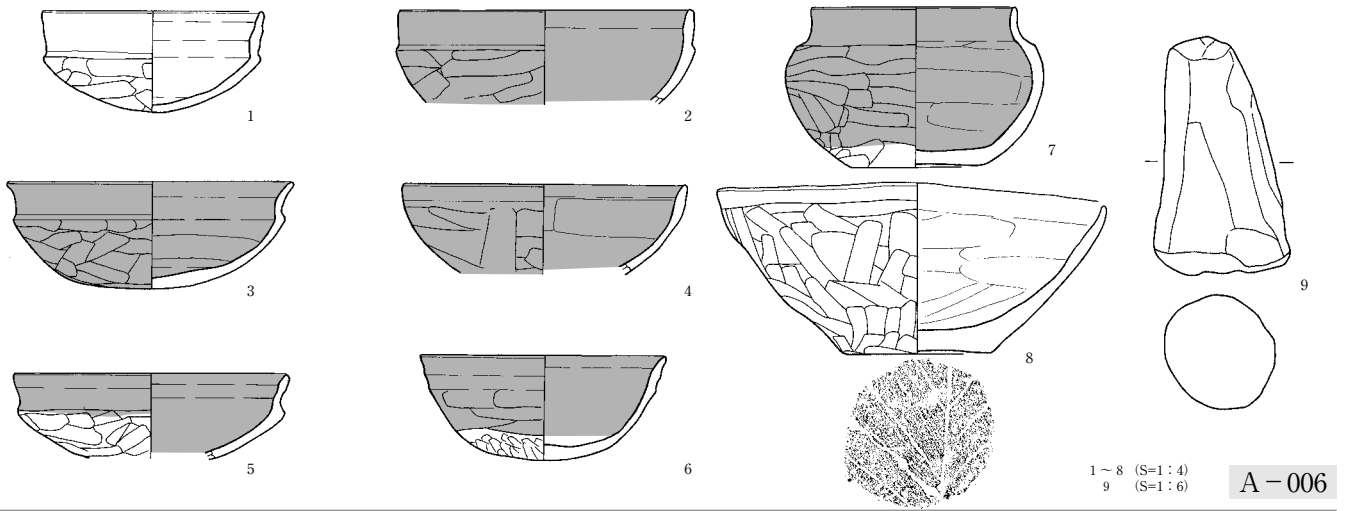
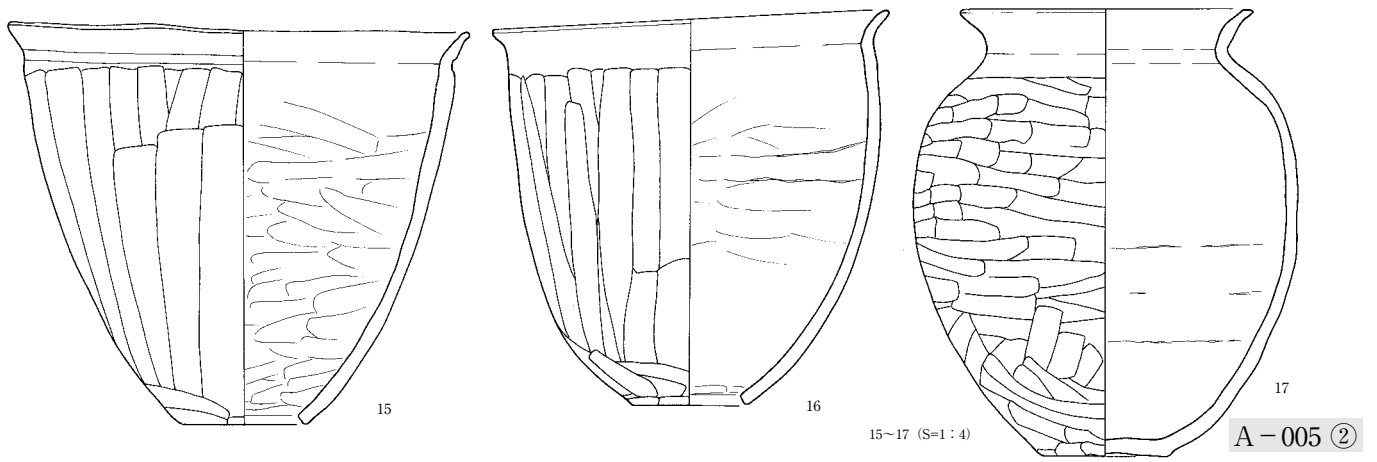


1~13 (S=1:4) A-002

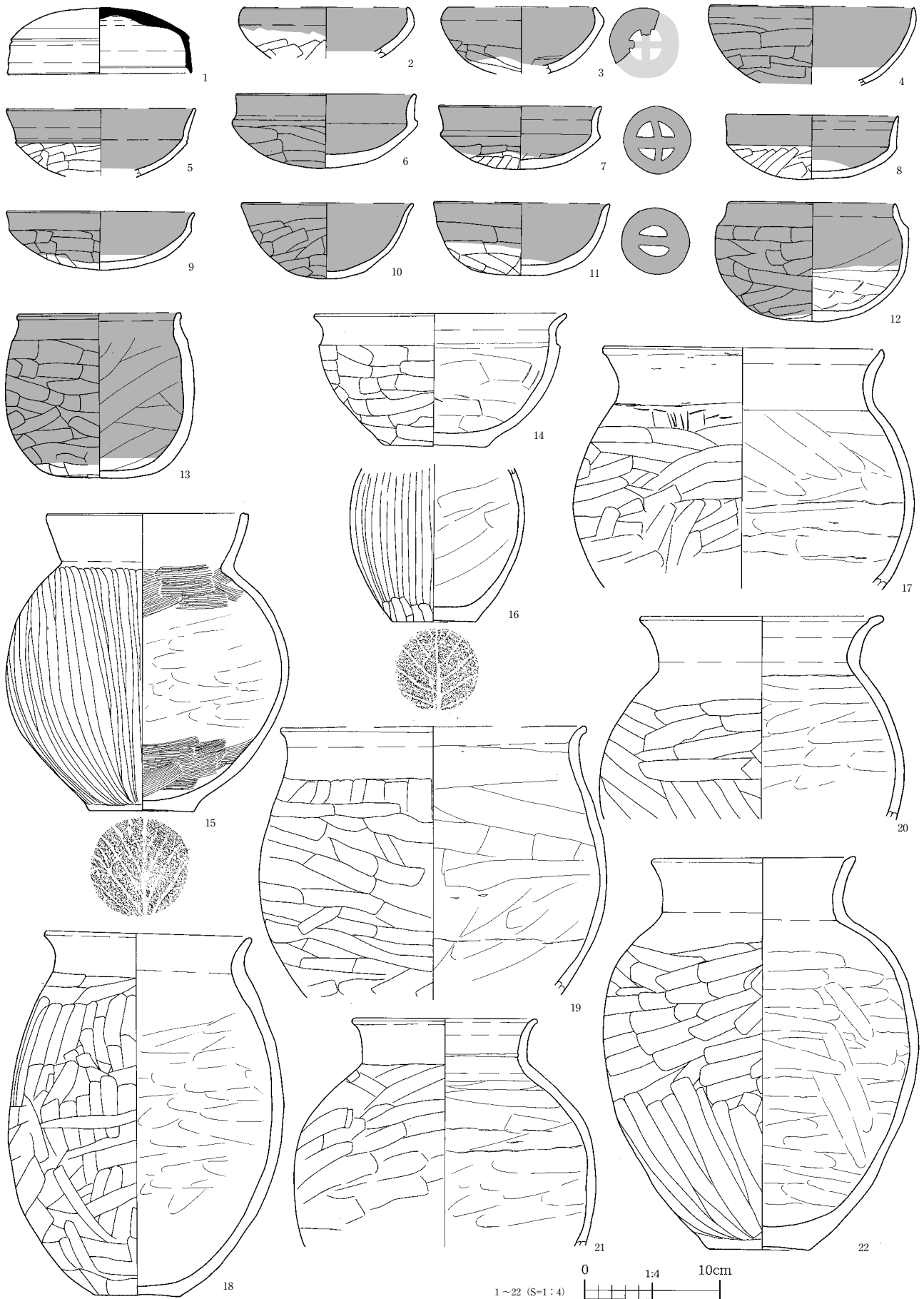


1~14 (S=1:4) A-005 ①

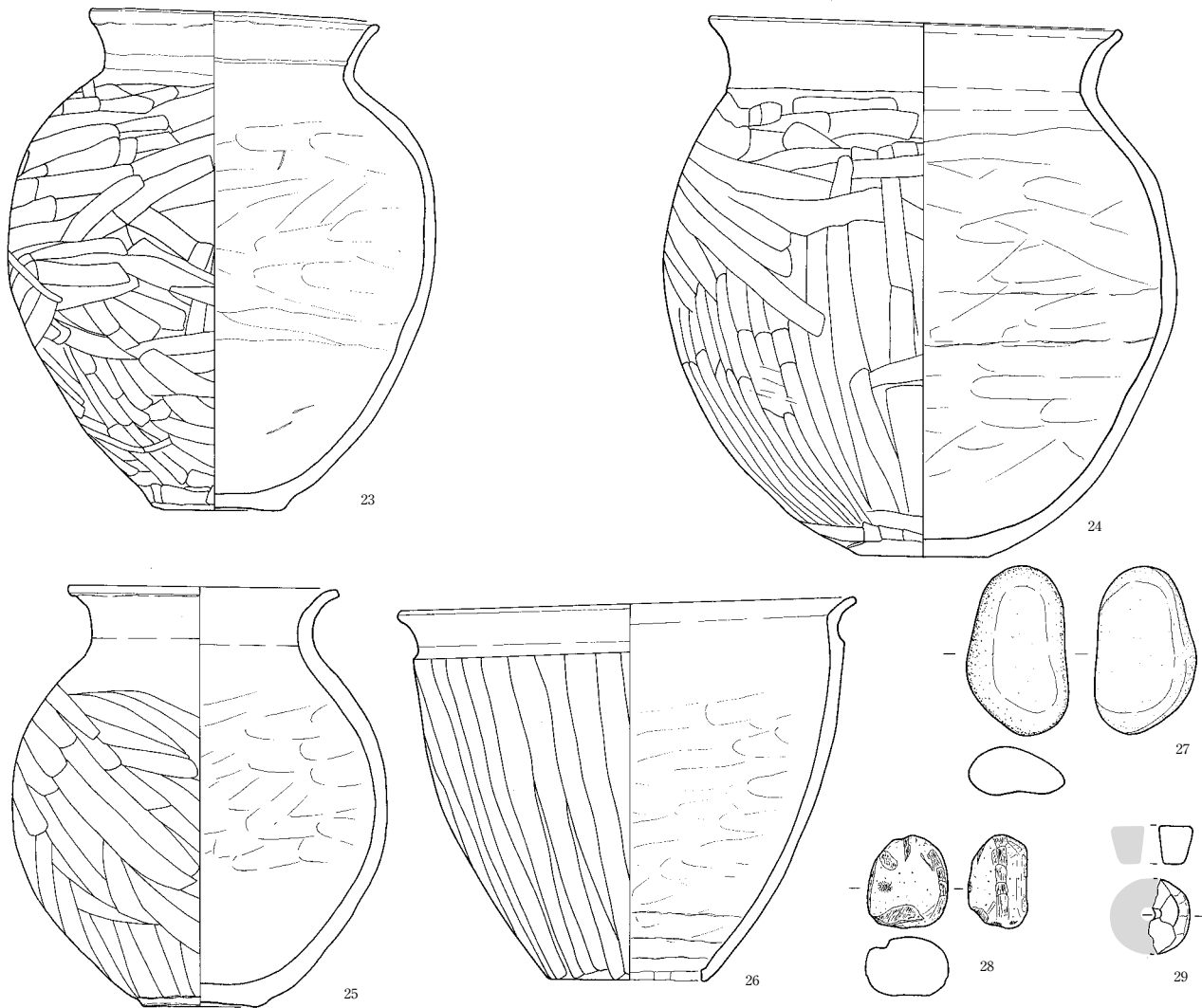
第24図 A-002・005 ① 出土遺物



第25図 A-005 ②・006・016・017 出土遺物

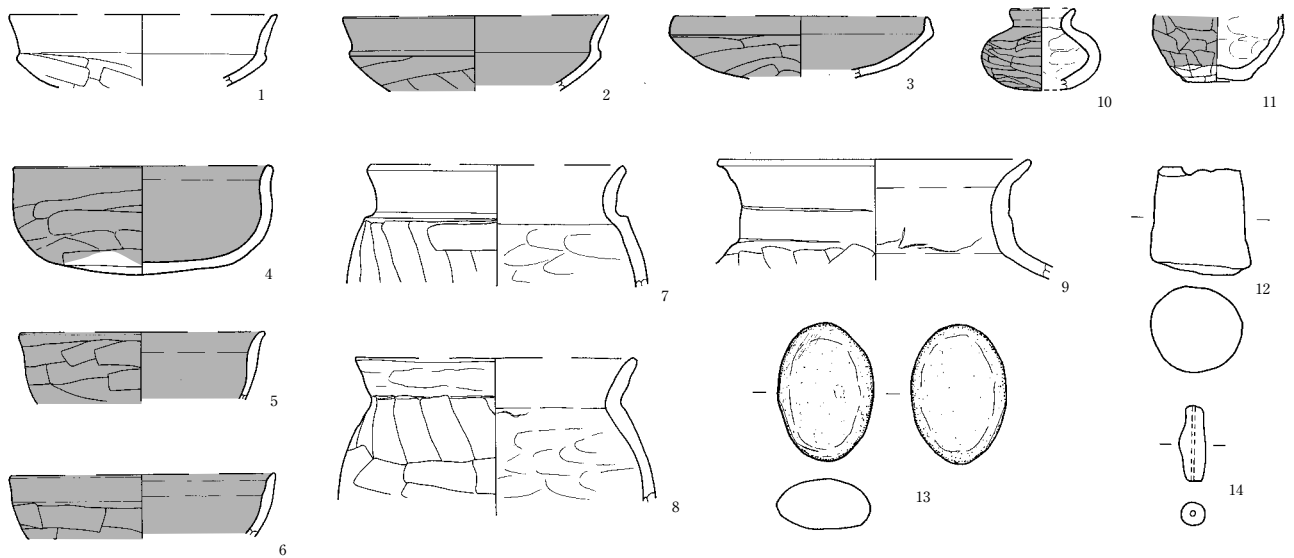


第26图 A-018 ① 出土遺物



23~29 (S=1:4)

A-018 ②



1~11, 13 (S=1:4)
12 (S=1:6)
14 (S=1:2)

0 1:2 3cm

0 1:4 10cm

0 1:6 10cm

A-020

第27图 A-018 ②・020 出土遺物

第8表 古代住居跡出土遺物観察表

A-002

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	覆土中	32	12.3		4.3+	ハラケズリ・無彩	E	
2	土師器 坏	覆土下位	150	(14.3)		4.9+	ハラケズリ・赤彩	B	
3	土師器 坏	床直	258	12.6		4.8	ハラケズリ・赤彩	A	
4	土師器 坏	覆土中	20	13.0		4.4+	ハラケズリ・赤彩	E	
5	土師器 坏	覆土下位	60	(14.6)		6.6+	ハラケズリ・無彩	D	
6	土師器 坏	床直	124	(12.4)		8.6+	ハラケズリ・無彩	D	
7	土師器 甕	床直	830	16.7		15.5	ハラケズリ	B	
8	土師器 甕	覆土中	675	19.2	6.9	14.4	ハラケズリ	B	
9	土師器 甕	床直	525	15.3	6.5	13.9	ハラケズリ	C	
10	土師器 甕	床直	1300	13.9	4.4	20.6	ハラケズリ	C	
11	石製品 磨石	竈覆土中	116.5	長4.8cm	幅6.5cm	厚4.0cm		E	砂岩製
12	石製品 砥石	床直	489.7	長10.9cm	幅6.8cm	厚7.5cm		E	安山岩製
13	土製品 紡錘車	竈覆土中	23.5	最大径4.8cm	孔径0.8cm	厚2.0cm		C	

A-005

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	須恵器 坏身	床直	130	(12.0)		4.1	轆轤成形・回転ハラケズリ	D	
2	土師器 坏	床直	223	13.8		4.8	ハラケズリ・赤彩	B	
3	土師器 坏	竈内	257	14.6		5.4	ハラケズリ・赤彩	A	
4	土師器 坏	床直	235	14.0		5.2	ハラケズリ・赤彩	B	
5	土師器 坏	覆土下位	161	(13.8)		5.6	ハラケズリ・赤彩	D	
6	土師器 坏	竈内	496	16.4		7.6	ハラケズリ・赤彩	A	
7	土師器 高坏	床直	191	12.8		3.8+	ハラケズリ・赤彩	C	
8	土師器 壺	床直	506	10.1	6.3	10.7	ハラケズリ・赤彩	B	
9	土師器 甕	床直	676	16.0	4.2	13.8	ハラケズリ	B	
10	土師器 甕	床直	1125	13.9	6.2	18.6	ハラケズリ	A	
11	土師器 甕	床直	1064	13.4	5.6	16.6	ハラケズリ	B	
12	土師器 甕	貯蔵穴上	2016	16.0	5.6	24.0	ハラケズリ	A	
13	土師器 甕	竈内床直	1935	17.2	8.0	25.5	ハラケズリ・ハケ	B	
14	石製品 磨石	覆土下位	176.9	長5.5+cm	幅8.0cm	厚2.5+cm		D	砂岩製
15	土師器 甕	床直	1740	24.4	6.6	20.8	ハラケズリ	A	
16	土師器 甕	床直	1565	21.0	6.0	20.2	ハラケズリ	A	
17	土師器 甕	床直	1694	14.3	6.7	23.7	ハラケズリ	A	

A-006

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	床直	146	11.5		5.4	ハラケズリ・無彩	B	
2	土師器 坏	床直	85	(15.3)		5.1+	ハラケズリ・赤彩	E	
3	土師器 坏	覆土下位	236	15.0		5.7	ハラケズリ・赤彩	A	
4	土師器 坏	床直	112	15.0		4.7+	ハラケズリ・赤彩	D	
5	土師器 坏	床直	91	14.4		4.5+	ハラケズリ・赤彩	D	
6	土師器 坏	床直	134	(12.9)		5.1	ハラケズリ・赤彩	C	
7	土師器 壺	床直	532	10.9	6.7	8.5	ハラケズリ・赤彩	B	
8	土師器 鉢	床直	510	20.5	8.0	9.0	ハラケズリ・底部木葉痕	B	
9	土製品 支脚	竈内床直	1473	長19.0cm	最大径10.9cm			A	

A-016

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	竈内	105	(12.4)		4.6	ハラケズリ・無彩	C	
2	土師器 坏	覆土中位	156	(15.0)		4.7	ハラケズリ・赤彩	C	
3	土師器 坏	竈内	145	(14.8)		5.0	ハラケズリ・赤彩	D	
4	土師器 坏	竈覆土中	144	13.8		5.4	ハラケズリ・赤彩	C	
5	土師器 甕	床直	308	14.0		6.5+	ハラケズリ	C	
6	土師器 甕	床直	232	12.5		5.2+	ハラケズリ	C	
7	土製品 支脚	竈脇床直	1415	長19.0cm	最大径10.5cm			A	

A-017

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	床直	20	(10.0)		2.8+	ハラケズリ・赤彩	E	
2	土師器 坏	床直	77	(14.0)		4.8+	ハラケズリ・赤彩	D	
3	土師器 坏	竈脇床直	232		5.3	4.1+	ハラケズリ・赤彩	C	
4	土師器 坏	床直	226	11.5	4.5	6.0	ハラケズリ・赤彩	B	
5	土師器 坏	竈覆土中	69	(12.6)		4.7+	ハラケズリ・赤彩	E	
6	土師器 壺	床直	85	(12.8)		5.5+	ハラケズリ・赤彩	E	
7	土師器 高坏	覆土中	96		9.2	5.2+	ハラケズリ・赤彩	D	
8	土師器 甕	床直	433	12.4		10.2+	ハラケズリ	C	
9	土師器 甕	床直	862	12.1	5.0	14.4	ハラケズリ	A	
10	土師器 甕	床直	545	(18.0)		18.2+	ハラケズリ	E	
11	土製品 支脚	竈内床直	1240	長19.0cm	最大径9.2cm			A	
12	石製品 勾玉	床下	1.3	最大幅1.2+cm	長1.4+cm			D	蛇紋岩製

A-018

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	須恵器 坏蓋	竈覆土	167	13.7		4.9	轆轤成形・回転ハラケズリ	C	
2	土師器 坏	覆土中	59	(12.4)		3.8+	ハラケズリ・赤彩	E	
3	土師器 坏	覆土中	63	(11.0)		5.0+	ハラケズリ・赤彩	E	
4	土師器 坏	覆土中	38	(15.0)		5.7+	ハラケズリ・赤彩	E	
5	土師器 坏	覆土中	55	(14.0)		5.0+	ハラケズリ・赤彩	E	
6	土師器 坏	床直	246	13.2		5.5	ハラケズリ・赤彩	B	
7	土師器 坏	床直	130	12.0		4.7	ハラケズリ・赤彩	D	
8	土師器 坏	床直	150	13.0		4.7	ハラケズリ・赤彩	C	
9	土師器 坏	覆土中位	204	14.0		4.3	ハラケズリ・赤彩	A	
10	土師器 坏	覆土中位	84	(13.0)		5.5	ハラケズリ・赤彩	E	
11	土師器 坏	覆土下位	104	(13.0)		5.3	ハラケズリ・赤彩	E	
12	土師器 壺	床直	462	12.3		8.9	ハラケズリ・赤彩	B	
13	土師器 壺	竈内床直	410	11.9	7.5	12.3	ハラケズリ・赤彩	C	
14	土師器 鉢	床直	773	18.5	7.8	9.8	ハラケズリ	A	
15	土師器 甕	床直	975	14.8	7.8	22.2	ハラケズリ・ハケ・底部木葉痕	B	乳白色胎土
16	土師器 甕	床直	269		6.2	11.4+	ハラケズリ・底部木葉痕	D	乳白色胎土
17	土師器 甕	竈覆土下位	1163	20.5		17.7+	ハラケズリ	D	
18	土師器 甕	床直	2220	15.1	6.4	26.8	ハラケズリ	B	
19	土師器 甕	床直	822	(22.4)		20.0+	ハラケズリ	E	
20	土師器 甕	床直	1153	17.8		15.0+	ハラケズリ	C	
21	土師器 甕	床直	755	13.5		17.0+	ハラケズリ	E	
22	土師器 甕	床直	2439	15.2	7.2	29.2	ハラケズリ	B	
23	土師器 甕	床直	2030	15.8	7.1	28.1	ハラケズリ	B	
24	土師器 甕	床直	3221	22.6	7.2	29.9	ハラケズリ	B	
25	土師器 甕	覆土下位	1925	15.0	6.4	23.6	ハラケズリ	B	
26	土師器 甕	床直	1593	25.5	8.9	21.0	ハラケズリ	B	
27	石製品 磨石	床直	204.5	長9.5cm	幅5.7cm	厚2.7cm		A	砂岩製
28	石製品 磨石	覆土中	55.2	長5.1cm	幅4.5cm	厚3.2cm		A	
29	土製品 紡錘車	覆土中	16.2	最大径(4.3)cm	厚2.2cm			D	

A-020

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	床直	25	(13.0)		3.7+	ハラケズリ・無彩	E	
2	土師器 坏	覆土中	28	(14.0)		4.0+	ハラケズリ・赤彩	E	
3	土師器 坏	覆土中	27	(13.4)		3.3+	ハラケズリ・赤彩	E	
4	土師器 坏	床直	129	(13.6)		5.6	ハラケズリ・赤彩	C	
5	土師器 坏	覆土中	23	(13.0)		3.7+	ハラケズリ・赤彩	E	
6	土師器 坏	覆土中	23	(14.0)		3.4+	ハラケズリ・赤彩	E	
7	土師器 甕	覆土中	38	(13.2)		6.5+	ハラケズリ	E	
8	土師器 甕	床直	133	(15.0)		8.4+	ハラケズリ	E	
9	土師器 甕	床直	400	16.4		6.3+	ハラケズリ	D	
10	土師器 壺	床直	34	(3.4)		4.3+	ハラケズリ・赤彩	D	
11	土師器 小型土器	貯蔵穴上	48		3.2	3.6+	手捏ね・赤彩	E	
12	土製品 支脚	床直	460	長8.5+cm	最大径8.2cm			D	
13	石製品 磨石	覆土中	143.5	長7.2cm	幅5.0cm	厚2.6cm		A	砂岩製
14	土製品 管玉	床直	1.2	最大幅0.7cm	孔径0.1cm	長2.0cm		A	

遺存度 A(完形) B(3/4以上) C(1/2以上) D(1/4以上) E(1/4以下)

第4節 土壙・竪穴状遺構・溝跡

土壙

総数95基であり、その大半は縄文時代の所産である。種別を特定できるものとしては縄文時代の陥穴が32基、貯蔵穴が20基である。C-101のみが古墳時代に属するものと考えられ、それ以外の42基については覆土に含まれる遺物から、縄文時代の所産と判断したものの、他は帰属時期など不明な点が多い。陥穴は、上面形態が楕円形で深度があり、底部にピットを有するタイプと袋状にオーバーハングするタイプの2者が主である。貯蔵穴は上面形態が円形を呈し、底部へと垂直に落ちるタイプと袋状にオーバーハングするタイプの2者が主である。

出土遺物については全体的に少なく、混入と思われるものも含めて一覧表に重量とともに記した。

竪穴状遺構

方形を呈し、不規則な浅い柱穴を有する土壙を竪穴状遺構として報告するが、出土遺物は混入と思われる縄文土器の細片しか検出されず、帰属時期など不明な点が多い。床面にある柱穴は1号のように規則性を持つものもあるが、大半は浅く不規則な配置である。

溝跡

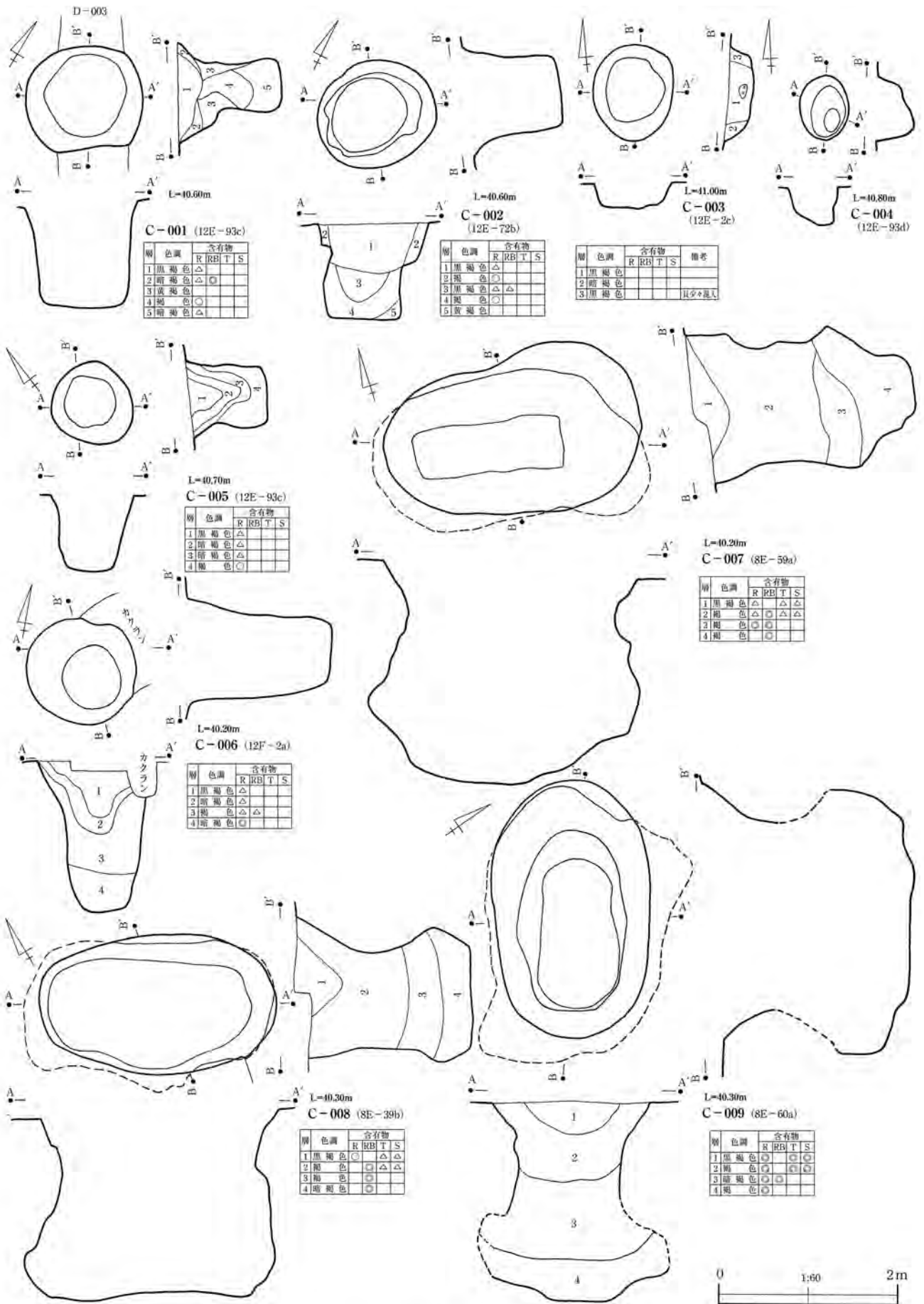
12条検出されおり、中には複数年度に亘って調査されているものもある。遺構図面は遺跡全体の遺構配置図の中で、断面図とともに掲載した。D-001はD-002に切られ、D-009はD-006・D-007に切られて構築されているのが土層断面図から判明している。構築された時期については調査所見等を参考にしても、中・近世よりは遡り得ないものと思われる。遺物は明らかに周囲からの混入と思われる縄文土器片が多量にあったため、それらは調査区出土遺物の中の各グリッドに還元して計量している（第5章第1節を参照）。

第9表 土壙一覧表①

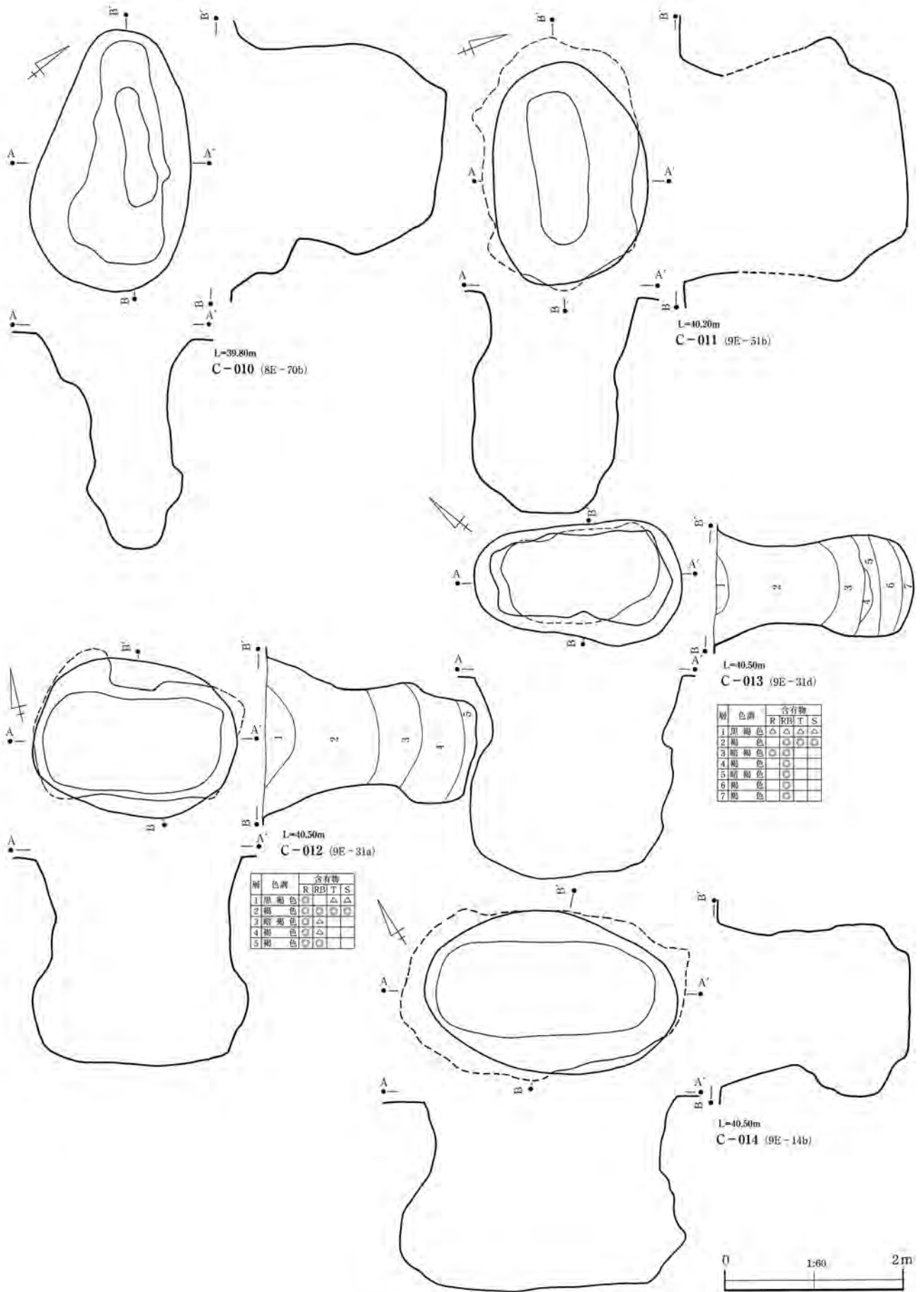
遺構番号	形態	規模 (cm)		深さ (cm)	種別	時代	出土遺物			図版番号		備考
		上(長軸×短軸)	下(長軸×短軸)				時期	種類	重量 (g)	遺構図	遺物	
C-001	円形	134×112	90×92	116	貯蔵穴	縄文				28		
C-002	円形	134×82	120×78	102	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器 土錘1点	795	28	38	加曾利E式・称名寺式
C-003	円形	106×88	68×64	26	貯蔵穴	縄文				28		貝を含む
C-004	楕円形	80×54	22×18	42						28		
C-005	円形	92×92	58×52	86	貯蔵穴	縄文	縄文時代 後期	土器	45	28	38	加曾利B式
C-006	円形	122×112	64×68	168	貯蔵穴	縄文	縄文時代	土器	12	28		
C-007	楕円形	286×168	200×56	242	陥穴	縄文				28		
C-008	楕円形	266×156	222×104	198	陥穴	縄文	縄文時代	土器	8	28		
C-009	楕円形	288×172	166×80	234	陥穴	縄文	縄文時代	土器	11	28		
C-010	楕円形	290×168	132×34	232	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	15	29		加曾利B式
C-011	楕円形	250×172	172×56	250	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	78	29		加曾利B式
C-012	楕円形	226×172	198×104	234	陥穴	縄文	縄文時代 早・後期	土器	105	29		茅山式・加曾利B式
C-013	楕円形	232×126	168×104	220	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	54	29		加曾利B式
C-014	楕円形	282×182	244×106	210	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	52	29	38	加曾利B式・曾谷式
C-015	楕円形	234×218	140×46	226	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	172	30	38	加曾利B式
C-016	楕円形	244×104	162×40	240	陥穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器	25	30		阿玉台式・加曾利B式
C-017	楕円形	240×150	162×70	204	陥穴	縄文	縄文時代 中期	土器	108	30	38	阿玉台式
C-018	円形	80×72	42×44	30	貯蔵穴	縄文				30		
C-019	楕円形	110×78	60×16	44		縄文				30		
C-020	円形	78×72	56×44	36						30		
C-021	円形	118×100	68×50	34	貯蔵穴	縄文				30		
C-022	楕円形	(160)×126	126×88	46						30		
C-023	楕円形	148×116	38×18	60						30		
C-024	円形	144×136	66×72	56						30		
C-025	楕円形	176×100	76×38	102	陥穴	縄文				31		
C-026	円形	196×176	170×158	38	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中期	土器	454	31		加曾利E式
C-027	楕円形	92×68	8×8	136						31		
C-028	長方形	168×134	112×92	72	貯蔵穴	縄文				31		キサゴ・ハマグリで構成された貝ブロックを含む
C-029	円形	110×98	82×76	36	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中期	土器	522	31	38	加曾利E式
C-030	楕円形	230×128	180×98	200	陥穴	縄文	古墳時代 後期	土器	196	31	39	

第10表 土壙一覽表②

遺構番号	形態	規模 (cm)		深さ (cm)	種別	時代	出土遺物			図版番号		備考
		上(長軸×短軸)	下(長軸×短軸)				時期	種類	重量(g)	遺構内	遺物	
C-031	隅丸長方形	174×88	138×48	64	陥穴	縄文					31	
C-032	長方形	262×140	166×44	236	陥穴	縄文					31	
C-033	楕円形	222×144	206×100	228	陥穴	縄文					31	
C-034	長方形	192×126	144×72	54		縄文	縄文時代 中期	土器	153	32	38	加曾利E式
C-035	楕円形	262×186	258×88	218	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	193	32	38	加曾利B式
C-036	楕円形	106×78	64×34	124	陥穴	縄文					32	
C-037	楕円形	224×132	178×64	66	陥穴	縄文					32	
C-039	楕円形	192×64	172×38	66		縄文	縄文時代 中・後期	土器	91	32	38	加曾利E式・加曾利B式
C-040	円形	92×84	72×54	34	貯蔵穴						32	
C-042	円形	74×68	64×52	28	貯蔵穴	縄文					32	
C-043	円形	82×58	58×44	32	貯蔵穴	縄文					32	
C-044	隅丸方形	128×104	82×80	38		縄文	縄文時代 後・晩期	土器	51	32		堀之内1式・加曾利B式 安行2式・安行3b式
C-045	円形	118×112	76×64	26							32	
C-046	長方形	130×88	96×54	26							32	
C-047	楕円形	110×86	82×56	24	貯蔵穴	縄文					32	
C-048	隅丸長方形	180×124	162×112	22							32	
C-049	楕円形	128×60	72×24	26		縄文	縄文時代 後・晩期	土器	9	32		安行1式
C-050	(円形)	108×(64)	64×(52)	26							32	
C-051	楕円形	144×72	120×48	24							33	
C-052	長方形	158×96	112×60	30							33	
C-054	(円形)	96×(62)	66×(46)	32							33	
C-057	楕円形	130×108	98×44	40							33	
C-058	楕円形	144×108	114×82	34	貯蔵穴	縄文	縄文時代 後期	土器	4	33		加曾利B式
C-059	楕円形	182×136	150×108	30	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器	393	33	38	加曾利E式・加曾利B式 破砕貝を含む
C-060	円形	114×104	128×120	118	貯蔵穴	縄文					33	D-009に切られる
C-061	円形	100×100	126×110	160	貯蔵穴	縄文					33	D-009に切られる
C-062	円形	88×82	68×60	24							33	
C-063	楕円形	140×80	124×60	14							33	
C-064	楕円形	140×116	122×106	14							33	
C-065	円形	104×80	84×62	22	貯蔵穴	縄文					33	
C-066	長方形	152×126	148×120	8							33	
C-067	楕円形	126×86	78×52	30							33	
C-068	円形	108×98	66×70	26							33	
C-069	楕円形	154×104	116×78	24							33	
C-070	楕円形	214×106	188×96	48		縄文	縄文時代 中期	土器	38	33	38	加曾利E式
C-072	楕円形	140×102	108×76	22							34	
C-073	楕円形	208×126	184×92	16							34	
C-074	楕円形	108×70	86×52	22							34	C-044と重複
C-075	楕円形	172×150	98×54	46		縄文	縄文時代 中・後期	土器	318	34	38	加曾利E式・加曾利B式 安行1式
C-076	隅丸長方形	198×110	170×58	254	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	40	34		堀之内1式
C-077	楕円形	218×150	194×108	212	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	480	34	38	堀之内式・加曾利B式
C-078	楕円形	262×142	150×48	238	陥穴	縄文					34	
C-079	隅丸長方形	(264)×116	222×74	200	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	98	34		称名寺式・加曾利B式
C-080	隅丸長方形	234×98	196×42	208	陥穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器	219	35		加曾利E式・加曾利B式
C-081	楕円形	186×108	124×36	32							35	
C-082	長方形	242×94	200×56	226	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器 石片	762 12.7	35	39	安行1式 剥片8点
C-083	不定形	430×70	396×34	14		縄文	縄文時代 後期	土器	9	35		加曾利B式 焼土多く含む
C-084	楕円形	300×182	208×70	102							35	
C-085	楕円形	144×76	104×52	20							35	
C-086	楕円形	244×108	186×44	200	陥穴	縄文					35	
C-087	楕円形	226×172	134×64	198	陥穴	縄文					35	
C-088	楕円形	214×92	190×54	66							35	
C-089	楕円形	(174)×114	110×66	162	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	584	36	38	堀之内式・加曾利B式
C-090	楕円形	(286)×110	166×42	250	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器	91	36	39	安行1式
C-091	楕円形	200×104	164×58	210	陥穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器	567	36	39	加曾利E式・加曾利B式 曾谷式・安行1式
C-092	長方形	196×84	182×62	48	陥穴	縄文					36	
C-093	楕円形	118×90	88×46	40	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中・後期	土器	342	36	39	加曾利E式・加曾利B式
C-094	円形	180×(162)	80×82	62							36	
C-095	楕円形	220×122	82×66	232	陥穴	縄文					36	
C-096	楕円形	164×118	64×86	68		縄文	縄文時代 後期	土器	13	36	39	加曾利B式・安行1式
C-097	楕円形	200×146	74×56	30							36	
C-098	楕円形	92×68	80×54	12							37	
C-099	円形	74×62	44×34	16							37	
C-100	円形	80×80	40×38	24							37	
C-101	方形	216×208	192×178	52		古墳	古墳時代 後期	土器	185	37	39	



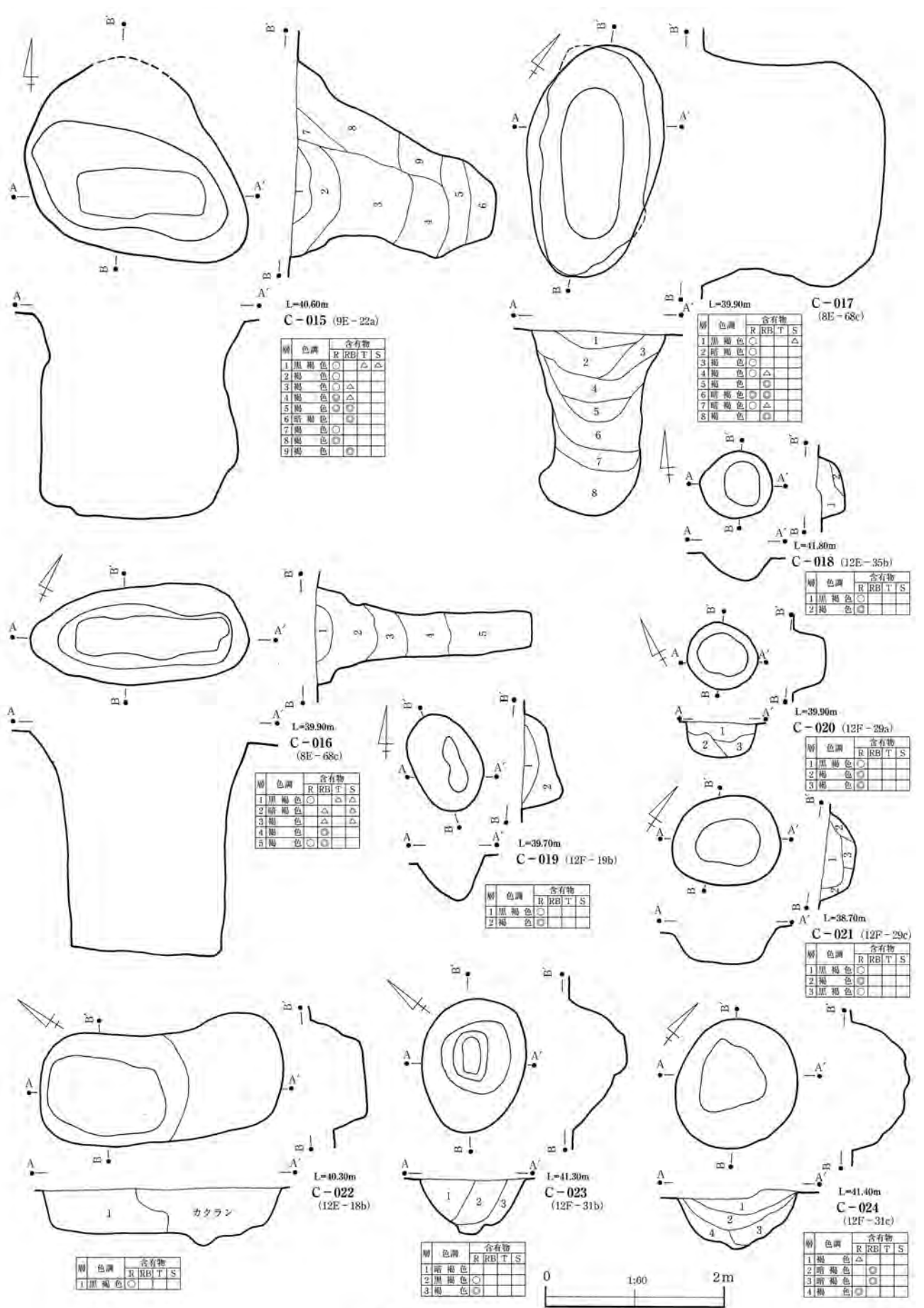
第28図 C-001~009



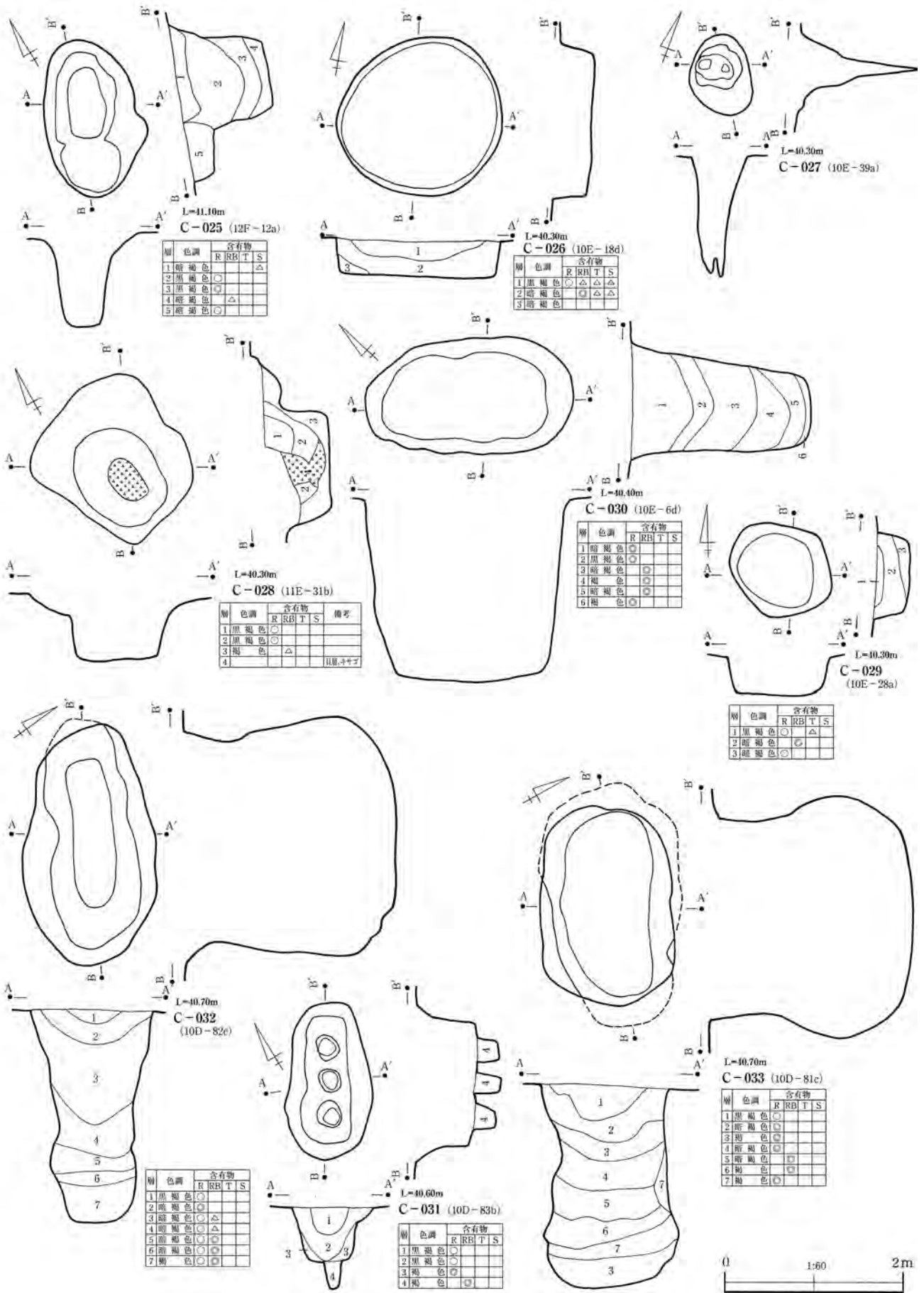
刷色調	含有物			
	R	RB	T	S
1 黒刷色	△	△	△	△
2 黒刷色	○	○	○	○
3 黒刷色	○	○	○	○
4 黒刷色	○	○	○	○
5 黒刷色	○	○	○	○
6 黒刷色	○	○	○	○
7 黒刷色	○	○	○	○

刷色調	含有物			
	R	RB	T	S
1 黒刷色	○	△	△	△
2 黒刷色	○	○	○	○
3 黒刷色	○	○	○	○
4 黒刷色	○	○	○	○
5 黒刷色	○	○	○	○

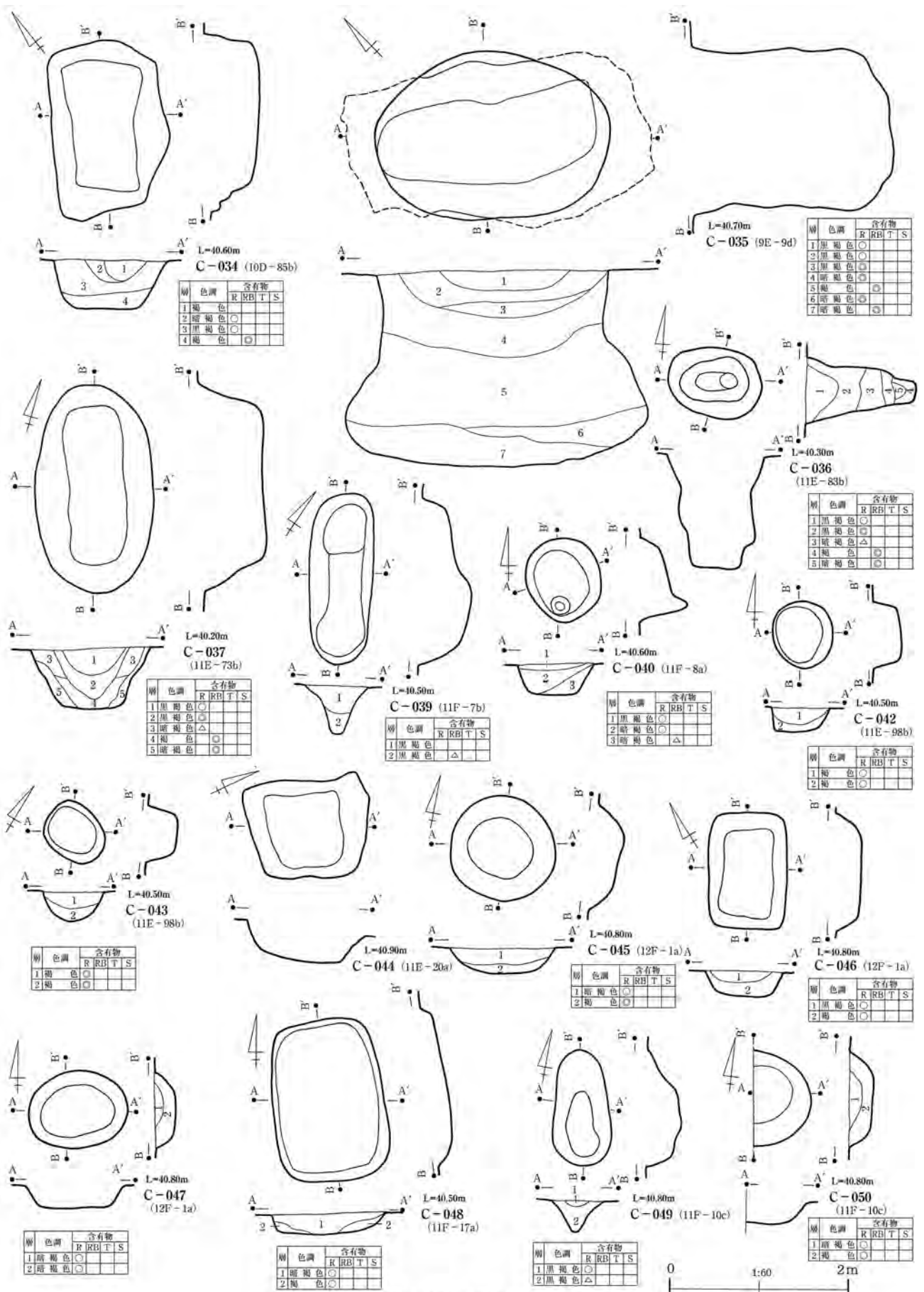
第29図 C-010~014



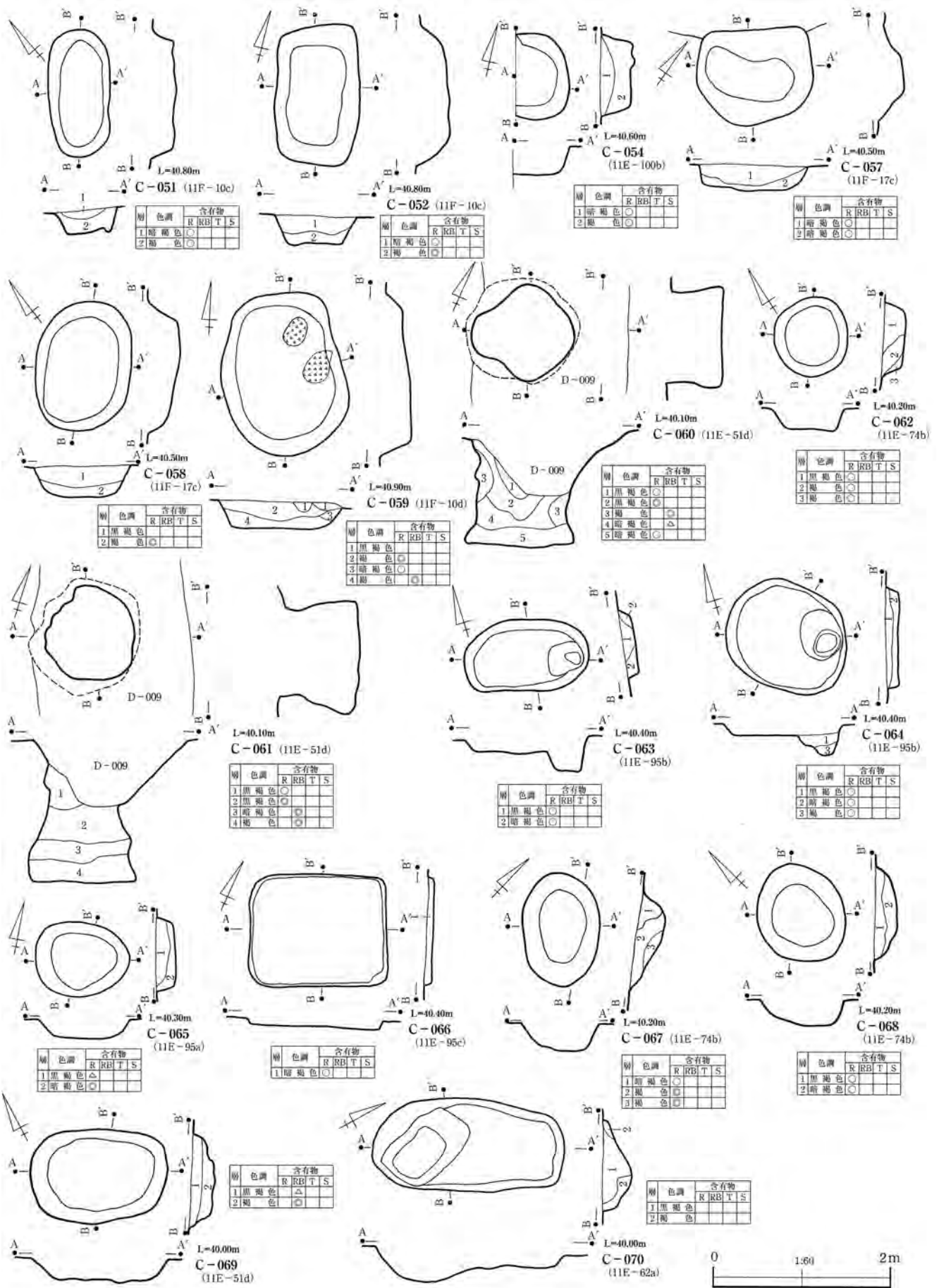
第30図 C-015~024



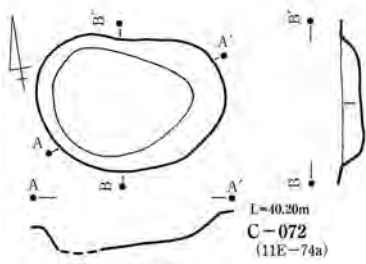
第31図 C-025~033



第32图 C-034~037·039·040·042~050

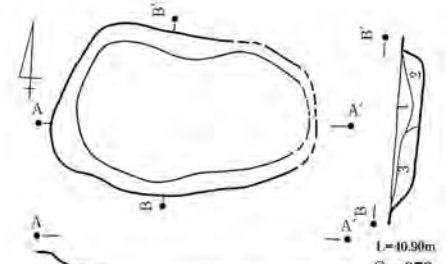


第33図 C-051・052・054・057~070



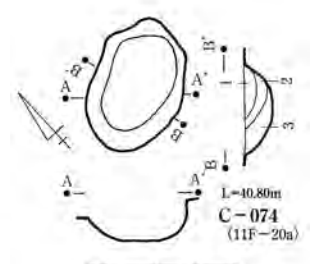
層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗褐色	△			

L=40.20m
C-072
(11E-74a)



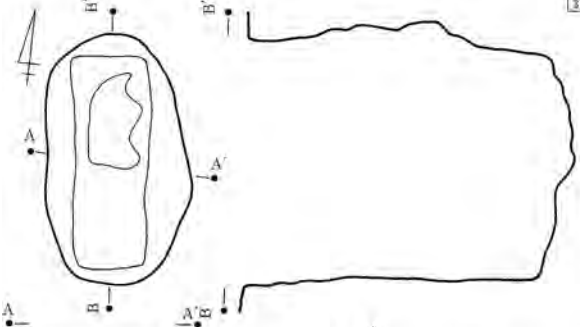
層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗褐色	△			
2	暗褐色	△			
3	褐色	○			

L=40.90m
C-073
(11F-20c)



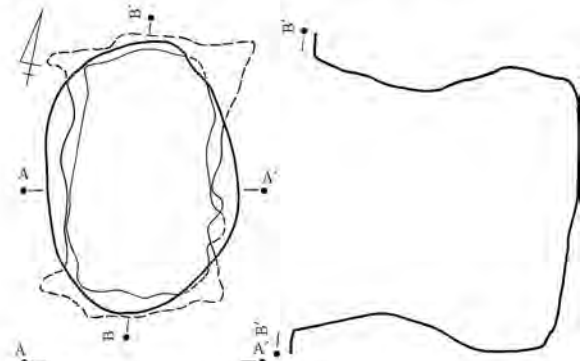
層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗褐色	△			
2	暗褐色	△			
3	褐色	○			

L=40.80m
C-074
(11F-20a)



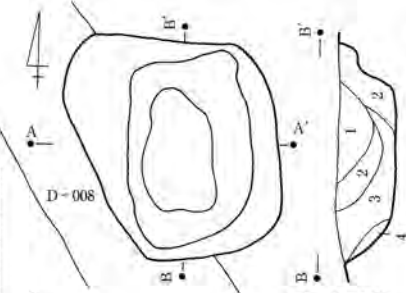
L=40.50m
C-076
(10E-27b)

層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗暗褐色	△			
2	暗褐色	△			
3	褐色	○			
4	暗褐色	△			
5	暗褐色	△			
6	褐色	○			
7	褐色	○			
8	褐色	○			



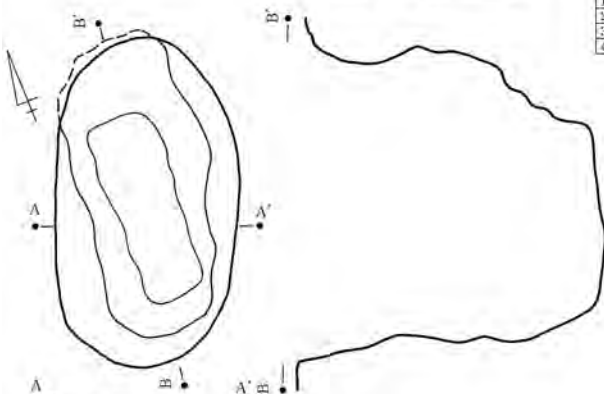
L=40.50m
C-077 (10E-45c)

層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗暗褐色	△			
2	褐色	○			
3	褐色	○			
4	暗褐色	△			
5	暗褐色	△			
6	暗褐色	△			



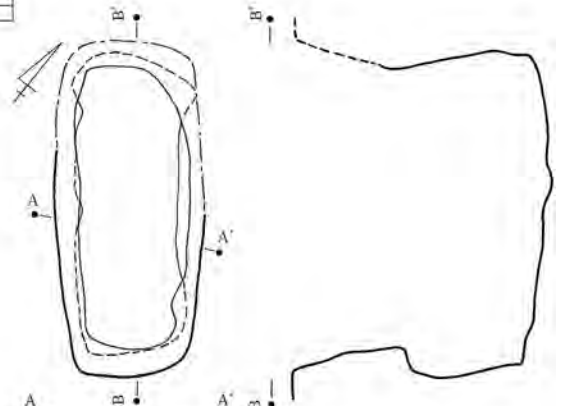
L=40.50m
C-075
(11F-16b)

層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗褐色	△			
2	暗褐色	△			
3	褐色	○			
4	褐色	○			



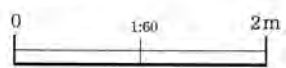
L=40.50m
C-078 (10E-16b)

層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	黒褐色	△			
2	褐色	○			
3	暗褐色	△			
4	褐色	○			
5	褐色	○			
6	暗褐色	△			

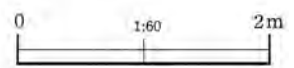
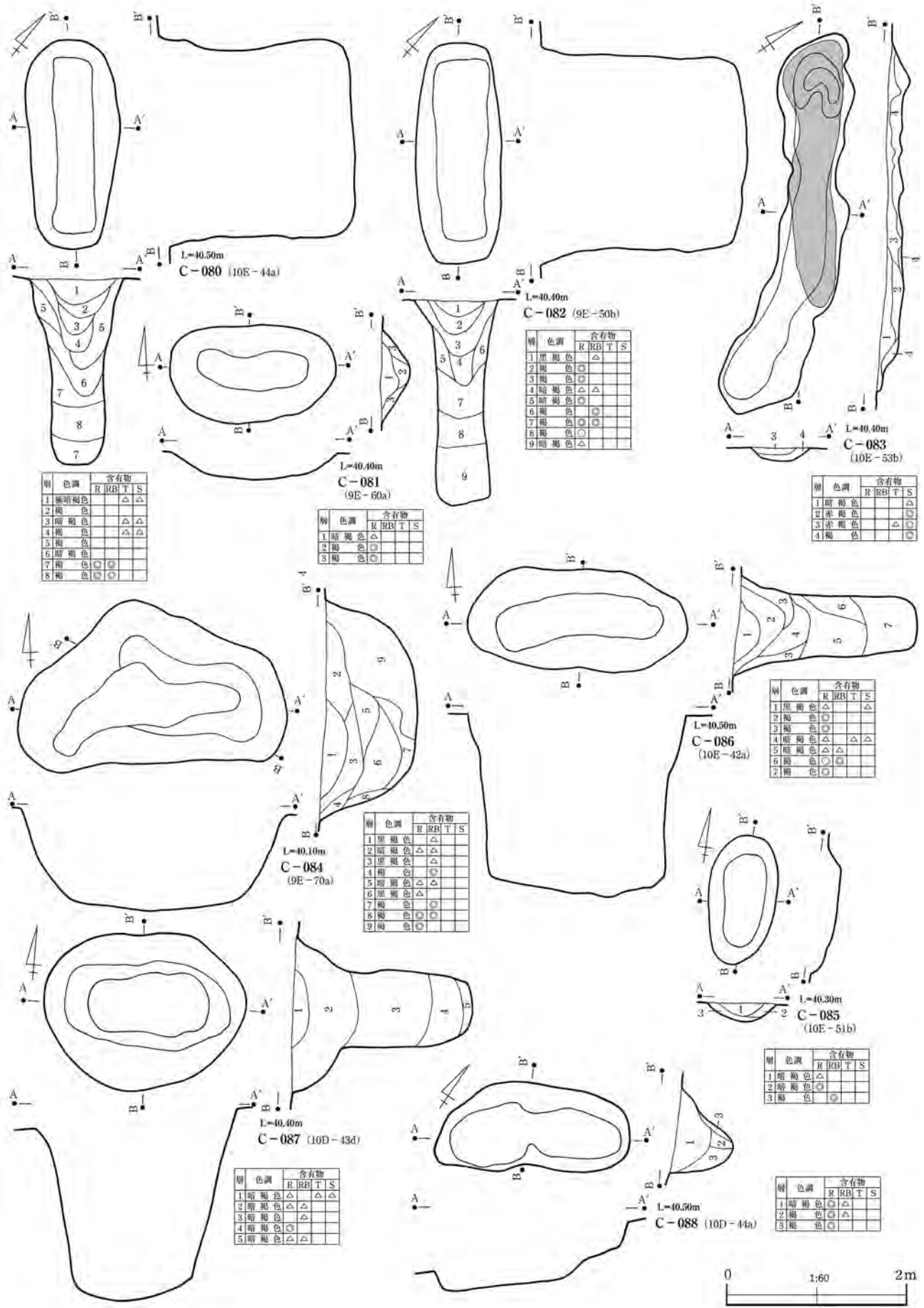


L=40.60m
C-079 (10E-37a)

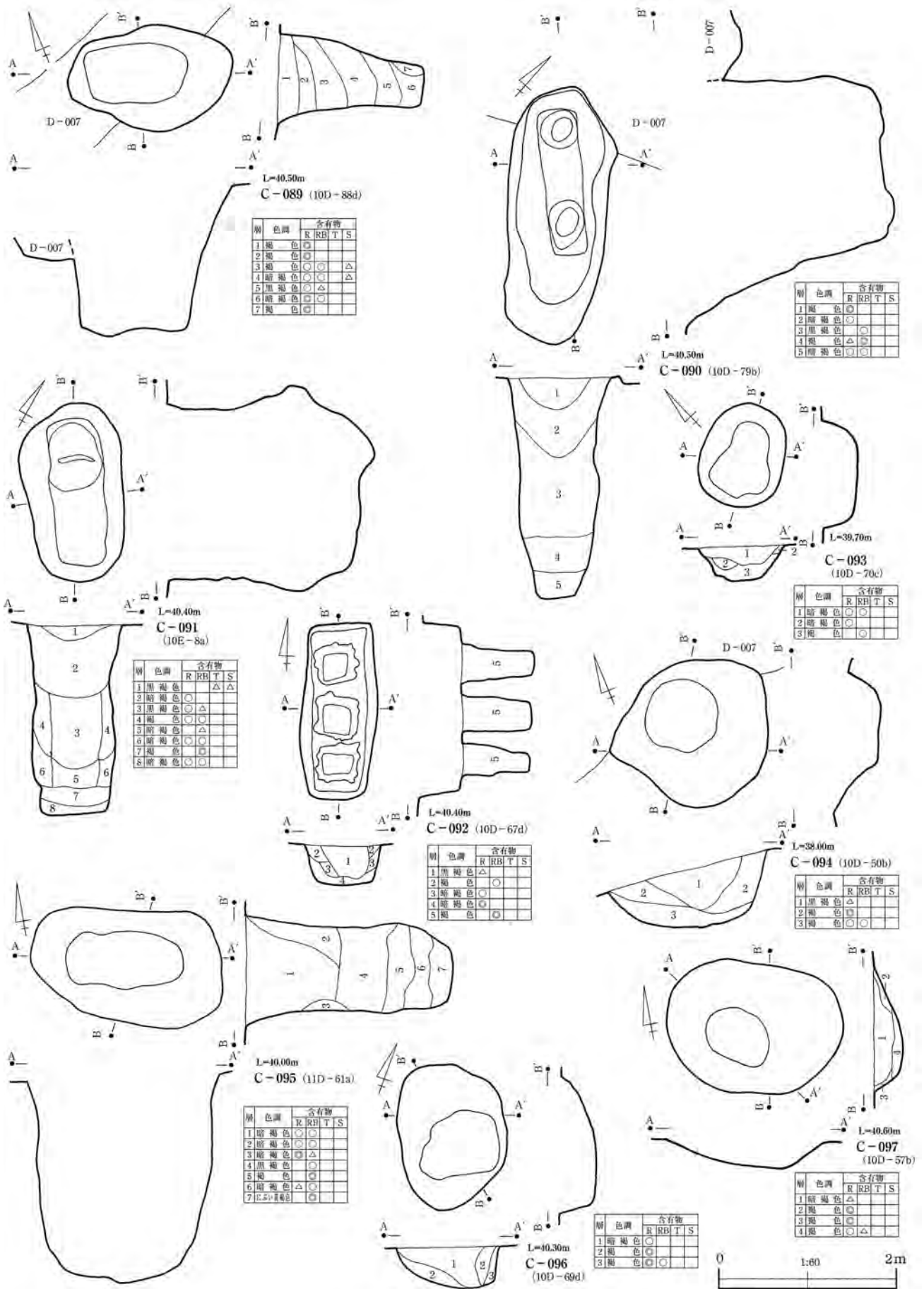
層	色調	含有物			
		R	RB	T	S
1	暗褐色	△			
2	褐色	○			
3	褐色	○			
4	暗褐色	△			
5	暗褐色	△			
6	褐色	○			
7	暗褐色	△			



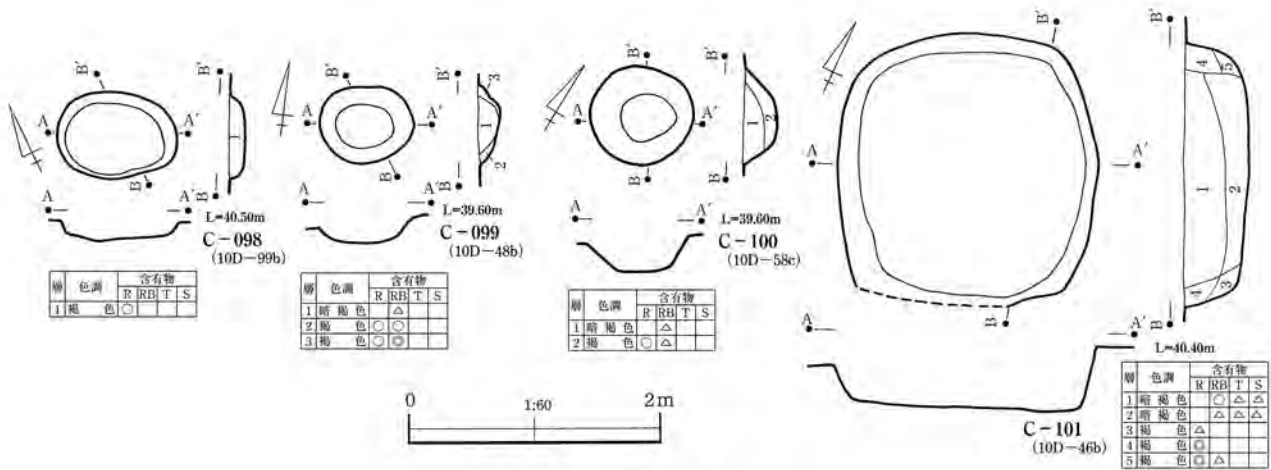
第34図 C-072~079



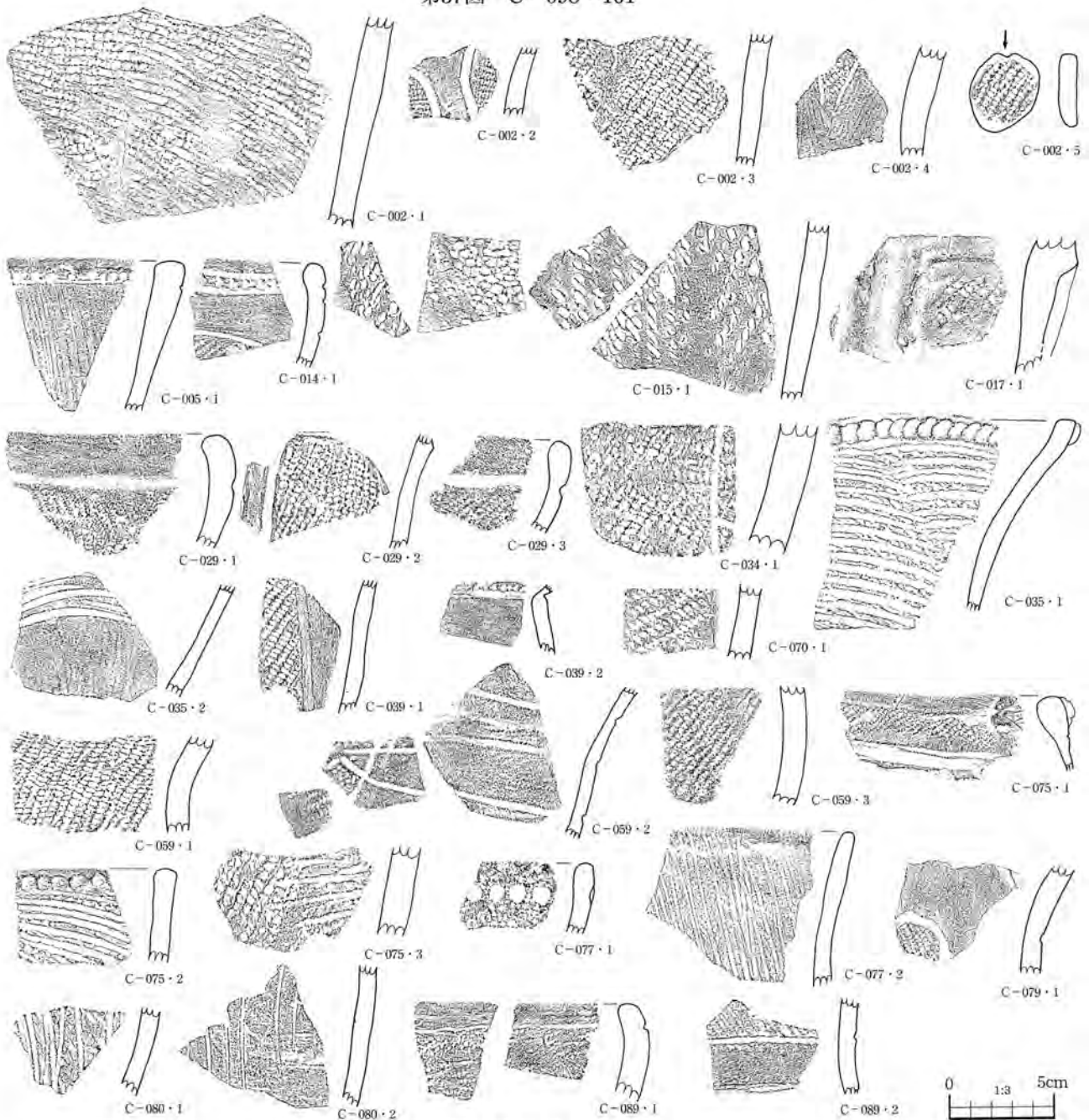
第35図 C-080~088



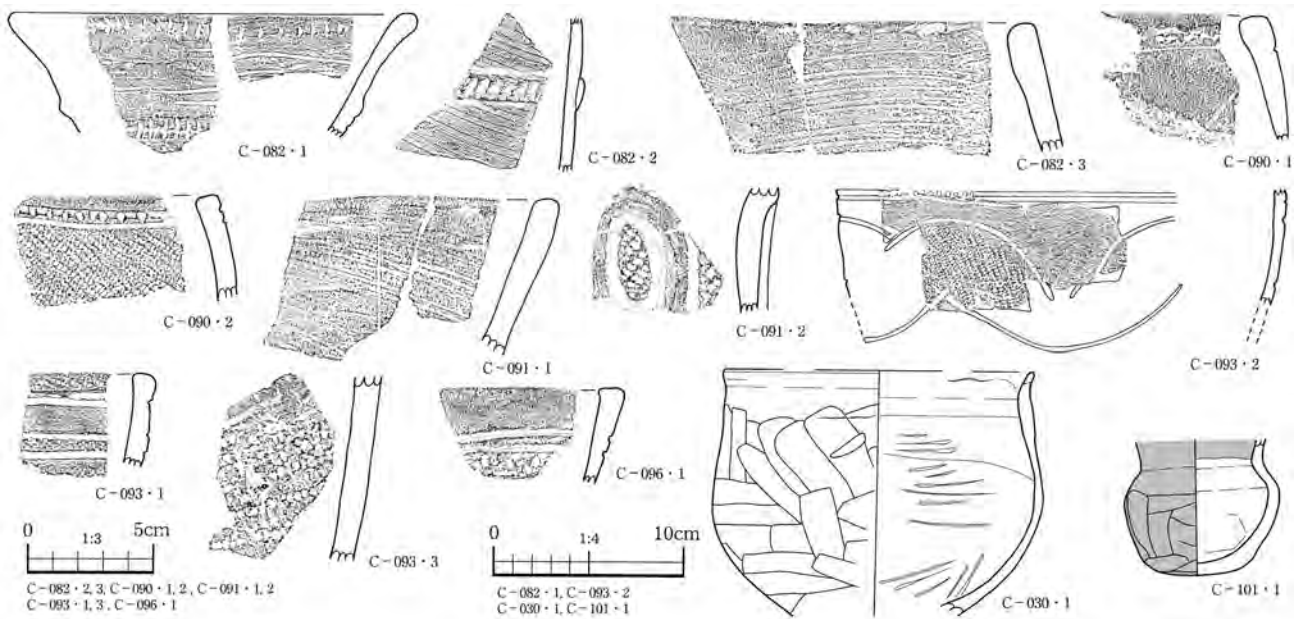
第36図 C-089~097



第37図 C-098~101



第38図 土坑 出土遺物 ①



第39図 土壙 出土遺物 ②

土壙出土土器

多部田貝塚からは95基の土壙が検出されているが、うち46基の土壙から縄文土器が出土し、2基の土壙から土師器が出土している。C-030の甕は縄文陥穴への混入であり、C-101出土の赤彩壺のみが土壙に帰属するものと思われる。C-012から茅山下層式土器が、C-017から阿玉台式土器が、C-044から安行3b式土器が出土している。加曾利EⅢ式～安行2式にかけての土器も出土しているが、主体をなすのは加曾利B式～安行1式土器である。C-002からは土器片錘が出土している。形態的に、陥穴と考えられるもの32基中18基から、貯蔵穴と考えられるもの20基中9基から縄文土器の出土が認められた。

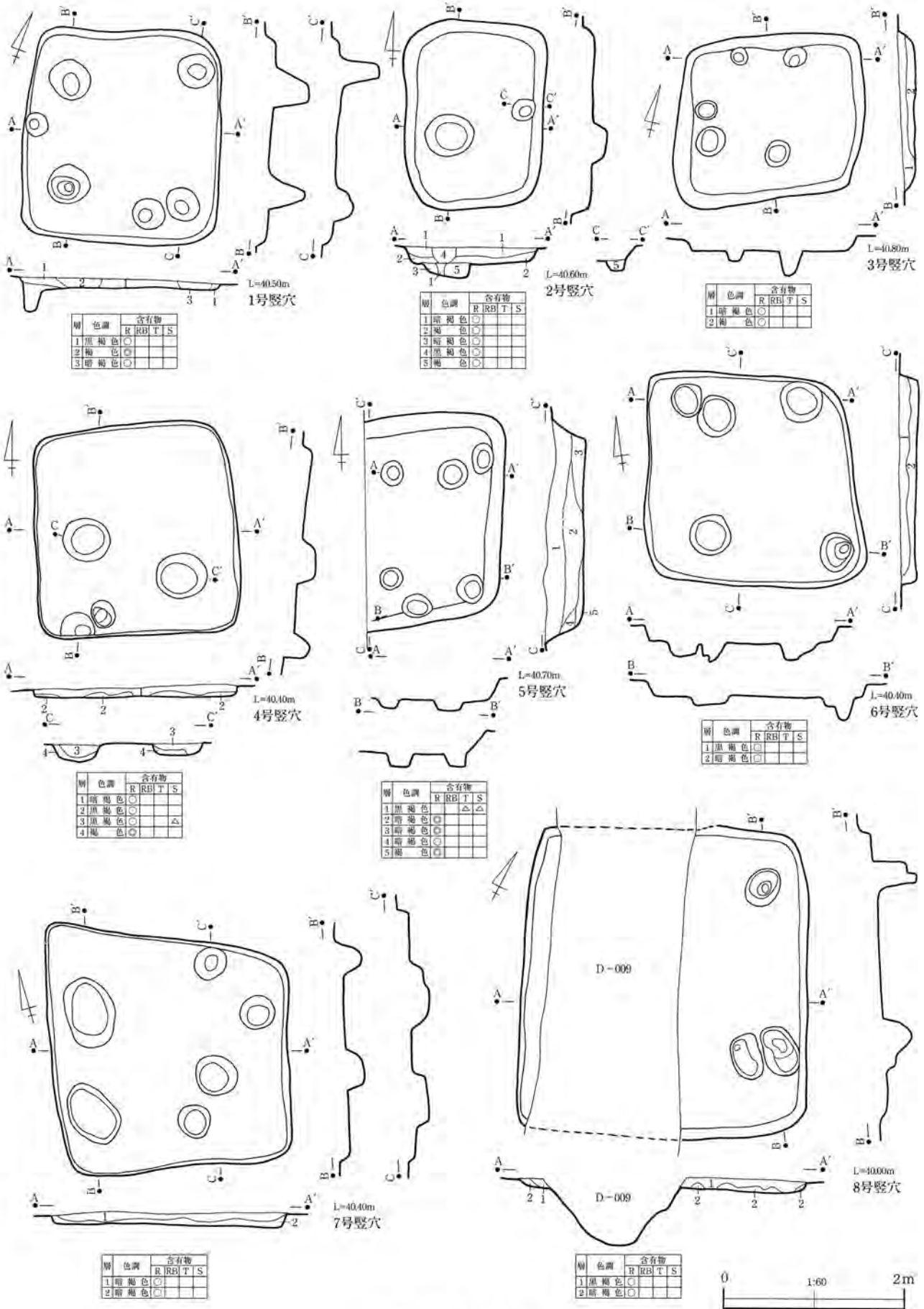
第11表 土壙出土遺物観察表・計測表

遺構名	No	器種名	層位	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	単位 (g)				単位 (cm)			
				口径	底径	器高			遺構名	No	種別	層位	重量	長	幅	厚
C-030	1	土師器 甕	覆土中		4.4	7.1+	ヘラケズリ	E	C-002	5	土錘	覆土中	12.0	3.2	3.6	0.9
C-101	1	土師器 壺	覆土中	(16.3)		14.0+	ヘラケズリ・赤彩	B								

遺存度 A(完形) B(3/4以上) C(1/2以上) D(1/4以上) E(1/4以下)

第12表 竪穴状遺構一覧表

遺構番号	旧番号	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	ピット数	出土遺物			備考
					時期	種類	重量 (g)	
1号	C-038	230×220	10	6	縄文時代 中・後期	土器	24	加曾利E式・加曾利B式
2号	C-055	205×152	16	2	縄文時代 後期	土器	18	加曾利B式
3号		205×178	18	5				
4号		205×218	12	4				
5号		232×(150)	40	6				
6号		230×224	18	5				
7号		260×254	10	6				
8号		344×315	3	3				D-009に切られる



第40图 竖穴状遺構

第5節 調査区出土遺物

多部田貝塚の調査区から出土した縄文土器は前期の黒浜式（1～3）、浮島式（4）、中期の阿玉台式（5～7）、加曾利E式（8～12）、後期の称名寺式（13・14）、堀之内式（15・16）、加曾利B式～曾谷式（17～45）、安行1式～2式（46～53）、晩期の安行3a式～3b式（54～59）、千網式（62・63）と晩期の東北地方の大洞BC式（60）、大洞C2式（61）の各型式の土器が出土している。14・48・64は注口土器、43は異形台付土器、60は関東地方での模倣であるが61は搬入品の可能性がある。86～88は加曾利B式の吊手土器である。これらのうち主体をなすのは、加曾利EⅢ式・EⅣ式土器と加曾利B式～安行2式土器で、前者は調査区全域から出土しているのに対して、後者は多部田貝塚の貝層縁辺部周辺に集中している。

土製品としては山形土偶2点（65・67）、木菟土偶2点（66）、耳飾3点（68～70）、土器片錘10点（72～80）、円盤状土製品9点（81～85）が出土し、66の木菟土偶は後期後半の可能性もある。

石器は剥片626点、石核86点、打製石斧14点（97～99）、磨製石斧11点（91～96）、磨石78点（107～109）、敲石31点（110）、石皿24点（111～113）、石錐1点（90）、石鏃3点（89）、凹石4点（105・106）、石剣6点（100・103）石棒5点（102）、軽石4点、不明石器42点が出土している。102は石棒を敲石に、106は石棒を凹石に転用した可能性がある。

第13表 調査区出土土製品・石器計測表

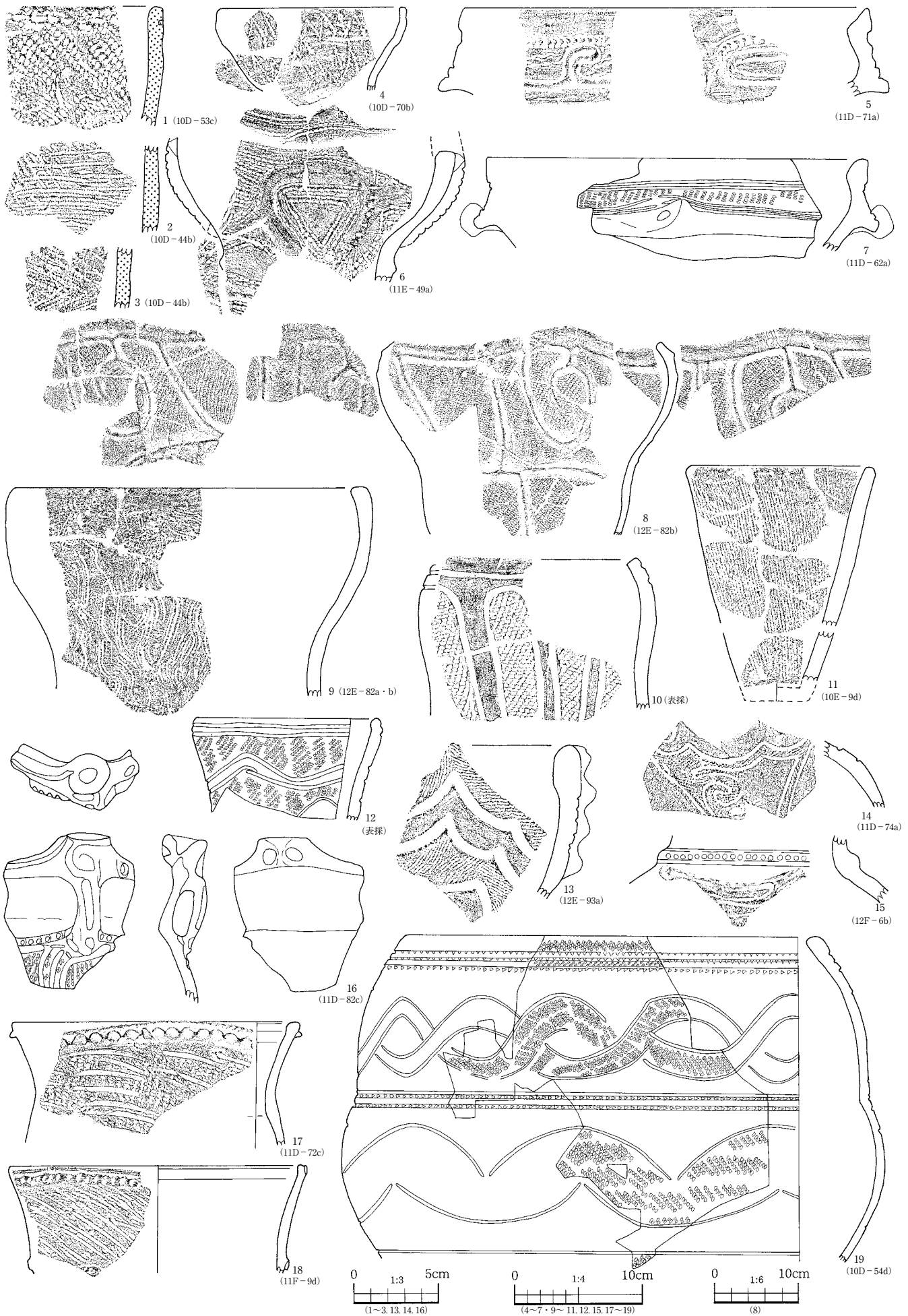
土製品

種別	図版・遺物番号	出土地点	重量	単位(g)			単位(cm)		
				長	幅	厚	長	幅	厚
土偶	43-65	12F-2b	243.0	7.0+	10.3	4.2			
土偶	43-66	11D-51a	139.0	7.8+	9.3	3.1+			
土偶	43-67	10D-98c	31.0	3.8+	3.0+	3.7			
耳飾	43-68	11D-81c	9.0	5.8+	1.8+	0.4			
耳飾	43-69	11F-8b	2.0	7.4+	1.6+	1.8			
耳飾	43-70	11D-82	8.0	2.3	2.5	2.5			
不明土製品	43-71	10D-99d	27.0	7.2+	5.8+	1.0+			
土錘	44-72	11D-91c	151.0	4.7	4.2	1.5			
土錘	44-73	10E-10a	18.0	3.6	5.7	0.6			
土錘	44-74	11D-63c	22.0	4.4	3.6	1.3			
土錘	44-75	11F-30b	35.0	4.5	5.3	1.2			
土錘	44-76	10D-70b	10.0	6.2	4.3+	1.0			
土錘	44-77	10D-70b	42.0	3.2	2.8+	0.7			
土錘	44-78	11D-82c	12.0	4.2	3.1	0.6			
土錘	44-79	10D-69c	29.0	5.2	5.5	0.6			
土錘	44-80	11D-63c	22.0	4.4	3.6	1.3			
土製円盤	44-81	11D-91a	24.0	5.0	4.7	0.6			
土製円盤	44-82	11D-91c	20.0	4.7	5.0	0.6			
土製円盤	44-83	11D-91c	18.0	4.3	3.6	0.7			
土製円盤	44-84	11E-1a	17.0	5.0	4.8	0.5			
土製円盤	44-85	11D-72c	15.0	3.4	3.0	0.7			

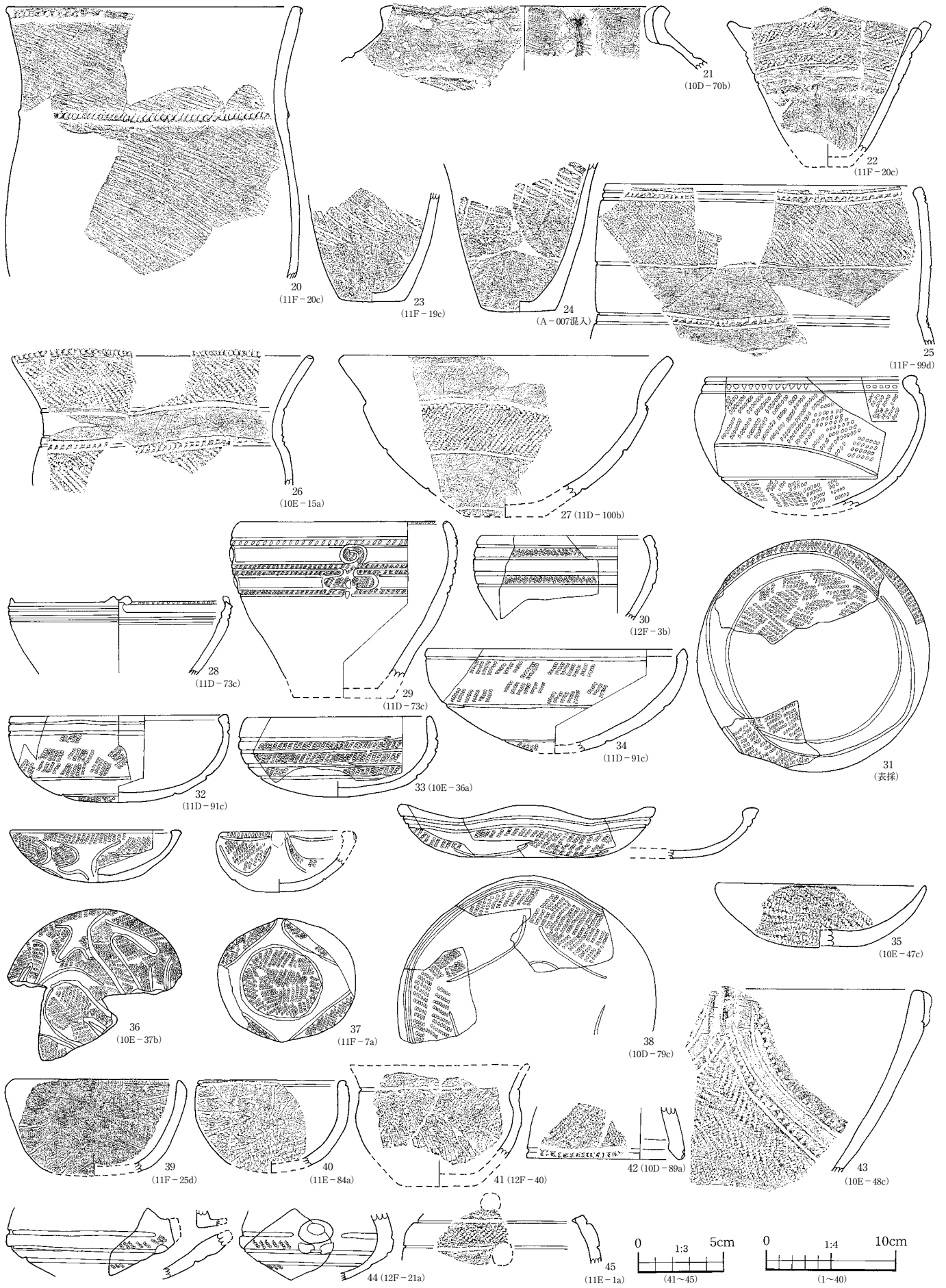
石器

種別	図版・遺物番号	出土地点	石材	重量	単位(g)			単位(cm)		
					長	幅	厚	長	幅	厚
石鏃	44-89	8E-59a	チャート	1.0	2.1	1.5	0.5			
石鏃		D-007混入	黒曜石	2.0	2.5	1.7+	0.1			
石鏃		11D-82	黒曜石	1.0	1.3+	1.6	0.3			
石錐	44-90	10E-18b	チャート	1.0	2.8+	1.1	0.4			
磨製石斧	44-91	10D-99b	砂岩	79.0	7.1	3.4	2.0			
磨製石斧	44-92	D-007混入	蛇紋岩	625.0	12.2+	7.3	3.7			
磨製石斧	44-93	10E-7a	緑泥片岩	55.0	7.2	3.2+	1.5			
磨製石斧	44-94	11F-1c	砂岩	224.0	7.2	5.8	7.0			
磨製石斧	44-95	11F-30b	蛇紋岩	22.0	5.0	3.5+	1.0			
磨製石斧	44-96	D-007混入	砂岩	7.0	3.5	1.7	0.6			
磨製石斧		D-007混入	砂岩	64.0	3.6+	5.1	1.7			
磨製石斧		11F-19b	蛇紋岩	17.0	13.2	3.2	0.9			
磨製石斧		11E-52b	砂岩	180.0	5.3+	5.2	3.1			
打製石斧		10E-18b	安山岩	190.0	7.5+	4.8	3.9			
打製石斧	44-97	10D-100a	安山岩	290.0	10.6	9.3	2.3			
打製石斧	44-98	11F-16a	安山岩	82.0	5.8+	3.6	1.3			
打製石斧	44-99	10D-68b	粘板岩	55.0	6.8	4.2	1.5			
打製石斧		10E-39d	結晶片岩	257.0	10.8	7.5	2.6			
打製石斧		11D-81b	安山岩	150.0	7.6	6.0	2.8			
打製石斧		11E-1a	安山岩	38.0	4.2+	5.2+	1.6			
石棒	44-102	10E-37d	緑泥片岩	234.0	8.3+	3.6	3.3			
石剣	44-100	10E-40b	緑泥片岩	61.0	8.6	2.5	1.7			
石剣	44-101	10D-100a	砂岩	74.0	7.6+	2.8	2.1			
石剣		10D-100a	粘板岩	76.0		4.7+				
石剣	44-103	D-010混入	緑泥片岩	50.0	7.9+	2.7	1.1			
石剣		10E-38d	緑泥片岩	87.0						
磨石	44-107	10D-100a	安山岩	225.0		7.0	6.4	3.7		
磨石		10D-100a	安山岩	261.0						
磨石		11D-82a	安山岩	136.0		5.1	4.8	3.4		
磨石		11E-62a	泥岩	537.0	12.0+	8.5	5.0+			
磨石		11E-85a	砂岩	498.0	13.0+	8.3	4.2			
磨石		12E-94b	砂岩	410.0		9.1	6.8	3.8		
磨石	44-109	11D-92c	頁岩	364.0	10.6	7.0	2.9			
磨石		11E-95d	砂岩	532.0	11.3	8.9	3.3			
磨石		10D-95d	砂岩	177.0	5.9+	7.8+	4.0+			
磨石	44-108	11D-61a	砂岩	566.0	12.0	8.1	3.0			
凹石	44-104	10E-18b	緑泥片岩	420.0	10.5+	8.7	2.3+			
凹石	44-105	9D-97b	安山岩	252.0		6.9	5.5	3.9		
凹石	44-106	11F-3a	安山岩	374.0		8.0	7.9	4.2		
凹石		10D-54d	安山岩	187.0		6.1	5.6	3.7		
凹石		11F-27a	砂岩	212.0		8.0	6.7	3.1		
敲石	44-110	10E-48b	砂岩	249.0		9.4	4.7	3.5		
石皿		10D-100a	砂岩	389.0		10.8	8.0	3.2		
石皿	44-113	10D-100a	安山岩	1448.0		8.8+	14.0	6.7		
石皿	44-111	11F-27a	安山岩	990.0		16.5	10.0	5.1		
石皿	44-112	11F-19b	安山岩	1269.0		11.3+	11.5	6.2		
石皿		10E-18d	安山岩	754.0		12.4	10.5	5.0		
石皿		12F-3c	泥岩	753.0		13.0	10.2	5.0		
石皿		10D-99a	安山岩	483.0						

(長・幅・厚の空欄のものは欠損による計測不能を表す)



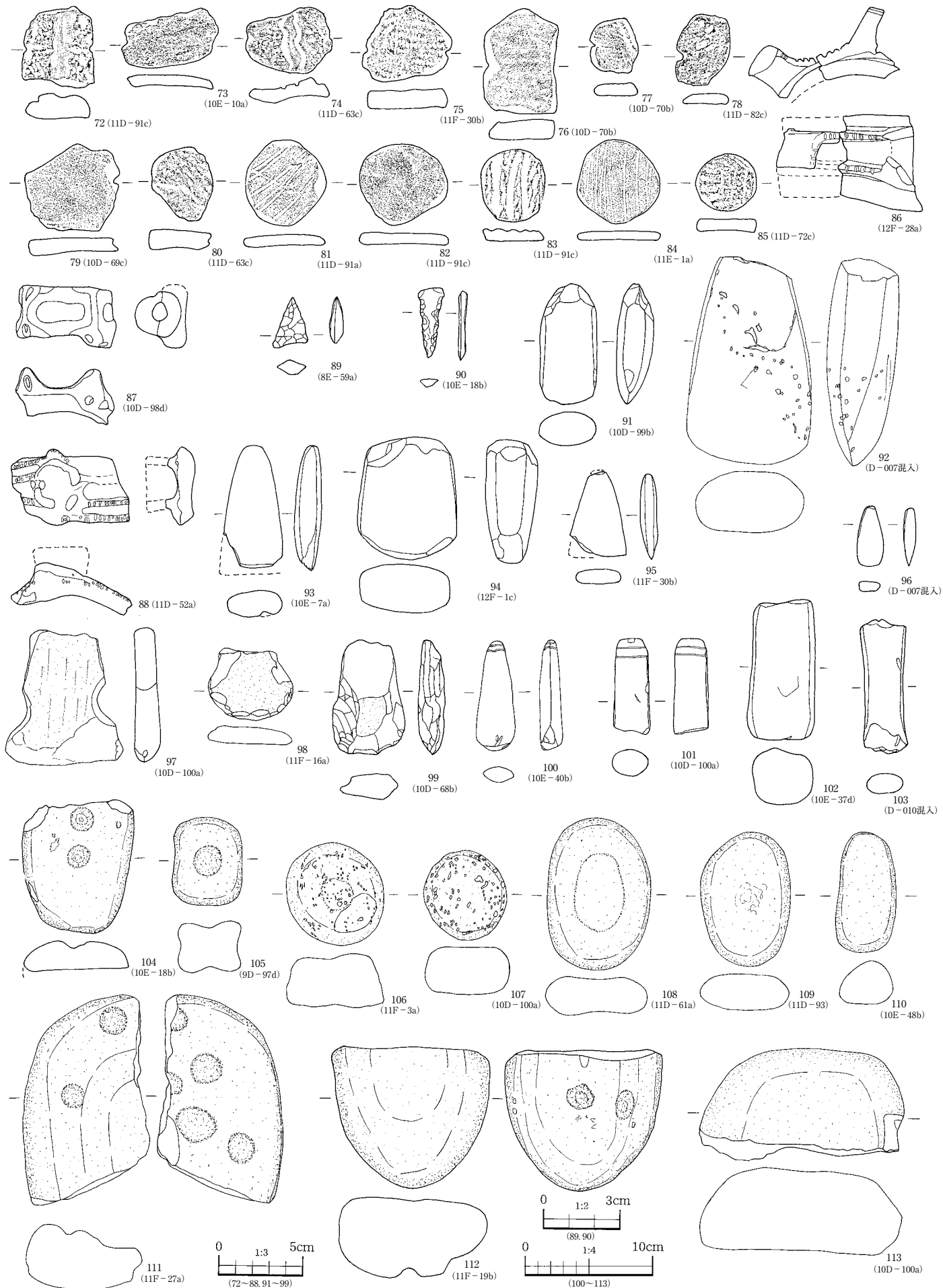
第41図 調査区 出土遺物①



第42図 調査区 出土遺物②



第43図 調査区 出土遺物③



第44図 調査区 出土遺物④

第3章 貝殻塚遺跡

第1節 調査の概要

立地

遺跡は平和公園内の西部に位置する。西側を都川から南方に伸びた多部田支谷に面し、標高は40～42m程度、低地との比高差は約20mを測る。第2章第1節で述べたように多部田貝塚と貝殻塚遺跡との遺跡範囲は便宜的な区分けとなっている為、地形上の大きな変化はなく、本来的には同一遺跡と見なされてもよい。今回の調査では、西側を深い谷に、東側を比高差10mに満たない浅い谷に挟まれた南北約270mの縦長の地点を対象とした。

調査履歴

貝殻塚遺跡の発掘調査については、平成4・6年度の2回実施されている。平成4年度地区については、西側谷の傾斜地にムグリ遺跡があることから関連する遺構・遺物の存在が想定されたが、結果的には縄文時代の陥穴を主体とする土壇群のみの検出で、平成6年度地区では多部田貝塚と縄文時代・古代の2時期に共通する遺構群が検出されている。各遺構については下の遺構一覧表を参照されたい。

検出遺構・遺物の概要

平成4年度と平成6年度の2回の発掘調査では合計21,000m²を対象とし、縄文時代中期末の住居跡2軒、土壇27基、古墳～平安時代の住居跡8軒、時期不明の土壇7基を検出した。縄文時代の住居跡は、多部田貝塚と比べ2軒と少ない。それも多部田貝塚寄りの調査区南部分での検出で、それより北側の南北に200mあまりの調査区には住居跡は全く検出されなかった。これにより貝殻塚遺跡は多部田貝塚を中心とする縄文集落と、うならず遺跡を中心とする縄文集落との境界に当たり、積極的に居住の空間として利用されていなかった状況が看取される。

古代の住居跡については、古墳時代後期7軒、平安時代住居跡1軒の内訳となる。同時期と考えられる古墳時代後期の住居跡は多部田貝塚においても7軒検出されており、合わせて14軒となる。住居跡の配置上の特徴としては、古墳時代後期の一般的な集落の傾向と同じく、台地中央でなく、谷寄りのやや斜面地に構築されている。竈位置はやや変異のあるものの、住居プランの矩形の軸線には強い共通性が認められる。平成4年度地区には住居跡は検出されなかったことから、10号住をもって集落の北限とみなすことが出来、南限は多部田貝塚本体にまで展開しているものと考えられる。なお西側斜面地への展開については、ムグリ遺跡の谷底際の斜面地にも古墳時代後期と思われる住居跡が1軒検出されていることから、今回の調査区の範囲を超えて、西側斜面地に同じ集落を構成する住居跡の存在が想定される。貝殻塚遺跡の平安時代の住居跡1軒は、時期的にはムグリ遺跡検出の住居跡(A-001)並びにムグリ遺跡で想定される製鉄関連遺構群との係わりが問題となってくるが、2つの住居間は直線距離にして180m離れており、関連については不明な点が多い。

標準土層は1層暗褐色土(表土)、2層(暗褐色土)、3層褐色土(ソフトローム)である。

第14表 遺構一覧表

住居跡

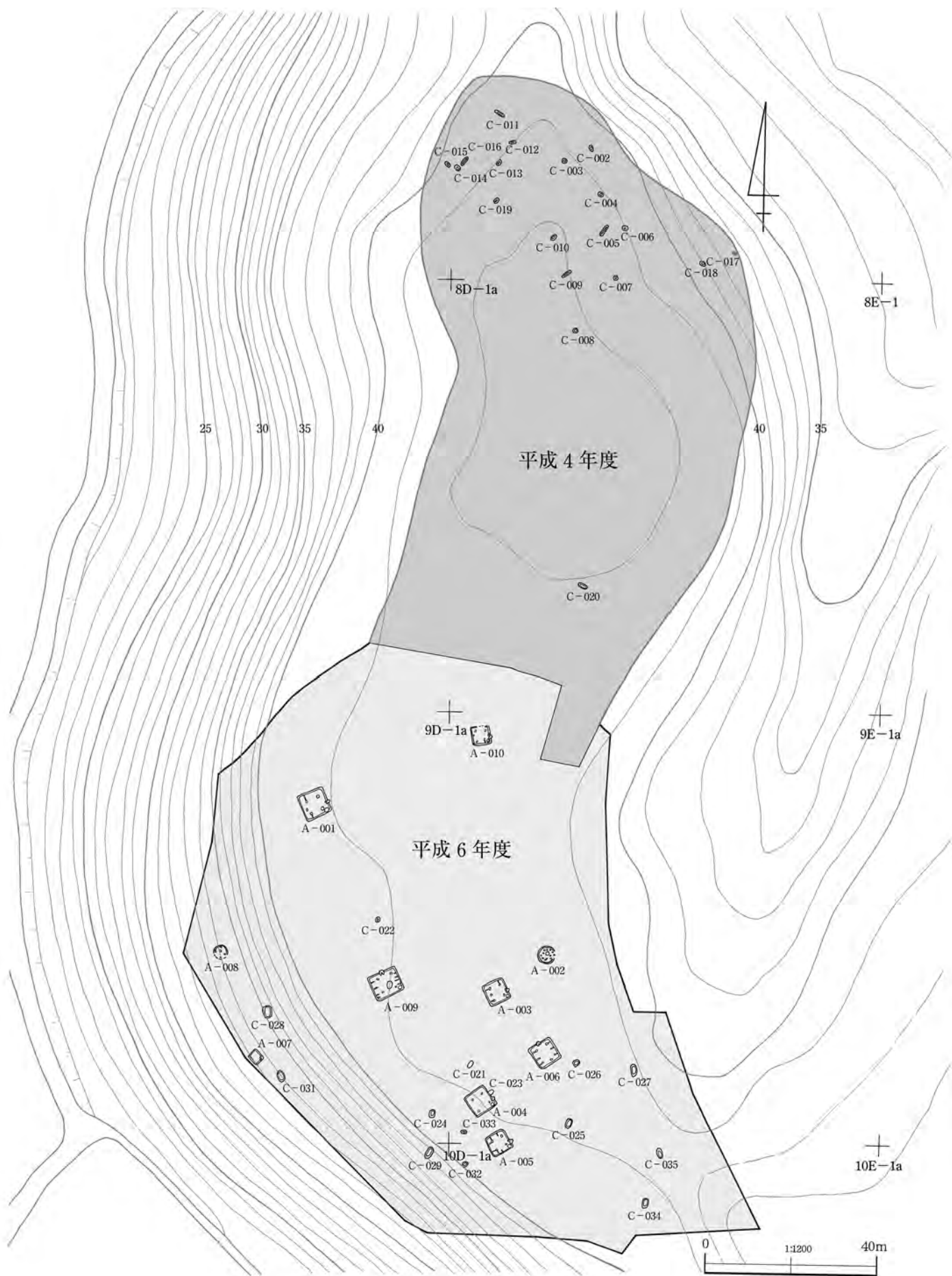
遺構名	時期	調査年度	遺構図版	遺物図版
A-001	古代	平成6年度	49	57
A-002	縄文	平成6年度	46	48
A-003	古代	平成6年度	50	57・58
A-004	古代	平成6年度	51	58
A-005	古代	平成6年度	52	58・59
A-006	古代	平成6年度	53・54	59
A-007	古代	平成6年度	54	59

遺構名	時期	調査年度	遺構図版	遺物図版
A-008	縄文	平成6年度	47	48
A-009	古代	平成6年度	55・56	59・60
A-010	古代	平成6年度	56	60

土壇

遺構名	調査年度	遺構図版	遺物図版
C-002～020	平成4年度	61・62	64
C-021～035	平成6年度	62・63	

C-001は欠番



第45図 遺構配置図

第2節 縄文時代住居跡

貝殻塚遺跡から検出された縄文時代の住居跡は2軒である。

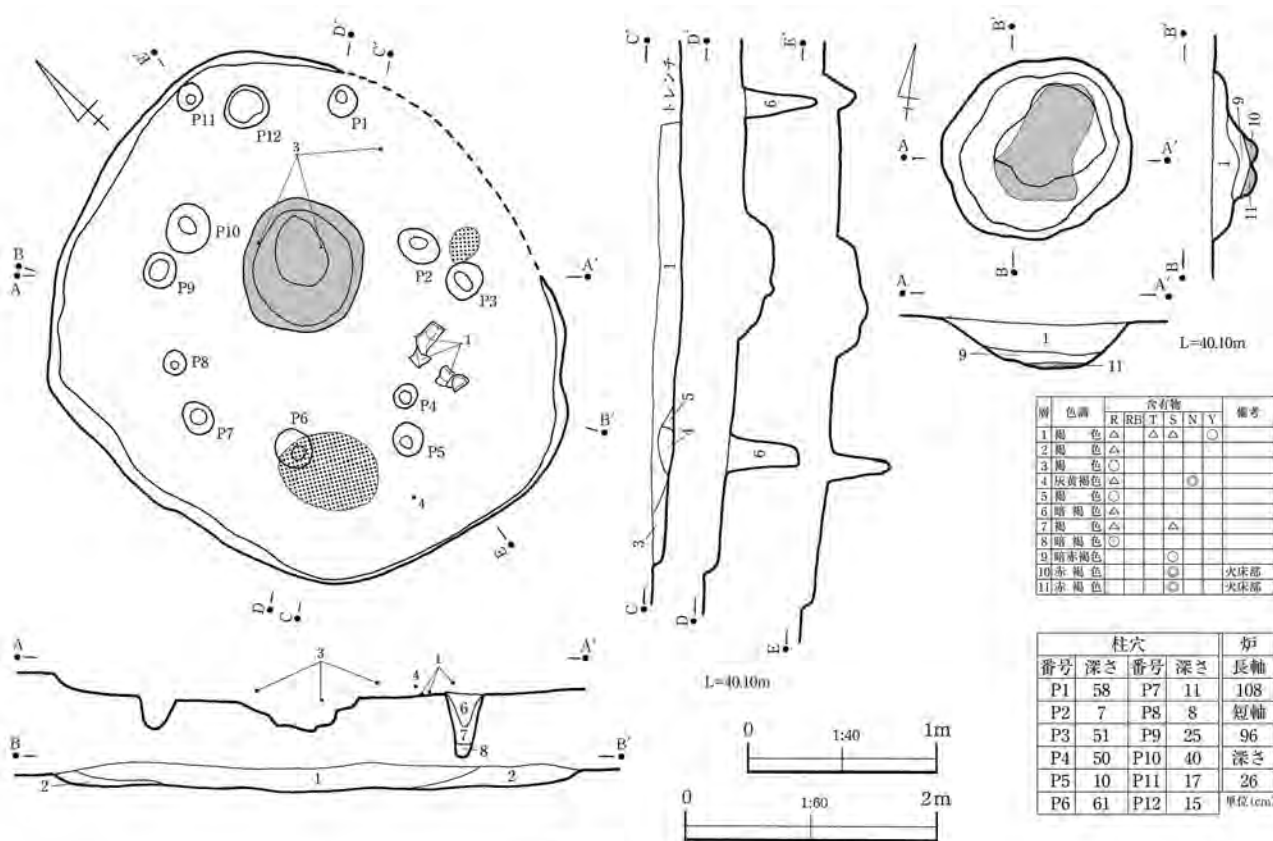
A-002は台地中央の平坦面に位置する。直径約4mの円形を呈し、中央部に炉を有する。円状の磨消縄文を有する加曾利EⅢ式土器(1)と無文の土器(3)が出土しており、出土土器の総重量は3,000gを測る。石器は磨石1点(4)と剥片6点(チャート2点・黒曜石2点)、石核(チャート)1点が出土している。図化した磨石は、安山岩製で重量538.0g、長さ20.1cm、幅8.0cm、厚さ3.9cmを測る。住居跡の時期は加曾利EⅢ式期と思われる。

A-008は、調査区西側の斜面部に位置し、直径約4mの円形を呈し中央部に炉を有する。南側の壁は失なわれている。突起を持つ無文の土器(1)及び条線を施文する土器(2)と全面に縄文を施文する土器(3)が出土している。出土土器の総重量は253gと極端に少ない。2・3の土器は堀之内1式土器であり、住居跡の時期も堀之内1式期と思われる。

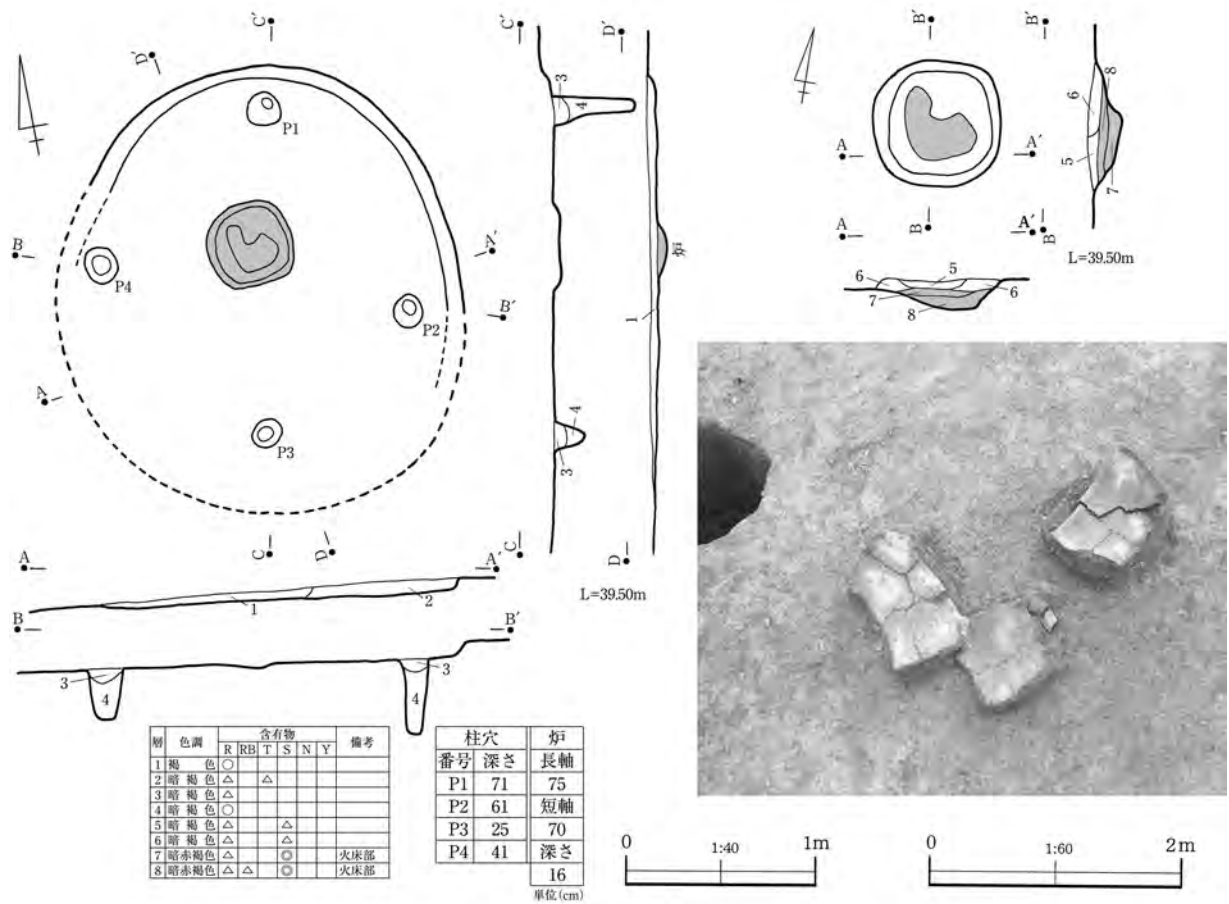
貝殻塚遺跡は東西に谷が入り込む馬の背状の台地上に形成されており、縄文時代の集落が展開するには適切な立地とはいえない。台地基部に存在する多部田貝塚検出住居跡と本遺跡の住居跡の時期は並行しており、その関連性や、遺跡の北側に展開する陥穴群の性格等今後の課題は多い。

第15表 縄文住居跡計測表

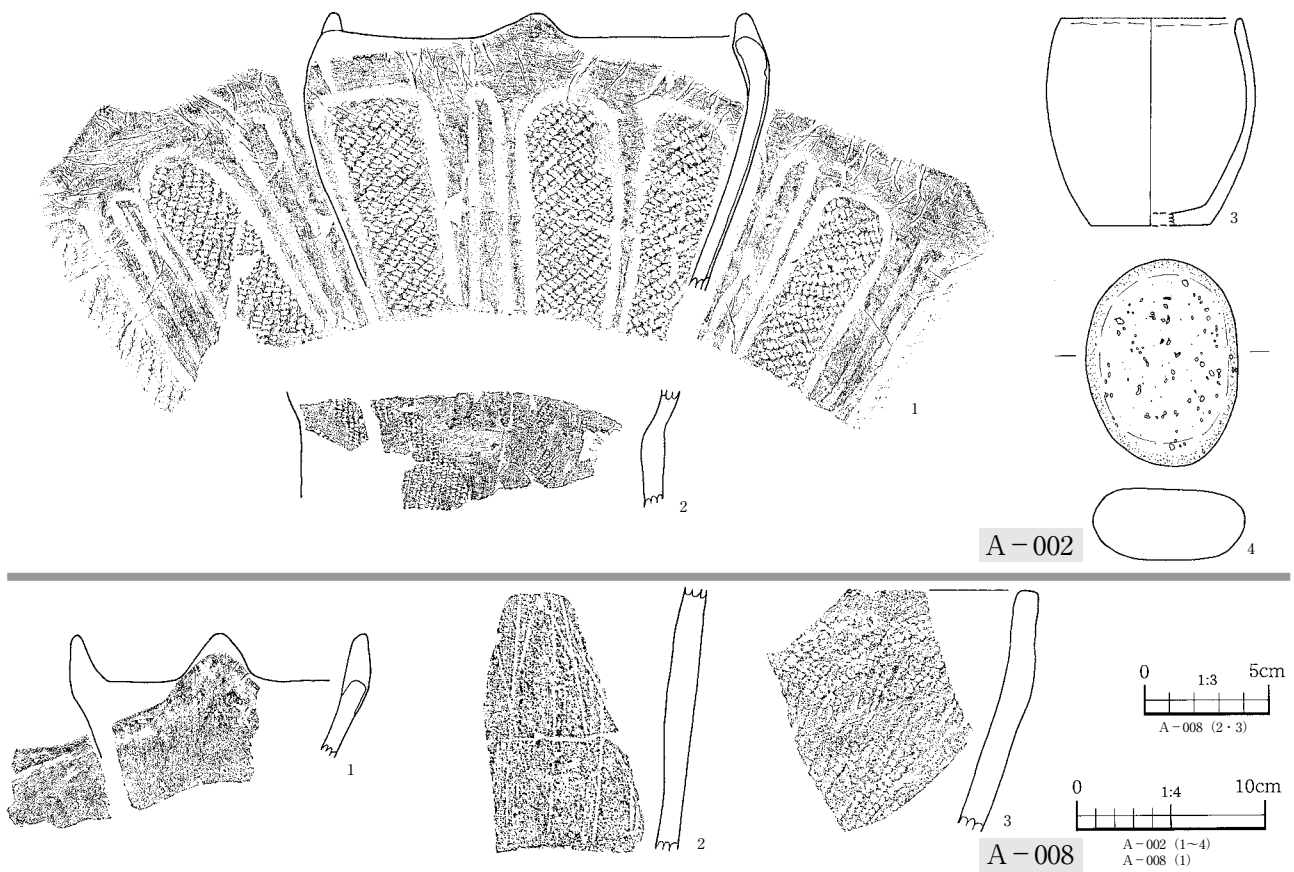
住居番号	位置	時期	主軸方位	平面形態	規模(m)		壁高(cm)	炉	柱穴
					長軸×短軸	最大～最小			
A-002	9D-26c	加曾利Ⅲ	N-10°-E	円形	4.25 × (3.74)	10~0	有	12	
A-008	9C-46d	堀之内1	N-16°-E	円形	(3.50) × (3.25)	14~3	有	4	



第46図 A-002



第47図 A-008



第48図 A-002・008 出土遺物

第3節 古代住居跡

古墳時代の住居跡は、いずれも遺跡南側多部田貝塚寄りに位置し、舌状の台地中央部に配置されている。多部田貝塚の同時期の住居同様、主軸を北東・北西方向に揃えている。平安時代の住居跡（A-007）1軒は、調査区西側の谷際、斜面地に位置する。

古墳時代の住居跡7軒中5軒の住居跡から炭化材・焼土を多量に検出しており、火災住居であると考えられる。また建替は5軒に認められ、床面下に旧住居の痕跡と思われるピット・周溝・間仕切り溝・竈を確認している。いずれの住居跡も貯蔵穴を装備し（A-006は旧貯蔵穴のみ）、竈が構築されている。竈は北東壁に構築されるもの5軒・北西壁に構築されるもの2軒と分かれるが、住居自体の主軸方位は7軒とも整っており、計画的な配置が窺える。また唯一時期の異なるA-007は住居の東コーナー部に竈が構築されている。

出土遺物は全体に多い傾向にあり、A-001に関しては明確な火災住居とは言い切れないものの出土量は最も多い。A-009から出土した須恵器横瓶（12）は、直線距離にして約170m離れた多部田貝塚のA-018の覆土中の遺物と接合しており、2軒の住居の関係が注目される。また同住居からは桃と推定される種子1点（写真図版16）が出土している。支脚はA-003・010以外にはすべて認められる。なおA-005では図化していないが、支脚の破片個体が出土している。鉄製品はA-009から出土した刀子の1点のみである。石製品としては図化している磨石兼敲石が、A-005・006からそれぞれ1点ずつ検出されているのみである。

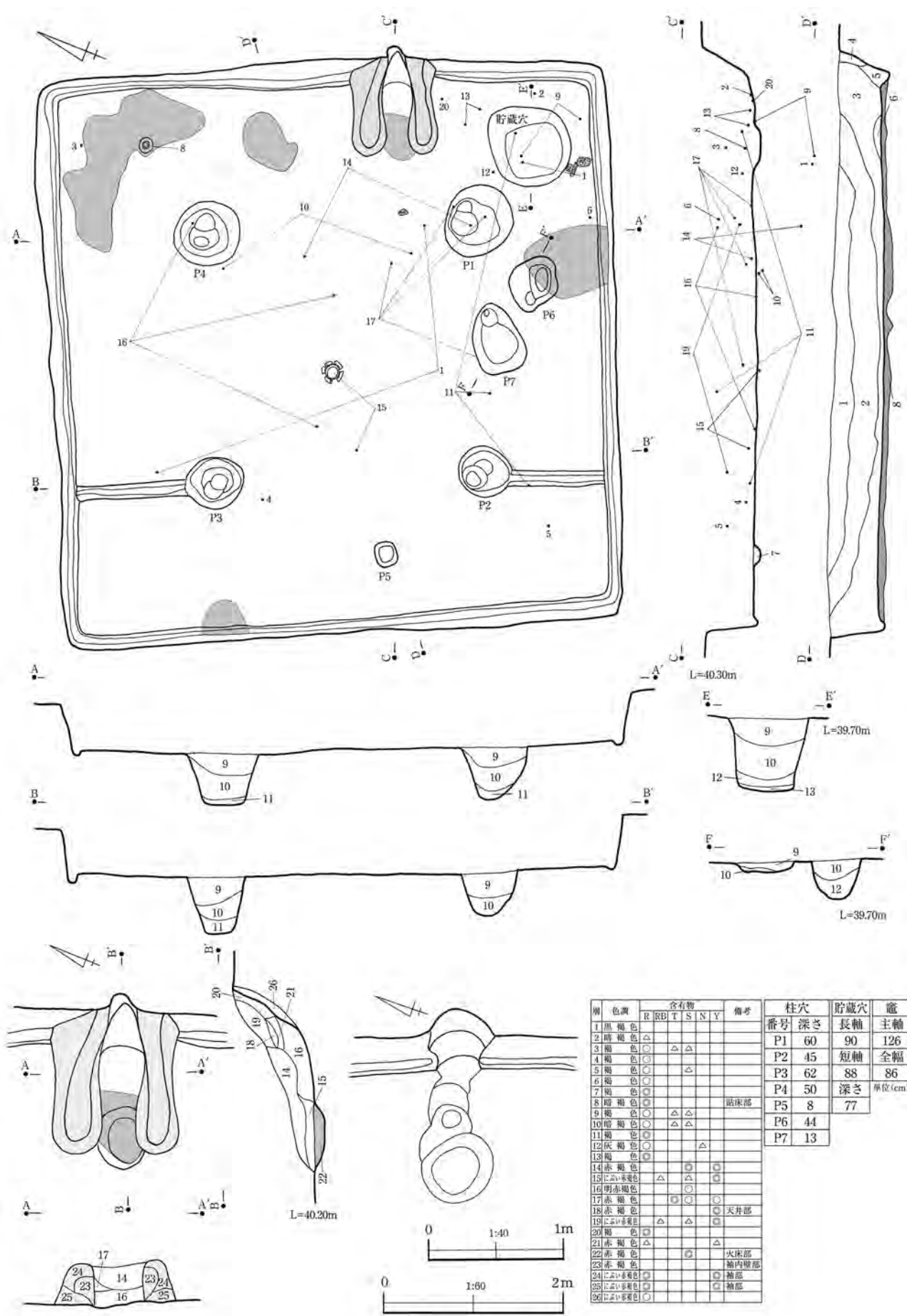
第16表 古代住居跡計測表

住居番号	位置	主軸方位	規模(m)		貯蔵穴	旧貯蔵穴	柱穴	旧柱穴	出入口	旧出入口	間仕切り溝	旧間仕切り溝	周溝	火災	建替	備考
			主軸長×横軸長	最大～最小												
A-001	9C-63b	N-70°-E	6.35×6.25	58~48	有	無	4	2	1	無	2	無	全周	無?	無	
A-003	9D-17c	N-66°-E	5.24×5.00	58~52	有	無	4	1	1	無	3	6	全周	有	有	旧竈あり
A-004	9D-10b	N-57°-E	5.50×5.65	48~35	有	無	4	2	1	無	無	3	全周	有	有	
A-005	10D-11a	N-62°-E	5.18×5.14	52~47	有	無	4	1	1	無	3	3	3/4周	無	有	
A-006	9D-28c	N-32°-W	5.65×5.58	55~40	無	有	4	5	1	無	6	3	全周	有	有	旧竈あり
A-007	9C-58d	N-50°-E	2.92×2.68	90~41	無	無	無	無	無	無	無	無	全周	無	無	
A-009	9C-87b	N-24°-W	6.03×6.95	55~42	有	有	4	1	1	無	10	2	全周	有	有	旧竈あり
A-010	9D-1d	N-82°-E	4.30×4.18	46~35	有	無	4	無	1	無	2	3	全周	有	無	

第17表 古代住居跡出土遺物計量表

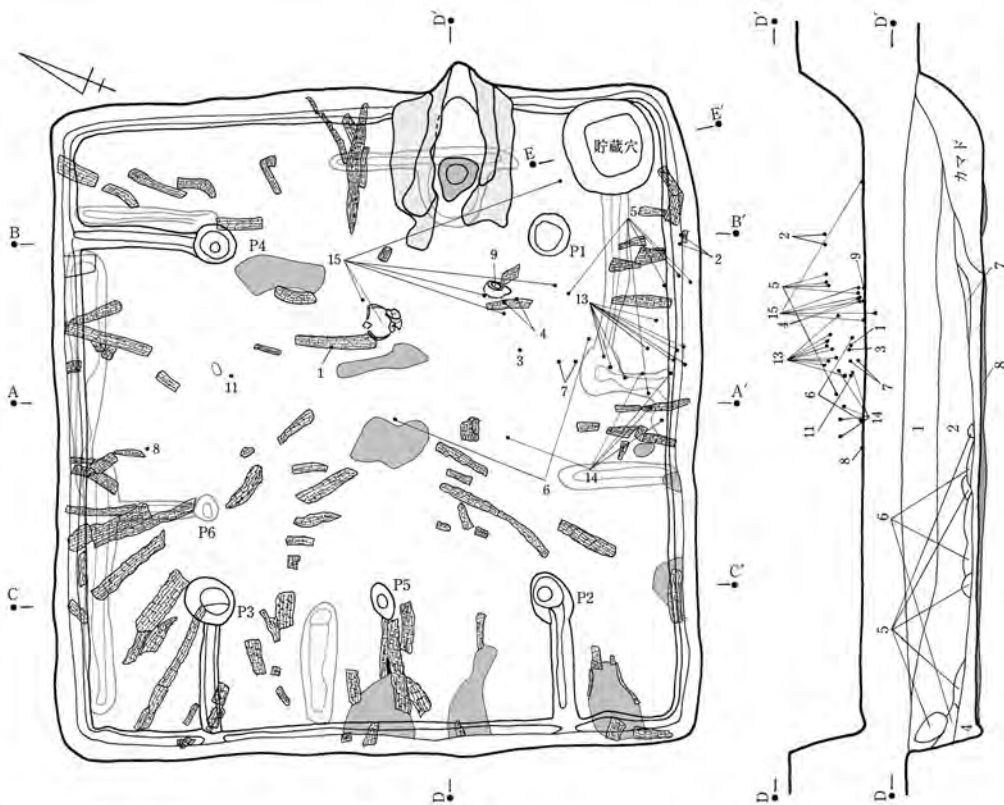
単位(g)

住居番号	製品別比率						土師器器種別比率						
	土器	土製品	石製品	鉄製品	その他	総計	坏	高坏	壺	甕	甌	小型土器	総計
A-001	18028	1831			86	19945	2469		437	14727	350	6	17989
	90.4%	9.2%			0.4%	100%	13.7%		2.4%	81.9%	1.9%	0.0%	100%
A-003	11536	9.4			140	11685.4	1397	1168		8963		8	11536
	98.7%	0.1%			1.2%	100%	12.1%	10.1%		77.7%		0.1%	100%
A-004	10710	1653.7			616	12979.7	483	26	214	9410	517	60	10710
	82.5%	12.7%			4.7%	100%	4.5%	0.2%	2.0%	87.9%	4.8%	0.6%	100%
A-005	7151	79.6	266		50	7546.6	680			6374		97	7151
	94.8%	1.1%	3.5%		0.7%	100%	9.5%			89.1%		1.4%	100%
A-006	7663	1734.3	328.5		73	9798.8	1121	223		6315			7659
	78.2%	17.7%	3.4%		0.7%	100%	14.6%	2.9%		82.5%			100%
A-007	390					390	183			203			386
	100.0%					100%	47.4%			52.6%			100%
A-009	11332.4	1588.6		9.7	243	13173.7	2373	11		7893	475	2.4	10754.4
	86.0%	12.1%		0.1%	1.8%	100%	22.1%	0.1%		73.4%	4.4%	0.0%	100%
A-010	184	478				662	184						184
	27.8%	72.2%				100%	100.0%						100%



順	色調	含有物						備考	柱穴 番号	貯蔵穴 深さ	貯蔵穴 長軸	貯蔵穴 主軸
		R	RB	T	S	N	Y					
1	黒褐色											
2	暗褐色	△							P1	60	90	126
3	暗褐色	○		△	△				P2	45	短軸	全幅
4	暗褐色	○			△				P3	62	88	86
5	暗褐色	○			△				P4	50	深さ	86
6	暗褐色	○							P5	8	77	
7	暗褐色	○							P6	44		
8	暗褐色	○						貼床部	P7	13		
9	暗褐色	○			△	△						
10	暗褐色	○		△	△							
11	暗褐色	○										
12	灰褐色	○				△						
13	暗褐色	○										
14	赤褐色						○					
15	正赤褐色	△			△	△						
16	明赤褐色						○					
17	赤褐色						○					
18	赤褐色						○					
19	正赤褐色	△			△	△						
20	暗褐色	○										
21	赤褐色						△					
22	赤褐色						○					
23	赤褐色						○					
24	正赤褐色	△					○					
25	正赤褐色	○					○					
26	正赤褐色	○					○					

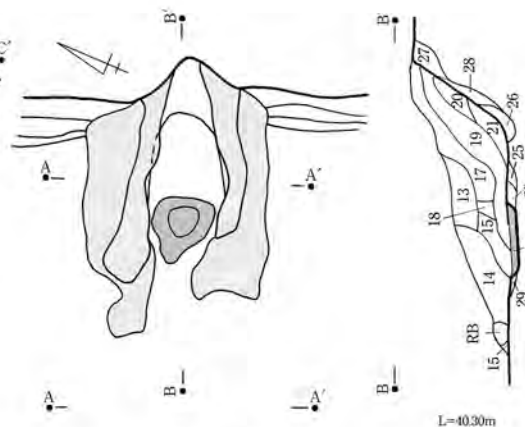
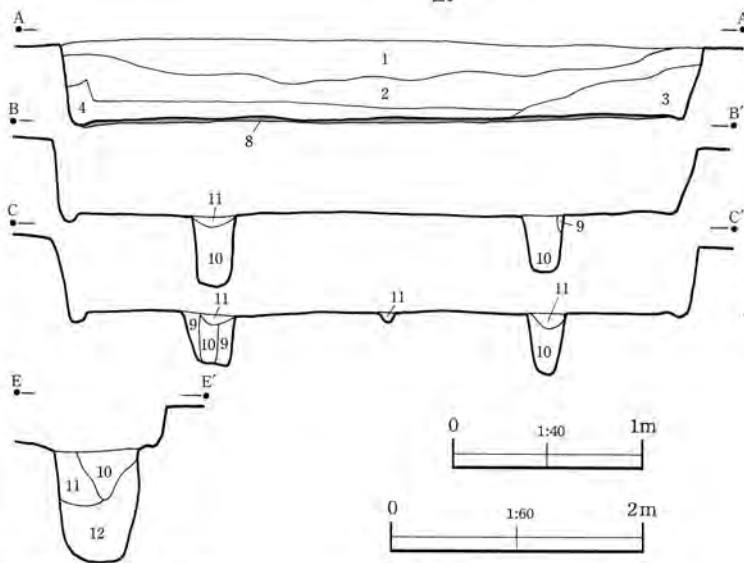
第49図 A-001



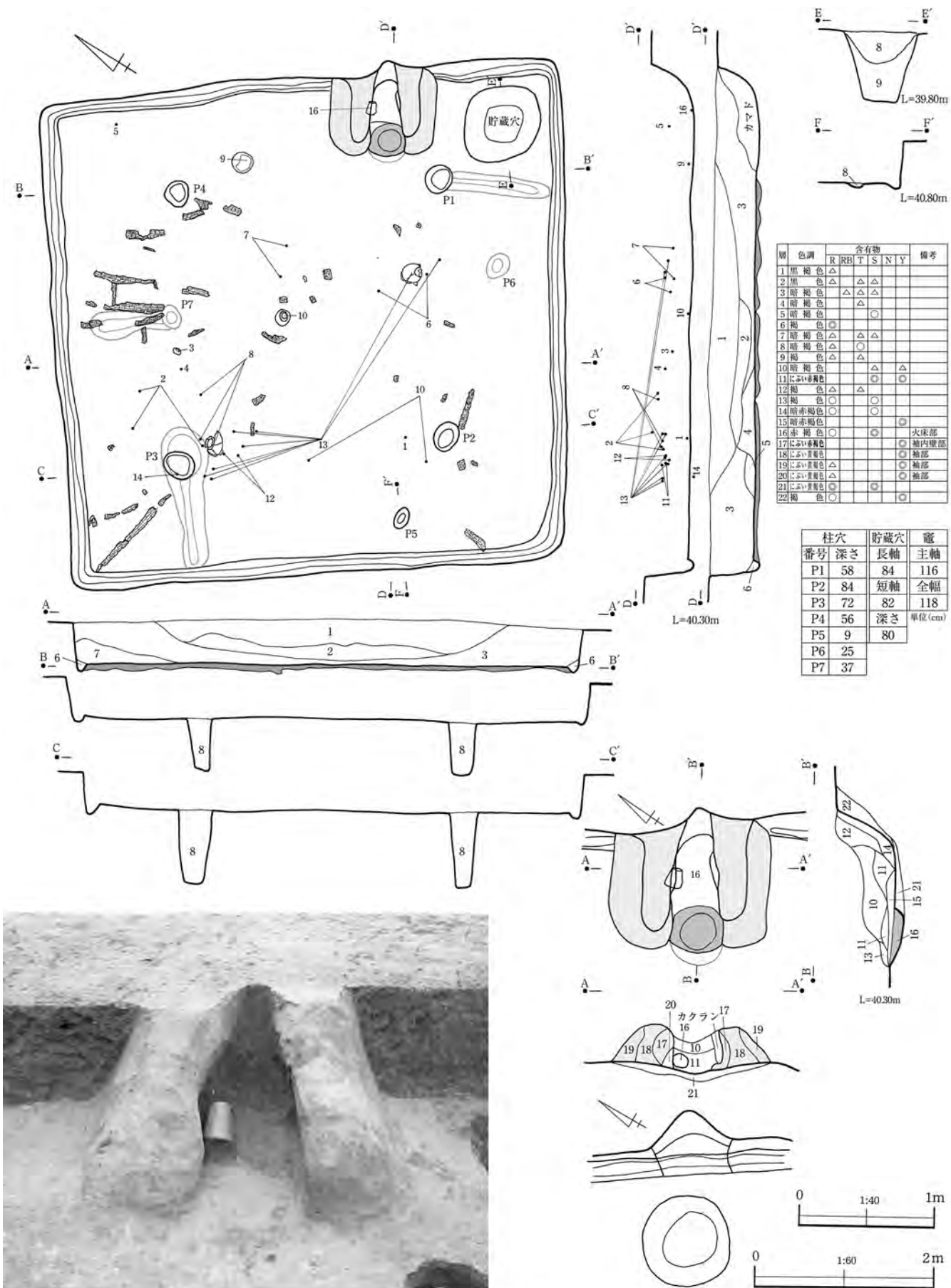
順	色調	含有物					備考	
		R	RB	T	S	N		Y
1	黒褐色	△	△					
2	暗褐色	△	△	△				
3	暗褐色	△	△	△				
4	暗褐色	△	△	△				
5	暗褐色	△	△	△				
6	暗褐色	△	△	△				
7	暗褐色	△	△	△				
8	暗褐色	△	△	△				貼床部
9	暗褐色	△	△	△				
10	暗褐色	△	△	△				
11	暗褐色	△	△	△				
12	褐色	△	△	△				
13	褐色	△	△	△				
14	暗褐色	△	△	△				
15	にじみ赤褐色	△	△	△				
16	赤褐色	△	△	△				火床部
17	褐色	△	△	△				
18	赤褐色	△	△	△				天井部
19	暗褐色	△	△	△				
20	暗褐色	△	△	△				
21	暗褐色	△	△	△				軸内横部
22	明赤褐色	△	△	△				横部
23	にじみ赤褐色	△	△	△				横部
24	暗褐色	△	△	△				横部
25	暗褐色	△	△	△				
26	暗褐色	△	△	△				
27	褐色	△	△	△				
28	暗褐色	△	△	△				
29	暗褐色	△	△	△				

柱穴	貯蔵穴	竈
番号	深さ	長軸
P1	48	82
P2	50	短軸
P3	44	66
P4	57	深さ
P5	10	101
P6	17	

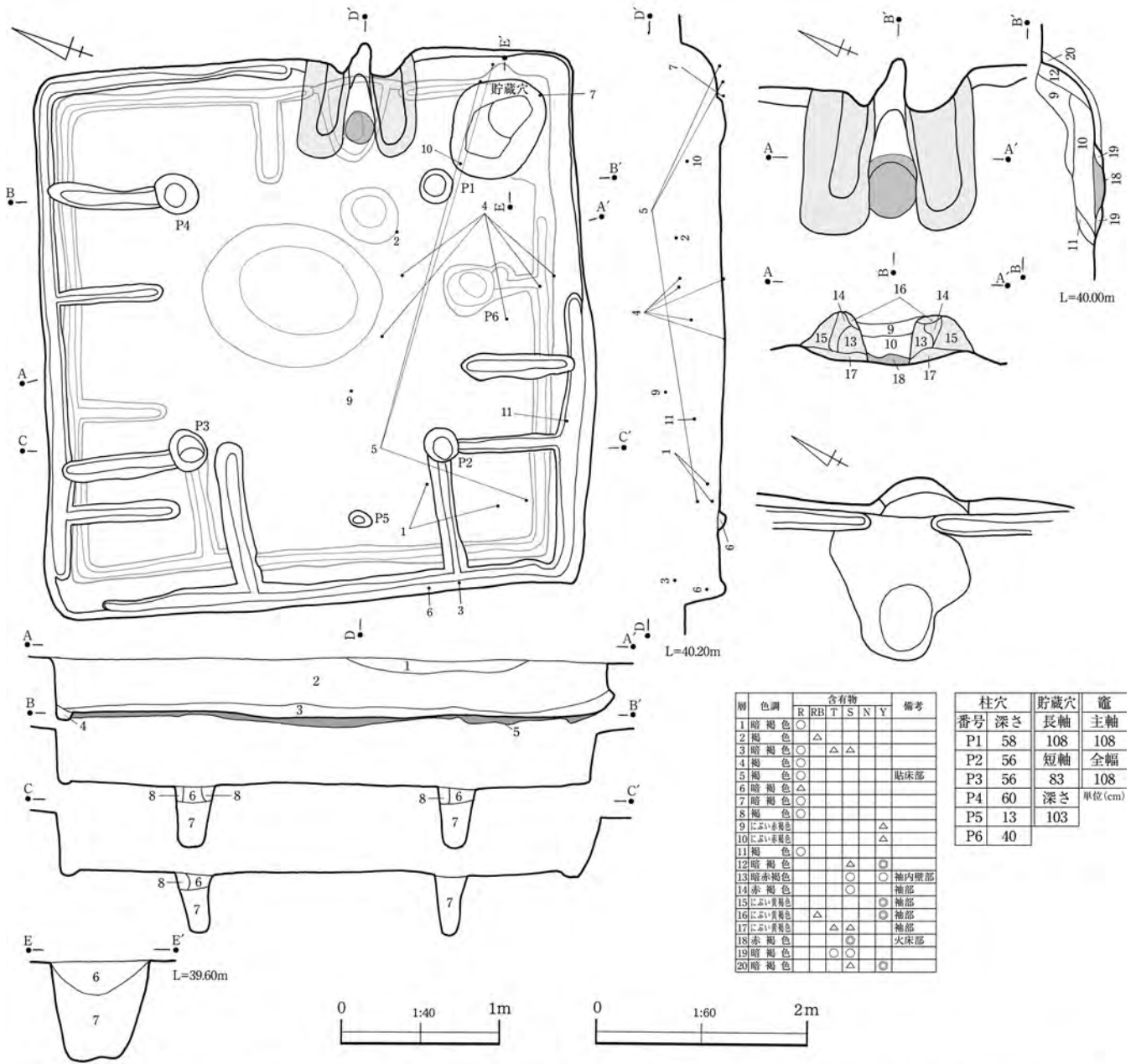
単位(cm)



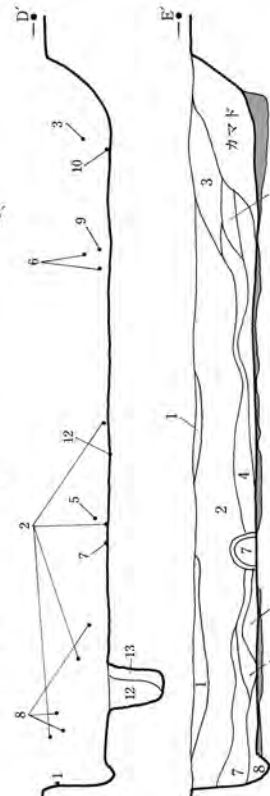
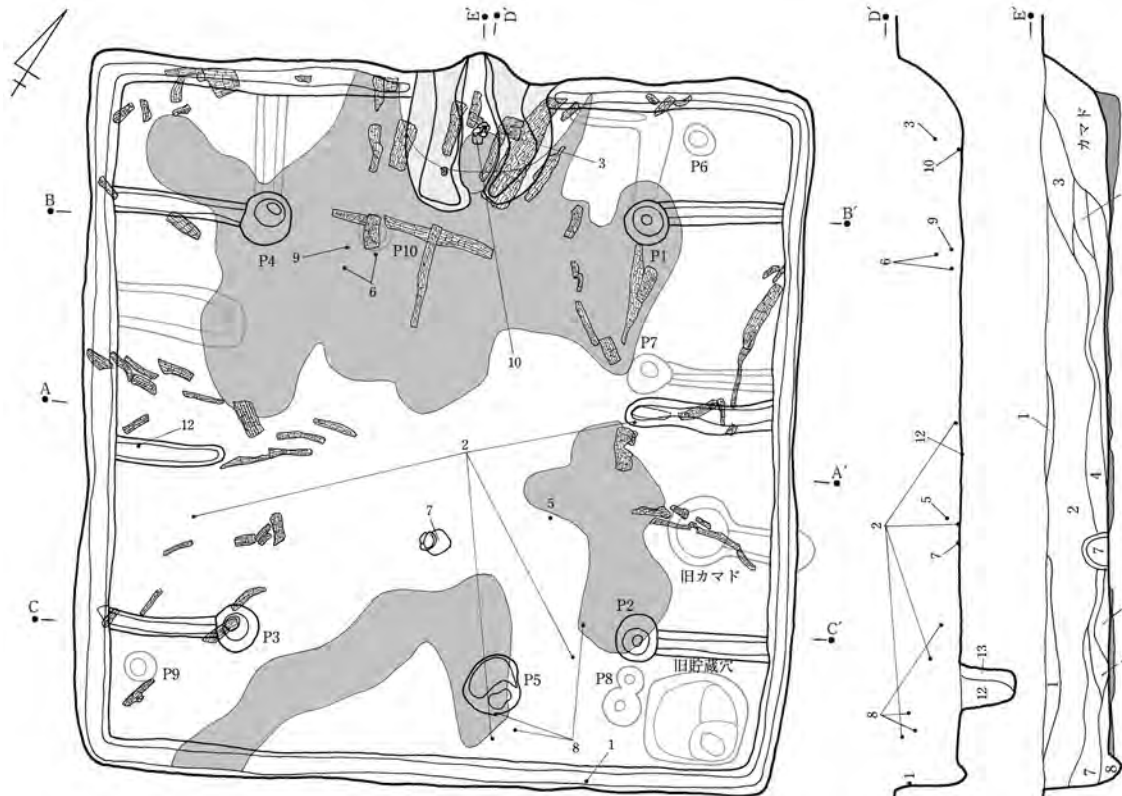
第50図 A-003



第51図 A-004

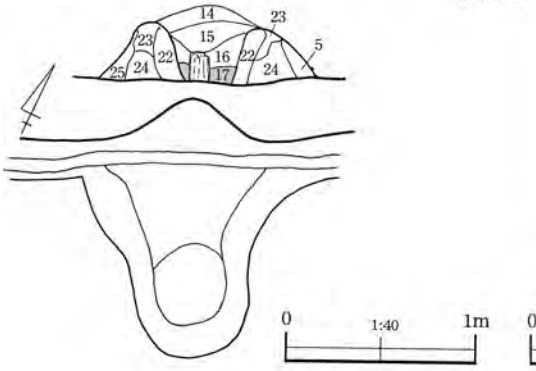
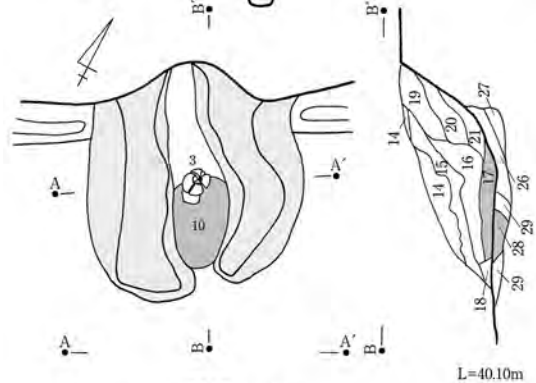
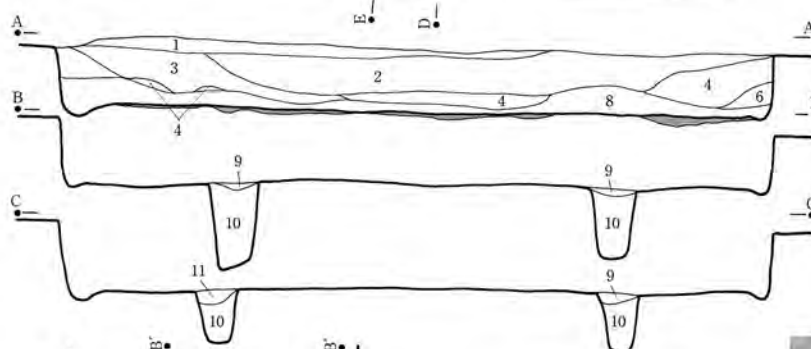


第52図 A-005



番号	柱穴 深さ	旧貯蔵穴 長軸	旧竈 主軸
P1	58	78	121
P2	45	短軸	全幅
P3	45	75	58
P4	70	深さ	竈
P5	61	84	主軸
P6	11		120
P7	36		全幅
P8	19		116
P9	26		
P10	31		

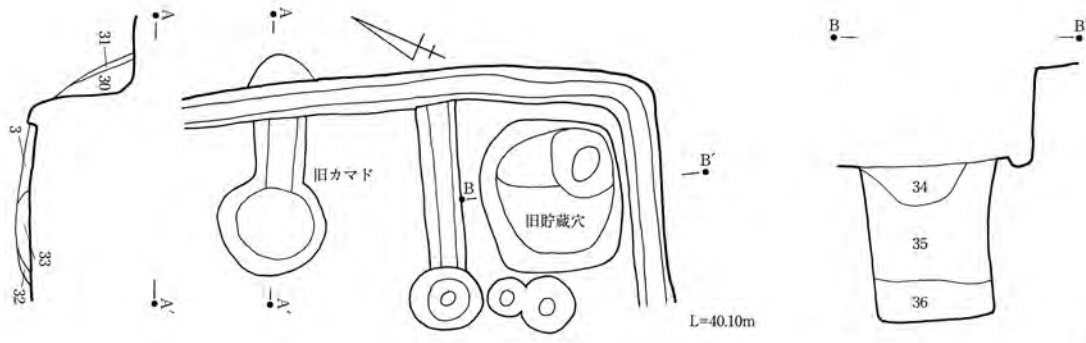
単位 (cm)



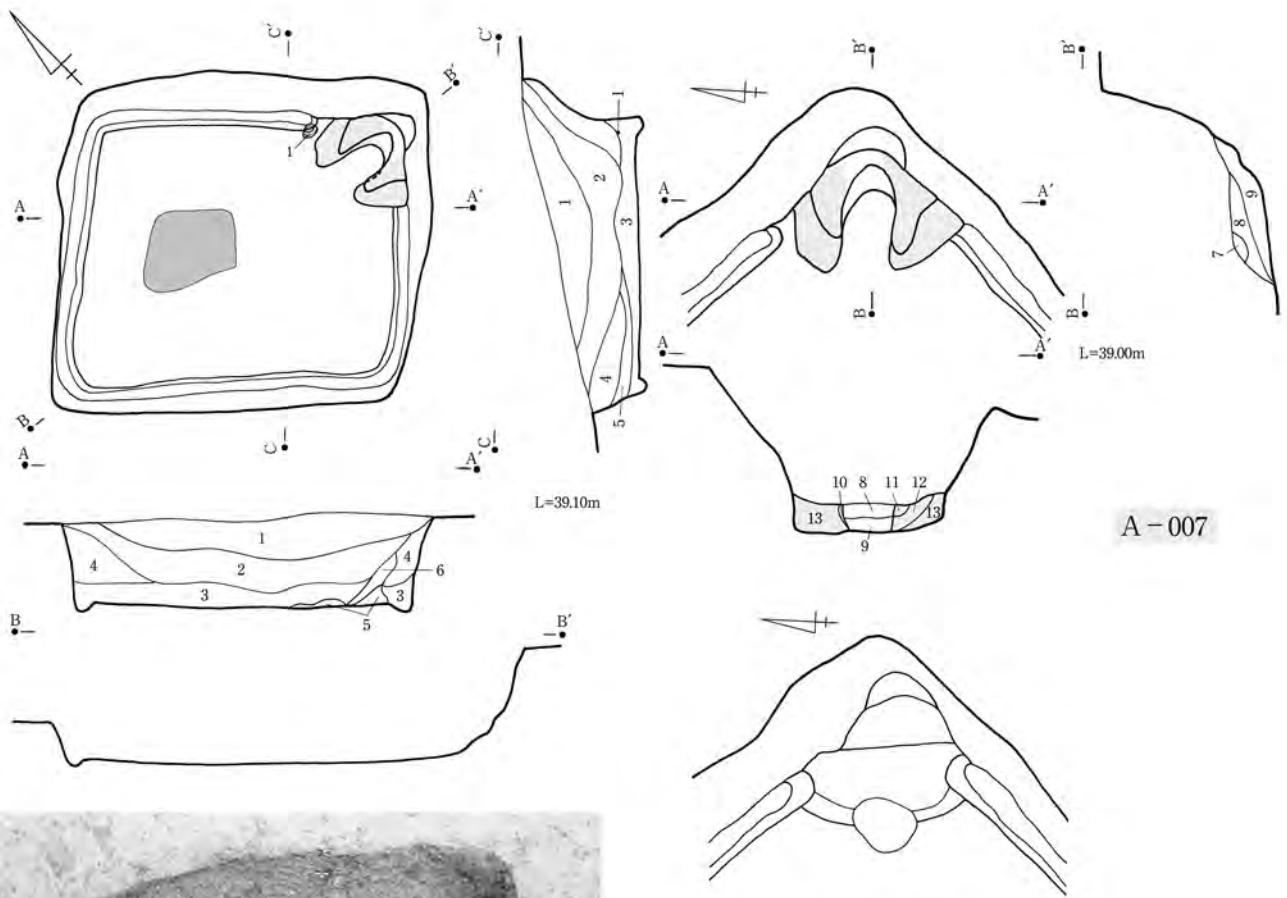
層	色調	含有物						備考
		R	RB	T	S	N	Y	
1	暗褐色	△						
2	暗褐色	○	○					
3	暗褐色	○	○	△				
4	暗褐色	○	○	○	△			
5	暗褐色	○	○	○				
6	暗褐色	○	○	○				
7	褐色	○						
8	褐色	○						
9	暗褐色	△						
10	暗褐色	△		△				
11	褐色	○						
12	褐色	○						
13	褐色	○					△	
14	褐色	○						
15	黒褐色	△						
16	黒褐色	○	○					
17	赤褐色	△						
18	赤褐色	○	○	○	○	○	○	火床部
19	赤褐色	○	○	○	○	○	○	
20	赤褐色	○	○	○	○	○	○	
21	暗褐色	○	○	○	○	○	○	袖部
22	赤褐色	○	○	○	○	○	○	袖部
23	赤褐色	○	○	○	○	○	○	袖部
24	赤褐色	○	○	○	○	○	○	袖部
25	赤褐色	○	○	○	○	○	○	
26	黄褐色	○	○	○	○	○	○	
27	黄褐色	○	○	○	○	○	○	
28	赤褐色	○	○	○	○	○	○	
29	暗褐色	○	○	○	○	○	○	
30	暗褐色	○	○	○	○	○	○	
31	褐色	○	○	○	○	○	○	
32	暗褐色	○	○	○	○	○	○	
33	褐色	○	○	○	○	○	○	
34	褐色	○	○	○	○	○	○	
35	暗褐色	○	○	○	○	○	○	
36	褐色	○	○	○	○	○	○	



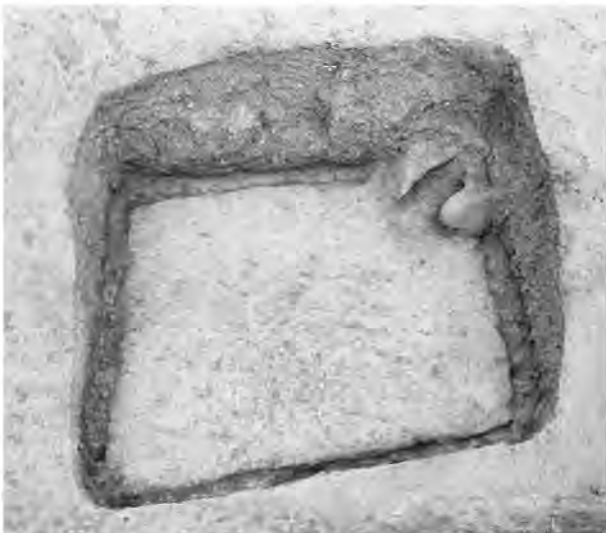
第53図 A-006①



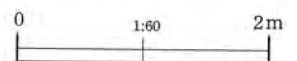
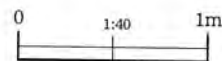
A-006 ②



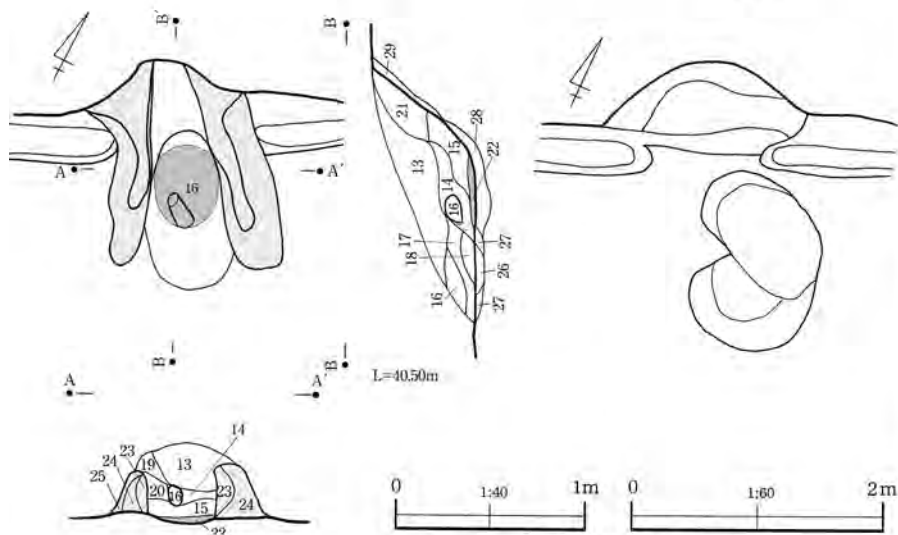
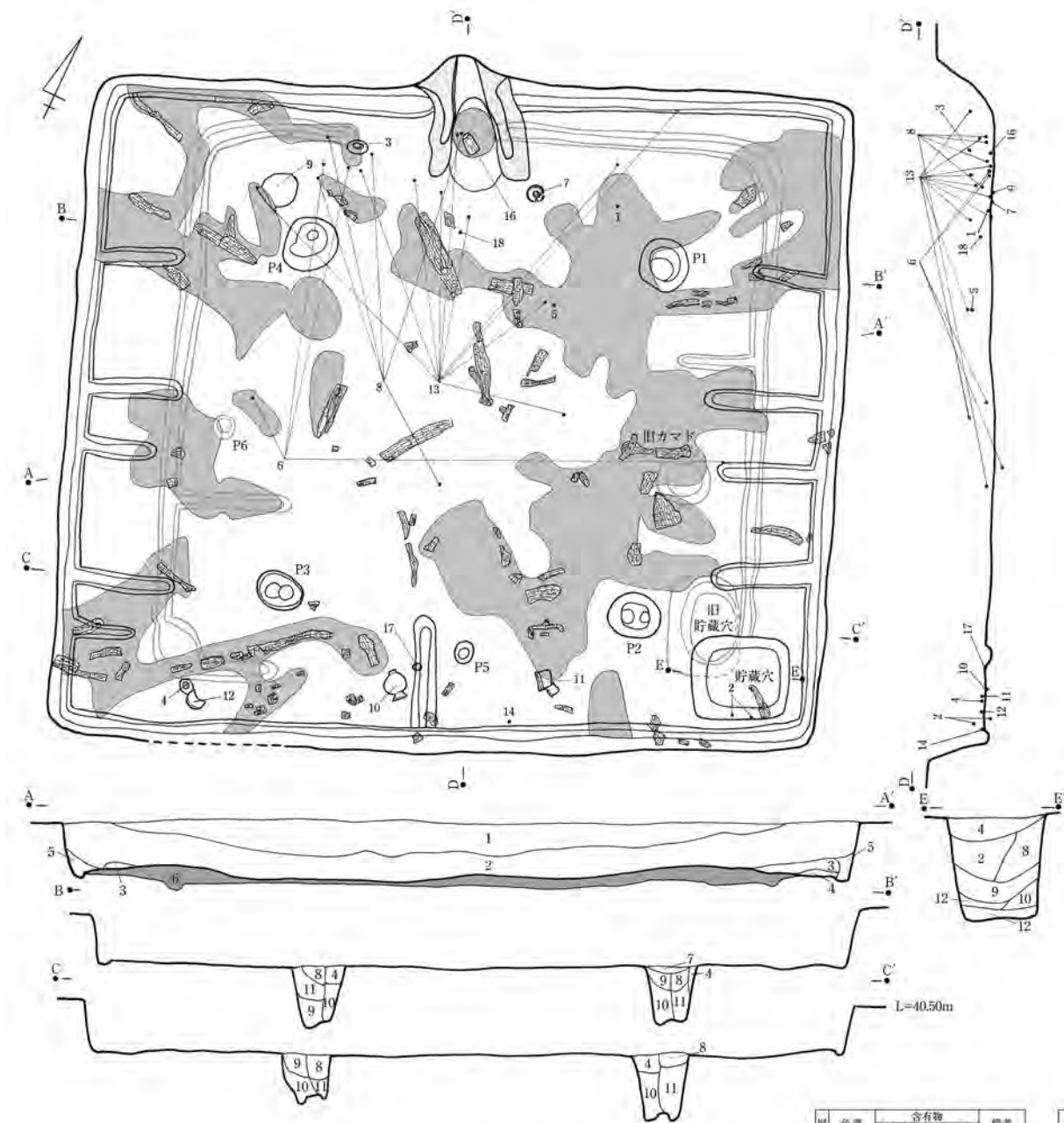
A-007



別	色調	含有物					備考	竈
		R	RB	T	S	N		
1	暗褐色	△						主軸
2	暗褐色	△						96
3	暗褐色			△				全幅
4	褐色	○						91
5	暗褐色			○	○			単位(cm)
6	褐色			△	△			
7	赤褐色			○	○			
8	褐色	○						
9	褐色	○						
10	不規則色			○	○			軸内増部
11	暗赤褐色			○	○			軸部
12	暗赤褐色			○	○			軸部
13	褐色	△		△	○			軸部



第54図 A-006②・007

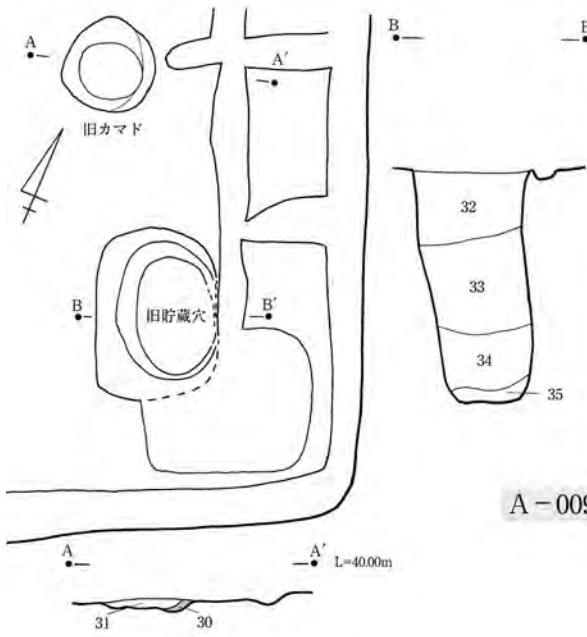


明	色調	含有物					備考
		R	RD	T	S	N	
1	黒褐色	△	△	△	△	△	
2	暗褐色	△	△	△	△	△	
3	黒褐色	△	△	△	△	△	
4	褐色	○	○	○	○	○	
5	暗褐色	○	○	△	△	△	
6	褐色	○	○	○	○	○	跡床部
7	に高い赤褐色	△	△	△	△	△	
8	暗褐色	○	○	△	△	△	
9	暗褐色	○	○	○	○	○	
10	褐色	○	○	○	○	○	
11	暗褐色	○	○	○	○	○	
12	暗褐色	○	○	○	○	○	
13	に高い赤褐色	△	△	△	△	△	
14	暗褐色	○	○	○	○	○	灰
15	暗褐色	△	△	△	△	△	
16	赤褐色	△	△	△	△	△	
17	暗褐色	△	△	△	△	△	
18	赤褐色	○	○	○	○	○	天井部
19	に高い赤褐色	○	○	○	○	○	天井部
20	に高い赤褐色	△	△	△	△	△	天井部
21	に高い赤褐色	○	○	○	○	○	
22	暗赤褐色	○	○	○	○	○	火床部
23	暗褐色	○	○	○	○	○	袖内壁部
24	暗褐色	○	○	○	○	○	袖部
25	赤褐色	○	○	○	○	○	袖部
26	に高い赤褐色	○	○	○	○	○	
27	褐色	○	○	○	○	○	
28	暗褐色	○	○	○	○	○	
29	褐色	△	△	△	△	△	
30	暗赤褐色	○	○	○	○	○	火床部
31	暗褐色	○	○	○	○	○	
32	暗褐色	△	△	△	△	△	
33	暗褐色	△	△	△	△	△	
34	暗褐色	△	△	△	△	△	
35	暗褐色	△	△	△	△	△	

柱穴	
番号	深さ
P1	62
P2	54
P3	41
P4	53
P5	5
P6	5
貯蔵穴	旧貯蔵穴
長軸	長軸
88	92
短軸	短軸
65	64
深さ	深さ
91	122
竈	
主軸	
120	
全幅	
88	

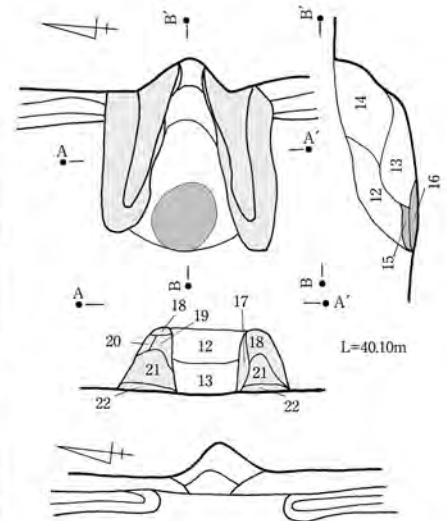
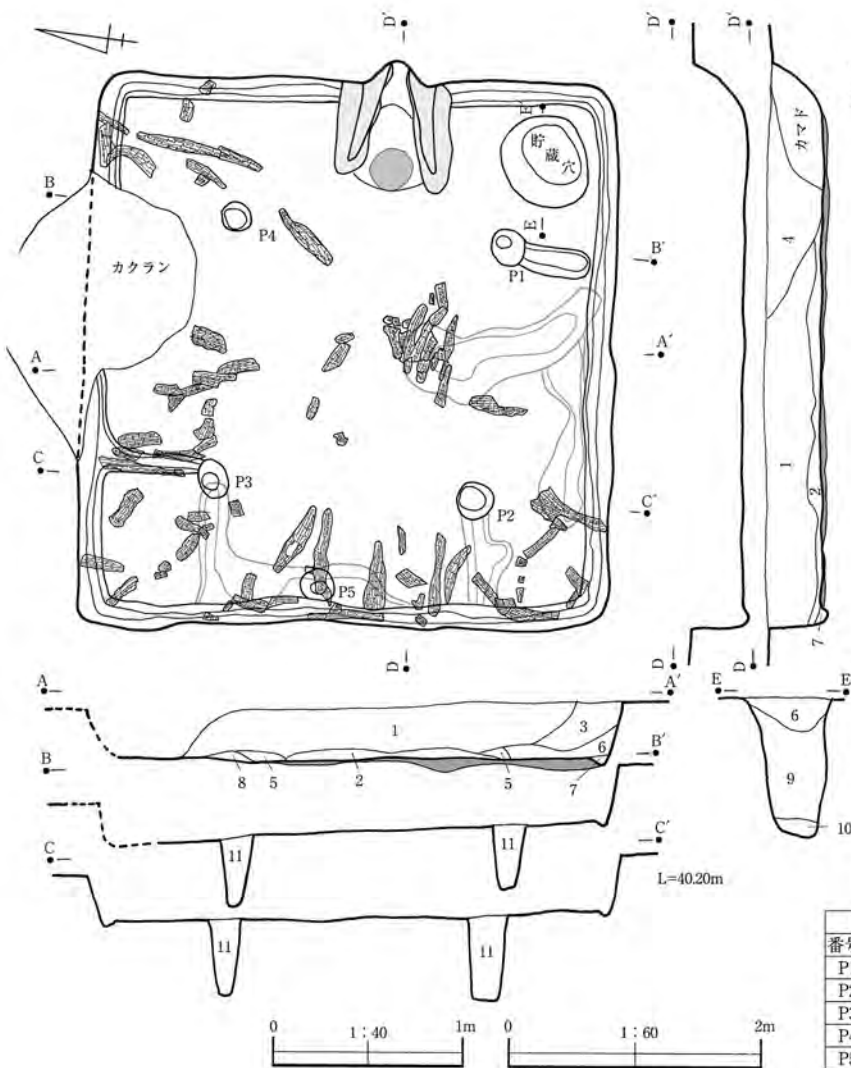
単位 (cm)

第55図 A-009①



A-009 掘り方

A-009 ②

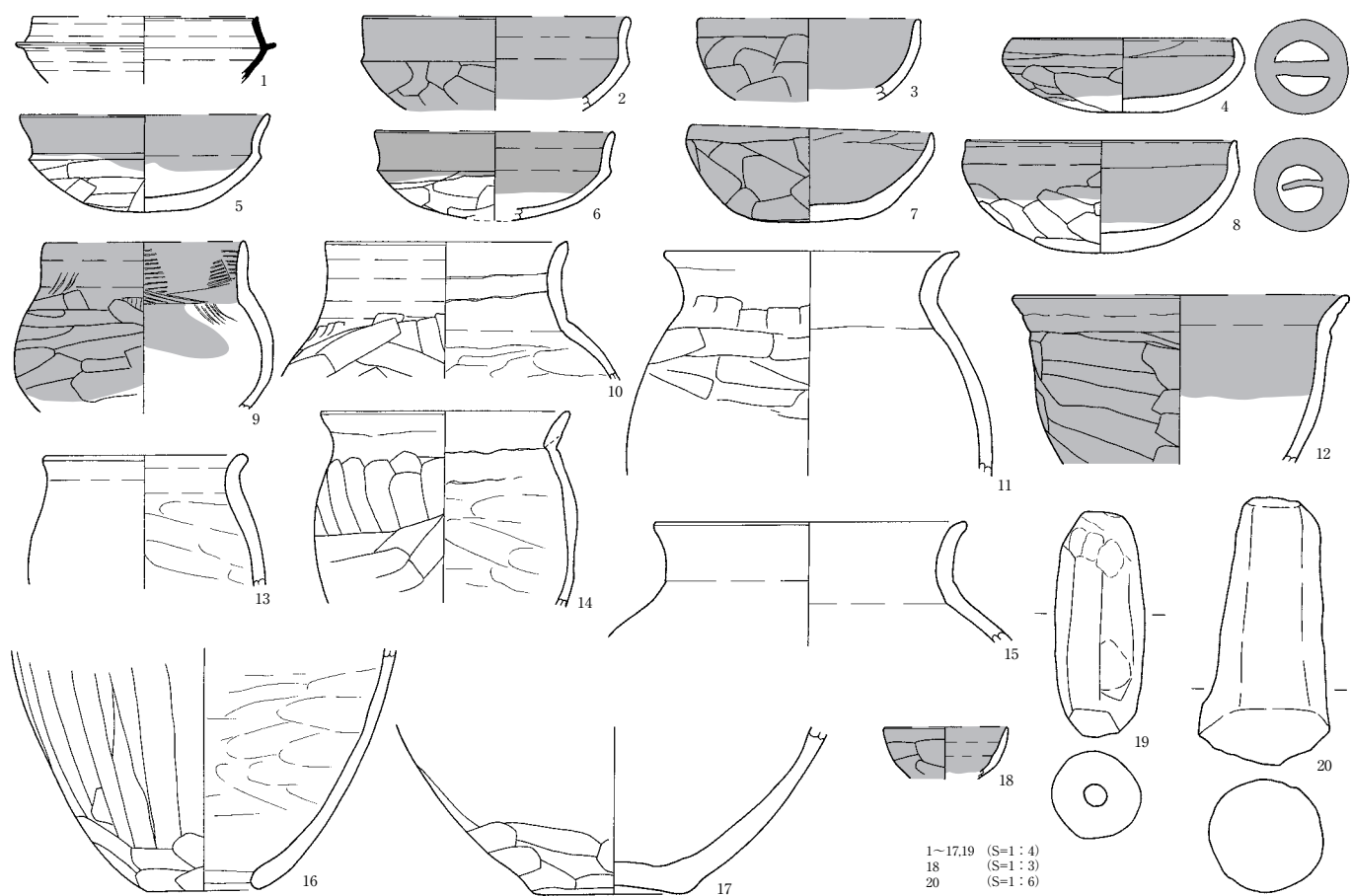


A-010

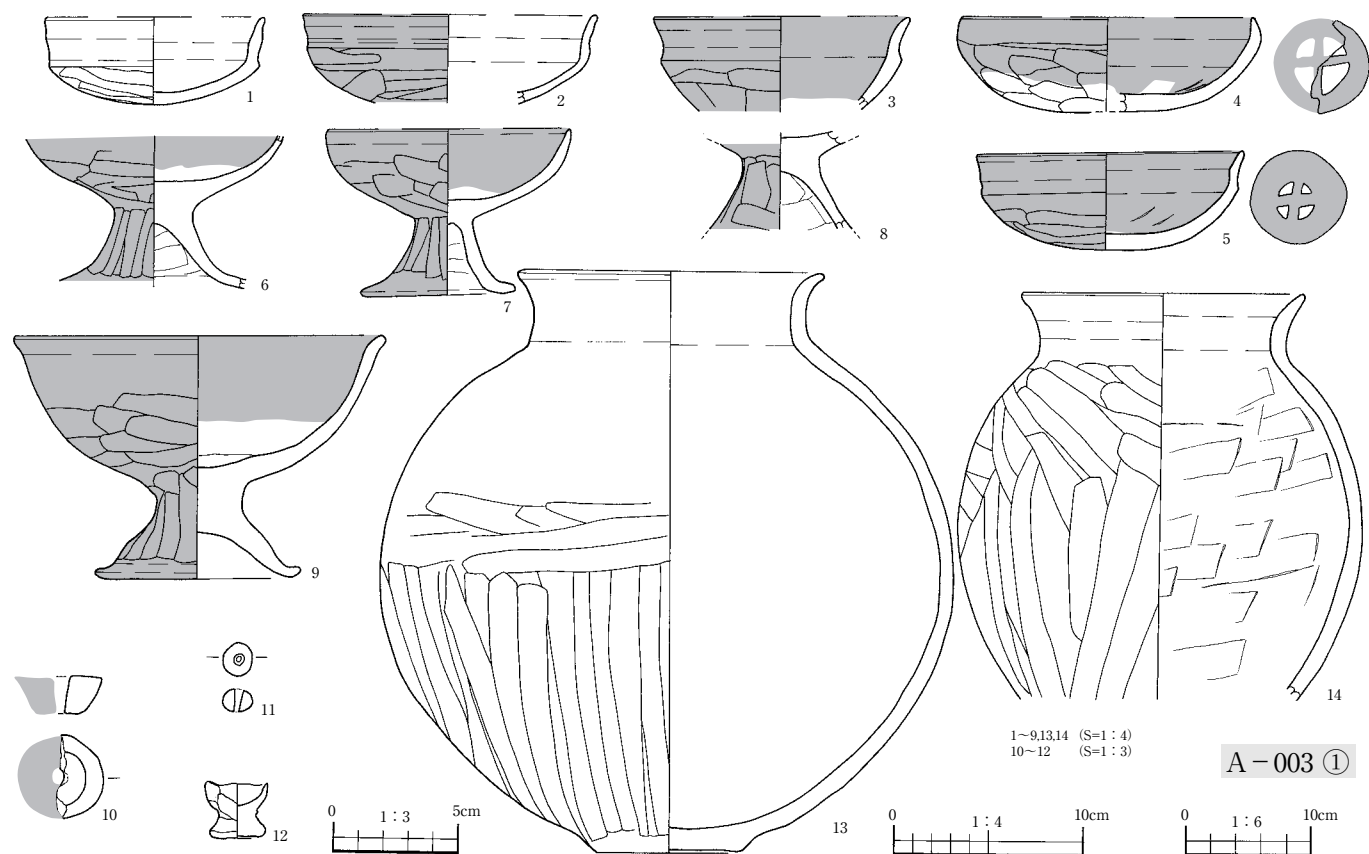
番号	柱穴		貯蔵穴		竈	
	深さ	長軸	長軸	主軸	全幅	短軸
P1	51	75	101			
P2	66	短軸	全幅			
P3	60	66	92			
P4	57	深さ	単位(cm)			
P5	6	117				

層	色調	含有物						備考
		R	RH	T	S	N	Y	
1	褐色	○		△	△	△		
2	黒褐色			△	△	△		
3	褐色	○		△	△	△		
4	褐色						○	
5	にぶい赤褐色							
6	暗褐色	△		△	△	△		
7	褐色	○						
8	黒色			○				
9	褐色	○						
10	褐色	○						
11	暗褐色	○						
12	暗褐色	○						
13	灰黄褐色			△				
14	にぶい黄褐色						○	
15	にぶい赤褐色							火床部
16	赤褐色							袖内壁部
17	にぶい赤褐色						○	
18	にぶい黄褐色							袖部
19	褐色			△	△	△		袖部
20	にぶい赤褐色			△	△	△		袖部
21	にぶい黄褐色			△	△	△		袖部
22	暗褐色	○						袖部

第56図 A-009②・010

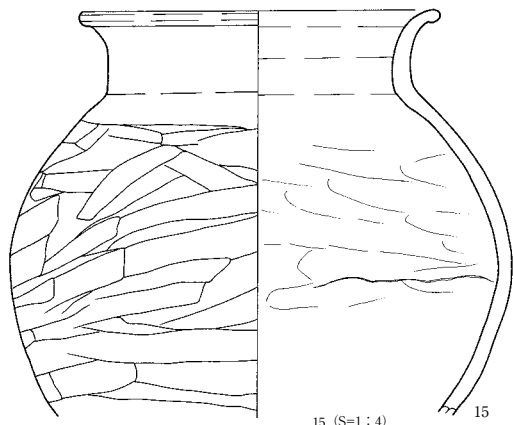


A-001



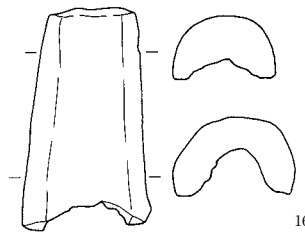
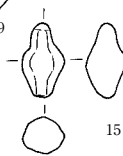
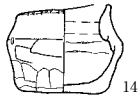
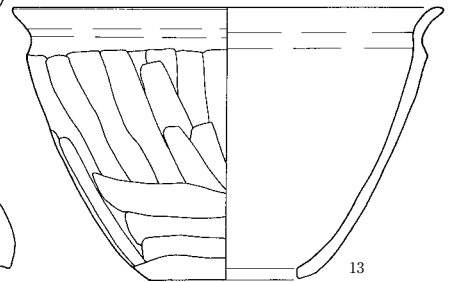
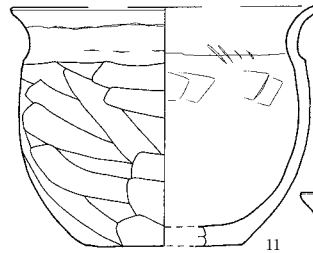
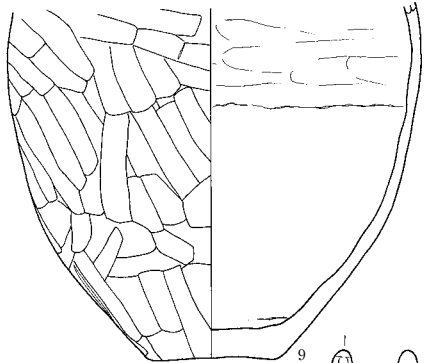
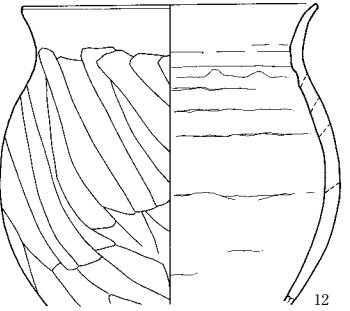
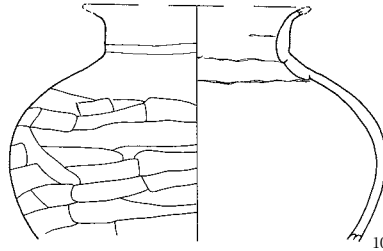
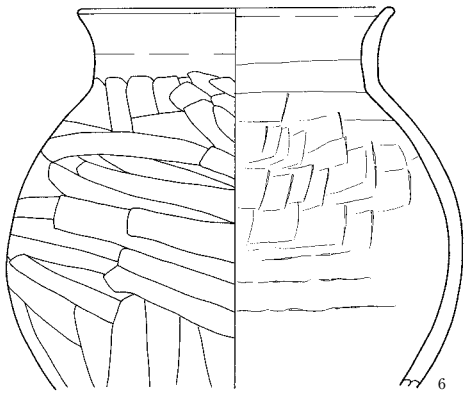
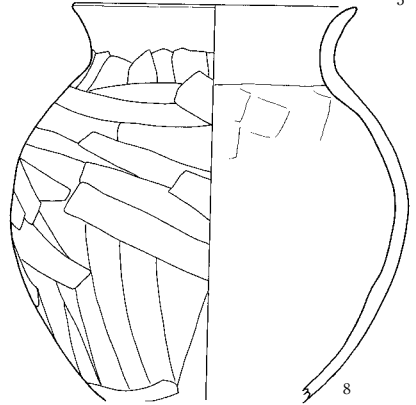
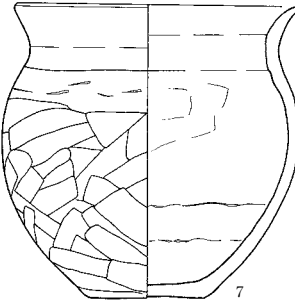
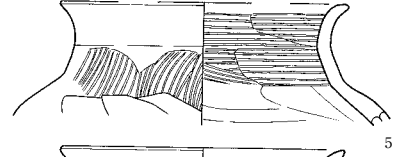
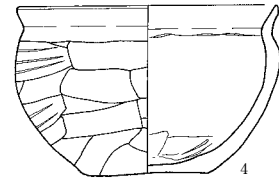
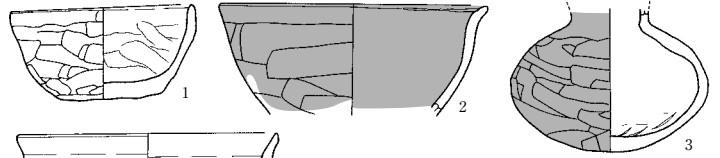
A-003 ①

第57图 A-001・003① 出土遺物



15 (S=1:4)

A-003 ②

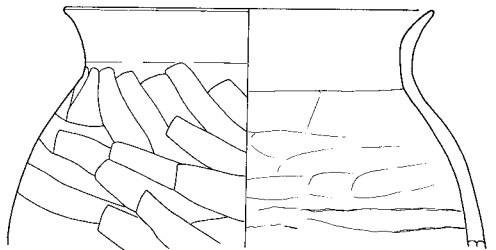
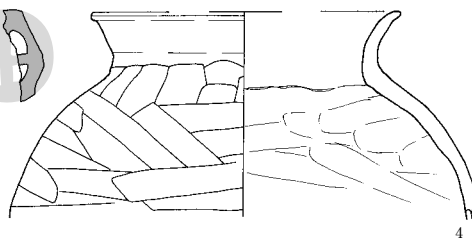
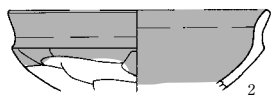
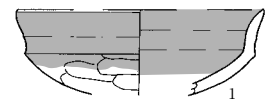


1~14 (S=1:4)

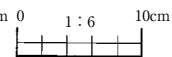
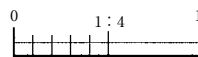
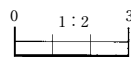
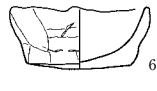
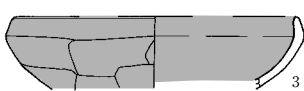
15 (S=1:2)

16 (S=1:6)

A-004

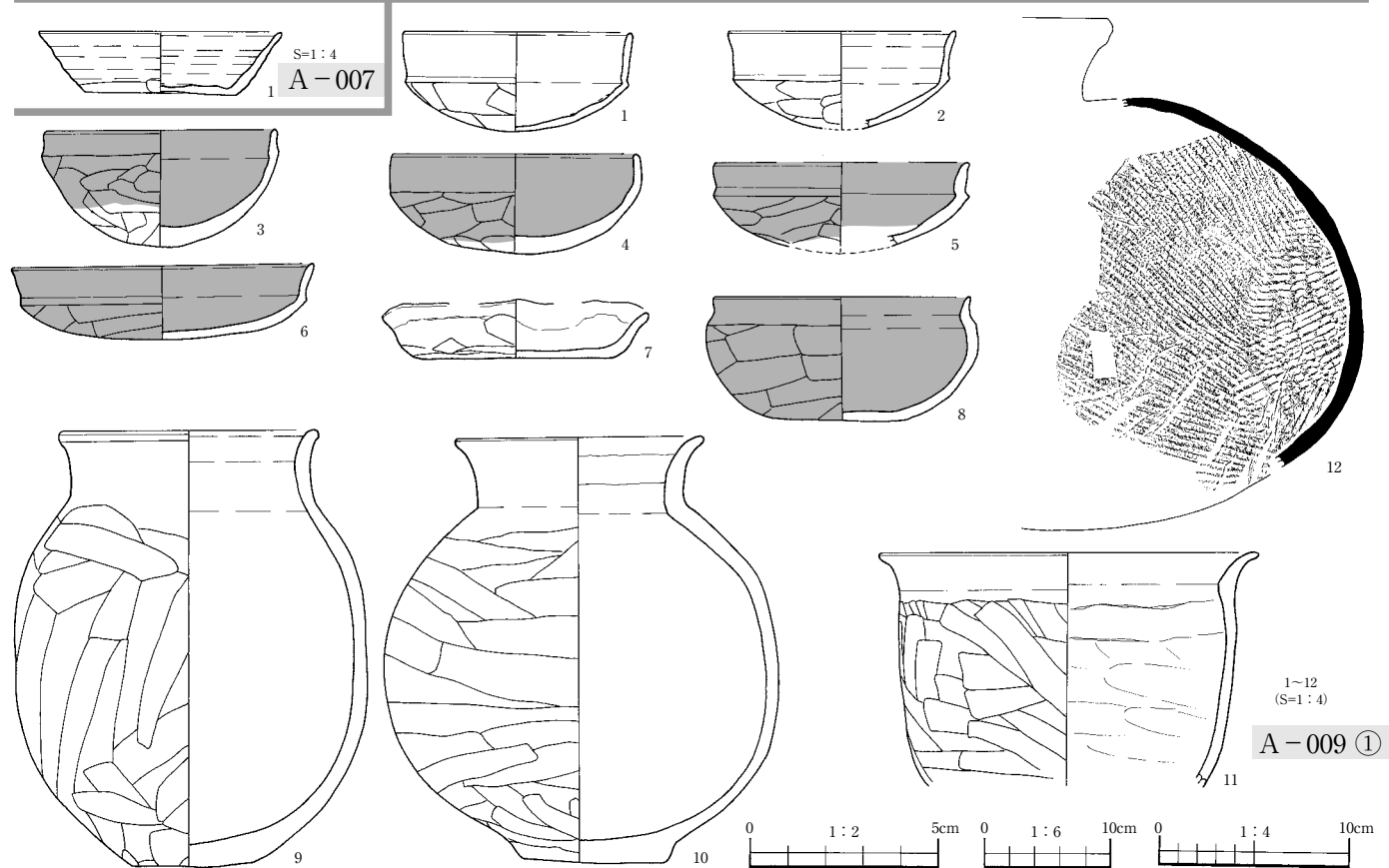
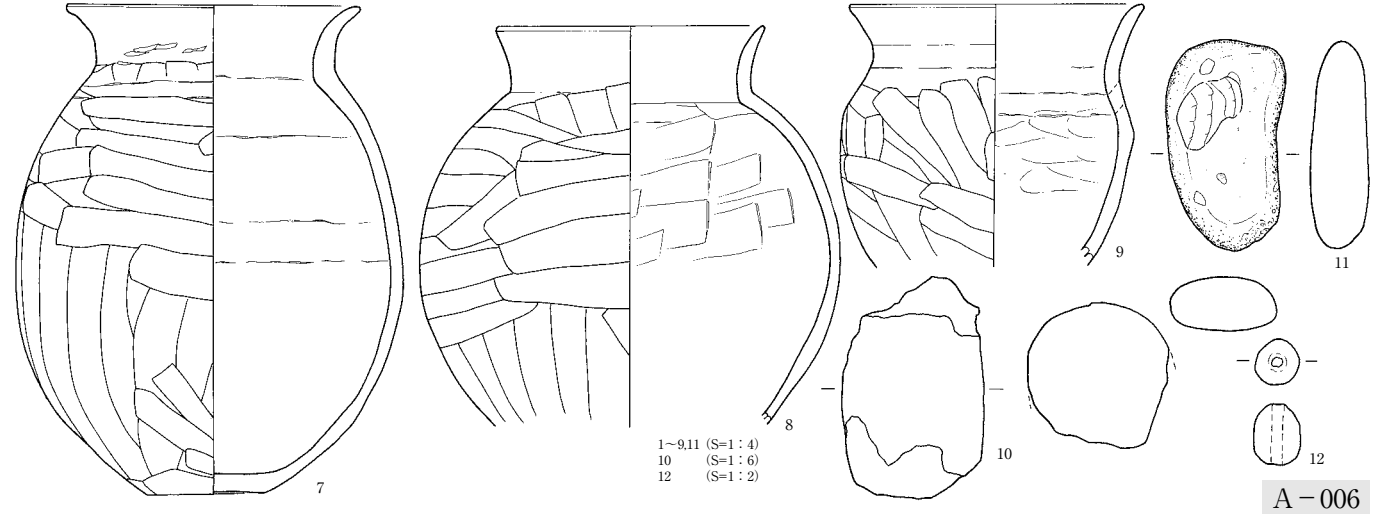
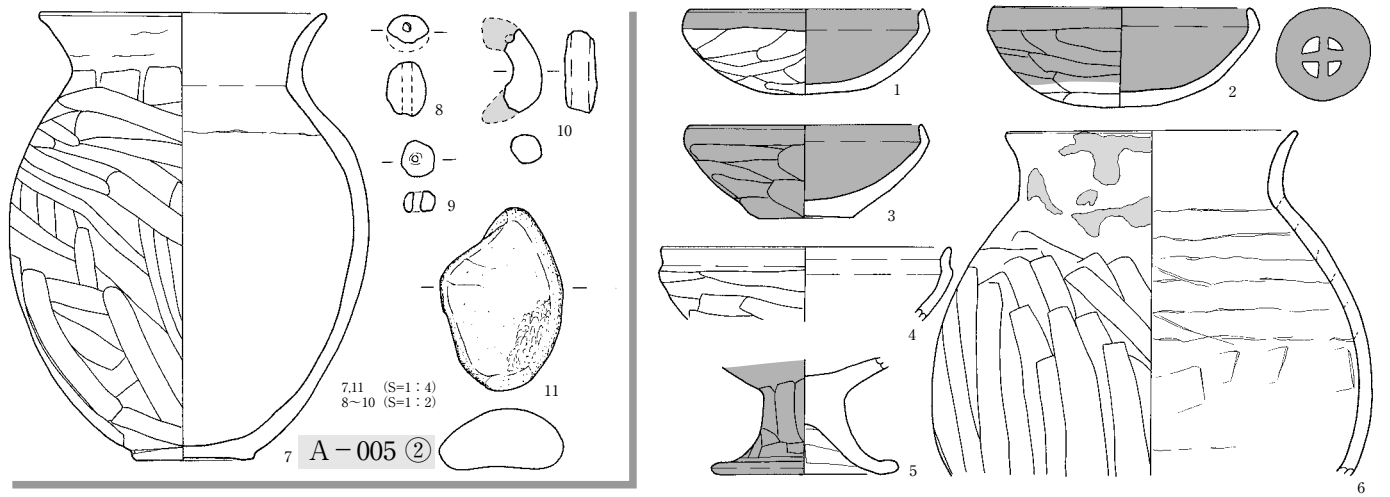


1~6 (S=1:4)

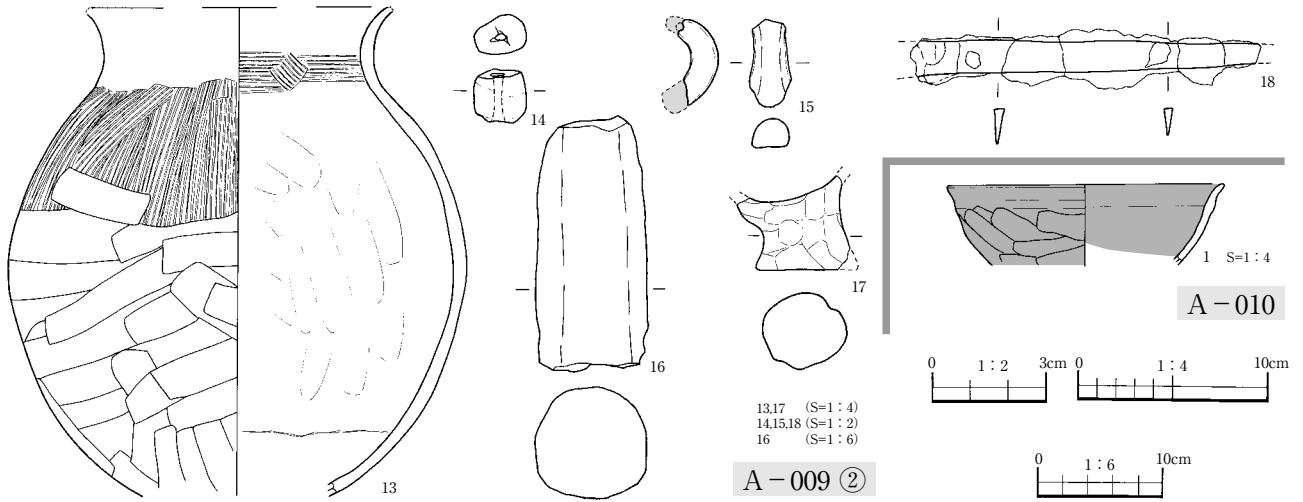


A-005 ①

第58图 A-003②・004・005① 出土遺物



第59図 A-005②・006・007・009① 出土遺物



第60図 A-009②・010 出土遺物

第18表 古代住居跡出土遺物観察表

A-001

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	須恵器 坏身	貯蔵穴内	22	(12.0)		(3.6)	轆轤成形 回転ヘラケズリ	E	
2	土師器 坏	床直	39	(14.1)		(5.0)	ヘラケズリ・赤彩	E	
3	土師器 坏	覆土中位	41	(11.8)		(4.4)	ヘラケズリ・赤彩	E	
4	土師器 坏	覆土下位	245	11.8		4.0	ヘラケズリ・赤彩	A	
5	土師器 坏	覆土中位	202	(13.3)		5.2	ヘラケズリ・赤彩	C	
6	土師器 坏	覆土上	101	(12.7)		(4.8)	ヘラケズリ・赤彩	D	
7	土師器 坏	覆土中	214	12.9	6.3	5.2	ヘラケズリ・赤彩	B	
8	土師器 坏	床直	394	14.3		6.1	ヘラケズリ・赤彩	B	
9	土師器 壺	貯蔵穴内	116	(10.6)		(9.2)	ヘラケズリ・赤彩	E	
10	土師器 甕	床直	482	13.0		(8.0)	ヘラケズリ	E	
11	土師器 甕	床直	250	15.6		(12.1)	ヘラケズリ	E	
12	土師器 壺	覆土下位	144	(17.8)		(9.1)	ヘラケズリ・赤彩	E	
13	土師器 甕	床直	248	10.6		(7.1)	ヘラケズリ	D	
14	土師器 壺	P1覆土	320	13.3		(10.5)	ヘラケズリ	D	
15	土師器 甕	床直	518	16.6		(6.5)	ヘラケズリ	E	
16	土師器 甕	床直	350	(6.0)		(13.0)	ヘラケズリ	E	
17	土師器 甕	床直	828		7.0	(9.0)	ヘラケズリ	E	
18	土師器 小型土器	覆土中	6	5.0		(2.1)	ヘラケズリ・赤彩	D	
19	土製品 土鍾	覆土中位	267	最大径4.8cm 長12.1cm				A	
20	土製品 支脚	床直	1564	最大径10.9cm 長21.8cm				A	

A-003

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	覆土下位	74	(11.5)		4.6	ヘラケズリ・無彩	A	
2	土師器 坏	覆土中位	54	(15.3)		(4.7)	ヘラケズリ・赤彩	D	
3	土師器 坏	覆土下位	48	(13.0)		(5.0)	ヘラケズリ・赤彩	E	
4	土師器 坏	床直	110	15.3	(5.0)	5.0	ヘラケズリ・赤彩	D	
5	土師器 坏	床直	257	14.9		5.3	ヘラケズリ・赤彩	B	
6	土師器 高坏	床直	194			(8.0)	ヘラケズリ・赤彩	D	
7	土師器 高坏	床直	258	(12.8)	8.1	8.8	ヘラケズリ・赤彩	B	
8	土師器 高坏	床直	86			(5.3)	ヘラケズリ・赤彩	E	
9	土師器 高坏	床直	608	19.4	10.9	12.9	ヘラケズリ・赤彩	C	
10	土製品 紡錘車	覆土中	8.1	最大径(3.5)cm 厚1.5cm				C	
11	土師器 土玉	覆土下位	1.3	最大径1.4cm 長1.0cm				A	
12	土師器 小型土器	覆土中	8	2.4	1.4	2.3	手捏ね	B	
13	土師器 甕	覆土中位	2801	16.2	7.5	30.7	ヘラケズリ	D	
14	土師器 甕	覆土下位	947	15.8		(21.7)	ヘラケズリ	C	
15	土師器 甕	床直	2289	19.4		21.9+	ヘラケズリ	C	

A-004

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	覆土中位	153	9.5	5.4	4.9	ヘラケズリ・無彩	A	
2	土師器 坏	覆土中位	161	14.0		5.8+	ヘラケズリ・赤彩	D	
3	土師器 壺	覆土中位	214			7.3+	ヘラケズリ・赤彩	C	
4	土師器 甕	覆土中位	406	13.6	6.6	9.0	ヘラケズリ	B	
5	土師器 甕	覆土中位	90	(15.0)		6.4+	ヘラケズリ・ハケ	E	
6	土師器 甕	覆土中位	1096	16.4		20.2+	ヘラケズリ	D	
7	土師器 甕	覆土中位	804	14.8	6.2	15.7	ヘラケズリ	B	
8	土師器 甕	覆土中位	1219	14.9		21.0+	ヘラケズリ	C	
9	土師器 甕	床直	1143		6.5	18.9+	ヘラケズリ	D	
10	土師器 甕	床直	753			12.5+	ヘラケズリ	C	
11	土師器 甕	覆土中位	329	(16.1)	(8.4)	12.6	ヘラケズリ	D	
12	土師器 甕	覆土中位	287	15.6		15.9+	ヘラケズリ	E	
13	土師器 甕	覆土中位	517	22.6	(7.9)	14.1	ヘラケズリ	C	
14	土師器 小型土器	床直	60	5.1	4.4	4.4	手捏ね・ヘラケズリ	A	
15	土製品 不明	壺覆土中	1.7	最大径1.2cm 長1.9cm				B	
16	土製品 支脚	床直	1652	最大径10.5cm 高17.8cm				C	

A-005

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	覆土下位	83	(13.0)		4.5	ヘラケズリ・赤彩	E	
2	土師器 坏	覆土中位	63	(13.5)		4.3	ヘラケズリ・赤彩	E	
3	土師器 坏	覆土上	28	(14.8)		3.8+	ヘラケズリ・赤彩	E	
4	土師器 甕	床直	617	(16.0)		11.0+	ヘラケズリ	F	
5	土師器 甕	床直	426	19.0		12.7+	ヘラケズリ	E	
6	土師器 小型土器	床直	74	6.8	5.5	3.3	手捏ね	B	
7	土師器 甕	床直	1783	15.0	6.2	23.6	ヘラケズリ	B	
8	土製品 土玉	覆土中	1.2	最大径1.1cm 孔径0.2cm 長1.4cm				B	
9	土製品 土玉	覆土上	0.6	最大径0.9cm 孔径0.2cm 長0.6cm				A	
10	土製品 勾玉	覆土上	1.8	最大幅0.9cm 長2.2+cm				C	
11	石製品 磨石兼敲石	覆土中位	266.6	長9.8cm	幅6.7cm	厚3.1cm		A	安山岩製

A-006

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	覆土上	168	12.3	5.0	4.5	ヘラケズリ・赤彩	B	
2	土師器 坏	床直	270	5.4		5.4	ヘラケズリ・赤彩	B	
3	土師器 坏	壺覆土中位	233	12.2	5.0	5.0	ヘラケズリ・赤彩	B	
4	土師器 坏	覆土中	36	15.2		2.9+	ヘラケズリ・無彩	E	
5	土師器 高坏	覆土下位	223		4.5	6.2+	ヘラケズリ・赤彩	D	
6	土師器 甕	覆土下位	1015	15.2		18.3+	ヘラケズリ	D	山砂付着
7	土師器 甕	床直	2139	15.4	6.1	26.1	ヘラケズリ	B	
8	土師器 甕	覆土下位	877	13.8		21.2+	ヘラケズリ	D	
9	土師器 甕	覆土下位	631	15.4		13.9+	ヘラケズリ	C	
10	土製品 支脚	甕床直	1732	最大径11.5cm 長17.7+cm				E	
11	石製品 磨石兼敲石	旧貯蔵穴覆土中	328.5	長11.1cm 幅6.5cm 厚3.8cm				A	凝灰岩製
12	土製品 土玉	床直	2.3	最大径1.2cm 孔径0.3cm 高1.6cm				B	

A-007

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	壺蓋覆土下位	106	12.8	7.8	3.3	轆轤成形 回転ヘラ切り	B	胎土に委母多し

A-009

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	床直	59	12.0		5.3	ヘラケズリ・無彩	D	
2	土師器 坏	貯蔵穴覆土中	142	12.0		5.2+	ヘラケズリ・無彩	B	
3	土師器 坏	覆土中位	276	12.0		6.2	ヘラケズリ・赤彩	A	
4	土師器 坏	床直	234	12.8		5.2	ヘラケズリ・赤彩	B	
5	土師器 坏	覆土中位	147	(13.4)		4.5+	ヘラケズリ・赤彩	D	
6	土師器 坏	床直	195	15.9		4.0	ヘラケズリ・赤彩	B	
7	土師器 坏	床直	131	(14.0)	10.0	3.3	ヘラケズリ・無彩	C	
8	土師器 坏	床直	295	13.5	7.3	6.5	ヘラケズリ・赤彩	C	
9	土師器 甕	床直	1643	13.3	6.4	23.2	ヘラケズリ	A	
10	土師器 甕	床直	1927	12.5	7.3	22.2	ヘラケズリ	B	
11	土師器 甕	床直	475	19.8		7.5+	ヘラケズリ	D	
12	須恵器 横瓶	床直	575				格子目風タタキ	E	
13	土師器 甕	床直	497	(15.8)	7.9	25.8+	ヘラケズリ・ハケ	E	
14	土製品 土玉	床直	2.6	最大径1.6cm 長1.5cm				A	
15	土製品 勾玉	覆土中	2.6	最大幅1.2cm 長2.4+cm				C	
16	土製品 支脚	甕床直	1586	最大径9.0cm 長20.5cm				B	
17	土師器 小型土器	床直	2.4		5.4	5.0+	手捏ね・ヘラケズリ	B	
18	鉄製品 刀子	床直	9.7	身幅0.9cm 厚0.3cm				C	

A-010

No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	土師器 坏	壺覆土中	96	14.5		4.3+	ヘラケズリ・赤彩	D	

遺存度 A(完形) B(3/4以上) C(1/2以上) D(1/4以上) E(1/4以下)

第4節 土壇

総数34基であり、その大半は縄文時代の所産である。種別を特定できるものとしては縄文時代の陥穴が23基・貯蔵穴が2基である。分布状況は調査区の北側と南側の2地点に集中する傾向がはっきりと認められた。C-028からは多量の焼土とともに古墳時代の遺物が多数検出されているが、検出はいずれも覆土上位であり、形態は縄文時代の陥穴であることから、窪みを再利用したと考えることも可能である。それ以外9基については、覆土に含まれる遺物から縄文時代の所産と判断したもの他は帰属時期など不明な点が多い。陥穴は多部田貝塚同様、上面形態が楕円形で深度があり、底部にピットを有するタイプと袋状にオーバーハングするタイプの2者が主である。

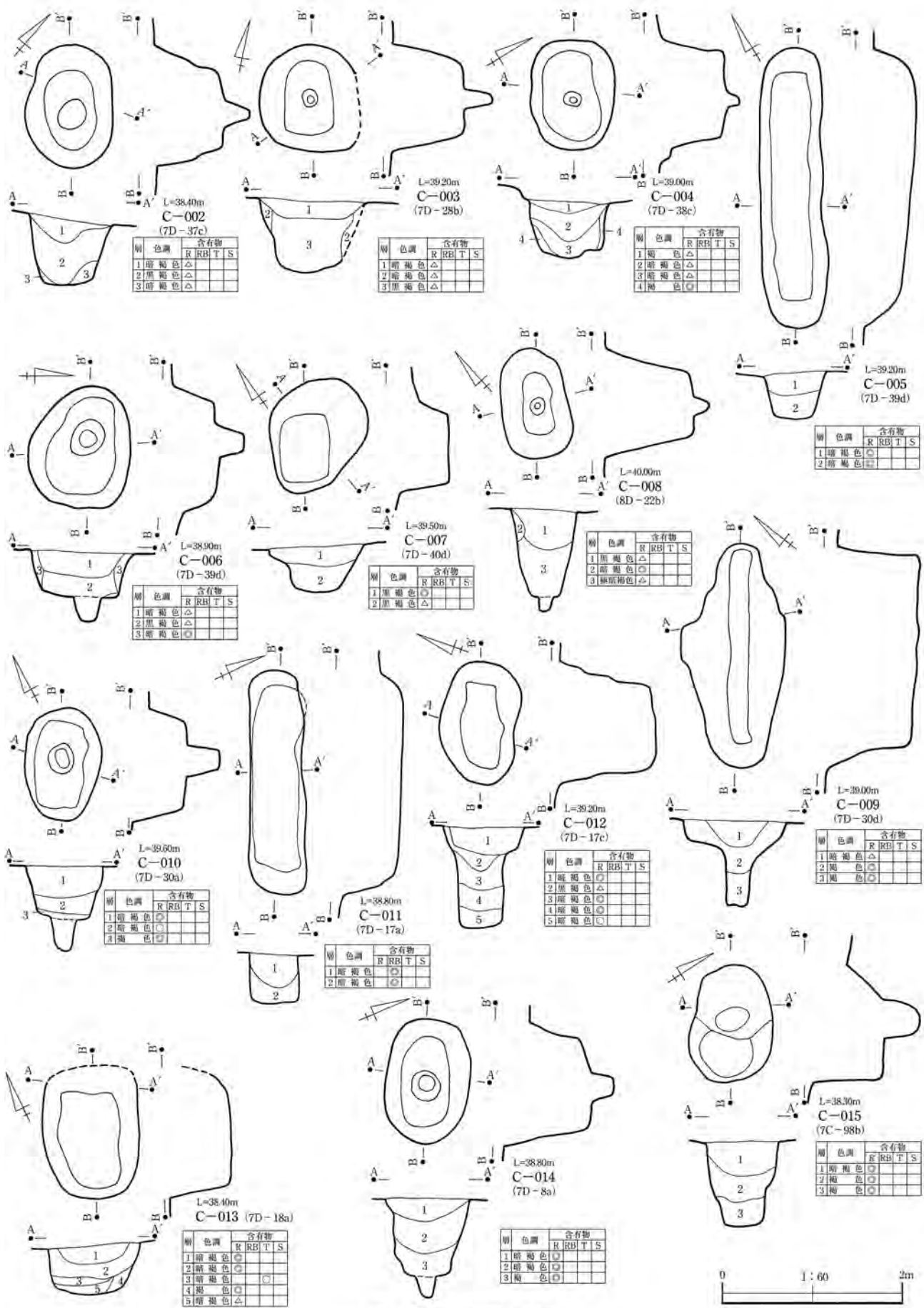
第19表 土壇一覧表

遺構番号	形態	規模(cm)		深さ(cm)	種別	時代	出土遺物			図版番号		備考	
		上(長軸×短軸)	下(長軸×短軸)				時期	種類	重量(g)	遺構図	遺物		
C-001	欠番												
C-002	楕円形	136×97	90×56	75	陥穴	縄文					61		
C-003	楕円形	120×112	81×52	80	陥穴	縄文					61		
C-004	楕円形	122×93	98×62	59	陥穴	縄文					61		
C-005	長楕円形	315×69	256×44	52			縄文時代 中・後期 平安時代	土器	5 9		61	阿玉台式	
C-006	楕円形	138×113	116×78	50	陥穴	縄文					61		
C-007	不整形	125×99	75×54	51	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中期	土器	32		61	阿玉台式	
C-008	楕円形	123×75	67×30	99	陥穴	縄文					61		
C-009	長楕円形	250×96	218×21	95	陥穴	縄文					61		
C-010	楕円形	126×85	97×53	60	陥穴	縄文					61		
C-011	隅丸長方形	251×58	206×51	54							61		
C-012	楕円形	135×84	92×48	112	陥穴	縄文					61		
C-013	(楕円形)	(139)×108	104×70	62							61		
C-014	楕円形	141×93	103×55	87	陥穴	縄文					61		
C-015	楕円形	132×87	89×60	96	陥穴	縄文					61		
C-016	隅丸長方形	238×64	184×48	35							62		
C-017	楕円形	115×84	89×66	65	陥穴	縄文					62		
C-018	楕円形	143×105	109×66	65	陥穴	縄文					62		
C-019	隅丸長方形	108×83	80×63	46	陥穴	縄文					62		
C-020	長方形	217×101	188×63	68	陥穴	縄文					62		
C-021	楕円形	151×88	123×38	94	陥穴	縄文					62		
C-022	円形	128×125	84×96	27	貯蔵穴	縄文	縄文時代 中期	土器	12		62	阿玉台式	
C-023	(楕円形)	(104)×(87)	97×46	20							62		
C-024	隅丸長方形	175×134	124×87	49	縄文	縄文時代 中・後期	石器	137		62	64	磨製石斧	
C-025	楕円形	212×151	186×118	(100)	陥穴	縄文	縄文時代 後期 古墳時代 後期	土器	145 272		62	加曾利B式	
C-026	楕円形	142×120	75×74	105	陥穴	縄文					62		
C-027	楕円形	273×144	133×76	223	陥穴	縄文	古墳時代	土器	21		62		
C-028	楕円形	292×225	229×105	216	陥穴	縄文	縄文時代 早～後期 古墳時代 後期	土器 石器 土器	896 216 5360		63	64	茅山式・阿玉台式 堀之内式・加曾利B式 剥片4点・打製石斧1点
C-029	楕円形	283×152	233×72	235	陥穴	縄文	縄文時代 早～後期 古墳時代	土器	153 90		63		茅山式・阿玉台式 加曾利E式・加曾利B式
C-030	楕円形	184×121	117×58	56	縄文?	縄文時代 中期	土器	53			63		
C-031	楕円形	253×153	206×48	227	陥穴	縄文	縄文時代 後期	土器			63	64	
C-032	円形	146×121	128×109	43		縄文時代 中・後期	土器	28			63		
C-033	円形	123×98	79×69	34							63		
C-034	長方形	215×132	239×70	195	陥穴	縄文					63		
C-035	楕円形	225×145	186×113	185	陥穴	縄文					63		

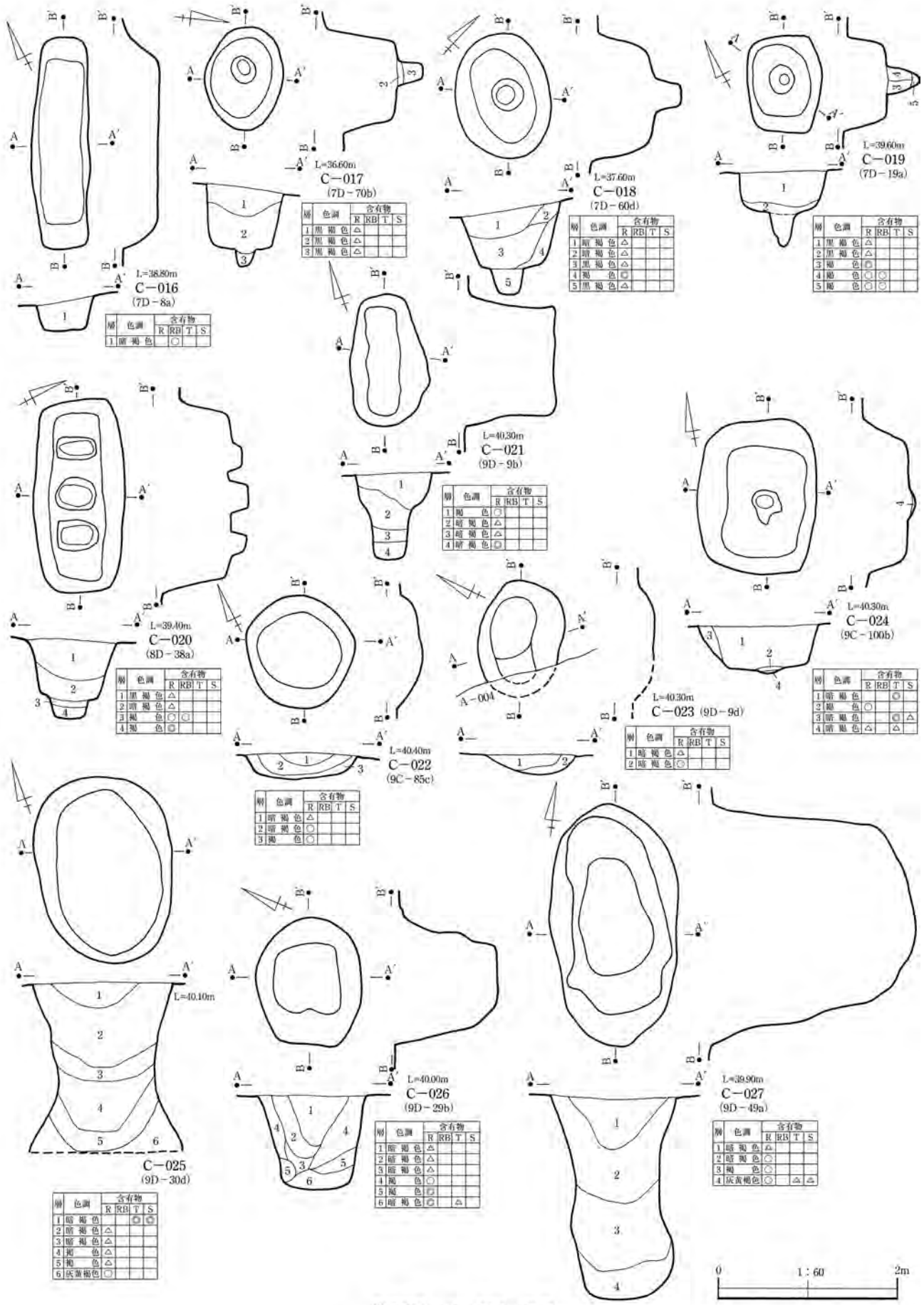
第20表 土壇出土遺物観察表

遺構名	No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度	遺構名	No	器種名	層位	重さ(g)	法量(cm)			成形・調整手法	遺存度
					口径	底径	器高								口径	底径	器高		
C-024	1	磨製石斧	覆土中	140	長7.0cm幅4.5cm厚2.6cm					C-028	6	土師器 甕	覆土上位	454	(13.1)		20.9+	ヘラケズリ	E
C-028	3	土師器 坏	覆土上位	124	12.0		4.8	ヘラケズリ・無彩	B	C-028	7	土師器 甕	覆土上位	1232	(18.4)	7.7	25.1	ヘラケズリ・ハケ	C
C-028	4	土師器 坏	覆土中	23	(12.9)		3.5+	ヘラケズリ・赤彩	E	C-028	8	土製品 勾玉	覆土上位	4.4	最大幅1.1cm 長3.0cm			B	
C-028	5	土師器 甕	覆土上位	427	16.9		11.0+	ヘラケズリ	E	C-031	1	土師器 甕	覆土中	775	(14.5)		17.0+	ヘラケズリ	E

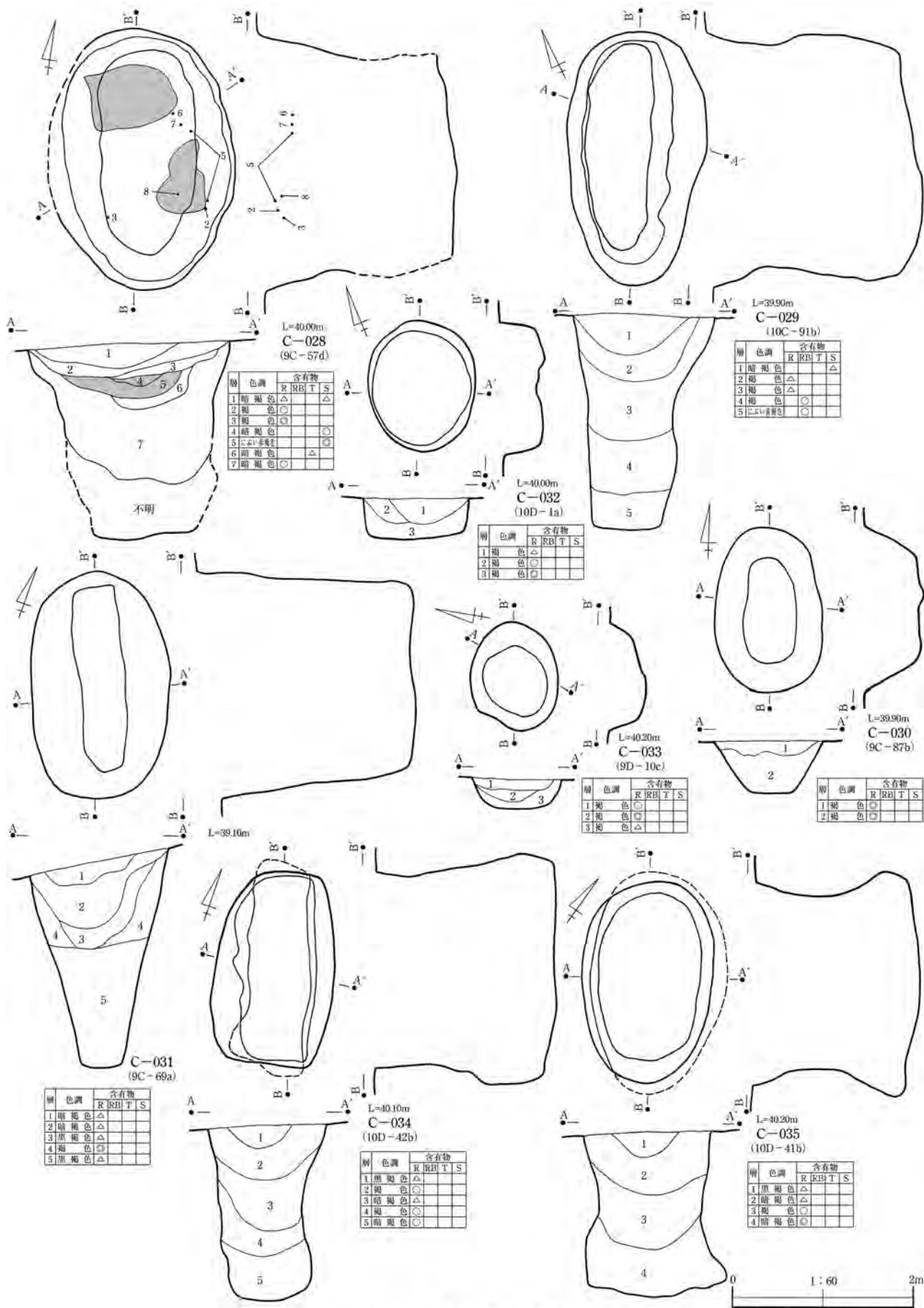
遺存度 A(完形) B(3/4以上) C(1/2以上) D(1/4以上) E(1/4以下)



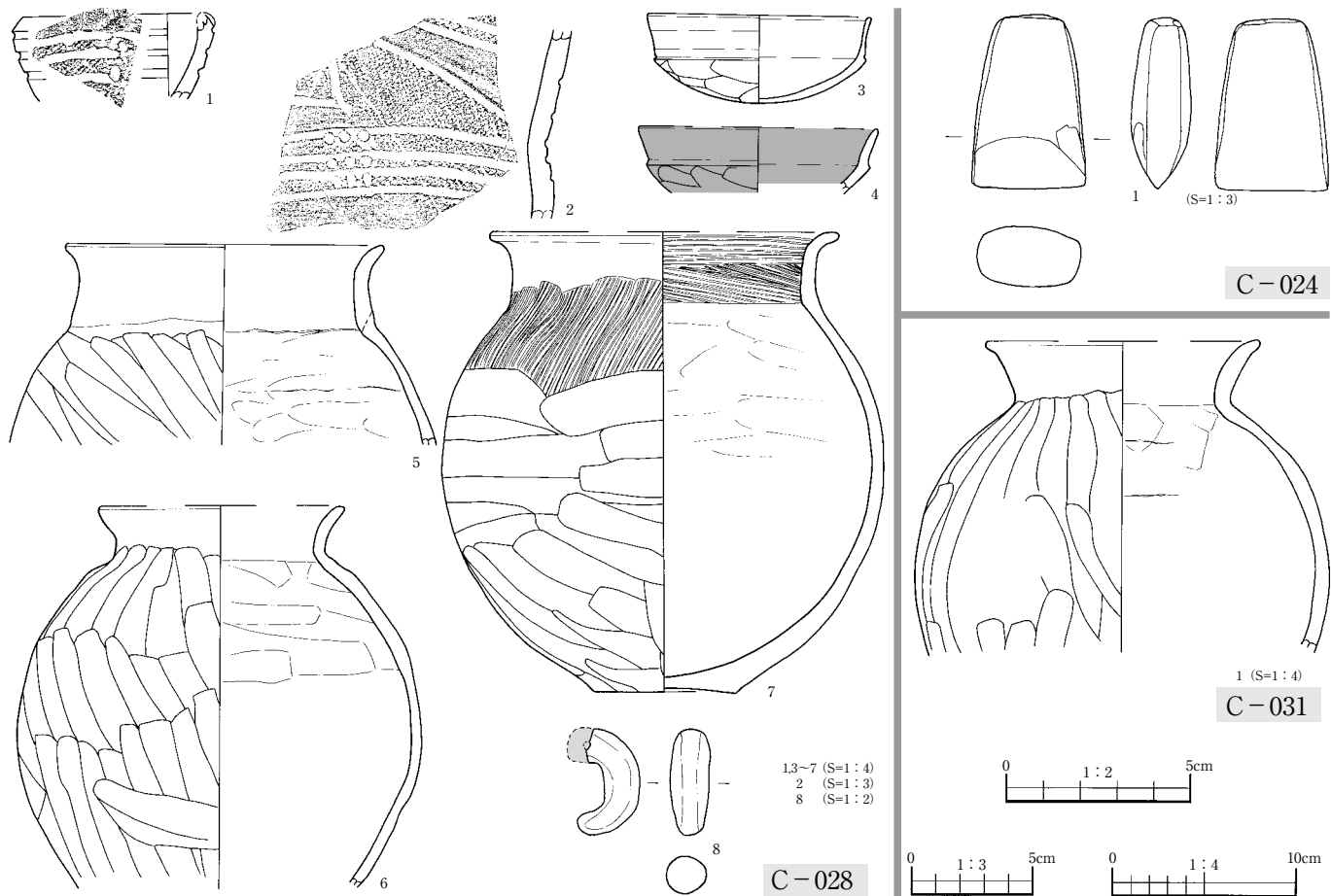
第61图 C-002~015



第62図 C-016~027



第63図 C-028~035



第64図 C-024・028・031

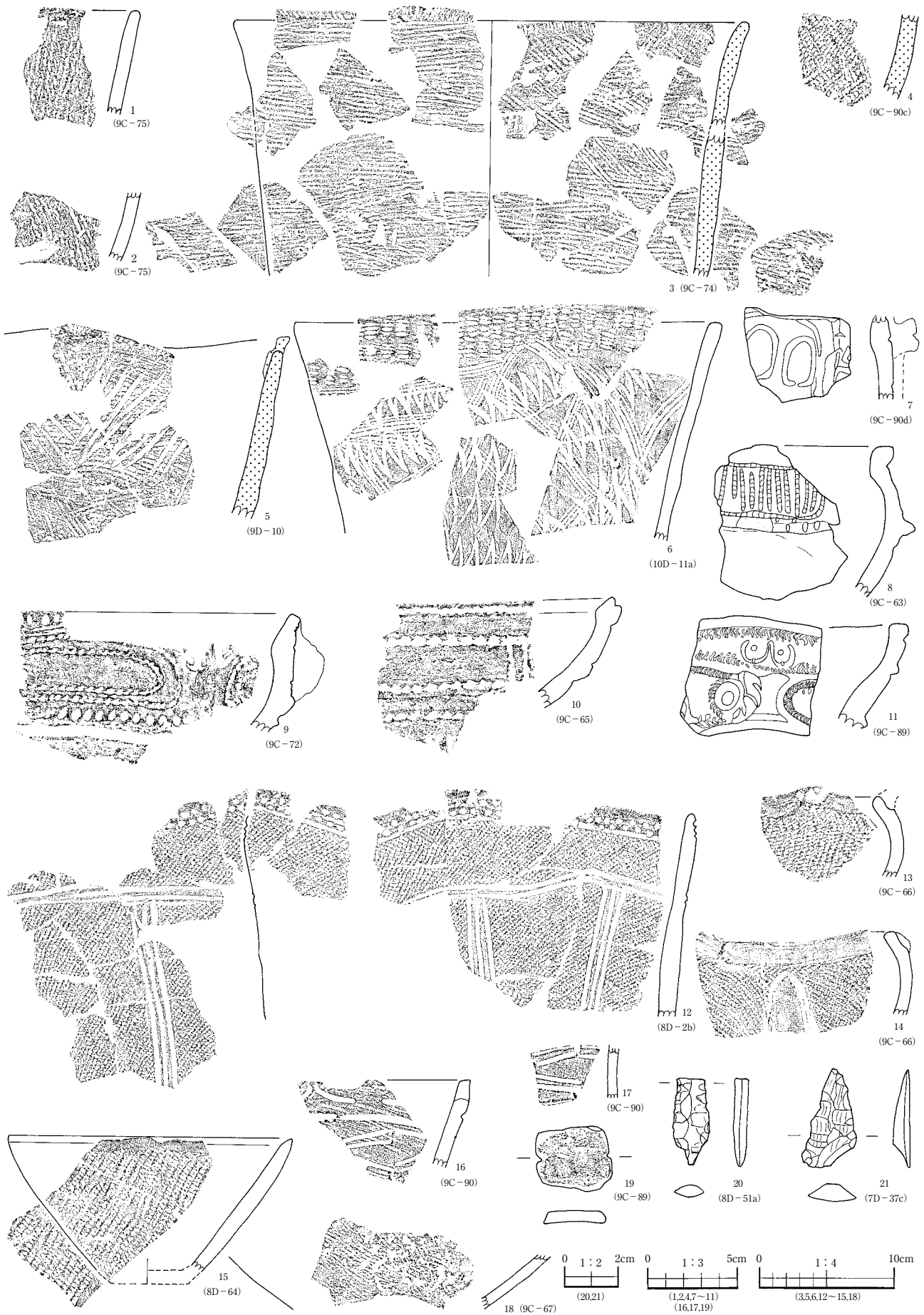
第5節 調査区出土遺物

貝殻塚遺跡の調査区から出土した縄文土器は、早期の夏鳥式（1・2）、茅山下層式（3）、前期の黒浜式（4・5）、浮島式（6）、中期の阿玉台式（7～11）、加曾利E式（12～14）、後期の堀之内式（15）、晩期終末の荒海式（16～18）の各型式に亘るが、総量としては加曾利EⅢ式・EⅣ式土器が主体的で、残りは少量である。土製品としては土器片錘（19）が1点出土している。

石器は剥片183点、石核6点、打製石斧1点、磨製石斧2点、磨石12点、石皿4点、砥石2点、石錐1点、石鏃5点（21）、有舌尖頭器1点（20）、凹石1点、スクレイパー1点、礫15点、不明5点が出土した。

第21表 調査区出土土製品・石器計測表

種別	図版・遺物番号	出土地点	石材	重量	単位(g)			種別	図版・遺物番号	出土地点	石材	重量	単位(cm)		
					長	幅	厚						長	幅	厚
土錘	65-19	9C-89	土製品	12.0	3.6	4.3	0.7	磨石		9C-65 b	砂岩	396.0	11.0	7.2	3.0
有舌尖頭器	65-20	8D-51 a	安山岩	2.2	3.2+	1.4	0.5	磨石		9C-82 c	砂岩	410.0	9.9	7.6	3.5
石鏃	65-21	7D-37 c	黒曜石	3.1	3.7	2.0	0.6	磨石		9C-89 b	花崗岩	374.0	10.0	8.3+	4.8
石鏃		9C-89 c	黒曜石	1.1	2.7	1.5+	0.5	磨石		9C-89 b	花崗岩	512.0	10.0	9.8+	3.6
磨製石斧		9C-73 d	安山岩	125.0	9.5	4.5	1.8	石皿		9C-88 d	安山岩	428.0	11.2	7.6	3.0
打製石斧		9C-83a	安山岩	191.0	8.0	5.4	2.8								



第65図 調査区 出土遺物

第4章 ムグリ遺跡

第1節 調査の概要

立地 遺跡は、貝殻塚遺跡の西側斜面部に位置し、標高23m～35mを測る台地縁辺と急傾斜地に立地する。発掘調査の便宜上地区をA・B地区と分割しており、本報告においてもその地区名を踏襲する。A・B地区はともに急斜面の中でも谷津がさらに台地を東に向かって浸食し、その結果幾らか緩斜面を形成した場所に当たる。

A地区 古墳時代後期、平安時代の住居跡をそれぞれ1軒ずつ、奈良・平安時代に属する製鉄に関係すると考えられる窯跡3基・土壙5基・粘土採掘坑1基・溝2条・ピット群を検出した。また1号窯には灰原が確認され、その灰分布範囲から多数の遺物が出土している。また調査段階では、もう一つの灰の分布を8C-43・8C-34グリッド付近で確認しているが、これは1号窯の灰原と異なり、鉄滓を含む全体に黒味を帯びた土層であったとのことである。

B地区 A地区の北側に位置し約200m²にも満たない狭い調査区で、土壙3基・ピット群・溝1条を検出した。遺物の出土量が少なく時期決定は難しいが、調査区出土の土器の年代からA地区の奈良・平安時代遺構とほぼ同時期の所産と考えている。またこの地区は、多量の鉄滓・製鉄炉壁片、さらには轆の羽口等が出土しており、A地区同様、製鉄に関する作業を行う際に使用された可能性が高い。

第22表 遺構一覧表

住居跡

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
A-001	A	68	75
A-002	A	68	75

窯跡

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
1号窯跡	A	70・71	75
2号窯跡	A	70・72	75
3号窯跡	A	70・72	76

備考

3号窯跡はC-004からの変更

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
粘土採掘坑	A	69	

土壙

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
C-001～003・005	A	69・70	76
C-001～003	B	74	

溝跡

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
D-001・002	A	70	76
D-001	B	73	

ピット群

遺構名	地区	遺構図版	遺物図版
ピット群	A	67	
ピット群	B	74	

第2節 A地区 検出遺構・遺物

住居跡

A-001 A地点の北側、台地縁辺部に位置する。A・B地区で想定される製鉄関連の遺構のちょうど中間に位置している。出土遺物としては竈から検出された風字硯が注目される。

A-002 斜面下の1号・3号窯跡付近の検出である。A地区東側斜面上部に想定される製鉄炉からの鉄滓・製鉄炉壁片・多量の炭化物の流れ混みが住居の上面を覆っており、当住居は製鉄関連遺構よりは年代的に遡る。出土遺物は少なく、僅かに時期を窺い知ることの出来る鬼高期の坏・甕を図示した。

第23表 古代住居跡計測表

住居番号	時期	位置	主軸方位	規模(m)	壁高(cm)	柱穴	周溝
				主軸長×横軸長	最大～最小		
A-001	平安時代	7C-58c	N-19°-E	2.20×2.20	40～22	1	全周
A-002	古墳時代	8C-34b	N-28°-W	3.60×4.10	70～56	1	全周

窯跡

1号窯跡 西向き斜面の等高線に沿って構築されており、窯体床面の標高は26.0mを測る。窯体の横軸長は4.0m、縦軸長は1.3m、残存高は0.7mで、窯体から突き出る焚口状の横口が4箇所ある。本窯の構築に際しては、もともと傾斜の緩やかな地点を選んでいるが、更に斜面を削り出し平坦面を造成し、そこに砂質の粘土で窯体を構築している。窯体内部の高さは、残存している窯壁から推察すると70cm程度であろう。煙道は検出されていないが、窯本体の地山壁際の方にあったと思われる。1号窯の前面には斜面下の方向に灰原が扇状に広がる。窯体内部からは僅かではあるが須恵器・瓦片が出土し、灰原からは坏・甕類が多数出土している。1号窯内や周辺、さらに灰原の遺物すべてを合わせた重量比で見ると、甕が80パーセント・坏が20パーセントを占め、その他に瓦片・蓋などを僅かに含む。図示した1点の瓦（2号窯・8）については、1号窯内と灰原、さらに2号窯の焚口付近からそれぞれ出土した個体が接合している。また窯前の灰原から出土した甕（13）には「田部」の刻書があり、現在の多部田町の由来を考える上で興味深い資料となる。覆土に土器片を含んでいる点、窯体内に炭化材が多く認められない点、窯体から4つの横口が突き出ている点等の要素は、本窯の性格を考える上で非常に迷うところであるが、炭焼きと須恵器焼成とを兼ねたものと理解している。突き出た横口は炭の掻き出し口ともとれるが、国内で検出されている炭窯とは規模や窯体構造（多くのものは半地下式か削り抜き式）が異なり、製鉄遺構群との関連だけで炭窯との安易な断定は避けるべきであろう。

2号窯跡 1号窯跡の南東方向に位置し、2mと離れていない。地下式の構造で、窯本体の主軸は等高線に直交する。窯体奥壁から焚口までの長さは約3mで、窯体の幅は奥の広いところで1.5m、中央部で1.1m程度、残存高は1.8mを測る。窯体内床面はほぼ平坦で標高は25.7mを測り、焚口から外へ向かって立ち上がる。煙道は窯体奥の向かって右側にある。窯体内の地山壁はよく焼けており、赤く変色していた。覆土の最下層には炭化物を主体とした層が認められた。遺物は焚口付近に集中しており、窯内からは検出されなかった。器種としては甕が85パーセント、瓦が15パーセント程度の比率であり、坏は細片の他は見られなかった。

3号窯跡 1号窯跡の北方向に隣接するように位置する。立地・構造等は2号窯と共通する。窯体奥壁から焚口までの長さは約3mで、窯体の幅は奥の広いところで1.5m、中央部で1.1m程度、残存高は最も深いところで2.5mを測る。窯体内床面はほぼ平坦で標高は25.3mを測り、焚口から外へ向かって立ち上がる。覆土下層には炭化物を含んだ層が確認されているが、壁の被熱は認められず、窯として機能していたかどうかは不明である。出土遺物は瓦片のみである。

土壌・溝跡・ピット群・粘土採掘坑

2号土壌(C-002)・3号土壌(C-003)は切り合っており、C-002が古くC-003が新しい。ともに鉄滓を多量に含んでおり、その一部については分析を行い、第4節に示した。C-003にはC-002ではみられなかった粒状滓が多く認められた。調査において1号窯跡よりも古いと認識されている点を考慮すると、周辺には1号窯跡よりも年代的に遡り得る窯跡並びに製鉄炉の存在が想定される。1号土壌(C-001)と1号溝(D-001)・2号溝(D-002)はいずれも1号窯跡の前庭部灰原下から検出された。窯での作業に必要な排水等の機能を持っていたものと想定される。6号土壌(C-006)は、8C-42グリッドのややテラス状に削り出された面に位置する。8C-34グリッドを中心にピット群が検出されているが、その組み合わせについては不明である。粘土採掘坑は調査区の南端に位置し、東斜面側は調査区域外の為、全体の範囲は不明である。現段階での長軸(南北ライン)で4.5mを測る。

第3節 B地区 検出遺構・遺物

土壌・溝跡・ピット群

B地点からは多量の鉄滓が、調査区の北側半分7C-53b・7C-53dを中心として集中的に検出された。第73図の調査区壁の土層断面図をみると、調査区中央部分は窪んだような地形になっている。これは小規模な埋没谷があったからで、土層でいうと5・10・11層は遺構形成以前に自然埋没した可能性が高い。従って遺構形成時点ではすでに谷は埋没しており、緩やかな傾斜面地となっていたと考えられる。鉄滓の多くは、表土近くの土層中に含まれていた。また鉄滓の分布範囲と重なるように炭化物の濃密な分布も認められており、A地区同様にB地区の東側斜面上部に製鉄炉本体の存在が想定される。

3基の土壌はいずれも不定形をしており、出土遺物はない。7C-53b・7C-53dを中心とした鉄滓・炭化物の分布範囲と重なるが、検出はその下層となる。2号土壌(C-002)の覆土には炉壁片と焼土を含んでおり、製鉄が行われた当時の所産ではないかと推測される。7C-54グリッドに1号溝(D-001)、ピット群が位置する。ピット群の付近には東側斜面上部から流れ込んだと考えられる炉壁の大きな破片が検出されている。B区の検出遺物としては鉄滓が大多数を占め、それら鉄滓とともに炉壁や、甬の羽口片も認められた。またそれ以外にも調査区からは平安時代の土器片が検出されており、A地区検出の遺構・遺物群の年代と大きな隔たりはない。

(注)本遺跡からは多量の鉄滓が検出・回収されており総量は数トンに及ぶとみられるが、時間・労力上の制約によりすべての鉄滓の洗浄・計量等を行うことは出来ず、特徴的なものの抽出・分析を実施せざるを得なかった。

第24表 出土遺物観察表

A-001

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	坏	覆土上位	90	10.3	6.1	3.7	R・底部手持ちヘラケズリ	B	
2	坏	覆土中位	62	(11.0)	5.7	4.0	R・底部手持ちヘラケズリ	C	
3	坏	床直	155	13.0	7.1	4.3	R・底部回転ヘラケズリ	A	
4	坏	床直	105	11.6	6.5	4.1	R・底部手持ちヘラケズリ	A	
5	坏	床直	150	12.4	6.3	4.2	R・底部手持ちヘラケズリ・底部ヘラ切り	A	
6	高台付坏	床直	125	(19.2)	(10.2)	3.7	R・貼付高台	D	
7	灰輪陶器 長頸壺	床直	200		8.8	3.8+	R	E	自然輪付着
8	甕	床直	740	15.8	8.5	12.0	R・ヘラケズリ	A	
9	風字硯	竈内	160	長14.6+cm	幅10.1+cm	最大高3.2cm	B	墨の痕跡	

A-002

No	器種名	層位	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				長	幅	厚			
1	土師器 坏	床直	40	(10.8)		3.3+	ヘラケズリ・無彩	E	
2	土師器 甕	床直	475	11.0	6.3	10.1	ヘラケズリ	B	

1号窯跡灰原

No	器種名	出土地点	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	坏	灰原	27	(12.8)		3.1+	R	E	
2	坏	灰原	32	(13.0)		2.9+	R	E	
3	坏	灰原	22	(12.4)		3.3+	R	E	
4	坏	灰原	24	(10.8)		4.4+	R	E	
5	坏	灰原	53	(12.4)	(8.0)	4.3	R・底部手持ちヘラケズリ	E	
6	坏	灰原	40	(12.8)	(8.4)	4.2	R・底部手持ちヘラケズリ	E	
7	坏	灰原	36		(8.0)	1.5+	R・底部回転ヘラケズリ	E	
8	坏	灰原	70		8.4	1.2+	R・底部ヘラ切り	E	
9	蓋	灰原	77			2.5+	R・頂部回転ヘラケズリ	E	
10	甕	灰原	175	(23.8)		5.8+	R・タタキ	E	
11	甕	灰原	85				R・タタキ	E	
12	甕	灰原	430	(22.0)		(19.7)	R・タタキ	E	
13	甕	灰原	201		(15.8)	7.1+	R・タタキ	E	「田部・大」刻書

3号窯跡

No	器種名	出土地点	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				長	幅	厚			
1	丸瓦		275	13.7	6.5+	1.2	凹面布目・凸面ケズリ	E	

2号窯跡

No	器種名	出土地点	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	甕	焚口部	325	(22.2)		14.0+	R	E	
2	甕	焚口部	75			8.9+	R・タタキ	E	
3	甕	焚口部	370	(16.4)		10.2+	R	E	貼付隆帯
4	甕	焚口部	655	17.2		13.5+	R・タタキ	C	
5	甕	焚口部	16					E	「道」刻書
6	甕	焚口部	6					E	刻書
No	器種名	出土地点	重さ (g)	長	幅	厚	成形・調整手法	遺存度	備考
7	丸瓦	焚口部	220	10.1+	7.0+	1.8	凹面布目・凸面ケズリ	E	
8	丸瓦	焚口部	320	25.1+	7.9+	1.0	凹面布目・凸面ケズリ	E	1号窯と接合

土壌・溝跡

No	器種名	遺構名	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				口径	底径	器高			
1	甕	C-002	409	(16.4)		13.9+	R?・タタキ	E	
2	砥石	C-002	45.6	長8.0cm	幅3.3cm	厚2.2cm		B	砂岩製
No	器種名	遺構名	重さ (g)	長	幅	厚	成形・調整手法	遺存度	備考
1	平瓦	D-001	1050	21.5+	14.0+	2.3	凹面布目・凸面縄目	D	

A地区調査区出土

No	器種名	出土地点	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考
				長	幅	厚			
1	丸瓦	8C-33d	365	11.3+	13.4	1.7	凹面布目・凸面ケズリ	E	
2	丸瓦	8C-33d	253	12.6+	10.6+	1.1	凹面布目・凸面ケズリ	E	
3	平瓦	8C-35c	260	11.3+	6.5+	2.0	凹面布目・凸面縄目	E	
4	平瓦	8C-33d	570	14.9+	10.0+	2.4	凹面布目・凸面縄目	E	
5	平瓦	8C-23b	100	8.0+	6.5+	2.0	凹面布目・凸面縄目	E	

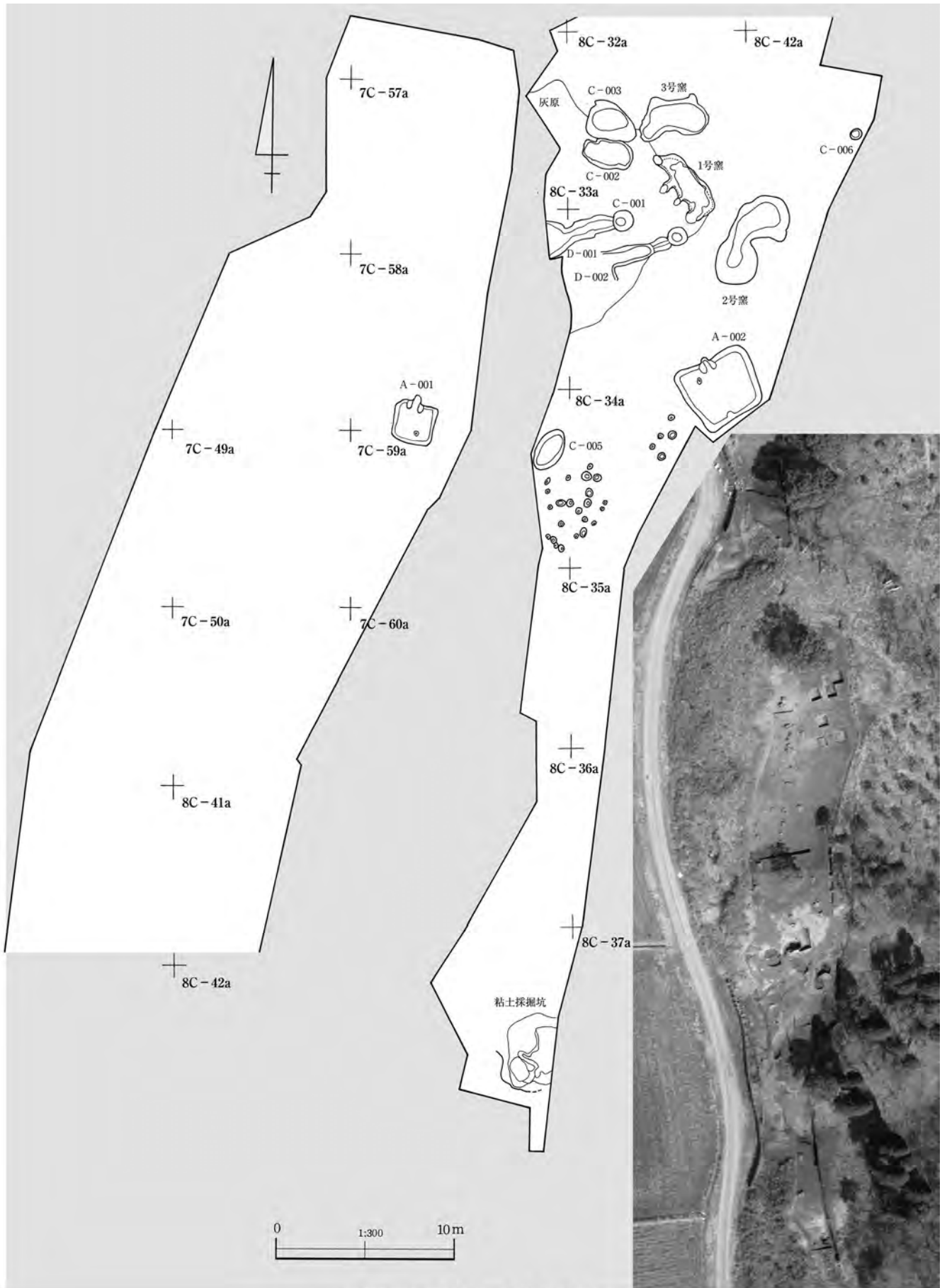
B地区調査区出土

No	器種名	出土地点	重さ (g)	法量 (cm)			成形・調整手法	遺存度	備考	
				口径	底径	器高				
1	坏	7C53a	32	(13.8)	(8.0)	4.2	R・底部手持ちヘラケズリ	E		
2	坏	7C53b	41		(7.5)	3.1+	R	E		
3	坏	7C53b	56	(18.0)		4.3	R	E	内黒	
4	高台付坏	7C54b	156	(15.4)		6.5	4.4	R・底部静止糸切り 内面ミガキ	D	内黒
5	羽口	7C53d	6725				分析試料No.12			
6	羽口	7C54b	1063				分析試料No.11			

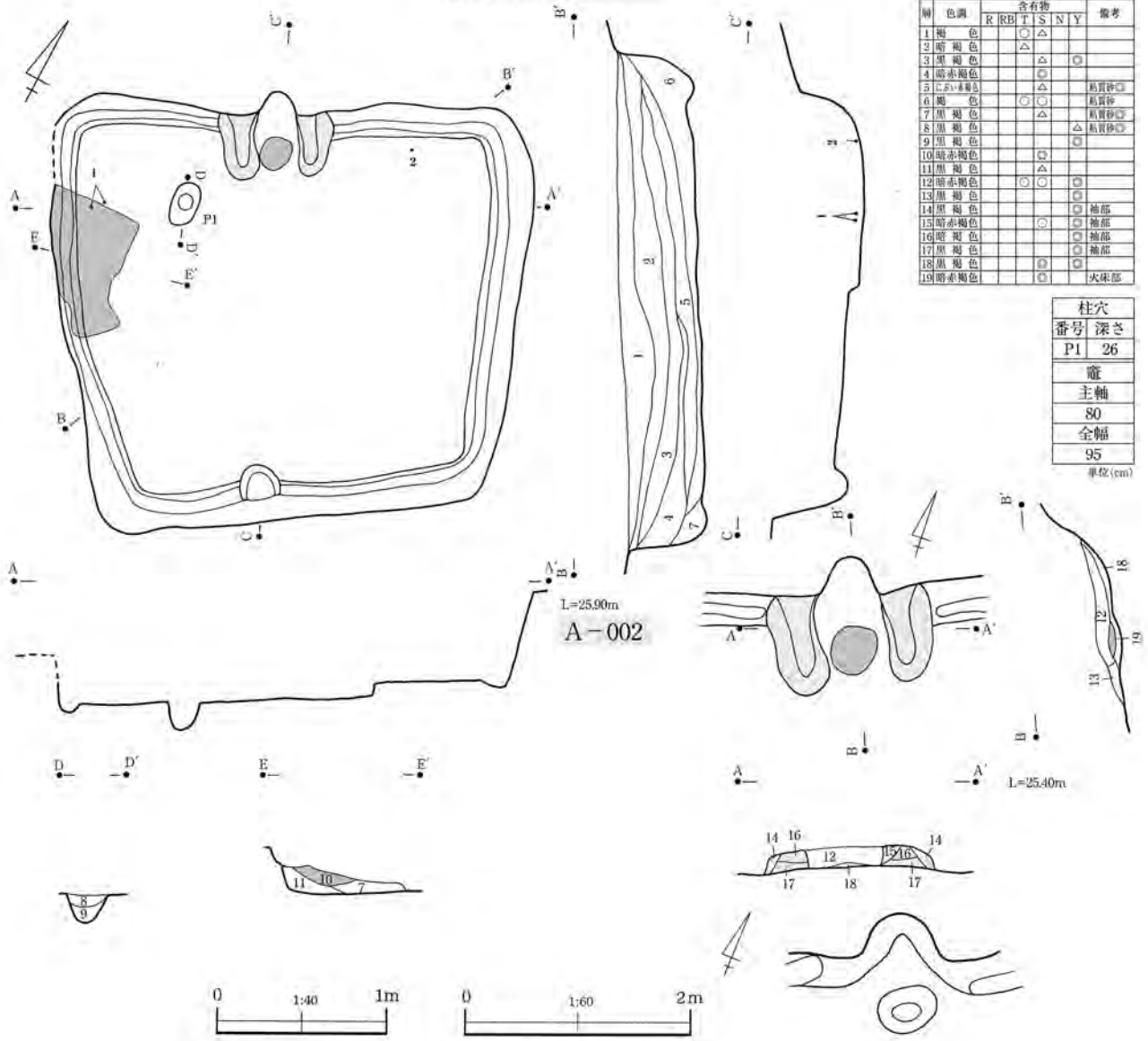
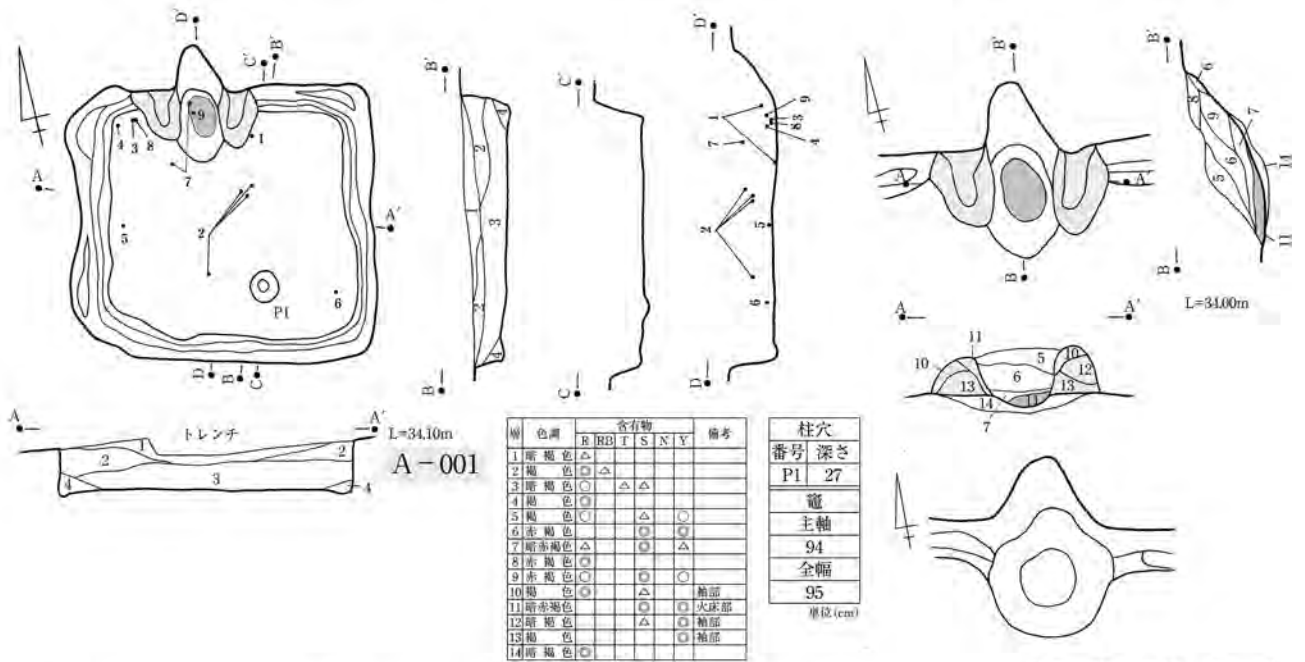
成形調整手法の「R」はロクロ成形を表す
遺存度 A(完形) B(3/4以上) C(1/2以上) D(1/4以上) E(1/4以下)



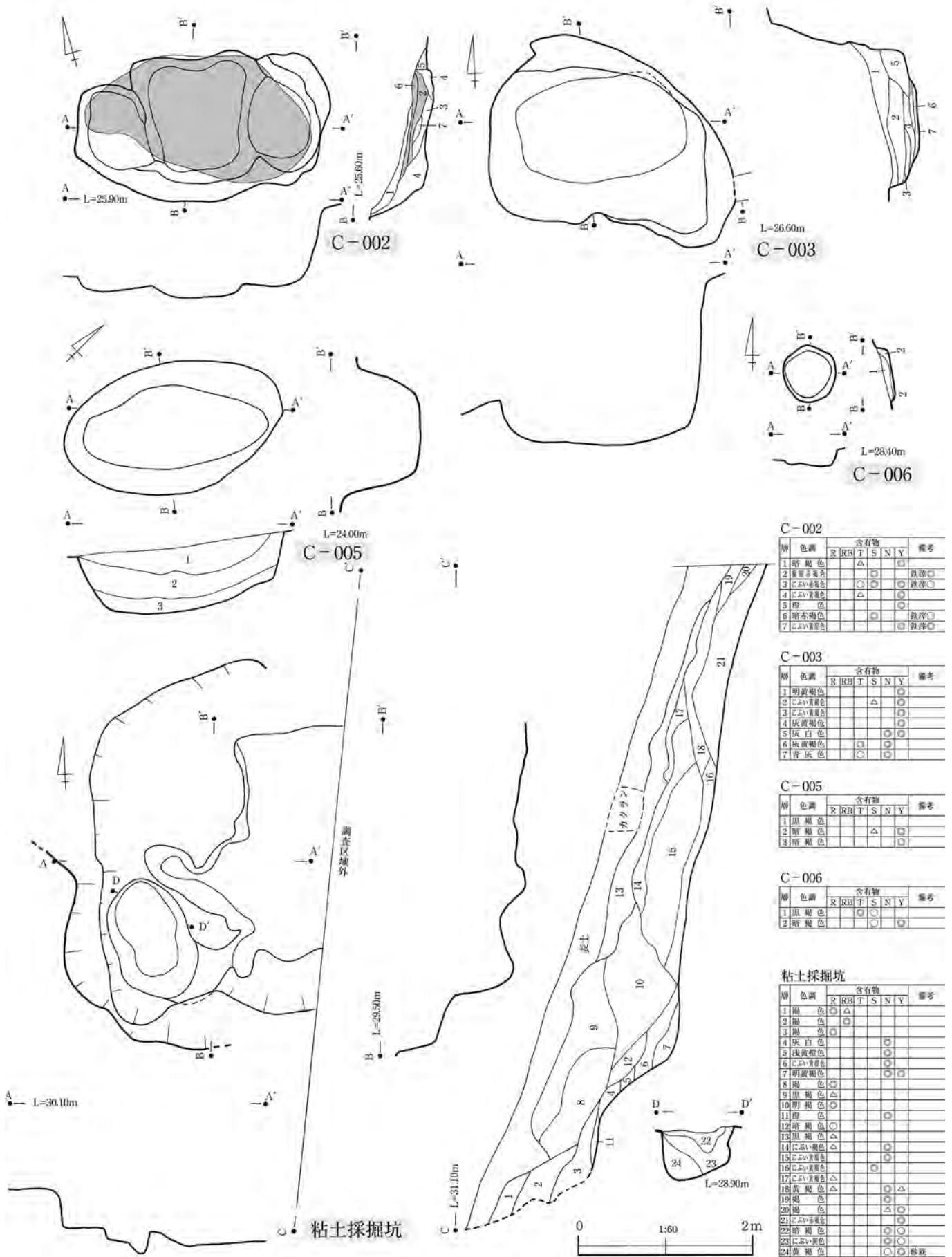
第66図 遺構配置図及び周辺地形図



第67図 A地区 遺構配置図



第68図 A-001・002



C-002

層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S	N	
1	暗褐色			△			◎
2	暗黒色						◎ 鉄滓◎
3	灰色						◎ 鉄滓◎
4	灰色			△			◎
5	褐色						◎
6	暗赤褐色						◎ 鉄滓◎
7	灰色						◎ 鉄滓◎

C-003

層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S	N	
1	明黄褐色						◎
2	灰色				△		◎
3	灰色						◎
4	灰黄褐色						◎
5	灰白色						◎
6	灰黄褐色						◎
7	青灰色						◎

C-005

層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S	N	
1	黒褐色						◎
2	暗褐色				△		◎
3	暗褐色						◎

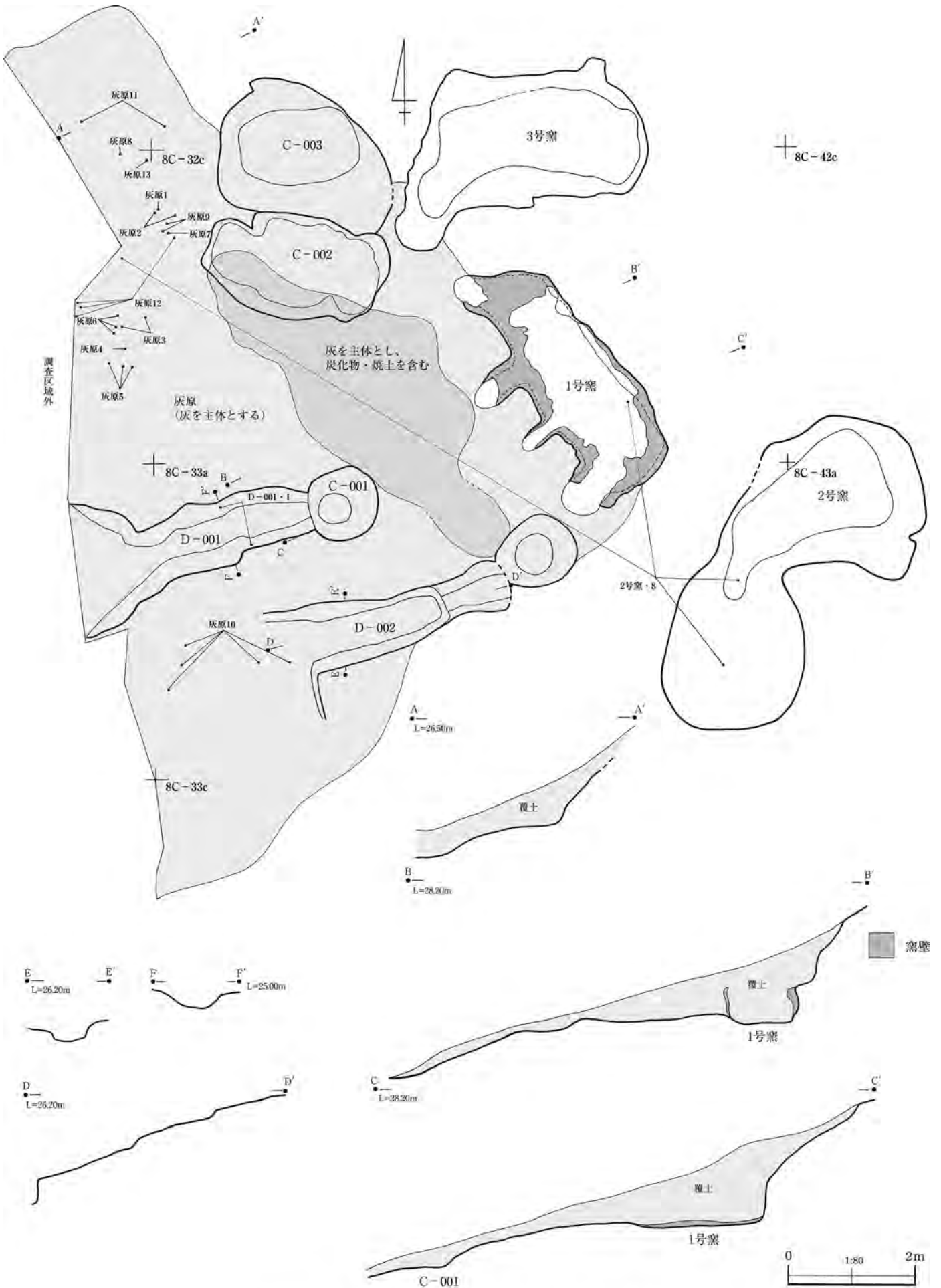
C-006

層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S	N	
1	黒褐色						◎
2	暗褐色						◎

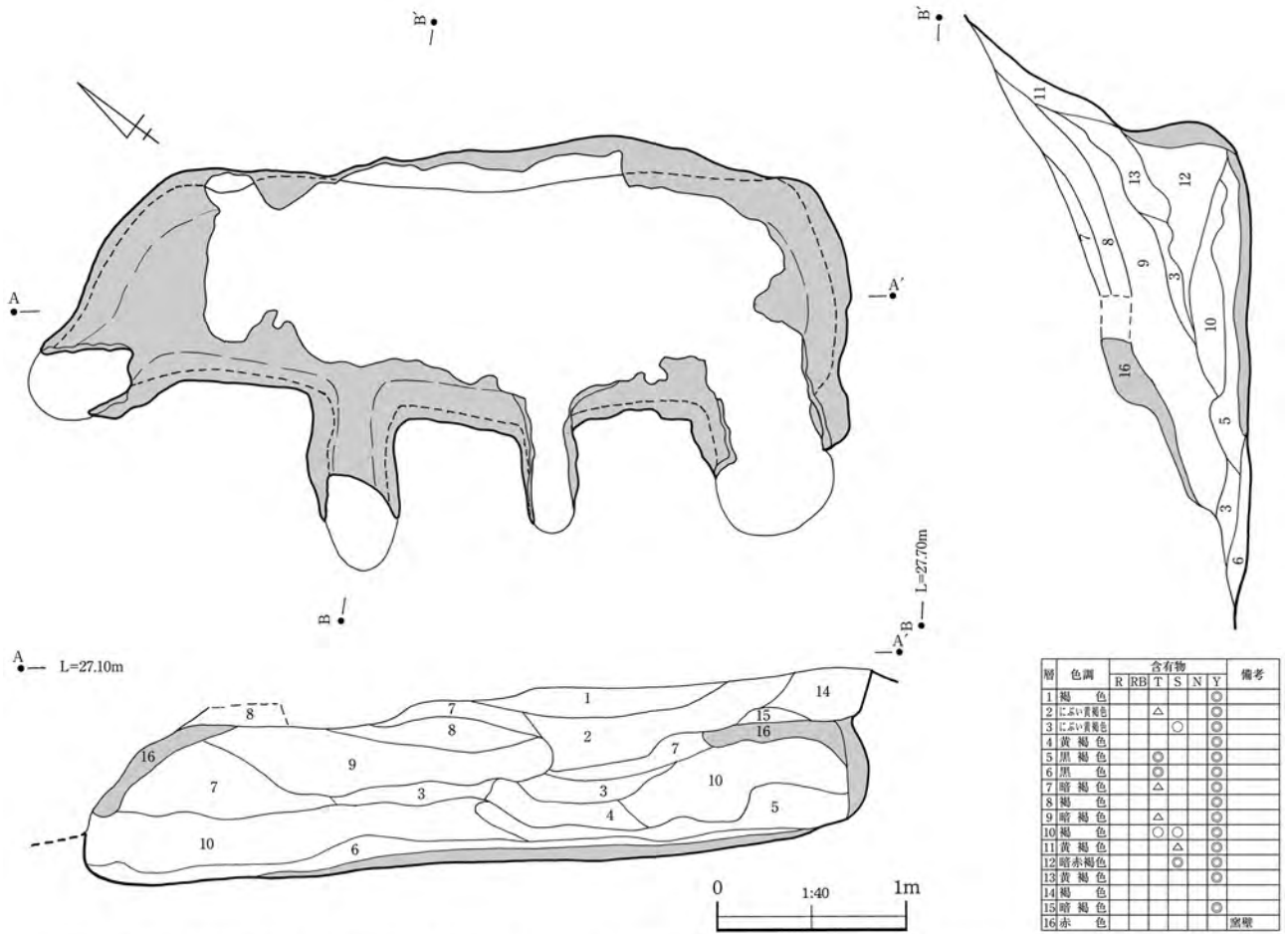
粘土採掘坑

層	色調	含有物					備考
		R	RB	T	S	N	
1	褐色			△			
2	褐色						◎
3	褐色						◎
4	灰白色						◎
5	浅黄褐色						◎
6	灰色						◎
7	明黄褐色						◎
8	褐色						◎
9	黒褐色						◎
10	褐色						◎
11	褐色						◎
12	暗褐色						◎
13	暗褐色						◎
14	灰色						◎
15	灰色						◎
16	灰色						◎
17	灰色						◎
18	黄褐色						◎
19	褐色						◎
20	褐色						◎
21	灰色						◎
22	暗褐色						◎
23	灰色						◎
24	黄褐色						◎ 鉄滓

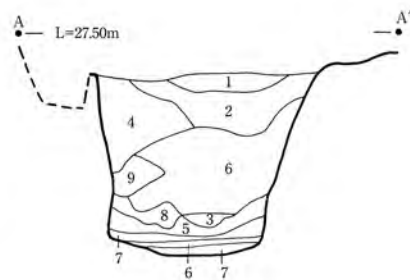
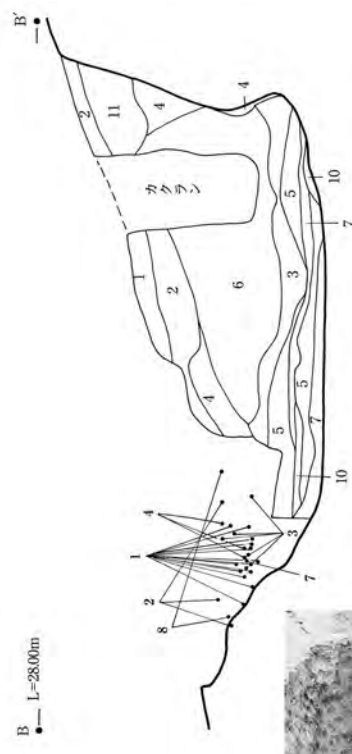
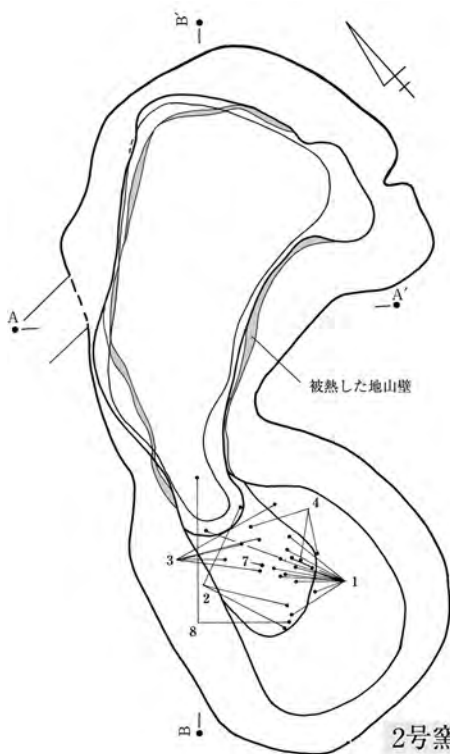
第69図 C-002・003・005・006、粘土採掘坑



第70図 C-001~003、D-001・002、1号~3号窯跡



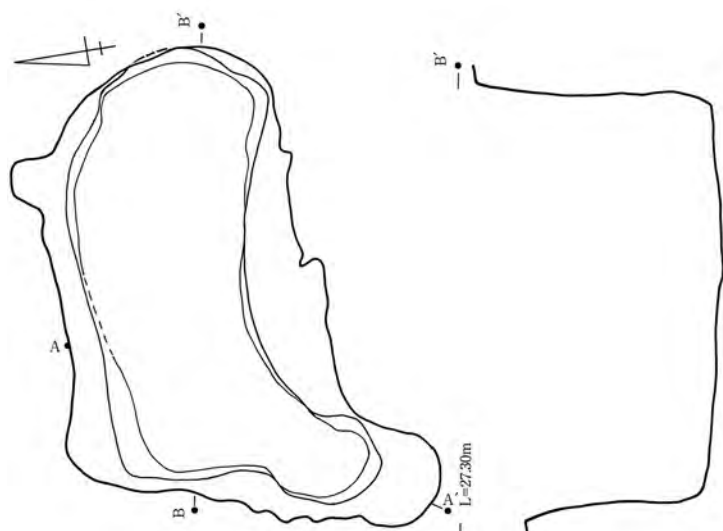
第71図 1号窯跡



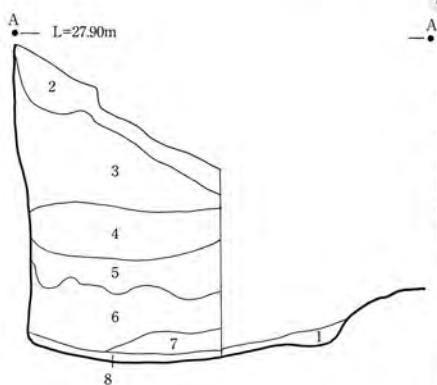
層	色調	含有物					備考	
		R	RB	T	S	N		Y
1	にぶい赤褐色						◎	
2	にぶい赤褐色				△		◎	
3	暗赤褐色						◎	YB△
4	褐色						◎	YB△
5	暗赤褐色				○		◎	
6	暗褐色						◎	遺棄した遺物
7	赤褐色			◎	◎			
8	褐色				△			YB◎
9	褐色							YB◎
10	にぶい赤褐色					◎		YB◎
11	褐色				△		△	



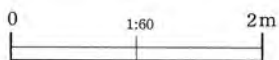
2号窯跡 土層断面



2号窯跡

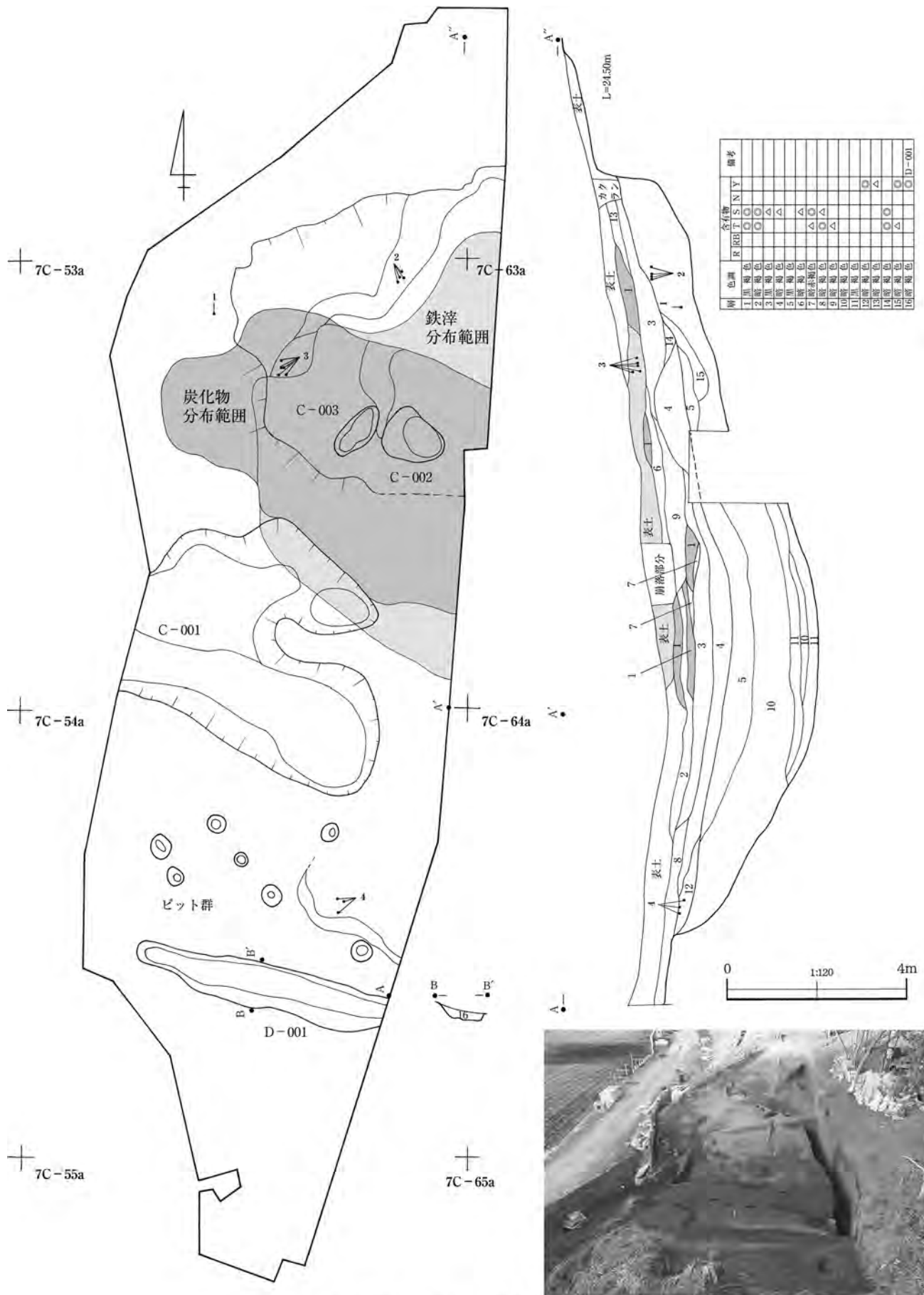


層	色調	含有物					備考	
		R	RB	T	S	N		Y
1	暗褐色			◎			◎	
2	褐色							
3	明黄褐色							◎ 遺棄した遺物
4	黄褐色			◎				砂鉄
5	明黄褐色			◎				砂鉄
6	褐色			△				
7	明褐色			△				
8	明褐色			△				黄灰材 3cm

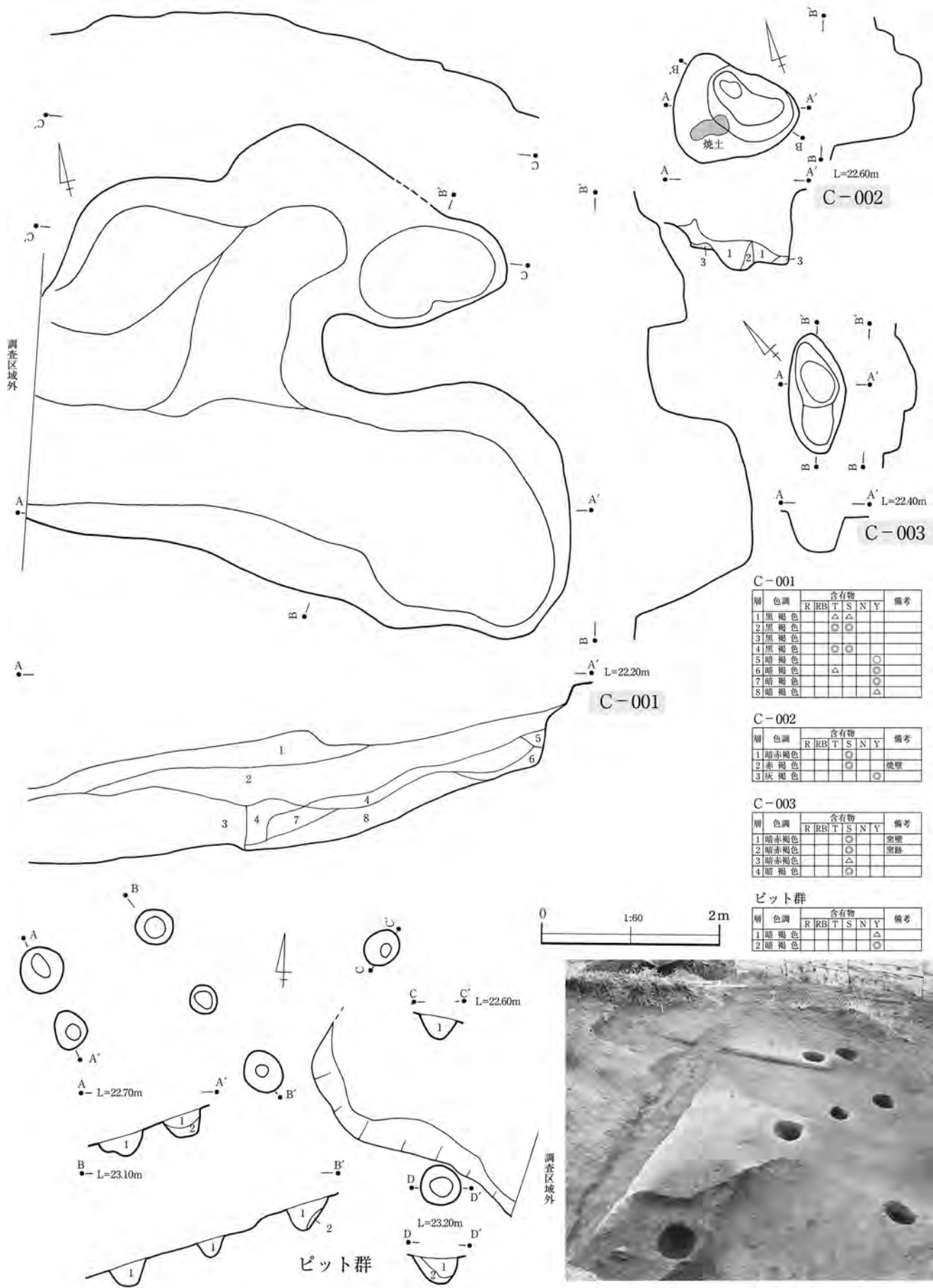


3号窯跡

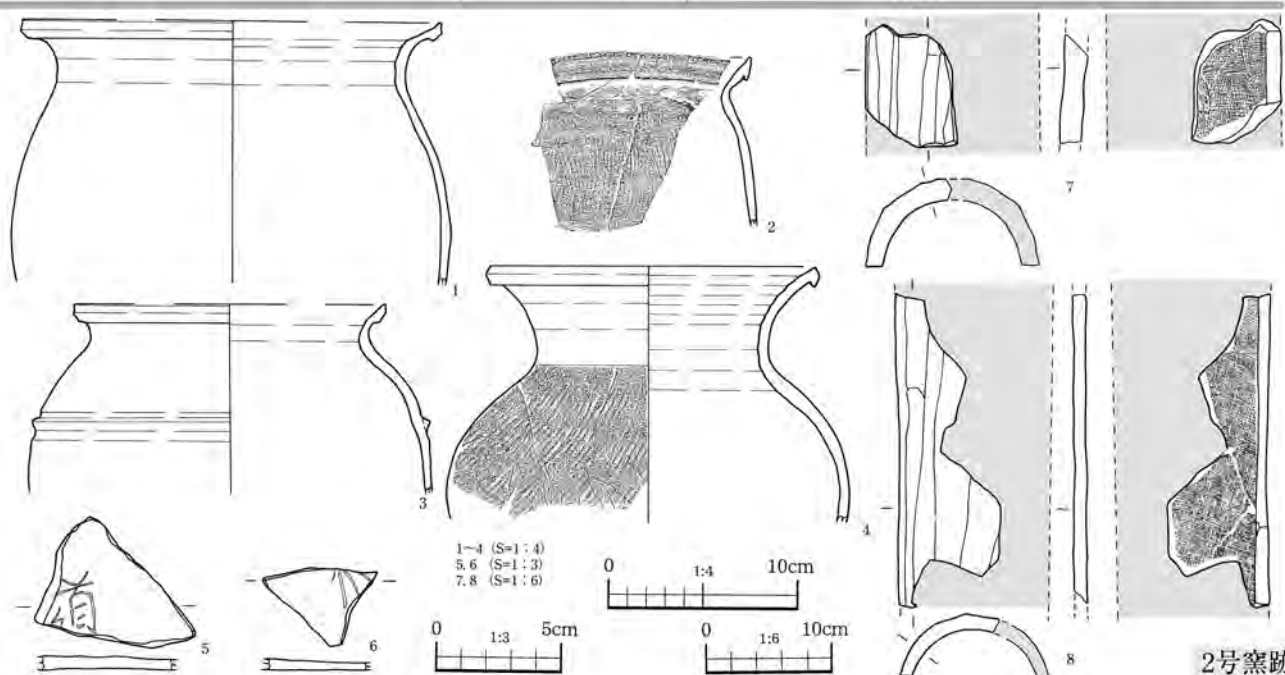
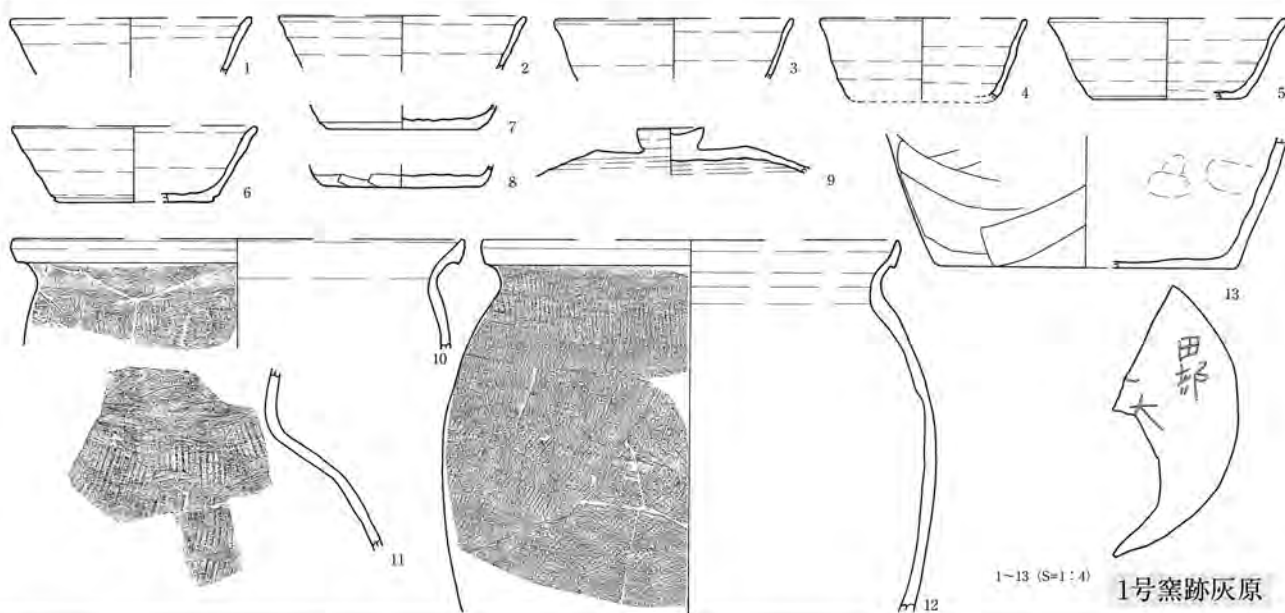
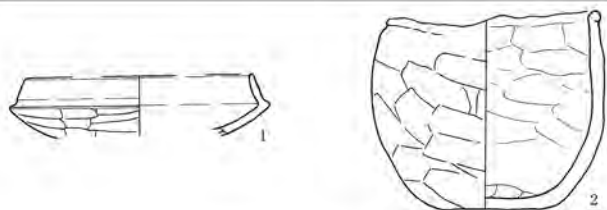
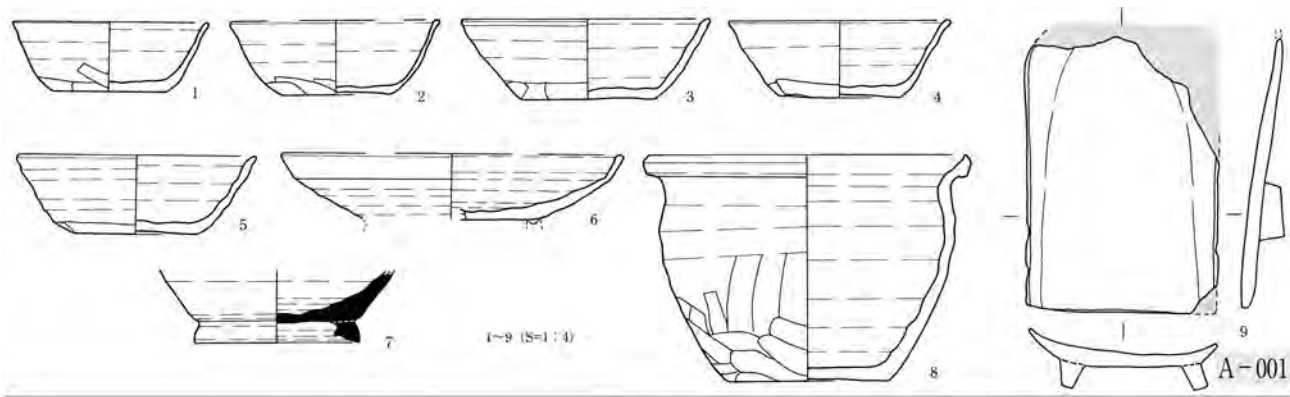
第72図 2号・3号窯跡



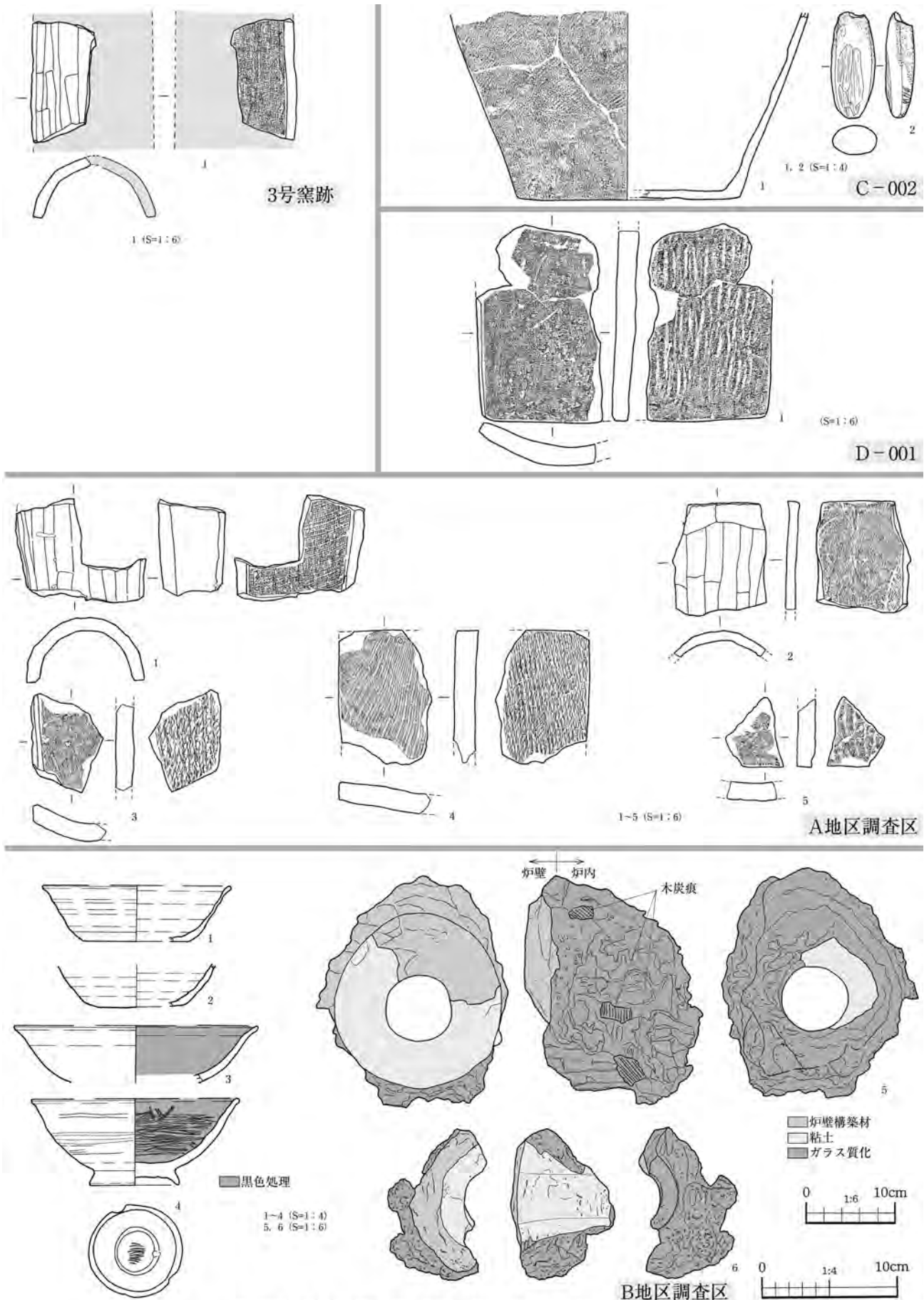
第73図 B地区 遺構配置図



第74図 C-001～003、ピット群



第75図 A-001・002、1号窯跡灰原・2号窯跡出土遺物



第76図 3号窯跡、C-002、D-001、調査区 出土遺物

第4節 千葉市ムグリ遺跡出土製鉄遺物の分析・調査

川鉄テクノロジー株式会社 分析・評価事業部 埋蔵文化財調査研究室
岡原 正明・天辰 正義・小川 太一・福田文二郎

1. はじめに

千葉県千葉市平和公園遺跡群ムグリ遺跡（千葉市若葉区多部田町）から出土した製鉄関連遺物の鉄滓、羽口および砂鉄について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査依頼があった。調査の観点として、鉄滓の製鉄原料の推定、製鉄工程上の位置付け、観察上の特記事項などを中心に調査した。その結果について報告する。

2. 調査資料と調査項目

調査資料と調査項目を以下の表1に示し、調査方法・試験法は紙数のため省略。調査・検討結果を以下に示す。

表1 調査資料と調査項目

資料No	出土地区・遺構・グリッド名	資料種別 寸法（長さ・幅・厚さ）	原素 材	重量 g	着磁 力	MC 反応	外 観 写 真	化 学 成 分	組 織 写 真	SEM EDX	X 線 回 折	発 熱 量	耐 火 度	粒 度 分 布
1	ムグリA C-003	粒状滓⇒粒状滓・粒状鉄の混合物 (φ3~8.5mm、7点)	鉄滓	0.9	稍強	無	○	○						
2	ムグリA 8C-43c	粒状滓⇒粒状滓・異物の混合物 (u3~8.5mm、8点)	滓	1.1	稍強	無	○	○						
3	ムグリA 8C-43	流出滓⇒流出滓 (51・38・31mm)	滓	71.2	弱	無	○	○	○		○			
4	ムグリA 8C-43a	流出滓⇒流出滓 (51・29・22mm)	滓	17.7	弱	無	○	○	○		○			
5	ムグリA 8C-34	鑄鉄片⇒鑄鉄片 (33・35・5.7mm)	鉄	139.0	強	有	○	○	○	□				
6	ムグリB 7C-53b	流出滓⇒流出滓 (50・33・25mm)	滓	44.0	弱	無	○	○	○		○			
7	ムグリB 7C-53b	粒状滓⇒粒状鉄 (φ5mm、7点)	鉄	2.7	強	混 合	○		○	□				
8	ムグリB 7C-53d	鉄塊系⇒流出滓 (76・60・60mm)	滓	344.9	稍強	無	○	○	○		○			
9	ムグリB 7C-54b	鉄塊系⇒鉄滓（含鉄、炉内滓） (121・91・56mm)	鉄滓	620.9	強	有	○	○	○					
10	ムグリB 7C-53c	鉄塊系⇒鉄滓（含鉄、炉内滓） (99・86・61mm)	鉄滓	708.7	強	有	○	○	○	□				
11	ムグリB 7C-53b	羽口⇒羽口 (170・135・68mm)	胎土	1063	弱	無	○	○	○		○		○	
12	ムグリB 7C-53b	羽口⇒羽口 (外u150mm、内u75mm)	胎土	6725	弱	無	○	○	○		○		○	
13	ムグリA 1号窯跡	窯体⇒窯体 (62・53・34mm)	胎土	172.4	稍弱	無	○	○	○				○	
14	ムグリA 1号窯跡内	炭化材⇒木炭 (u38・40~50mm)	木炭	37.6	無	無	○	○	○	■		○		
15	遺跡周辺採取（磁選）	砂鉄⇒砂鉄（赤目・真砂の範疇外） (80l m)	鉱石	106.8	強	無	○	○	○					○

註(1) 名称、資料Noと資料種別は、資料の記載による。MC反応はメタルチェッカーによる金属検知反応。

(2) 種別の項で⇒後は、検討結果である。

(3) 成分分析□は、SEM観察とSEM-EDXによる介在物の成分分析を行った。

(4) 資料No.14の■は、SEM観察を示す。

3. 調査結果

(1) 資料番号 No.1 粒状滓 ⇒ 粒状滓・粒状鉄の混合物

本資料は、 $u\ 3\text{mm}\sim u\ 8.5\text{mm}$ のきれいな球形をしたものから、突起のある楕円形のものや灰汁が発泡凝固した様相の軽量灰白色のものなど7点が収集されている。資料の総重量0.9gである。No.1資料の(大)と(小)写真は、粒状鉄の組織である。黒色部分は、芋虫状の片状黒鉛が析出している。白色部分はパーライト(pearlite、フェライト: αFe とセメンタイト: Fe_3C の共晶鉄-炭素化合物)が析出していて、一部錆化している。赤色(凹んだ穴)はさび部分である。白色は、錆化したゲーサイト($\text{FeO}(\text{OH})$)が全面を覆っているものとみられる。No.1資料の(中)は、ガラス質粒状滓である。したがって、この資料は、粒状滓と粒状鉄の混合物(7個)と推定される。

(2) 資料番号 No.2 粒状滓 ⇒ 粒状滓・異物の混合物

資料 No.1と同様、 $u\ 3\text{mm}\sim u\ 8.5\text{mm}$ の球形をしたものから、突起のある楕円形のもの、気泡痕のあるものなど、8点が収集されている。小鉄片が錆化して瘤を形成した様相のものなども含まれる。総重量は1.1gである。

顕微鏡組織写真の最前面に針状または四角状に見えるチタン鉄酸化物のイルメナイト(Ilmenite: $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)結晶と短冊状のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)結晶が観察される。本資料は、①砂鉄系製錬滓(粒状滓)で、②製錬の鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。なお、異物として植物の種子状のものが見られた。

(3) 資料番号 No.3 流出滓 ⇒ 流出滓

本資料は、長さ51mm×幅38mm×厚さ31mmで、総重量は71.2gである。割欠面が三方にある黒色溶融滓で破面の一部や凹部に茶色の水酸化鉄が発生している。顕微鏡ミクロ組織写真の前面に大きく四角状に見えるウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)結晶と樹枝状のウスタイト(Wustite: FeO)および大きな白点の鉄(Fe)結晶が観察される。X線回折・顕微鏡組織と一致している。化学成分の分析結果(表2)によると、全鉄(T.Fe)34.5%に対して、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、17:83で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。滓中成分の指標となる造滓成分($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}$)は38.2%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニアを14.9%含有する。一方、製造工程の位置づけとして、図1に、全鉄とチタニアの関係を示す。図2には、全鉄と造滓成分の関係を示す。本資料は、図1では、砂鉄系製錬滓グループの範囲に属する。図2では、鉍石系製錬滓グループと砂鉄系製錬滓グループの中間位置に属する。したがって、本資料は、①砂鉄系製錬滓(流出滓)で、②鉄源には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(4) 資料番号 No.4 流出滓 ⇒ 流出滓

本資料は、長さ51mm×幅29mm×厚さ22mmで、総重量17.7gである。 $\phi\ 8\text{mm}$ 位のチューブから絞り出された様相を見せるくねくねとした初期流出滓資料にみえる。先端部には気泡痕が多い。全体に薄く水酸化鉄が付着しているが、土砂等の付着も無く清浄な資料である。顕微鏡組織写真前面に羊歯状のウスタイトおよび写真背面に四角形状がやや崩れた短冊形状をしたファイヤライト結晶が観察される。化学成分分析の結果(表2)によると、全鉄10.8%に対して、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、24:76で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。造滓成分は59.4%と高い。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニアを23.1%含有する。図1と図2を参照。

したがって、本資料は、①砂鉄系製錬の流出滓で、②製錬過程で炉材に融着し、流出した可能性が高い。鉄源にはチタニアを中程度含有する砂鉄が使用されたと、推定される。

(5) 資料番号 No.5 鋳鉄片 ⇒ 鋳鉄片

本資料は、長さ33mm×幅35mm×厚さ5.7mmで、総重量139gである。錆化が著しく、茶褐色の水酸化鉄に厚く覆われ錆の剥離部は黒色に錆化している。湾曲箇所は無く偏平で鉄鋳物の破片状を呈す。割欠面は鋭角になっている。

顕微鏡組織写真は全体的には共析鋼の空冷組織を呈している。すなわち、黒色のパーライトから白色のフェライトが析出している。一方、鉄中の炭素含有量が2.2%で、亜共晶組成の鑄鉄である。しかし、典型的な鑄鉄の凝固組織は観察されていない。したがって、共晶鑄鉄が熱処理を経て、鑄物中の炭素が一部脱炭されて、亜共晶(2% C) 近傍までに炭素濃度が低下した鑄鉄片と推察される。SEM 観察写真には鉄酸化物(さび)以外に、介在物や鑄鉄組織は観察されなかった。したがって、本資料は、亜共晶組成(約2% C)の鑄鉄片、と推定される。

(6) 資料番号 No.6 流出滓 ⇒ 流出滓

本資料は、長さ50mm×幅33mm×厚さ25mm、総重量44.0gである。溶岩流の先端部のように褶曲した資料で、50mm程度で折れている。破面には気泡の空孔が多いが土砂が詰まっていない。薄く水酸化鉄が付いているのみである。顕微鏡ミクロ組織写真の前面に大きく四角状に見えるウルボスピネル結晶と樹枝状のウスタイトおよび大きな白点の鉄結晶が観察される。X線回折と顕微鏡組織は一致している。化学成分分析の結果(表2)によると、全鉄44.5%に対して、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、32.3:67.6で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニアを12.2%含有する。(図1と図2を参照)。したがって、本資料は、①砂鉄系製錬滓(流出滓)で、②鉄源には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(7) 資料番号 No.7 粒状滓 ⇒ 粒状鉄

本資料は、いずれも ϕ 5mm前後の粒の比較的揃った粒状資料7点が採取されている。総重量2.7gである。うち3点にMC反応があり、製錬時に生成される鉬玉(ケラダマ)の可能性もある。顕微鏡組織写真(上)は、レーデブライト組織(白色のセメントライトと黒色のパーライト)が平行配列や樹枝状配列を示す。炭素濃度は共晶(4.3%)から亜共晶(4.3~2.1%)が観察された。一方、下に示した写真には、フェライト組織(白色)にパーライト組織(黒色)が粒界を構成している組織が観察された。

したがって、本資料は、炭素濃度の高い鑄鉄と極低炭素の鉄を混合している粒状鉄、と推定される。

(8) 資料番号 No.8 鉄塊系 ⇒ 流出滓

本資料は、長さ76mm×幅60mm×厚さ60mmで、総重量344.9gである。割欠面の多いごろっとした気泡の多い鉄滓である。一部に黒褐色の水酸化鉄瘤があるが、MC反応は無い。気泡跡には砂礫と水酸化鉄が詰まっており重量感のある資料である。顕微鏡組織写真の前面に大きく四角状に見えるウルボスピネル結晶とその背面に短冊状のファイヤライト、僅かに樹枝状のウスタイト結晶が観察される。化学成分では、全鉄42.7%に対して、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、34:66で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。造滓成分は27.4%で、チタニアを14.5%含有する。図1と図2を参照。したがって、本資料は、①砂鉄系製錬滓(流出滓)で、②鉄源には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(9) 資料番号 No.9 鉄塊系 ⇒ 鉄滓(含鉄、炉内滓)

本資料は、長さ121mm×幅91mm×厚さ56mmで、総重量620.9gである。下部に丸く突出した楕形滓状資料。表面は凹凸が激しく黒褐色に濡れた感じの部分にMC反応がある。また割れも観察され、錆化進行中の様相を呈する。下部は砂礫や水酸化鉄の固着が多い。鉄部分の顕微鏡組織写真には、芋状で白色のフェライトと黒色のパーライトが析出していて、加工・鍛造の履歴は観察されない。滓部分の顕微鏡組織写真の前面には大きく四角状に見えるウルボスピネル結晶とその背面に短冊状のファイヤライト、僅かに樹枝状のウスタイト結晶が観察される。化学成分では、全鉄48.9%に対して、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、23:77で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。造滓成分は23.3%で、チタニアを10.6%含有する。図1と図2を参照。したがって、本資料は、①砂鉄系製錬滓(含鉄、炉内滓)で、②鉄源には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(10) 資料番号 No.10 鉄塊系 ⇒ 鉄滓(含鉄、炉内滓)

本資料は、長さ99mm×幅86mm×厚さ61mm、全体にMC反応があり、着磁力も強い。総重量708.7gである。

割欠面は二面あるが、表面の黒褐色部は銹化進行中の様相を呈する。橙色の水酸化鉄部や下部の砂礫の詰まった空孔部近傍も MC 反応がある。中央から切断した断面には金属の凝集模様が観察される。鉄部分の顕微鏡組織写真には、白色の粗大な（100～200 μm）フェライト粒子のみが観察され、加工・鍛造の履歴は観察されない。滓部分の顕微鏡組織写真の前面に多角形状の粗大な（100～400 μm）ウルボスピネル結晶とその背面に平滑なファイヤライト結晶が観察される。この鉄滓資料の中心部に球形の鉄粒子が凝集し、フェライト結晶が観察される。化学成分では、全鉄44.6%に対して、Fe₂O₃ と FeO の比率は、25：75で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。造滓成分を18.4%、チタニアを20.5%含有する。図1と図2を参照。したがって、本資料は、①砂鉄系製錬滓（含鉄、炉内滓）で、②鉄源には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(11) 資料番号No.11 羽口 ⇒ 羽口

本資料は、長さ170mm×幅135mm×厚さ68mmで、総重量は1063gである。黒色発泡したガラス質滓が溶着した羽口先端資料である。内径孔は75mm、推定外径は150mm程度であり、資料No.12と類似している。

胎土成分分析結果（表4）では、シリカ（SiO₂）が64.2%で、耐火度を向上させるアルミナ（Al₂O₃）も18.4%で、通常の粘土における約15～18%よりもやや高く、耐火度には有利である。耐火度の測定結果、1,510℃とやや高い温度が得られた。産地推定の検討は三辻利一⁵⁾の方法を利用して行った。蛍光X線の分析結果を用いて、本資料のK/Ca値とRb/Sr値を公知の須恵器、土器等のK/Ca値とRb/Sr値⁵⁾と比較した（図4）。本資料は三辻らの分類したグループ（大阪陶群、陸前群、美濃須衛群、出雲-伯耆群、筑紫群、中部地方グループ等）のいずれにも一致していない。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。

したがって、本資料は、①耐火度が約1,510℃と得られ、高温での製鉄用の羽口粘土の耐火度としては十分に使用でき、②その胎土は地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い、と推定される。

(12) 資料番号 No.12 羽口 ⇒ 羽口

本資料は、外径255mm×240mm、長さ180mm、内径孔75mmの大型羽口先端部資料。総重量は6725gである。付着滓には木炭繊維痕が多数観察される。羽口の中央孔は偏芯しており灰色の粘土を挟んで三層になっているが、外径150mm程度の羽口の径合わせのために粘土を詰めたようにも見える。

胎土成分では、シリカ（SiO₂）が67.4%で、通常の粘土（約60%程度）よりもやや高めで、耐火度を向上させるアルミナ（Al₂O₃）も14.0%で、耐火度は普通である。耐火度の測定結果、1,445℃と得られた。産地推定の検討は三辻ら⁵⁾の分類したグループの中で、陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群に含まれる位置にある。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣で特別な粘土を使用した可能性が高い。

したがって、本資料は、①耐火度が約1,445℃と得られ、高温での製鉄用の羽口粘土の耐火度としては十分に使用でき、②その胎土は地元近隣で特別な粘土を使用した可能性が高い、と推定される。

(13) 資料番号 No.13 窯体 ⇒ 窯体

本資料は、長さ62mm×幅53mm×厚さ34mm、他3点の資料で、総重量は172.4gである。表面に植物痕が残存しており砂質の素材は触るとさくさくと崩れていく感じである。図4の解析結果から、本資料は三辻ら⁵⁾の分類したグループのいずれにも一致していない。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。

したがって、本資料は、①耐火度が1,406℃と得られ、高温で使用される窯構築材の耐火度としては十分に使用でき、②その胎土は地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い、と推定される。

(14) 資料番号 No.14 炭化材 ⇒ 木炭

本資料は、長径38mm程度の炭を小割にし、長さ40～50mmで砂礫に覆われている。サイズから見て、製鉄や鍛冶に使用されたものであろう。木炭の工業分析結果を表6に示す。資料の木口（C-断面方向）の網目構造を

SEM 観察した。大きな導管の径は約75～200 μmと大きく、小導管の径は約5～10 μmと細かいので、木炭樹種同定に関する文献⁶⁾を参考にすれば、木炭の樹種はコナラあるいはクヌギと推定されるが、明確ではない。本資料は、①発熱量4,620kcal/kgと得られた。発熱量がやや低い木炭である。②樹種はコナラあるいはクヌギと推定される。

(15) 資料番号No.15 砂鉄 ⇒ 砂鉄 (真砂、赤目の範疇外)

本資料は、遺跡周辺に層状に分布している。磁選により採取されたため純度・粒径が揃った資料で、総重量は106.8gである。砂鉄の平均粒度は、80 μmと得られた。顕微鏡組織は、外観写真のように、断面形状は丸みを帯びている。

化学成分分析の結果(表7)によると、全鉄55.1%に対して、Fe₂O₃とFeOの比率は、25:75で、平衡状態図のマグネタイト領域に相当する。造滓成分は5.7%で、チタニアを16.5%含有する。これまでに報告された資料から、化学成分(チタニア、全鉄および酸化マンガン)との関係を図3に示す。本資料は、中程度含有チタニアの砂鉄に分類できるが、赤目・真砂の分類(範疇)から外れている。ただし、これまでの報告において、砂鉄の赤目・真砂の定義が解明されていないので、確実な推定はできない。

したがって、本資料は、①砂鉄の範疇に分類できるが、砂鉄製錬で高級な製鉄原料とされる真砂の分類から外れている。②本資料の粒度は80 μmと求められた。やや細かい粒度の砂鉄である。

4. まとめ

資料の調査結果および考察結果を以上に述べた、それらの結果を以下にまとめる。

1. 資料 No. 1、No. 2 と No. 7 は、粒状遺物である。資料 No. 1 は粒状滓と粒状鉄の混合物(7個)と推定される。資料 No. 2 は、砂鉄系製錬滓(粒状滓)と異物(植物の種子)の混合物と推定される。資料 No. 7 は、炭素濃度の高い鉄(鑄鉄)と極低炭素の鉄(鋼)が混合している粒状鉄である。
2. 資料 No. 3、No. 4 と No. 6 は、それぞれ流出滓で、製錬過程で炉外へ流出したと推定される。資料 No. 9 と No. 10 は鉄滓で、滓中に鉄を含有している。上記資料は、鉄滓の化学分析・顕微鏡組織観察から鉄製錬の始発原料には中程度含有のチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い。
3. 資料 No. 5 は、亜共晶組成(約2%C)の鑄鉄片と推定される。
4. 資料 No. 11～13 は、窯体・羽口の一部であり、それぞれ耐火度は、1,510℃、1,445℃、1,406℃と測定された。

高温での製鉄用の羽口粘土、または窯構築材の耐火度としては十分に使用できるものと推定される。

資料 No. 11 と No. 13 は、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。一方、資料 No. 12 は、地元近隣では特別な粘土を使用した可能性が高いと推定される。

5. 資料 No. 14 は、発熱量4,620kcal/kgの木炭で、その樹種はコナラまたはクヌギと推定されるが明確ではない。
6. 資料 No. 15 は、砂鉄の範疇に分類されるが、砂鉄製錬で高級な製鉄原料である真砂の分類から外れている。砂鉄の粒度は80 μmと求められ、やや細かい粒度の砂鉄である。

5. 参考文献

- 1) 窪田蔵郎著：『鉄の考古学』[雄山閣出版](1986)
- 2) たたら研究会編：『日本製鉄史論集たたら研究会創立25周年記念論集』[たたら研究会](1994)
- 3) 佐藤知雄：炭素鋼の顕微鏡組織写真と解説[丸善](1963.7)
- 4) 西沢泰二、佐久間健人：金属組織写真集 鉄鋼材料編[日本金属学会](1979.3)
- 5) 三辻利一：胎土分析による土器の産地推定：蛍光X線法
古文化財編集委員会編：考古学・美術史の自然科学的研究[日本学術振興会](1989)
- 6) 嶋倉巳三郎：福島県文化財調査報告集第215集 相馬開発関連遺跡調査報告 I 本文2、附編8 武井地区製鉄遺跡群出土炭化木の樹種調査、平成元(1989)年3月、p.299-356

6. 分析結果

• 鉄滓資料の化学成分分析

表2 千葉市ムグリ遺跡出土鉄滓の化学成分分析結果(%)

No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C.W.	Co	C	V	Cu	比率(%)		造滓成分%
																			Fe ₂ O ₃	FeO	
3	34.5	0.38	43.2	0.77	0.71	22.2	7.56	4.56	0.42	0.65	14.9	0.61	0.186	0.71	0.078	0.070	0.33	0.001	17.2	82.8	38.2
4	10.8	0.23	5.73	8.74	0.98	25.2	10.6	17.0	0.43	0.81	23.1	0.96	0.266	0.98	0.075	0.096	0.43	0.001	23.7	76.3	24.5
6	45.5	0.37	31.3	29.7	0.80	12.5	5.17	2.28	0.14	0.37	12.2	0.56	0.203	0.80	0.027	0.047	0.41	0.001	32.3	67.7	27.4
8	42.7	0.28	41.2	14.9	0.71	15.5	6.04	2.27	0.25	0.61	14.5	0.64	0.129	0.71	0.030	0.056	0.16	0.001	33.5	66.5	23.3
9	48.9	0.51	44.5	19.7	0.76	13.3	5.07	2.26	0.18	0.71	10.6	0.40	0.124	0.76	0.021	0.025	0.19	0.001	23.0	77.0	18.4
10	44.6	3.43	34.2	20.8	0.85	6.35	5.59	1.19	0.10	0.25	20.5	0.58	0.061	0.85	0.043	0.043	1.11	0.002	24.8	75.2	38.2

C.W. = 化合水、造滓成分 = SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + Na₂O + K₂O

• 資料No.5の化学成分分析

表3 千葉市ムグリ遺跡出土鉄片の化学成分分析結果(%)

No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Cr	Al	V	Ti	Ca	Mg
5	2.28	0.011	0.021	0.19	0.014	0.011	0.006	0.012	<0.001	0.034	<0.001	<0.001	<0.001

• 胎土の耐火度試験

表4 千葉市ムグリ遺跡出土羽口・窯体の胎土分析結果(%)および耐火度(℃)

No.	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C.W.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	Na ₂ O	K ₂ O	C	Igloss	耐火度測定 y obs (℃)
11 羽口	4.85	0.54	6.93	0.64	64.2	18.4	3.53	1.01	0.60	0.08	1.61	2.32	0.07	-0.17	1,510
12 羽口	4.99	0.65	7.13	0.95	67.4	14.0	3.21	0.77	0.97	0.08	1.44	3.26	0.73	1.06	1,445
13 窯体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,406

• 胎土の産地推定分析(蛍光X線分析)

表5 胎土中の特定元素の存在比

No.	標準資料JG-1aに対する元素比				元素存在比	
	Ca	K	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr
11	0.65	0.34	0.29	0.92	0.52	0.31
12	0.35	0.59	0.50	0.58	1.68	0.86
13	0.75	0.37	0.28	0.67	0.50	0.42

• 木炭資料(No.14)の工業分析

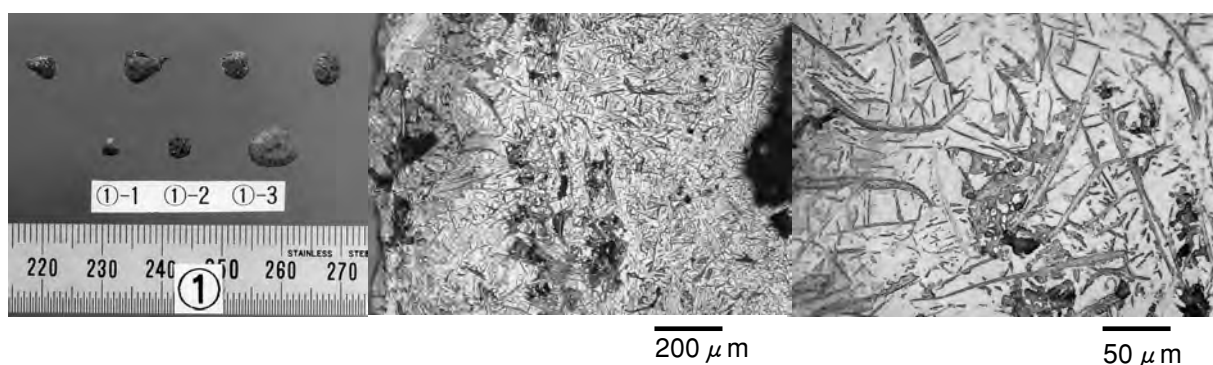
表6 千葉市ムグリ遺跡出土炭化木の工業分析結果(%)

No.	灰分	揮発分	固定炭素	水分	P	S	発熱量 (cal/g)
14	9.6	38.7	51.7	17.8	0.005	0.013	4,620

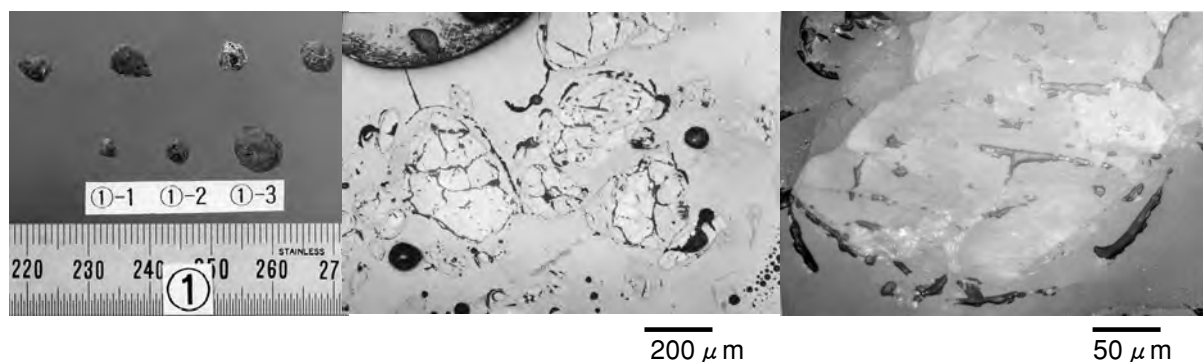
• 砂鉄資料(No.15)の化学成分分析

表7 千葉市ムグリ遺跡砂鉄の化学成分分析結果(%)

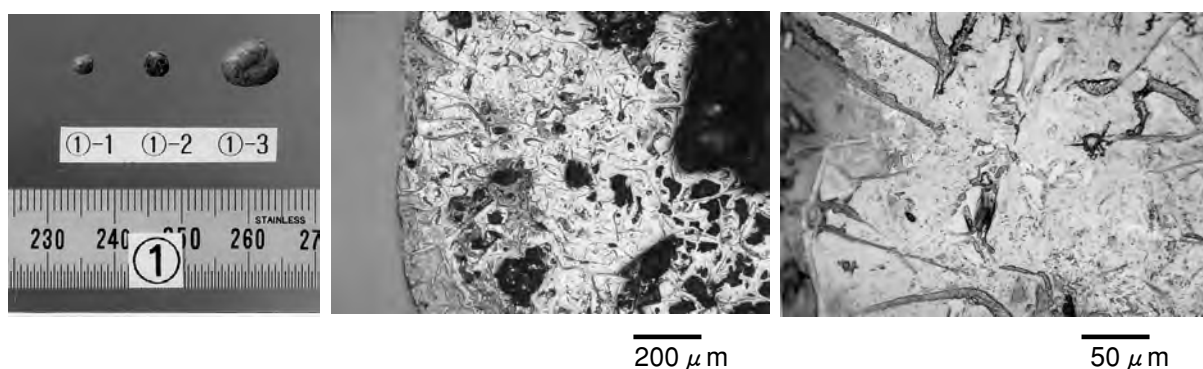
No.	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	Na ₂ O	K ₂ O	C.W.	V	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	比率(%)	
																Fe ₂ O ₃	FeO
15	55.1	24.0	52.1	1.37	2.46	0.01	1.84	16.5	0.53	0.02	0.89	0.30	0.31	0.30	0.032	24.8	75.2



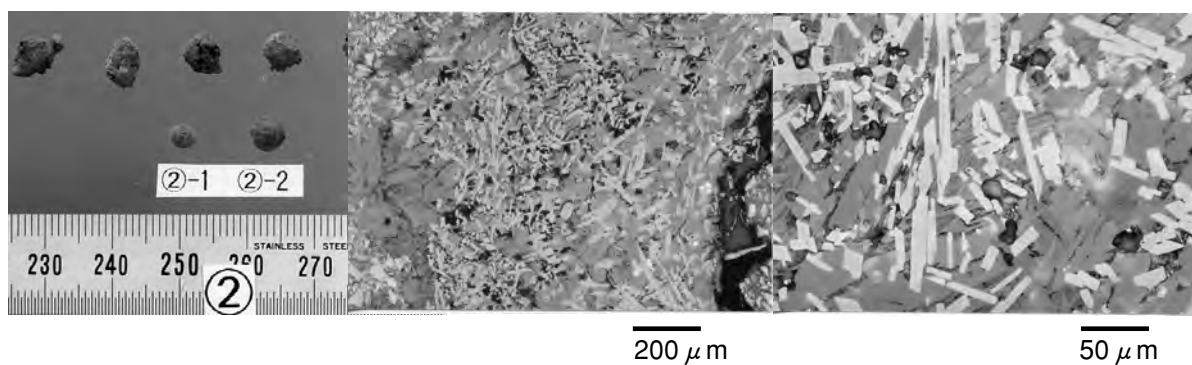
ムグリ遺跡遺物資料 (No.1 粒状鉄・大) の外観写真と顕微鏡組織写真



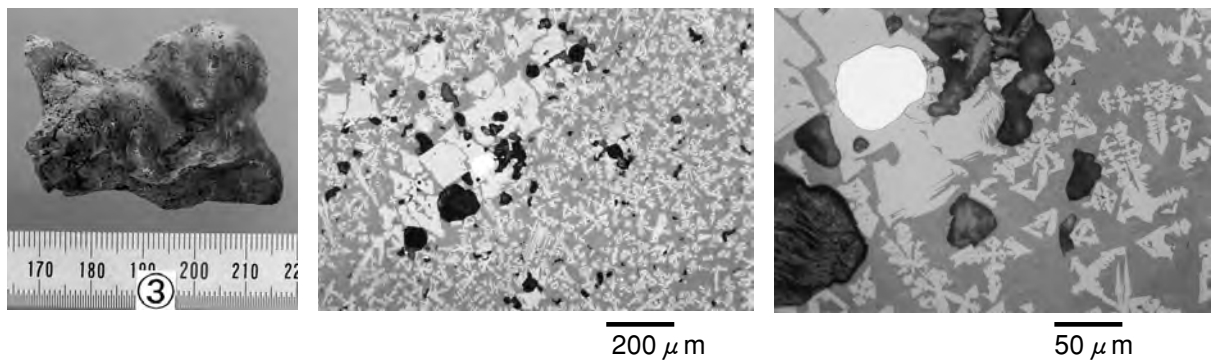
ムグリ遺跡遺物資料 (No.1 粒状鉄・中) の外観写真と顕微鏡組織写真



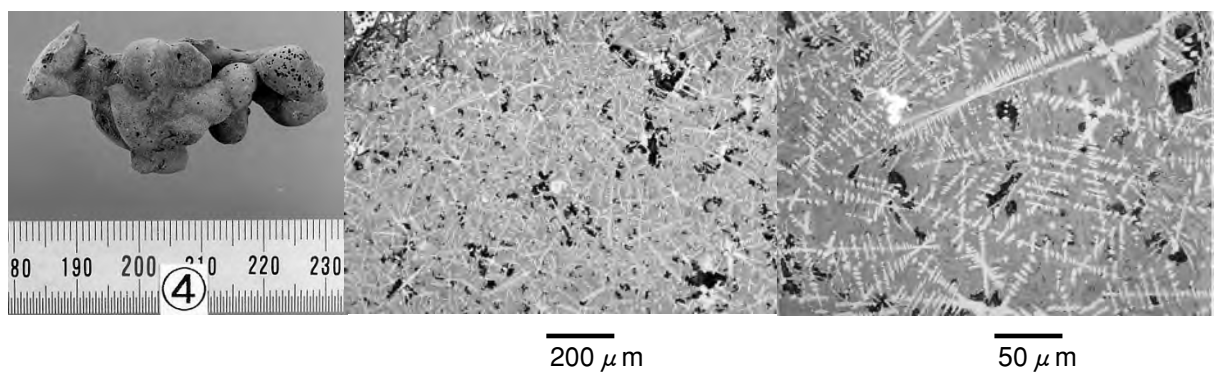
ムグリ遺跡遺物資料 (No.1 粒状鉄・小) の外観写真と顕微鏡組織写真



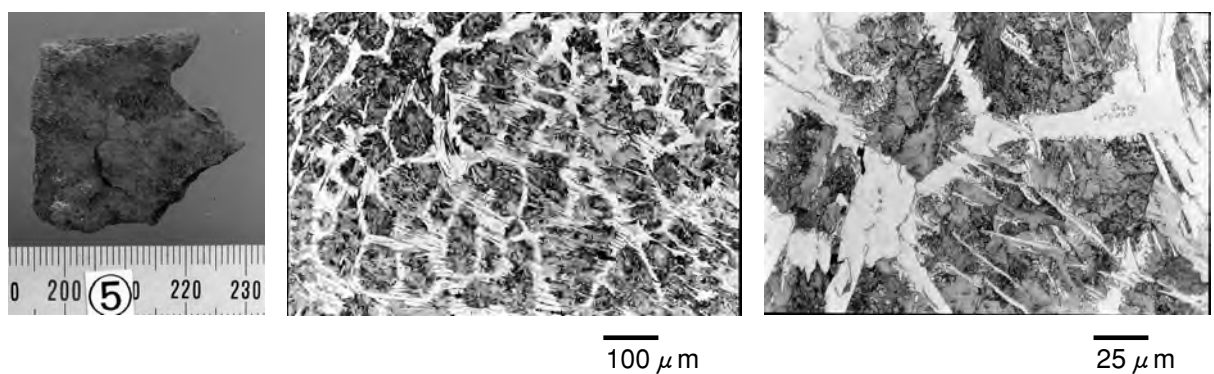
ムグリ遺跡遺物資料 (No.2 粒状滓) の外観写真と顕微鏡組織写真



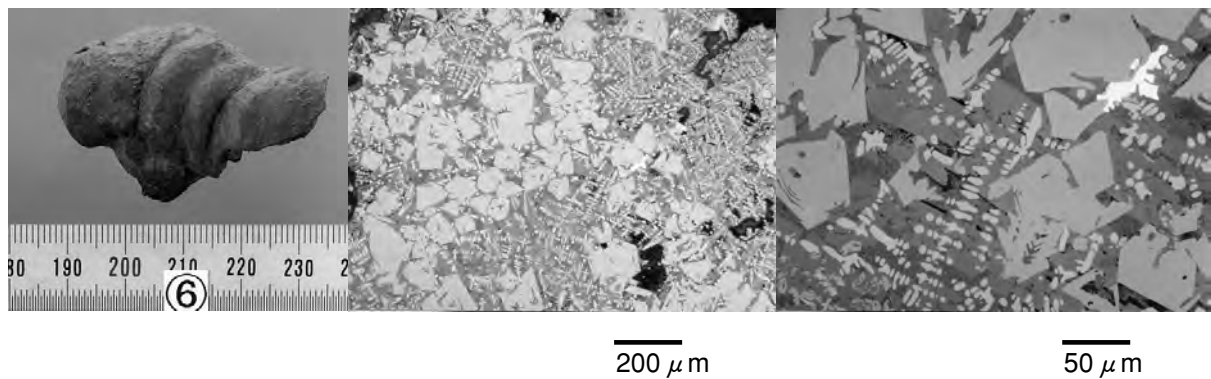
ムグリ遺跡遺物資料 (No.3 流出滓) の外観写真と顕微鏡組織写真



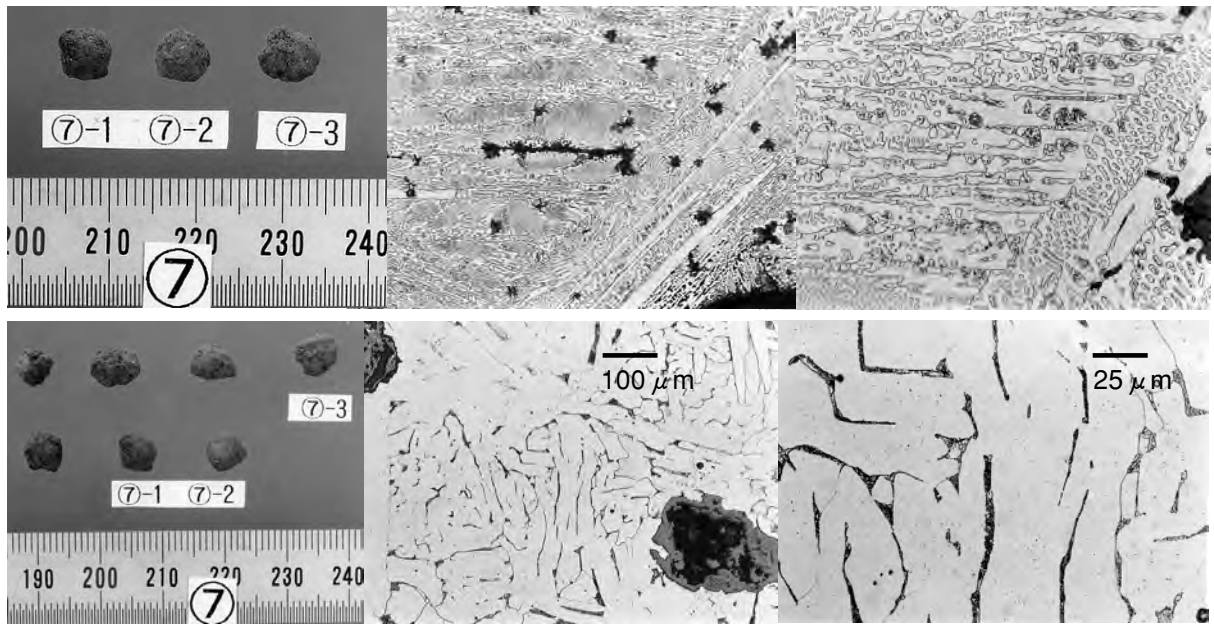
ムグリ遺跡遺物資料 (No.4 流出滓) の外観写真と顕微鏡組織写真



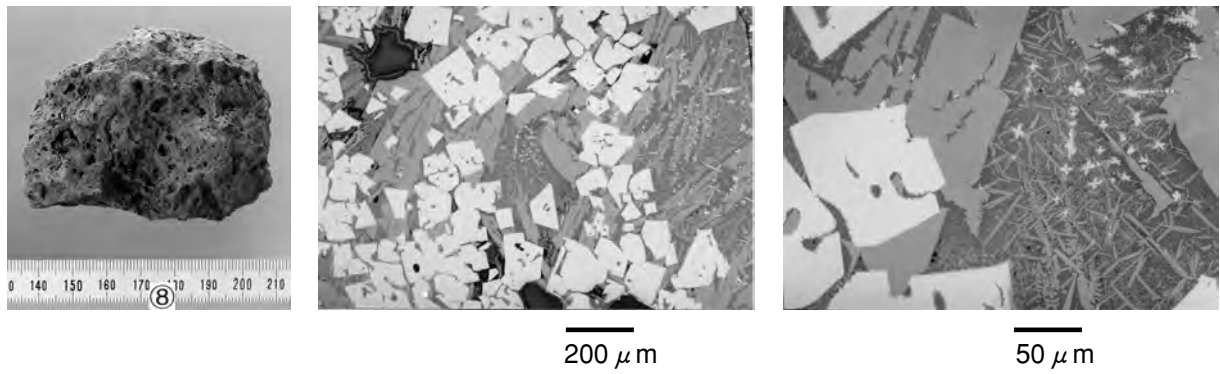
ムグリ遺跡遺物資料 (No.5 銑鉄片) の外観写真と顕微鏡組織写真



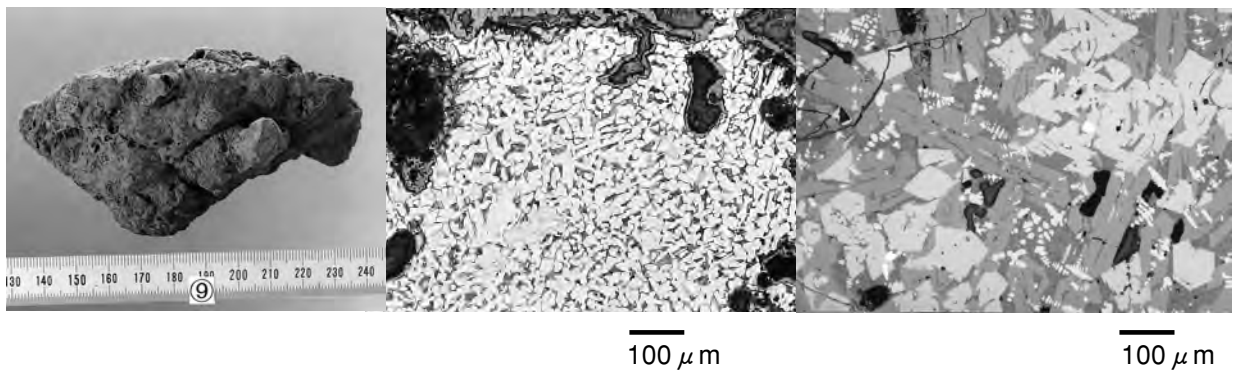
ムグリ遺跡遺物資料 (No.6 流出滓) の外観写真と顕微鏡組織写真



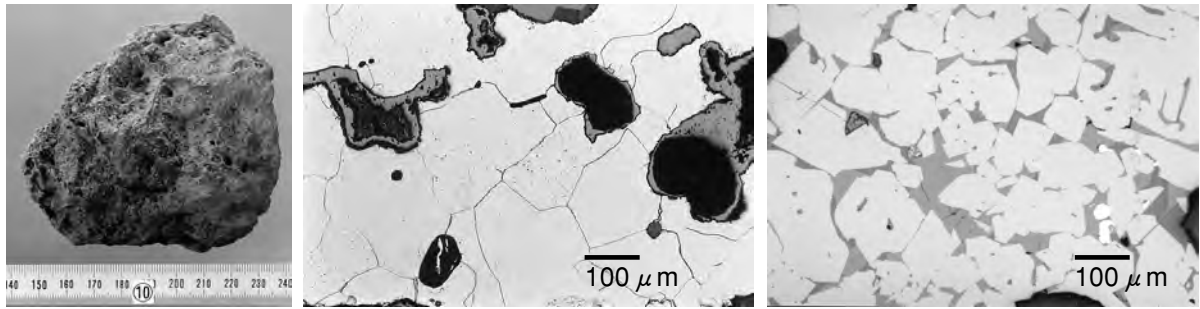
ムグリ遺跡遺物資料 (No.7 粒状鉄) の外観写真と顕微鏡組織写真



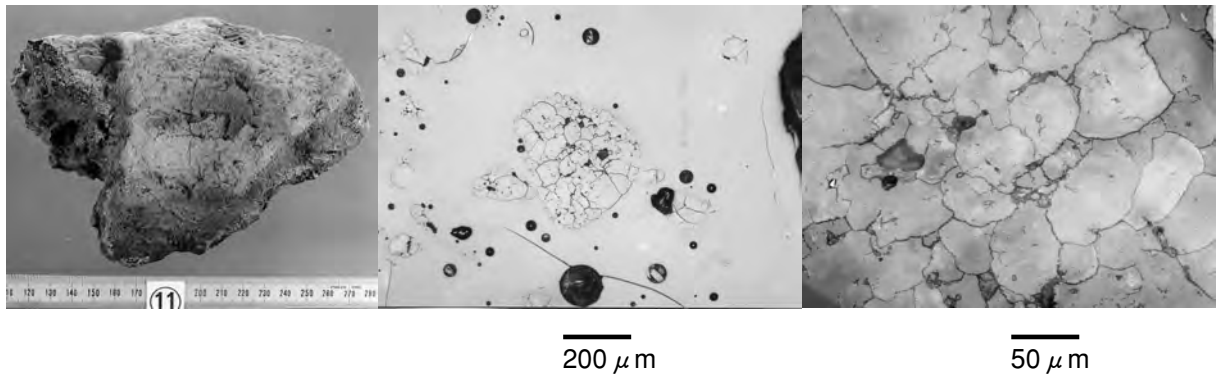
ムグリ遺跡遺物資料 (No.8 流出滓) の外観写真と顕微鏡組織写真



ムグリ遺跡遺物資料 (No.9 鉄滓、含鉄) の外観写真と顕微鏡組織写真



ムグリ遺跡遺物資料 (No.10 銑滓・含鉄) の外観写真と顕微鏡組織写真



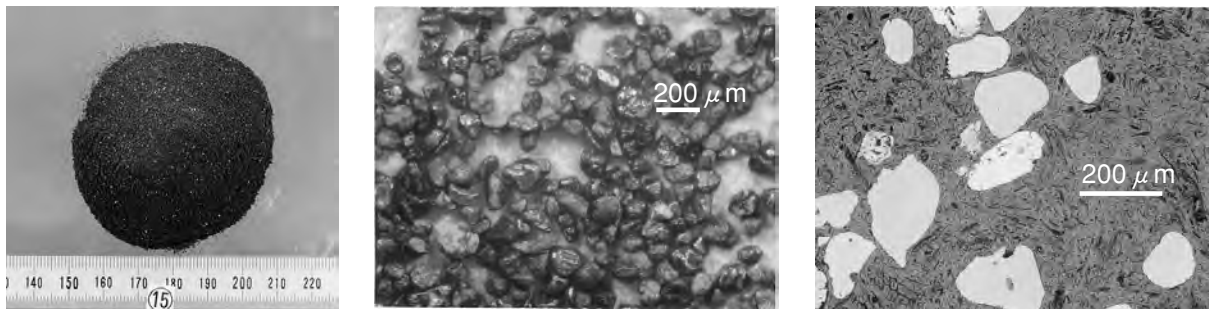
ムグリ遺跡遺物資料 (No.11 羽口) の外観写真と顕微鏡組織写真



資料 No.12 羽口の外観写真

資料 No.13 窯体の外観写真

資料 No.14 木炭の外観写真



ムグリ遺跡遺物資料 (No.15 砂鉄) の外観写真と顕微鏡組織写真

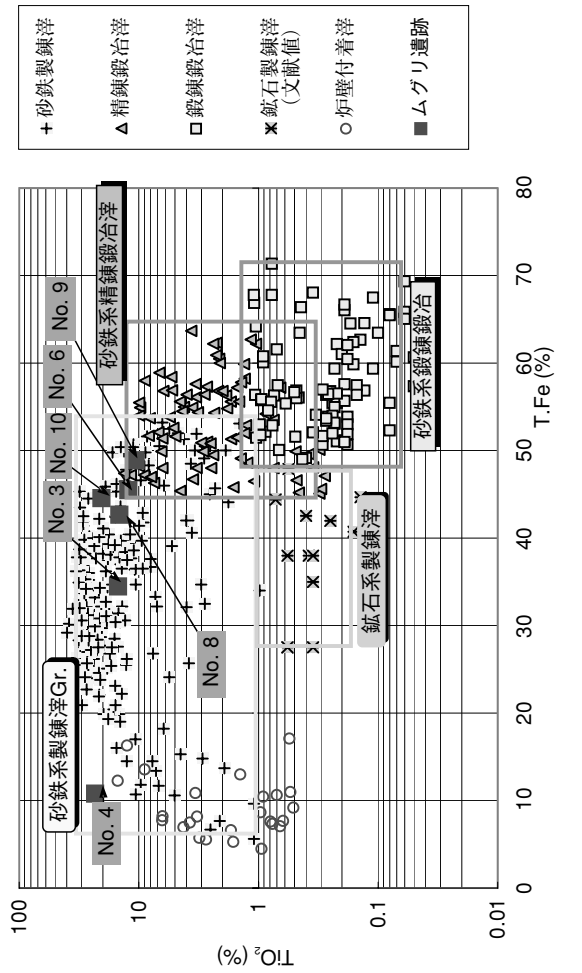


図1 出土鉄滓類の全鉄量(T.Fe)-チタニア(TiO₂)量分布図

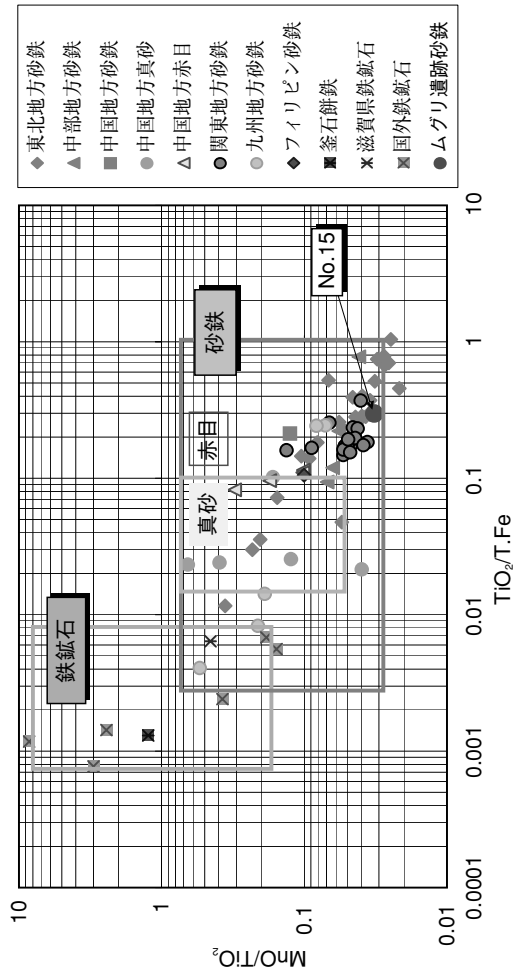


図3 砂鉄と鉄鉱石原料のチタニア(TiO₂)とマンガン(MnO)との関係

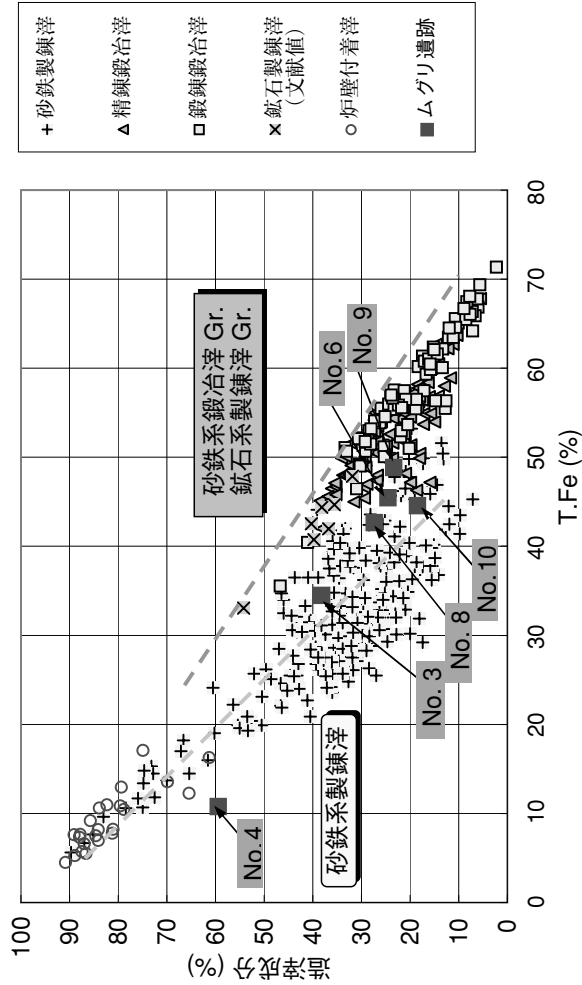


図2 製鉄滓と鉄冶滓の分類

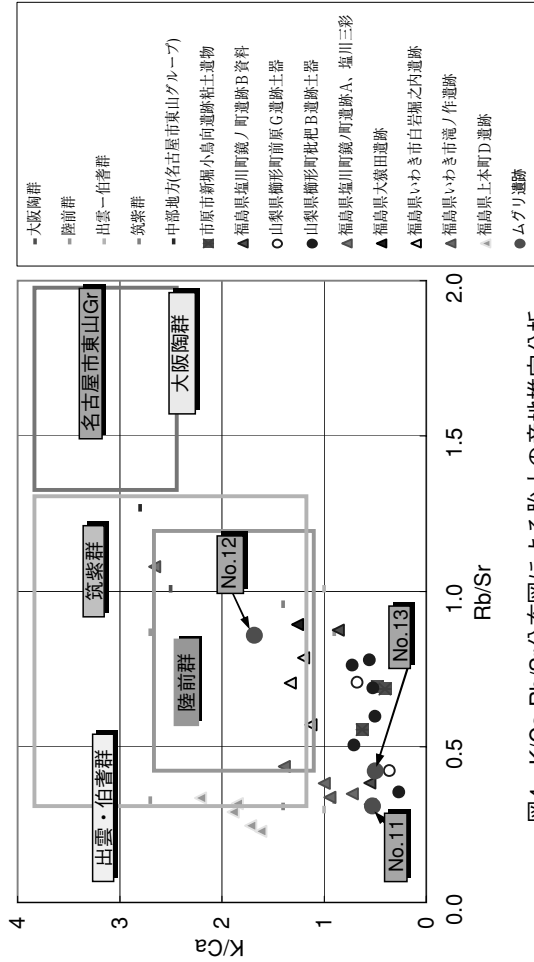


図4 K/Ca-Rb/Sr分布図による胎土の産地推定分析

第5章 まとめ

第1節 調査区出土縄文時代遺物の時期別分布状況

多部田貝塚および貝殻塚遺跡の調査区から出土した縄文時代遺物を、小グリッド単位で時期別に分類し、重量の計測を行い分布状況を捉えた。

石器—剥片・石核は総計で901点を数える。貝層北側部分・貝殻塚遺跡調査区南側部分の主に2地点で、それぞれ数百点上る集中が認められる。中・後期の所産であると考えられる。

早期—集中地点は多部田貝塚の貝層北側と貝殻塚遺跡の8D-84・9D-20グリッドに認められる。多部田貝塚は条痕文系土器のみだが、貝殻塚遺跡では熱糸文系土器と条痕文系土器の両者が出土している。

前期—多部田貝塚では貝層北側の10D-70グリッドから浮島式土器が出土し、10D-44・53グリッド周辺から黒浜式土器が出土している。貝殻塚遺跡では9C-90グリッド周辺から黒浜式土器が、古代住居跡A-005を中心とした地点から浮島式土器が出土している。両遺跡とも出土量は少ない。

中期—両遺跡とも阿玉台式土器から加曽利EⅣ式期にかけての土器の出土が認められる。多部田貝塚では主体となるのは加曽利EⅢ・Ⅳ式土器であり、阿玉台式土器の出土は少ない。これらの遺物の分布は住居跡の分布・時期と一致する。貝殻塚遺跡では調査区南半分に出土が偏る傾向にあり、阿玉台式土器と加曽利EⅢ式・Ⅳ式土器とはともに多く認められた。また北側の8D-2グリッドから連弧文土器が2個体出土している。

後期—遺物分布の主体は多部田貝塚の貝層北側および東側周辺に移行し、主体をなすのは加曽利B式期から安行2式期の土器であり、明確な住居跡が存在する称名寺式土器及び堀之内式土器の出土は少ない。貝殻塚遺跡においては8D-2グリッドに集中が認められるのみで、堀之内式期のA-008周辺からの出土は少ない。

晚期—遺物の集中は多部田貝塚の貝層北側部分に認められる他はない。貝塚から晩期の土器が出土することは昭和28年に武田宗久氏により確認されている。今回の調査では、安行3a式期から千網式期の土器が出土しているが、量的には少ない。貝殻塚遺跡からは晩期最終末の荒海式土器が出土しているのみである。

第25表 貝殻塚遺跡 調査区出土遺物計量表

グリッド名	単位(g)										単位(点)																								
	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	剥片	石核	剥片+石核	打斧	磨斧	磨石	石皿	砥石	石鏃	石鏃	尖頭器	凹石	スクレイパー	鏝	不明		
7C-100			21				9C-58		22				9D-1		177	43	110																		
7D-10			112				9C-59		47				9D-2		627																				
7D-36			36				9C-62		27	184			9D-3		371																				
7D-38			16				9C-63	64	1890	8		166	9D-4		152	18	18																		
7D-39	30						9C-64		778	84		409	9D-5		260																				
7D-70				72			9C-65	51	347			366	9D-6		143																				
8D-2			754	3511			9C-66		514			280	9D-7		240																				
8D-8			76	48			9C-67	77	180		101	67	9D-8		16																				
8D-11			76				9C-68		58			22	9D-9		9																				
8D-13			17				9C-69		168	28			9D-10	364	496	23																			
8D-14			162				9C-71		37				9D-11		80																				
8D-16					30		9C-72		422			110	9D-13		4																				
8D-17				12			9C-73	16	284			440	9D-14		73	12																			
8D-21			5			77	9C-74	676	815	83		706	9D-15		61																				
8D-22	10		79	68			9C-75	81	641			264	9D-16		142	19																			
8D-23			53				9C-76	153	16	120	86		9D-17		357	55																			
8D-25				11			9C-78		252				9D-18		16																				
8D-28			33				9C-79	95	793			503	9D-19		40	20																			
8D-31			82				9C-80	14	47	518			9D-20		58																				
8D-32			31				9C-81			114			9D-27		70																				
8D-33			217			19	9C-82			379			9D-28		25	416																			
8D-34			28				9C-83			484			9D-29		12																				
8D-35			3				9C-84	233	549			207	9D-30		120																				
8D-36				90			9C-85		362				9D-36		576																				
8D-37			20				9C-86		74	40			9D-37		32																				
8D-38	10						9C-87		201	21		107	9D-38		20																				
8D-41			40				9C-88	99	352			17	9D-39		76	15																			
8D-42			103				9C-89	213	1179			482	9D-40		71																				
8D-51					5		9C-90	94	12	1776	141	36	447	9D-48		115																			
8D-55			54	12			9C-91		257				9D-49		61	66																			
8D-64				419			9C-92						10C-81		63	12																			
8D-66				49			9C-93		127	44			10C-91		61																				
9C-46			46			56	9C-94		76			189	10D-1		75	17																			
9C-47			22				9C-95		255	33			10D-2		18	67	109																		
9C-53						48	9C-96		307			41	10D-11		143	397																			
9C-54						40	9C-97		28				10D-21		50	22																			
9C-55	22		42				9C-98	37	29	156	9		87	10D-31		203																			
9C-56			130				9C-99	153	371			187	小計	2568	236	2229	633	137	8305																
9C-57	32		114				9C-100	44	210	33		177																							
小計																																			
小計																																			

第26表 多部田貝塚 調査区出土遺物計量表

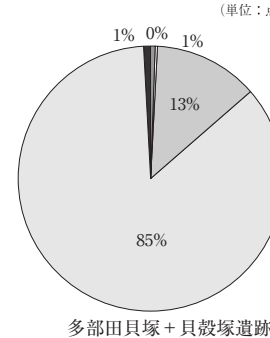
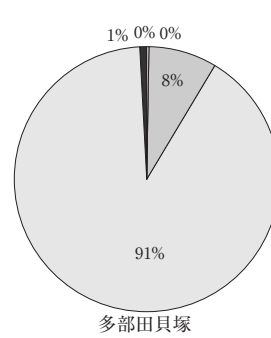
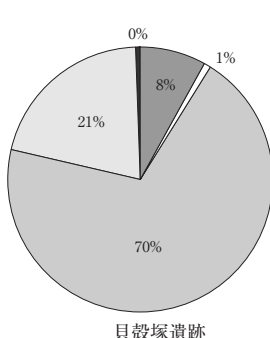
Table with columns for grid name (グリッド名), period (早期, 前期, 中期, 後期, 晩期, 不明), and various artifact types (e.g., 剥片, 石核, 打斧, 磨斧, etc.).

第27表 多部田貝塚・貝殻塚遺跡調査区出土遺物の総計

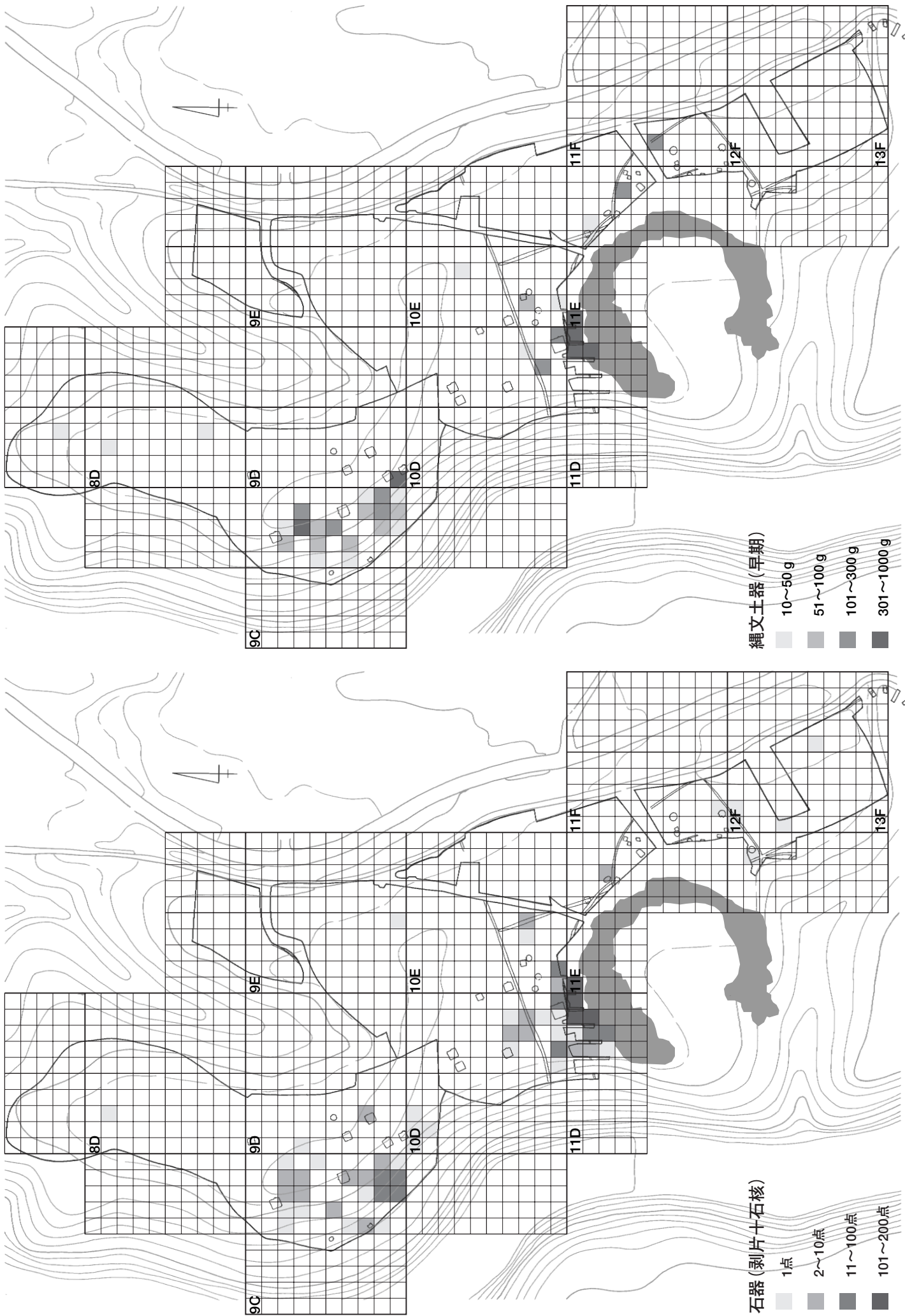
Summary table for artifacts, categorized by site (貝殻塚遺跡, 多部田貝塚) and period (早期, 前期, 中期, 後期, 晩期, 不明, 小計).

石器

Table for stone tools (石器) showing counts for various types like 剥片, 石核, 打斧, etc., across sites and periods.



第77図 時期別総量比率



第78図 調査区出土遺物重量別分布図①



第79図 調査区出土遺物重量別分布図②



第80図 調査区出土遺物重量別分布図③

第2節 古墳時代後期における住居跡出土遺物の統計的分析

今回の整理作業では、全時代の各遺物に対し、属性に基づき重量を基本とした統計処理を行った。遺構のデータについては、各節において表記した。ここでは調査時点において古墳時代の1住居跡と判断した遺構内に含まれる遺物をすべて対象（縄文土器・奈良平安時代の土器等、明らかな混入遺物は除く）としており、厳密な意味での一括遺物性を保証するものではないことを明記しておきたい^(注)。予め設定してあった統計的な分析項目に基づき、多部田貝塚と貝殻塚遺跡の古墳時代住居跡から出土した遺物（特に土師器を中心とする）を主に取り上げる。

出土遺物の総量

総量については、当初火災住居であれば什器類の捨て置きが多く、遺物量も非火災住居に比べ、多いであろうと想定していた。しかし火災住居と思われる多部田貝塚 A-016の遺物量が13軒中で最も少なく、反対に貝殻塚遺跡 A-010は火災住居ではないと考えられるにもかかわらず、遺物量は他の火災住居をはるかに上回る。また火災の有無以外の点では、住居の規模が遺物の総重量に比例すると考えていた。多部田貝塚 A-018は8.7m 四方で床面積が約70m²以上を有することから13軒中出土量が最も多い点は頷けたが、それ以外の住居について必ずしも面積に比例する訳ではない。これらの現象については様々な要因が考えられるが、統計的なデータからは有効な判断材料を得ることは出来なかった。

製品別の比率

全体の平均値では、土器が約90%を占め、残り10%を土製品、そして石製品が1%、鉄製品が1%以下となる。土製品の大半は支脚である。石製品・鉄製品はともに少量で皆無の住居跡も少なくない。鉄製品については全体に占める割合は微量の為、対象外としているが、古墳時代以降の奈良・平安時代の住居跡と重量・数量面で比較すると、徐々に増加してゆく傾向が数値的に捉えられる可能性がある。

土師器器種別比率

供膳具としての坏類が20%程度、煮沸具としての甕・甑が80%の比率となる。これは2者の1個体の重量差を考慮する必要があり、坏5：甕1もしくはそれ以上は確実であるから、個体数としては逆転する。なお多部田貝塚 A-006だけは重量比率上でも坏類が甕類を上回っている。

土師器坏の塗彩比率

坏に限って見ると全体では90%以上が赤彩で占められる。また無彩である坏は、貝殻塚 A-009・7の手捏ね風の坏、貝殻塚 A-004・1の坏を除外すると、在地系とは異なる胎土で、製作・器形の点からも明らか共通した個性をもつ一群に括られる。このタイプの坏についてはこれまでも各報告書で取り上げられ注意が喚起されてきているが、赤彩土器が主流の中であって、極めて特異な存在であり、ここで取り上げたような坏全体の中での塗彩比率といった観点からも追跡されるべきと考える。

土師器の塗彩比率

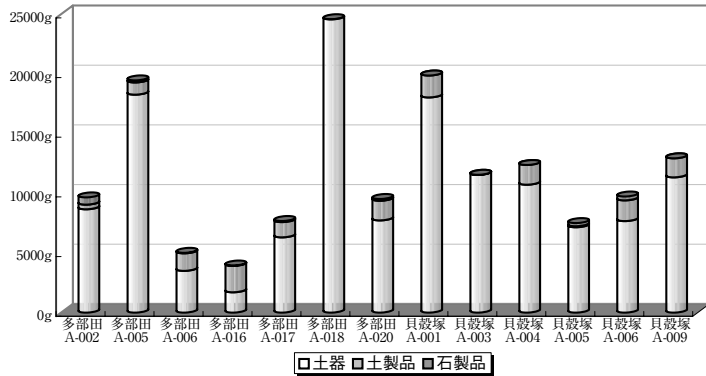
土師器の塗彩（ここでは赤彩）は、坏・高坏・壺に限られた現象である。したがって当然無彩である甕類が土師器の器種比率の80%を占めていることから、全体で見れば赤彩土器15%、無彩土器85%という結果になった。この土師器の塗彩という観点は、古墳時代の後期以前との比較が重要になってくると思われ、古いほど赤彩土器の比率は高まってくるとはならないだろうか。

(注)このような手法のスタンスについては、同様の分析を行った『海老遺跡—平成8年度調査報告書—』(2000)で触れている。

なお古墳時代の住居跡は14軒であるが、貝殻塚遺跡のA-010については極端に遺物が少なく、発掘調査上の問題等も考えられ統計的な分析においては有効ではないと判断し除外している。

	土器	土製品	石製品	総計
多部田A-002	8655	388.5	606.2	9649.7
多部田A-005	18258	1018	176.9	19452.9
多部田A-006	3495	1473	38	5006
多部田A-016	1697	2215	28	3940
多部田A-017	6299	1280	93.3	7672.3
多部田A-018	24553	16	259.7	24828.7
多部田A-020	7722	1649.2	143.5	9514.7
貝殻塚A-001	18028	1831	0	19859
貝殻塚A-003	11536	9.4	0	11545.4
貝殻塚A-004	10710	1653.7	0	12363.7
貝殻塚A-005	7151	79.6	266	7496.6
貝殻塚A-006	7663	1734.3	328.5	9725.8
貝殻塚A-009	11332.4	1588.6	0	12921

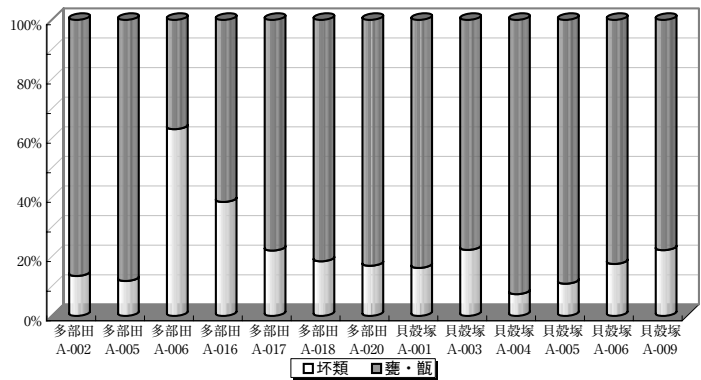
(単位g)



第81図 製品別出土量

	坏類	甕・甔	総計
多部田A-002	1166	7483	8649
多部田A-005	2134	15994	18128
多部田A-006	2204	1291	3495
多部田A-016	653	1044	1697
多部田A-017	1389	4910	6299
多部田A-018	4491	19895	24386
多部田A-020	1305	6416	7721
貝殻塚A-001	2912	15077	17989
貝殻塚A-003	2573	8963	11536
貝殻塚A-004	783	9927	10710
貝殻塚A-005	777	6374	7151
貝殻塚A-006	1344	6315	7659
貝殻塚A-009	2386.4	8368	10754.4

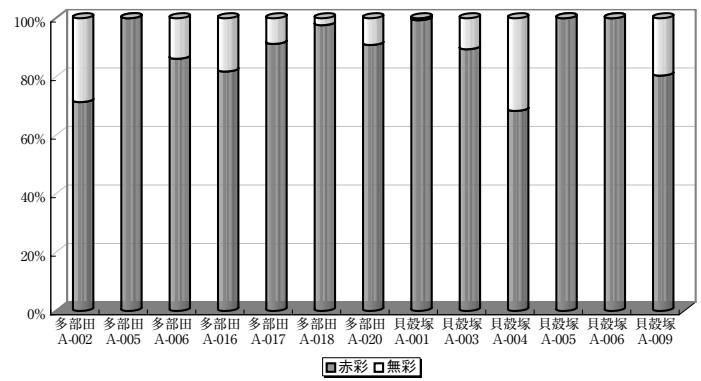
(単位g)



第82図 土師器器種別比率

	赤彩	無彩	総計
多部田A-002	712	286	998
多部田A-005	1437	0	1437
多部田A-006	1001	161	1162
多部田A-016	534	119	653
多部田A-017	1102	106	1208
多部田A-018	2654	65	2719
多部田A-020	1102	111	1213
貝殻塚A-001	2452	17	2469
貝殻塚A-003	1249	148	1397
貝殻塚A-004	330	153	483
貝殻塚A-005	680	0	680
貝殻塚A-006	1121	0	1121
貝殻塚A-009	1949	424	2373

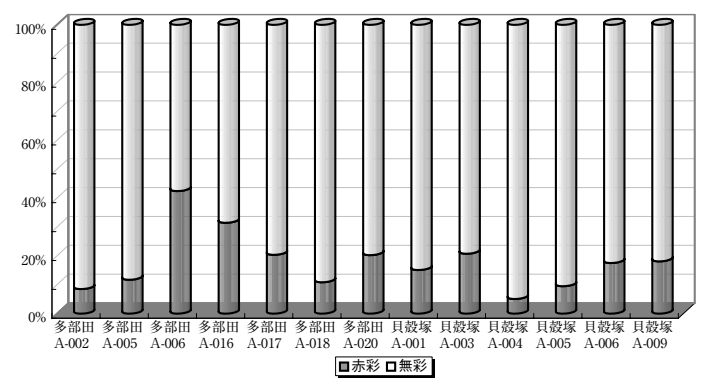
(単位g)



第83図 土師器赤彩比率

	赤彩	無彩	総計
多部田A-002	712	7937	8649
多部田A-005	2134	15994	18128
多部田A-006	1484	2011	3495
多部田A-016	534	1163	1697
多部田A-017	1283	5016	6299
多部田A-018	2654	21732	24386
多部田A-020	1566	6155	7721
貝殻塚A-001	2718	15271	17989
貝殻塚A-003	2395	9141	11536
貝殻塚A-004	544	10166	10710
貝殻塚A-005	680	6471	7151
貝殻塚A-006	1344	6315	7659
貝殻塚A-009	1949	8805.4	10754.4

(単位g)



第84図 土師器赤彩比率

写 真 图 版



平和公園遺跡群 遠景①



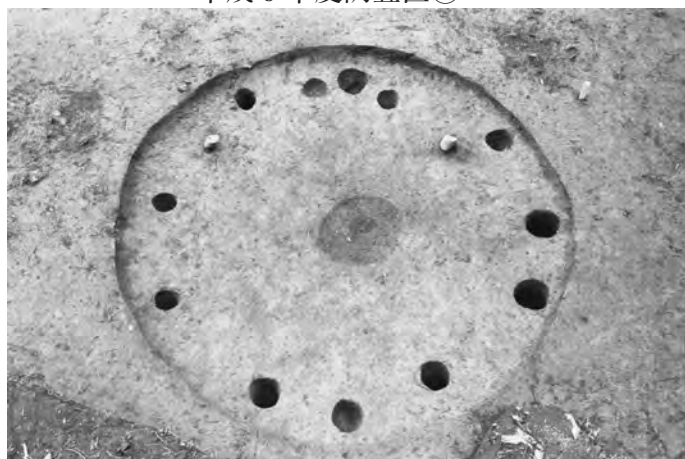
平和公園遺跡群 遠景②



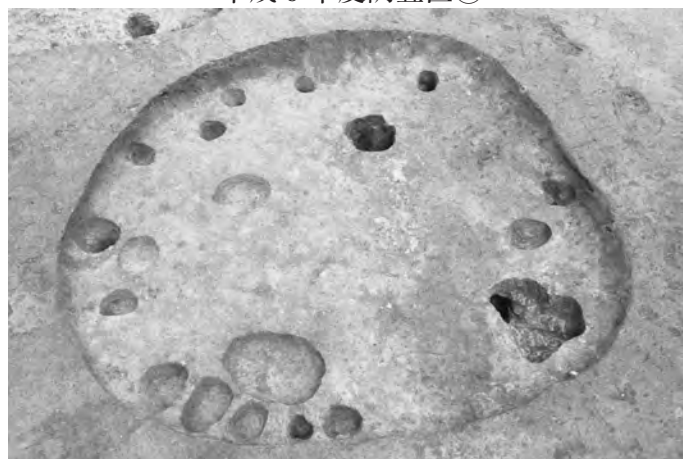
平成 5 年度調査区①



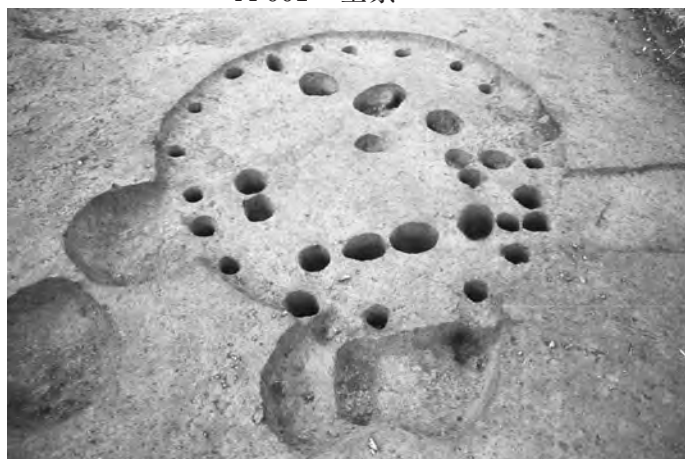
平成 5 年度調査区②



A-001 全景



A-004 全景



A-007 全景



A-015 全景



A-005 遺物・炭化材検出状況



A-005 全景



A-016 炭化材検出状況



A-016 全景



A-017 全景



A-017 掘り方



A-018 全景



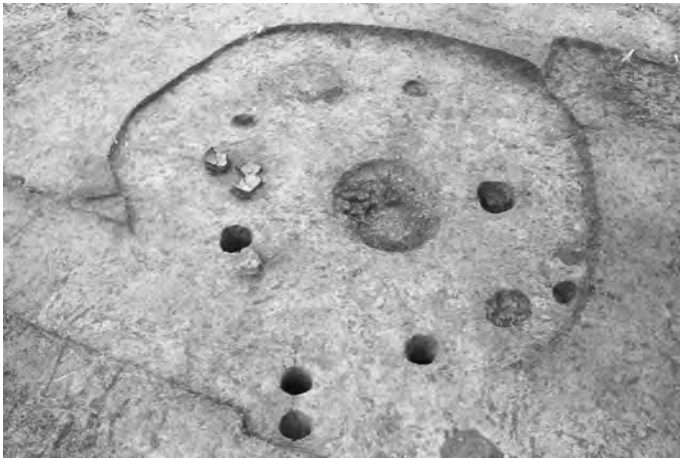
A-018 掘り方



A-020 全景



A-020 竈



A-002 全景



A-008 全景



A-001 全景



A-001 竈遺物出土状況



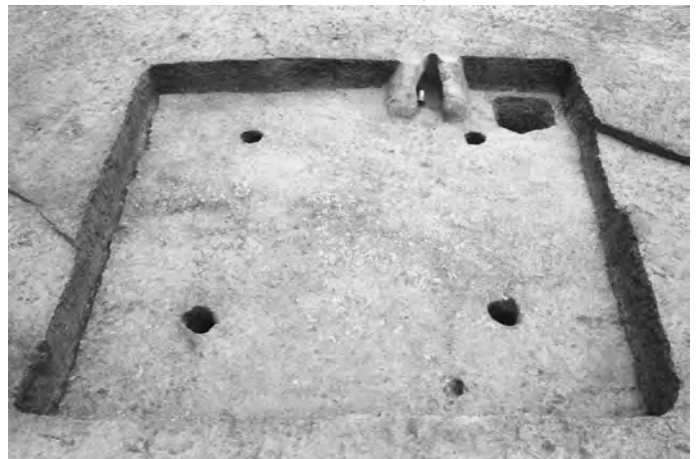
A-003 遺物・炭化材検出状況



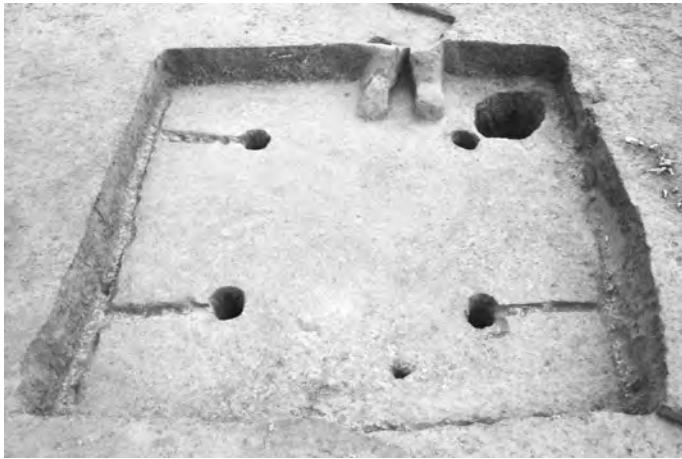
A-003 全景



A-004 遺物・炭化材検出状況



A-004 全景



A-005 全景



A-005 掘り方



A-006 遺物・炭化材検出状況



A-006 全景



A-009 遺物・炭化材検出状況



A-009 全景



A-010 遺物・炭化材検出状況



A-010 全景



A-001 全景



A-001 竈遺物出土状況



A-002 全景



C-002・003



粘土採掘坑



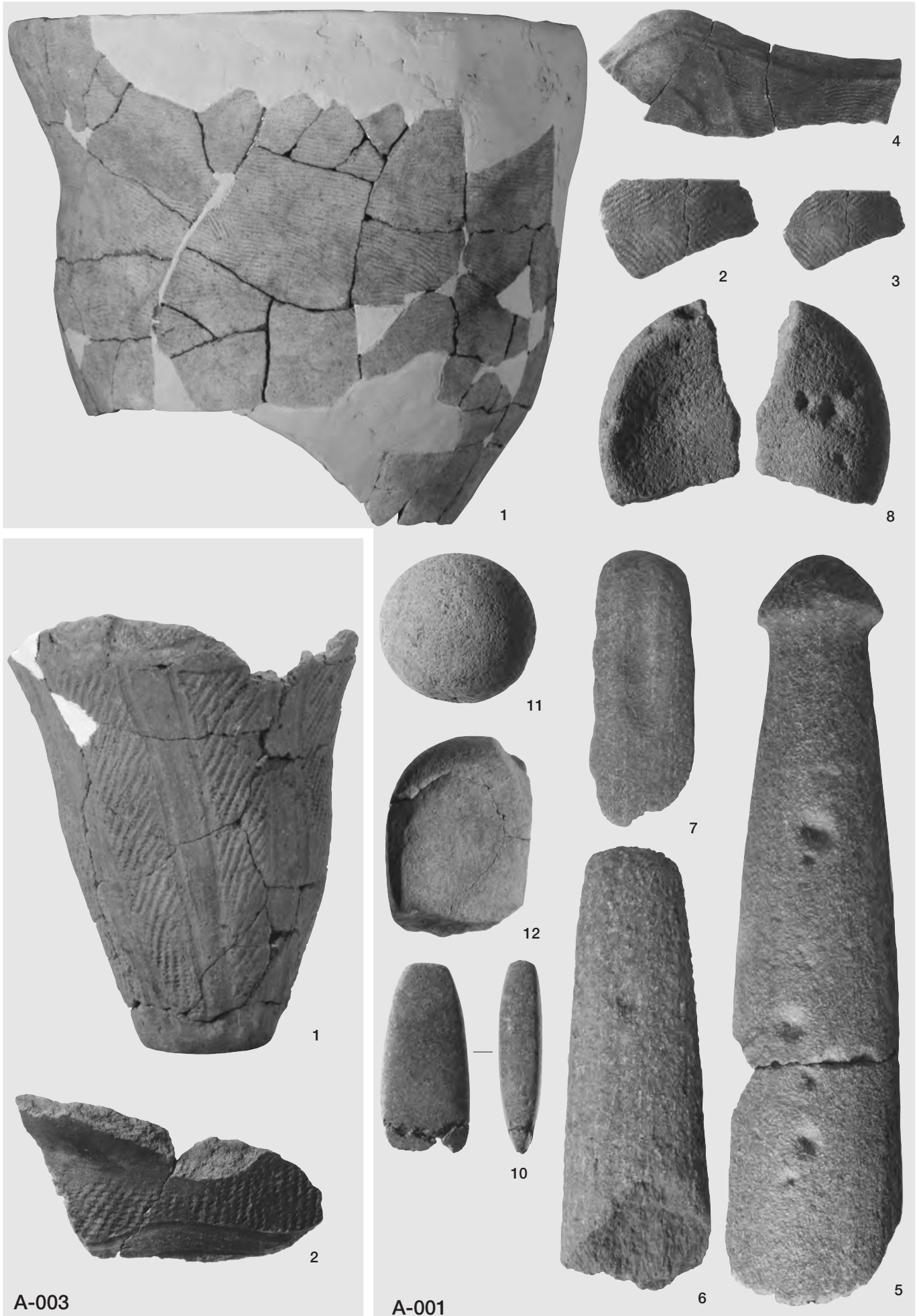
1号窯跡 調査風景



A地区 遠景



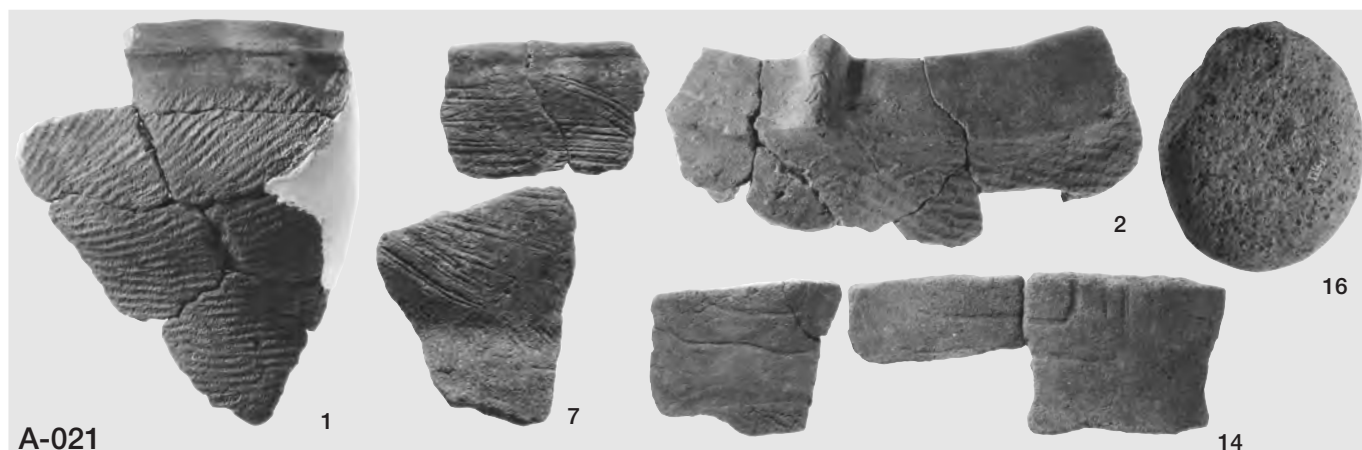
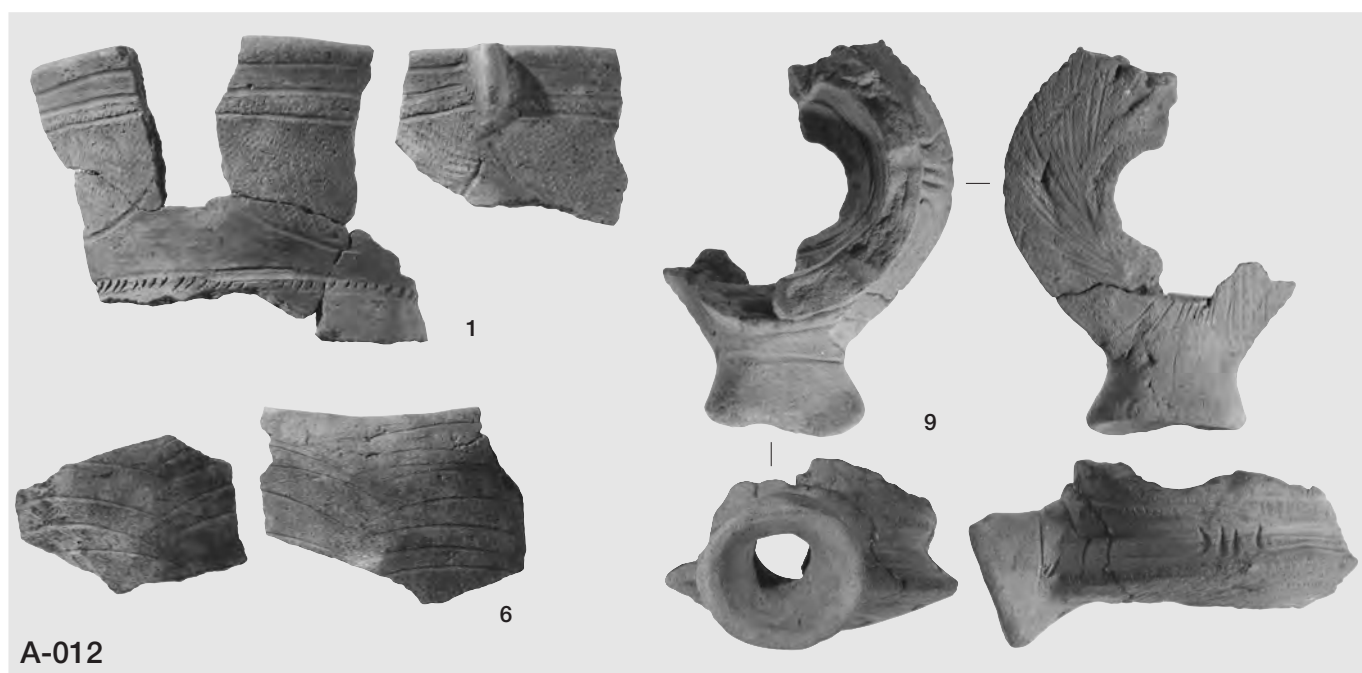
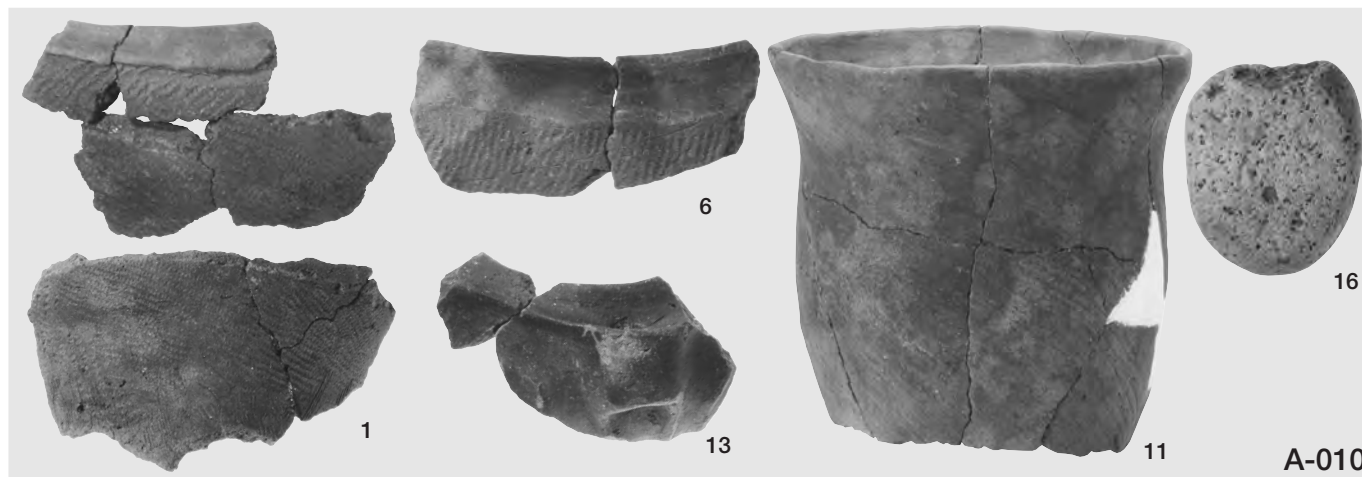
B地区 遠景



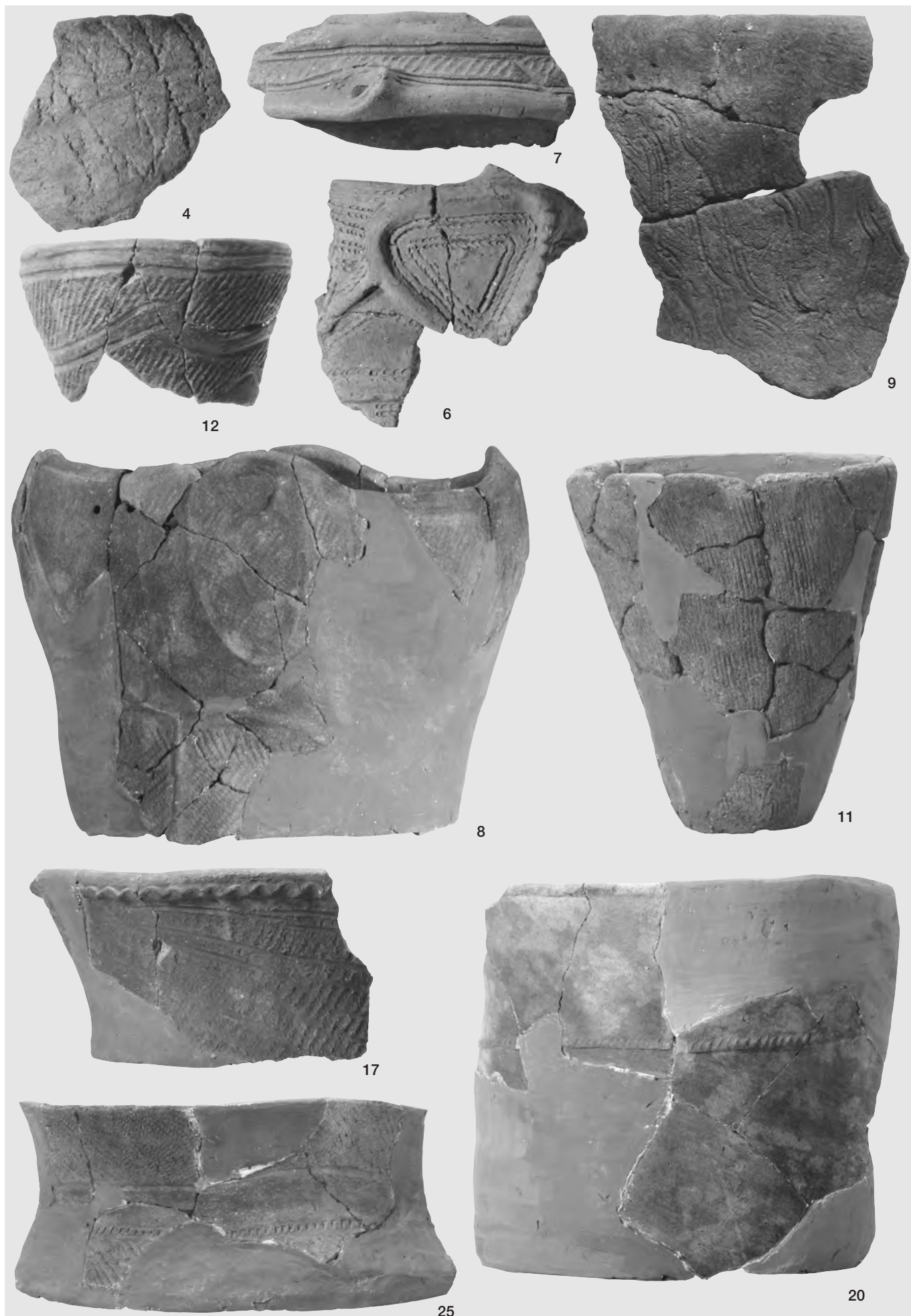
A-003

A-001

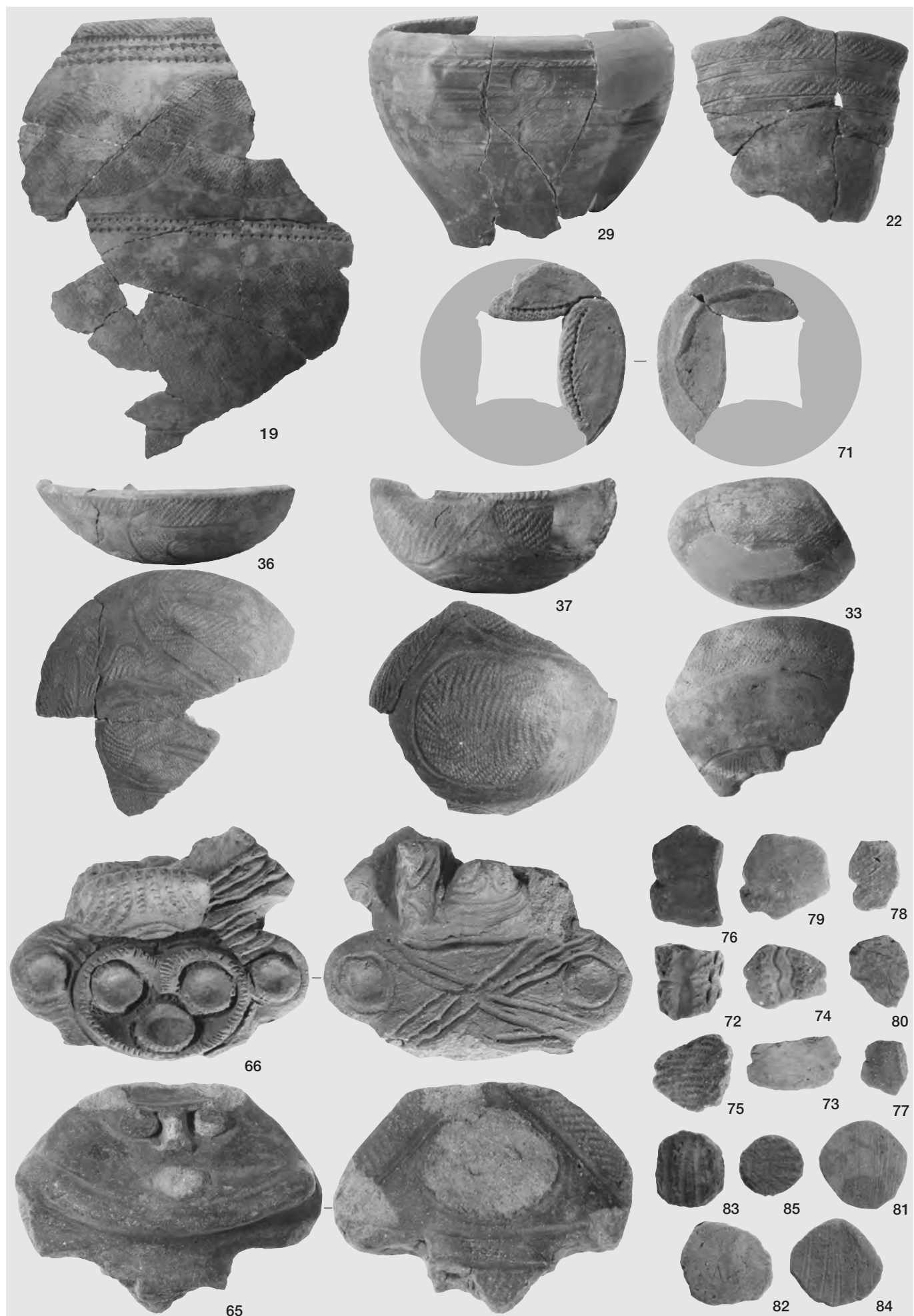
縄文時代住居跡 出土遺物①



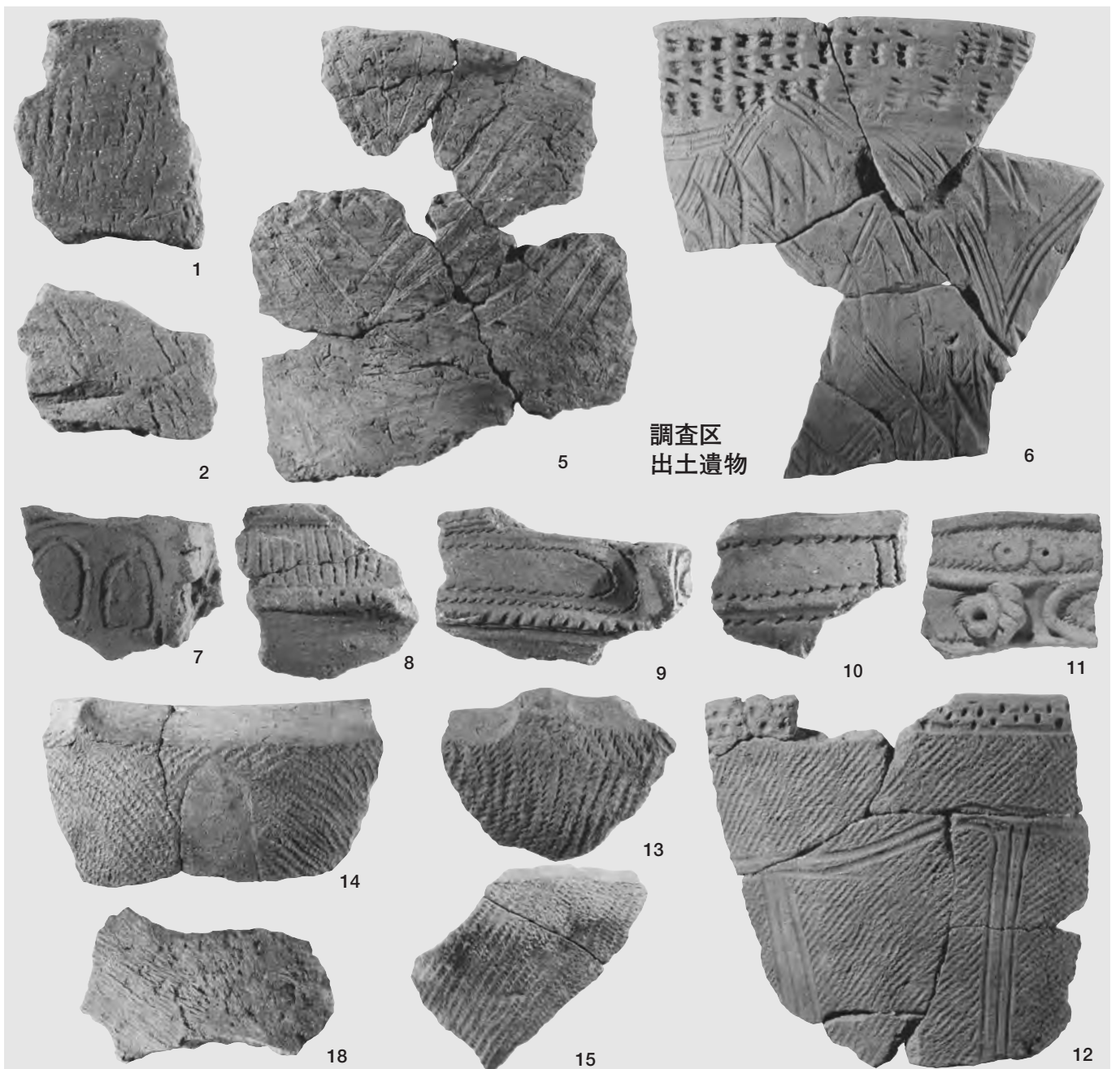
縄文時代住居跡 出土遺物②



調査区 出土遺物①

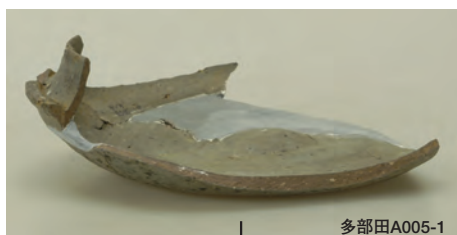


調査区 出土遺物②



縄文時代住居跡・調査区 出土遺物











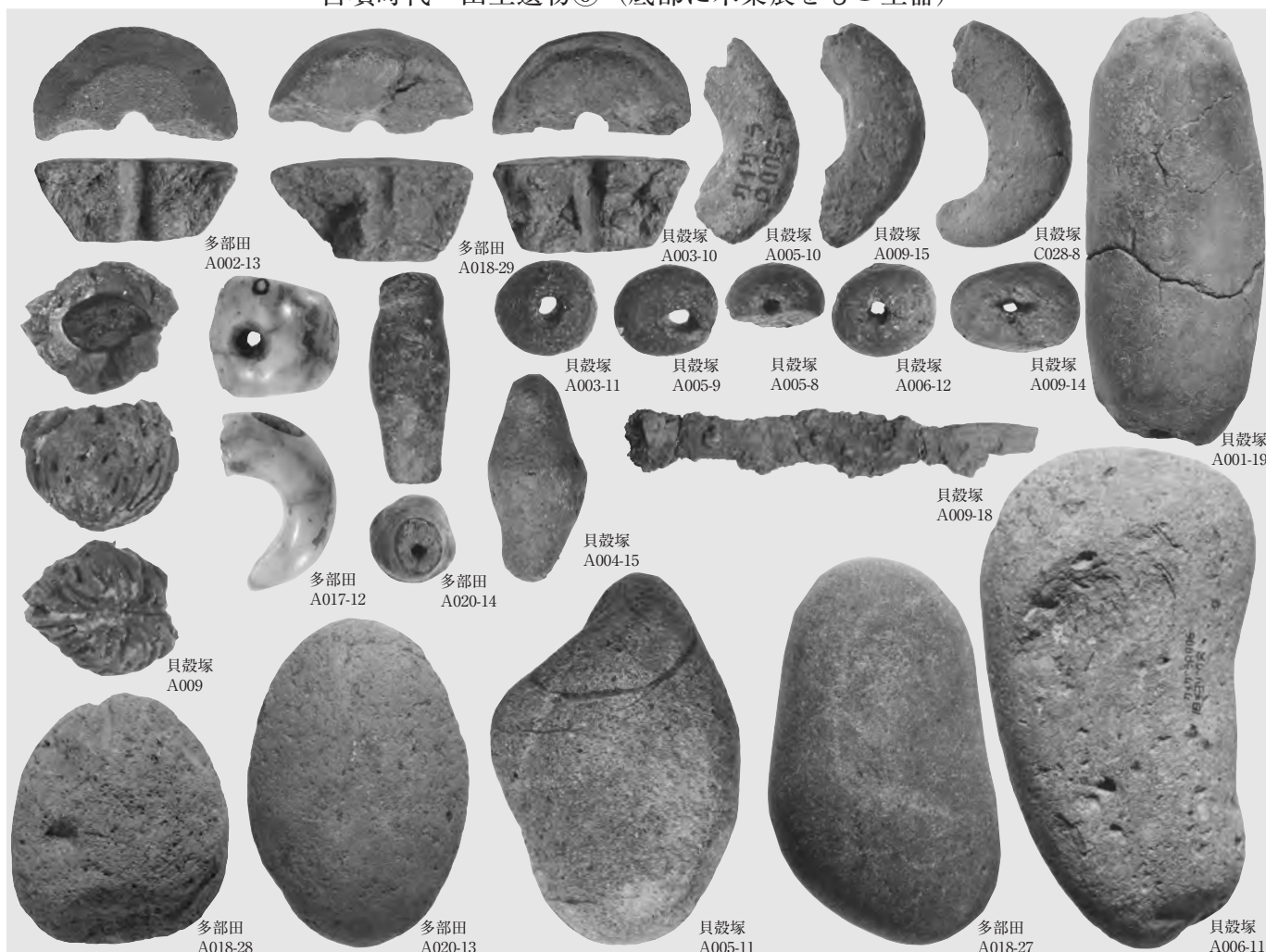
多部田A006-8



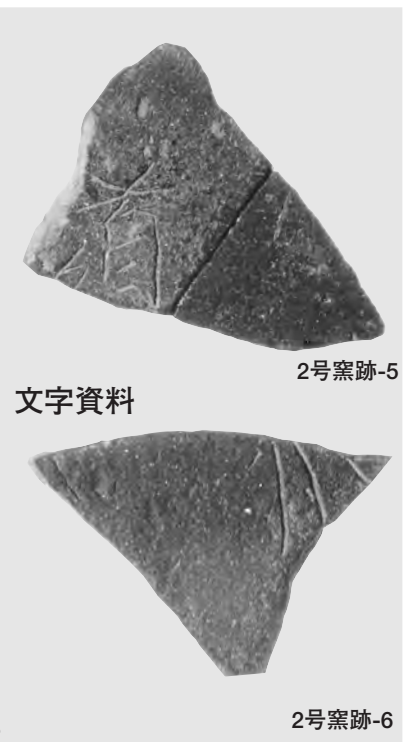
多部田A017-9



古墳時代 出土遺物⑤ (底部に木葉痕をもつ土器)



古墳時代 出土遺物⑥ (土製品・石製品・鉄製品)



ムグリ遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばしへいわこうえんいせきぐん							
書名	千葉県平和公園遺跡群 I							
副書名	多部田貝塚・貝殻塚遺跡・ムグリ遺跡							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	田中英世・中山貴正							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒260-0814 千葉県中央区南生実町1210 TEL 043-266-5433							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	本調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たべたかづか 多部田貝塚	わかばくたべた 若葉区多部田町 1,360他	12104	若葉区 217	35° 35' 29"	140° 11' 55"	19920302 ～ 19950331	32,900m ²	公園整備
かがらつかいせき 貝殻塚遺跡	わかばくたべた 若葉区多部田町 1,309他	12104	若葉区 226	35° 35' 36"	140° 11' 51"	19920401 ～ 19950331	21,000m ²	公園整備
ムグリ遺跡	わかばくたべた 若葉区多部田町 1,322他	12104	若葉区 227	35° 35' 38"	140° 11' 48"	19950601 ～ 19960329	1,460m ²	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
多部田貝塚	貝塚・集落跡	縄文時代 古墳時代 中・近世	縄文時代住居跡 土壇 古墳時代住居跡 土壇 中・近世溝跡 時期不明竪穴状遺構 土壇	12軒 60基 7軒 1基 12条 8基 34基	縄文時代土器・石器 古墳時代土師器・須恵器・石製品・土製品			
貝殻塚遺跡	集落跡	縄文時代 古墳～平安時代	縄文時代住居跡 土壇 古代住居跡 時期不明土壇	2軒 27基 8軒 7基	縄文時代土器・石器 古墳～平安時代土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品			
ムグリ遺跡	集落跡・窯跡	古墳～平安時代	古代住居跡 窯跡 粘土採掘坑 土壇 ピット群	2軒 3基 1基 7基	古墳～平安時代土師器・須恵器・瓦・羽口・炉壁・鉄滓			「田部」の刻書土器・製鉄関連の遺構遺物の検出

千葉県平和公園遺跡群Ⅰ

多部田貝塚

貝殻塚遺跡

ムグリ遺跡

平成15年3月31日 発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区問屋町1-35
財団法人千葉県教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
千葉県中央区南生実町1210
TEL 043-266-5433

印刷 株式会社 弘報社印刷
千葉県緑区古市場町474-268